

福丸小糸は失敗れない

300円

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

中学受験を失敗して、仲がよかった友達と離れることになってしまった小糸。

親からの信頼もなくなってしまい、ただただ透たちと同じ学校に進むために勉強を続けた。

いざ高校に入ると、仲がよかったみんなは、アイドルを始めてしまった。

あとを追いかけるようにアイドルになった小糸は、一つの嘘をついてしまう。

きつと、一歩間違えればまた中学時代に逆戻りしてしまうから。

もう、失敗は許されない。

小糸を中心にしたノクチル全体のお話です。

ほぼ週刊で書けたらいいなと思っていました。

少しずつのんびり書いていきたいと思えます。暖かい目で見守っていただければと思います。

特に序盤はWINGメインコミュを意識していますが、公式設定と差異があるかと思えます（今後増えていく設定・持っていないカードには対応できないので!!!）

目次

1章	43
福丸小糸は失敗れない	1章 1節,
2節	1
福丸小糸は失敗れない	1章 3節
8	
福丸小糸は失敗れない	1章 4節
14	
福丸小糸は失敗れない	1章 5節
22	
福丸小糸は失敗れない	1章 6節,
7節	34
福丸小糸は失敗れない	1章 8節
2章	
一瞬だけ、追いついた	51
寝坊と目標と夜七時	56
楽しさ、みつけたよ	69
初めてのオーデイション	79
壊れた、脆い嘘	96
希望を連れてお願いを	104
3章	
短いラジオを精一杯	119
次なる一步に向けて	130
紫の光を身に受けて	144
ちゃんと知ってもらいたいから	

157

取り返せないけれど、これから

171

いつも通りはいつの通り？

183

そして本番と、本番へ

192

4章

突きつけられる、わたしたちの真実

208

わたしと同じは嫌だから

221

分からないけれど、届いたかも

238

ラジオでヘッドホンで建前で

255

福丸宅へと行ったとき

273

前に進む、そのために

286

ヨンブンノイチ 夢はなに？

297

ニブンノイチ 狂気

313

ヨンブンノサン 幸せのかたち

329

ヨンブンノヨン もうすこしだけ

340

確認テスト

349

5章

どこへ行こうか？

361

やりたいけど、やりたいなら

377

ビバ、ハピパーベキュー

393

補習勉強あと幽霊

406

なんもかんも、一緒に

426

ヨンブンノゴ いっしよに

437

決戦前夜にひとつ足す

454

小さくても大きくなる

463

分かるから、まつすぐ

475

遠くへ行きたい

482

本選本番

497

結果、そして

513

ぜくぶんぶまとめて

528

1章

福丸小糸は失敗れない 1章 1節, 2節

ない。

手元に握りしめている番号を見る。

1834

何度も何度も確認した番号。

先週だつて見たし、昨日も今日も確認した番号。

もう一度目の前に掲示された番号を順番に目で追っていく。

1830、1832、1833、1835、1836

やはり、ない。きつとなにかの間違いに決まっている。

確かに少しばかり余裕ぶつたかもしれないが、自己採点の結果は十分によかったはず。

どこかで間違えた……？

帰ったら確認……いや、もう落ちたことは覆らない。

周りを見れば、友達同士で抱き合っている人もいれば、泣き崩れている人もいる。

透ちゃんも円香ちゃんもこの中学に進学した。

雛菜ちゃんは……うん、番号がある。

よかった。隣に雛菜ちゃんが居なくてよかった。

今の状況は、雛菜ちゃんの嬉しい気持ちも奪うことになってしまふから。

これから家に帰って、なんて説明しよう。

この事実はどんな嘘をついても隠せるものではない。

入学することができない以上、どんなことを言ってもすぐにバレてしまふ。

あれだけ余裕ぶっていた頃が馬鹿らしく思えてくる。

こんなことになるくらいなら、もっとちゃんと勉強しておけばよかった。

「はあ……」

後ろで、聞き覚えのあるため息が聞こえた。

その声は、今一番聞きたくない声で、このあと必ず聞かなければならない声。

せめて心の準備をという願いすら聞いてくれない。

「お母さん……」

お母さんの表情を見て、胸の痛みが強く、締め付けられるように痛く、上手く呼吸ができないほどになる。

諦めや呆れ、落胆、期待外れといった負の感情が読み取れるその表情を、これ以上見

ていたくはなかった。

「わたし、もっと頑張るから、いっぱい勉強して、いっぱい頑張つて、それから……それから……」

頑張る以外にできることが見つからなくて、視線は下へ下へと落ちていく。

「……はあ」

再び、ため息。

視界の端に映っていた足が動き始め、釣られるように視線を動かす。

お母さんは背を向けて歩き始めていた。

その隣には、透ちちゃんも円香ちゃんも雛菜ちゃんもいて、みんなが離れていつてしま
う。

慌てて追いかけるものの、どれだけ走っても追いつかない。

それどころか、次第に距離が離れていってしまう。

こんなにも走っているのに、向こうは歩いているのに、どうして、どうして。

「いやっ！ まって……まって！ 置いてかないでっ！」

○○○

目を覚ましたはず、ということとは理解できた。

視界から情報を得るより先に、体は息を吸うことを求めた。

大きく息を吸うと、すごく長い間感じていたような息苦しさが一気に楽になる。
あれは……夢。

「だったなら、よかったのに」

夢であることには変わりないけれども、残念ながら夢の中で見たことは過去。

もう今となつては覆せない現実。

中学受験で失敗して、みんなと離ればなれになつて、お母さんに期待されなくなつて、それでもなんとか頑張つて透ちゃんたちと同じ学校に進学した。

中学の三年間、透ちゃんたちと遊ぶ機会は激減した。

勉強をしなくちゃいけないことも大きかったが、会つてしまうと学校に行つたときに辛い思いをすることになる。

だから、できるだけ会わないようにしていた。

周りは知らない人だらけの中学校で、勉強を優先して新しい友達ができるはずもなかった。

とはいえ、こうして透ちゃんたちと同じ学校に戻つてくることができた。

これからは毎日一緒に居られる。

それが嬉しくて堪らなかつた。

嬉しさの反面、高校受験に成功しても、お母さんの期待は戻つてこなかつた。

家に帰っても、テストでどれだけいい成績を残しても、返ってくるのは機械的な返事だけ。

中学に入学して一年でそのことに気づき、お母さんの期待を取り戻すのは後回しにした。

中学での残りの二年は、ただひたすら透ちやんたちと同じ高校へ進むためだけに頑張りを続けた。

そうしないと、自分がなくなってしまう気がしたから。

でも、高校に入ったから解決したかといえば、そんなことはなかった。

なんだか、少し距離感が離れている気がする。

円香ちゃんも雛菜ちゃんも、あの透ちやんさえも気を使ってくれている。

ような気がする。

三年前までの思い出が強すぎて、気のせいかもしれないけれど。

「ん、んん〜!」

憂鬱な気分を切り替えるために、横になっている体を持ち上げて伸びをする。

力んだ体から力を抜くと、一緒に息も漏れてくる。

大丈夫。

同じ学校に入れたのだから、一緒に居られるのだから。

それが……あと二年しか続かないと分かっているても、その二年間を大切に、一生懸命過ごさなくては。

二つ折りにされた布団を整えてベッドから下りる。

もう一度伸びをしてから、部屋を出る……前に、一度だけ深呼吸。

部屋を出る直前は、少しだけ緊張する。

あのお母さんの機械的な対応を目にしないといけない、しかしそれでもちゃんと挨拶はしないとイケない。

そんな朝だから憂鬱になるのも仕方がないと思う。

「うん、よしー」

鼻を鳴らして気合いを入れてからドアノブを回す。

廊下に出て奥の扉を開けば居間だ。

「お母さん、おはよう」

「おはよ」

なんてことない、親子の挨拶。

そのはずだが、この状況ではなんてことある挨拶。

お母さんはこちらを振り向くことなく、流し台で食器を洗い続けながら挨拶を返す。

それも、三年間も続けば少しは慣れる。

笑顔はそのままに、自分の席に座って目の前に用意された朝食を食べていく。

ご飯と鮭フレークとお味噌汁と冷たいお茶。

ひとつずつ食べながら、今日の予定を思い出す。

今日は一限から古文、体育、英語、数学、物理。

午前最後に体育があるので、お昼休みは少しだけ短くなってしまいました。

午後は英語は兎も角、数学と物理が続いているのは大変そう。

お茶を飲み干して、茶碗を重ねていく。

「ちそうさま」

流し台の横に茶碗と湯飲みを置くと、母親の手が素早くそれを回収して、スポンジで洗い始める。

それを横目に流しながら、洗面所に向かって身支度を調べてから、髪を二つに縛って自室へ戻る。

クローゼットを開けて制服を取り出してから一度ベッドの上に放る。

パジャマを脱ぎ、ベッドの上に同じように放って制服を着る。

姿見で一応問題ないことを確認してから、再び自室を出る。

「行ってきます」

その言葉に、返事はない。

福丸小糸は失敗れない 1章 3節

家を出て十数分。

中学は電車通学だったが、高校は近くて楽だ。

小さな公園の横を通り、階段を少し上ったらすぐに学校。

中学時代は行き帰りに一時間以上費やしていたことを思うと、学校という存在が随分と近くなったように感じる。

それに――

「あ、透ちゃん円香ちゃん、おはよー!」

「おはよう小糸」

二人に声をかけて近寄ると、先に円香ちゃんが気がつく。

「ん?」

そして円香ちゃんに一拍遅れて、透ちゃん。

「おはよう小糸ちゃん」

二人の横に並ぶと、再び学校に向かって歩き始める。

とはいえ、校門はもうすぐ目の前。

この校門をくぐったら、校舎の違う二人とは別れてしまう。でも、この時間が大切なのだ。

ここに居場所があると感じられて、安心する場所が用意されていると実感できるこの時間が。

安心感に身を任せながら校門の目の前まで来ると、透ちやんがなにかに気づく。

「あ、そうだ」

視線を向けると、空を見上げていた透ちやんの顔が、ゆっくりとこちらを向く。

「ねえ、小糸ちゃん今日英語あつて、一限英語じゃなかったり？」

「えっ……うん、英語はあるよ。あと一限は古文だから」

「じゃあ、教科書貸してよ」

言っていることを理解する前に、鞆から教科書を取り出そうとして、ちようど取り出したところで手が止まる。

透ちやんは二年生で、使っている教科書は別のはず。

どうして二年生が一年生の英語の教科書を借りようとしているのか。

もし透ちやんが教科書を忘れていたとしても、一年生の教科書では代用できるはずもない。

まだ六月だから、一年生の復習でもあるのだろうか。

いや、いくらなんでもそれはおかしい。

復習は大事だろうけれど、復習だけをしていても先には進めない。

思考をめぐらせていると、円香ちゃんがわざとらしい大きなため息をつく。

「浅倉、一年生の教科書で誤魔化さずに素直に先生に怒られな」

「えー」

不満そうな言葉なのに、その言葉から不満は一切感じない。

むしろ、どこか楽しそうな印象さえ受ける。

透ちゃんは、英語の教科書を忘れたから一年生の教科書を机に広げて誤魔化そうとした、ということらしい。

確かにそれはよくない。というか、それで分からないものなのだろうか。

「小糸も、そう簡単に貸そうとしない」

「う、うん……」

深くため息をつく円香ちゃんは、鞆の位置を直すと目を逸らす。

「そういうえば、雛菜ちゃんは？」

円香ちゃんの仕草は特に関係ないが、いつも透ちゃんの隣にいるはずの人物がいないことに気がついた。

「どうせいつもの遅刻でしょ」

「あはは、多分ね」

一瞬だけ二人の言うとおりのいつものことだから仕方がないと思ってしまうが、これから先のことを考えて思い直す。

円香ちゃんも透ちゃんも、毎度毎度同じクラスで、教師から呆れられている雛菜ちゃんを見ている人の気持ちにもなつて欲しい。

ポケットからスマートフォンを取り出して、チェインのフレンド一覧から雛菜ちゃんに電話をかける。

「あれ、ほんとに寝坊？」

数コールで出ないから少し心配したが、十コールほど経つてから、ようやく雛菜ちゃんが出る。

「ふわあく、小糸ちゃんおはよう」

とりあえず、病気とかではなさそうなので安心した。

とはいえ、この様子だとちようど今起きたようだ。

視線を校門奥の大時計に向けると、時計は八時半を指している。

雛菜ちゃんの家から学校までは二十分近くかかるため、これから家を出る支度をする
と考えると、遅刻確定だ。

「雛菜ちゃん、早く起きて！ 遅刻しちゃうよ！」

電話越しに叫ぶと、のんびりとした口調で返された。

「あは、じゃあお昼くらいに行くね」

直後に雛菜ちゃんからの声は聞こえなくなった。

代わりに聞こえてくるのは、通話が切断されたことを示す通知音。

スマートフォンを耳から離して画面を見ると「通話が終了しました」の文字が。

今からでも雛菜ちゃんの家に行つて急がせればと一瞬考えたが、ミイラ取りがミイラになることが目に見えているため思いとどまることができた。

これが経験の力。

「テストの成績はいいみたいだし、大丈夫なんじゃないの？」

円香ちゃんの言うとおり、出席日数が足りていて、テストでそれなりの成績を取れていれば進級は問題ないはず。

それは入学直後に調べた。

しかし、入学して二ヶ月でこれだけ遅刻しては、今後の雛菜ちゃんが心配になるのも仕方ないと思う。

「ほら浅倉はこつち」

校門をくぐつてすぐ、左に曲がろうとした透ちゃんを円香ちゃんが止める。

「え……あそっか」

左に曲がると一年生の校舎。

まっすぐ進むと二年生、三年生の校舎が建っている。

一年生の校舎は最近新設された校舎で、奥に見える校舎よりも綺麗に見える。

実際には綺麗で、新入生にとっては心地のいい環境だと思う。

照れるそぶりもなく、透ちゃんは円香ちゃんに引きずられるように旧校舎へと向かう。

「じゃ、お昼にまた」

「……！ うん、お昼ね！」

早く午前中の授業が終わらないかなと、塗装の剥げていない校舎を眺めながら下駄箱へと向かった。

福丸小糸は失敗れない 1章 4節

二限目の体育を終えて、火照った体を冷ましながら制服に着替える。

雛菜ちゃんは二限目の途中で合流したが、もう馴れてしまった先生は雛菜ちゃんには何も言わなかった。

体育の授業はお昼休み少し前に終わるとはいえ、着替える時間を含めるとどう頑張ってもお昼休み開始には間に合わない。

きつと二人とも待っているだろう。

鞆から弁当箱を取り出して、雛菜ちゃんを探すが見当たらない。

「雛菜ちゃん……は購買かあ」

雛菜ちゃんはお弁当持参ではなく、学校の購買を利用している。

なんでも、購買で売っているパンは種類も多く飽きないし、なにより美味しいそう。

そんなに多くお小遣いをもたらっていないので、毎日購買でお昼ご飯を買うような真似はできない。

教室を出て、教室を一つ通過した先の階段、一段飛ばしをしたくなる気持ちをごつと抑えて、しかしできる限り早く下りる。

途中で踊り場を折り返し、また階段を下りて下駄箱へと向かう。

まだ踵が硬いシューズを脱いで、やはり堅いローファーへと履き替える。

下駄箱を出て旧校舎の方へと向かう。

緑の石段を超えると、旧校舎とは反対の方向に車一台が入れそうなくらいの脇道がある。

木々が生い茂り、緑色をした日の光に照らされた脇道には、一定の間隔でベンチが並べられている。

このどこかに透ちゃんと円香ちゃんがいるはずだ。

「あ、いたいた！」

脇道の最初のカーブを曲がったあたりで二人を見つける。

二人がけのベンチに一人ずつ座り、あとから来る後輩の席を確保してくれていた。

小走りで向かうと、円香ちゃんが立ち上がりベンチの片方を空けてくれる。

「円香ちゃんありがとう！」

「ん……」

実は円香ちゃんが動く必要はないのだが、透ちゃんと同じベンチで、透ちゃんの隣が円香ちゃんの定位置なのだから仕方がない。

誰かが決めたわけではなく、昔からそう。

小学生のときからずっとこの位置にいる。

透ちゃんはまだあまり意識していない様子だけれども、円香ちゃんは間違いなく意識しているだろう。

透ちゃんを挟んで円香ちゃんの反対側、ほんの少しだけ離れたベンチに座って、弁当箱を膝の上に載せる。

「あは〜みつけた〜」

落ち着く暇もなく雛菜ちゃんがやってくる。

手に提げたビニールには、いつものハニートーストが入っているのだろう。

何も言わずに、一人分左に動く。

ベンチの右側、つまり透ちゃんの隣を雛菜ちゃんに譲るため。

そんな気遣いを知ってか知らずか、雛菜ちゃんは勢いよくベンチに座る。

ベンチは地面に固定されているからいいものの、固定されていなかったら間違いなくひっくり返る勢い。

「おまたせ〜」

「ん、じゃあいただきます」

透ちゃんの言葉を合図に膝に載せた弁当箱を開けると、卵焼きとにんじん、トマト、ソーセージ、ふりかけのかかったご飯がびっしり詰められていた。

バランスがいいとは言えないかもしれないが、作ってもらっている手前文句はない。まずはにんじんに箸を伸ばす。

野菜から食べると健康にいいとテレビで見ながら、意識して野菜を先に食べるようにしている。

口に含んで数回噛むと、口の中ににんじんの香りと甘みが広がっていく。

歯ごたえも柔らかく、よく茹でられていることが分かる。

「あ、そうだ」

突然、透ちゃんが何かを思いだした。

まあ、よくあることなのでそのままにんじんをもうひとつ食べる。

「私、アイドル始めた」

直後に、円香ちゃんが口に含んでいたお茶を吹き出した。

まあ、これもよくあること。次はトマトを箸で掴む。

「アイドル……?」

トマトを口元に持ってきて、ようやく透ちゃんの言った言葉を理解する。

透ちゃんが、アイドルを始めた。

小学校でもそのかっこいい姿は女の子から人気があり、今でもその人気は衰えていない。

そんな透ちちゃんだから、アイドルにスカウトされたとしても不思議ではない。

「わっ！ ととっ」

その事実を理解して、箸で挟んだトマトが落ちてしまった。

運良く弁当箱の中に落ちてくれたので粗末にせずに済んだ。

透ちちゃんがアイドルを始めること自体は何も問題はない。

問題なのは、その周りにいる人たち。

雛菜ちゃんは、きつと透ちちゃんに付いていくように同じ事務所のアイドルになろうとするだろう。

そして、なんでもできる雛菜ちゃんはアイドルだつてこなしてしまうのだろう。

「あはく、なんか楽しそう。雛菜もやってみたくい」

雛菜ちゃん本人もやる気があるようなので、あとは事務所次第だろうが、このような逸材を放っておくような事務所なら、透ちちゃんをスカウトしたりしないだろう。

「ちよつと、浅倉。突然すぎ」

「あ、ごめん。でも言つといた方がいいかなつて。樋口もやる？」

「やるつて……そんな簡単にできるもんじゃないでしょ」

一番動揺を見せている円香ちゃんも、雛菜ちゃんより可能性は低いかもしれないけれど、きつと透ちちゃんについていく。

小さい頃から一緒に、まるで姉妹のように過ごしてきた二人だから、今さら離れるよ
うなことはしないだろう。

「ん？ あー。まあ、そうかも？」

三人がアイドルを始めるとなれば、また取り残されてしまう。

また、ひとりぼっちになってしまう。

それは……嫌だけれど。でも、アイドルなんて……。

「……」

雛菜ちゃんや透ちゃんみたいなスタイルはないし、円香ちゃんみたいなかつこよさも
持っていない。

なんならちよつと……その……丸いし、顔立ちだつて普通の女の子でしかない。

勉強は頑張ればなんとかなった。

勉強すればするほどテストの成績は上がるし、高校にだつて合格できる。

だからこうして、またみんなと一緒に過ごすことができている。

でも、アイドルは……芸能界はそうはいかない。

生まれ持った才能がなければ、生きていけない業界のはずだ。

その業界に入ったことはないのイメージでしかないが、世間のニュースやテレビに
出ている人たちを見れば分かる。

あれは努力だけでどうにかなる世界ではない。

——それだと……わたしは……。

「小糸ちゃんも、やる？」

「え？」

突然名前を呼ばれて、右を向けば雛菜ちゃんの奥から透ちゃんが覗き込むようにこちらを見ていた。

透ちゃんは表情の動きが少ないのでなんとなくでしか分からないが、嬉しそうな印象を受けた。

「えつと……」

「小糸ちゃんかわいいし、いけるっしょ」

「あはくわかるく。小糸ちゃんかわいいもんねく」

雛菜ちゃんの手が頭に伸びてきて、ものすごく雑に撫で回してきた。

強引に手を動かしていたので頭は左右に振られるし、髪は引つかかって痛い。

「雛菜ちゃん、ご飯食べてるときに髪触らないの！」

「はい」

行儀の悪さを指摘すると、大人しく手が引つ込んでいく。

これもたまに引つ込んでいかないときがあるので困る。

しかし、ここまで期待されて応えないわけにはいかない。

みんなが期待してくれているのだから、その期待には応えなければ。

「と、とーぜん！ わ、わたしもやるから！」

ああ、言ってしまった。

でも、言わなかったとしても受けなければまたひとりぼっち。

きつとみんなの仲の良さを主張すれば、四人そろってアイドルをすることだってできるはず。

とはいえ、応募はどうするのか、そもそも応募できるのか。そこから調べないと。

アイドルを目指す不安を紛らわすために目の前にあるトマトを口に含むと、奥で円香ちゃんがため息をついていた。

福丸小糸は失敗れない 1章 5節

午後の授業に身が入るはずがなかった。

それでも予習はしっかりやっているの、しばらくは大丈夫だろう。

それよりも、頭の中はどうやってアイドルになるかでいっぱいだった。

休み時間の度にスマートフォンで事務所のサイトを開き、応募要項を確認していた。

授業中はどうやってアピールをしようか考えて、思いついたことをノートに整理してみようとしたが上手くいかなかった。

何か特別な才能があるわけでもなければ、アイドルになりたいという特別な理由もない。

結局、家に着いても思いつくことはなく、スマートフォンに映った応募フォームとにらめっこしているだけの時間を過ごしてしまっている。

「そっういえば、どんな人がいるんだろ」

283プロダクションの公式サイトトップへと戻り、所属アイドルの一覧ページに飛ぶ。

金髪の人や、身長が高いのに小学生な人、なぜか宣材写真に鳩が写っている人、すご

く胸が大きい人。

どの人もプロフィールを見ただけでその人たらしめる特徴を持っていることが分かる。

しかし、そういうものは持っていない。それを、どうアピールするか。

問題は一度棚上げて、応募要項を埋めていく。

氏名、住所、電話番号……は携帯電話にしておいて、特技、趣味、志望理由。

志望理由以外は一通り埋めることができた。

特技は……自慢できることではないけれども、勉強と書いておいた。

趣味は読書。教科書を含めて本を読むのは好きなので、嘘ではない。

さて、棚上げた問題が返ってきてしまった。

志望理由。

一度「みんなと一緒にいたいから」と書いて、消す。

そんな文章では相手に伝わらないし、アイドルになる理由として妥当ではない。

無難な回答を考えて「多くの人を笑顔にしたいから」と打ち込んでみた。

いやいや、そもそも嘘は下手くそなのだから、こんな上辺だけ繕ったところですぐに

見抜かれてしまうに決まっている。

「でも、じゃあどうすれば……」

ため息交じりにベッドに飛び込む。

「やっぱり、わたしには無理なのかな」

応募する時点で躓いているようでは、仮に合格しても続けられないだろう。

仰向けに寝転がり、再び画面とにらめっこ。

すると突然、スマートフォンが震えた。

同時に、画面の上部にメッセージが。

「樋口、受かったって」

発信者は透ちちゃん。

前置きは何もないけれど、このタイミングで受かる受からないの話が出てくるのはアイドルの話意外に決まっている。

透ちちゃんの言うことが冗談でなければ、円香ちゃんはすぐに行動してすぐに合格をもらったということ。

少しだけ間を置いて、続けざまにスマートフォンが震える。

「わあっ！」

あまりに異常な振動で、驚いて手の力が緩んでしまう。

慌てて手を握るが、何も掴めない。

そして目の前にスマートフォンが迫ってくる景色を最後に、視界が真っ暗になる。

直後に鼻の頭に堅いものが当たる。痛い。

「わぷっ」

スマートフォンが顔に落ちてきたと理解するのに、時間はいらなかった。

たまにやらかすことだから。

顔に落ちたスマートフォンを拾い上げると、落とす前と画面が変わっていた。

「あ、あれ？」

ホーム画面ではなく、チエインの画面でもない。

ただただシンプルな白背景に黒い文字で「送信しました」と小さく書かれているだけ。送信しました。

何を？

いや、考えるまでもない。

先ほどまでにらめっこしていた画面は応募フォームなのだから。

それを送信したに決まっている。

つまり、283プロダクションのオーディションに応募してしまったということ、それはつまり――。

「え、ええっ！ ちょよ、ちょよと待って、待って！」

思わずベッドから立ち上がり、スマートフォンを弄る。

なんとかして送信したものを取り消せないものかと、一つ前のページに戻ってみるが、空白の応募フォームが表れるだけ。

逆に言えば、別の何かを送信したかもしれない可能性は、これで消えた。

「い、いや。だってあんな理由で……」

どれだけ言い訳したところで、送ってしまったものが取り消せるわけではない。

そもそも、どうにかして応募しようと考えていたのだ。

応募してしまった今、書類選考で落ちないことを祈りながら、どうやってオーデイションでアピールするかを考えなくては。

頭で理解している部分はあるものの、心が追いついてこない。

「ど、どうしよう……」

なんて言葉が漏れるが、どうしようもなにも、もう先に進む以外の道はない。

とりあえず、チエインを見よう。

透ちゃんの言葉が本当か嘘か分かるかもしれない。

最悪、間違つて応募してしまったと事務所に連絡をすればいい話だ。

「ちよ」

「なに言ってるの」

「てかなんで知ってるの」

「プロデューサーから聞いた」

「円香先輩はやくい」

そこで会話は終わっている。

透ちゃんの言葉は本当だったようだ。

円香ちゃんはお昼に透ちゃんの話聞いて、どうやったのかは分からないけれども、今日合格をもらってきつた。

すごい行動力だと思う。

「迷ってばかりのわたしとは……」

ため息をつこうと息を吸った瞬間、再びスマートフォンが長く振動し始め、思わず息が詰まる。

「え、あれ、この番号……」

電話をかけてきた相手番号は、先ほど調べていた場所……283プロダクションの電話番号。

なんの理由もなくかかってくるような相手ではない。

「どうしよう……」

どうしようもないにも、もう道は一つしか残っていない。

仮にここで電話に出なければ、その残された道は完全に消え去ってしまう。

だから、出るしかない。

緑の受話器マークを上にもスワイプして、通話に応答する。

——あれ、電話出るときってなんて言えればいいんだっけ。

もしもし……は確か失礼だって見た気がする。

かといって、友達と話すときのよ様な気軽な挨拶もおかしい。

「……」

なにか言わなければ。

でも、何を言えればいいか分からない。

何を言っても間違いになってしまう気がして怖い。

ここで間違えてしまえば、やはり道は閉ざされてしまうのだから。

かといって、このまま黙っていることが正解なはずもなく、何かは言わなければなら

ない。

その言葉が発せず、数秒。

「もしもし〜」

スピーカーから聞こえてきたのは、気が抜けたようなのんびりとした口調の女性の

声。

不思議なことに、沈黙を破られたことで少しだけ気が楽になった気がした。

そうしてようやく、言葉を発することができる。

「は、はいっ!」

言葉を発したといっても、ただ返事をしただけ。

ここから先、何を話せばいいのか分からない。

「えっと、福丸さんのお電話でよろしいでしょうか?」

戸惑っていることは伝わってくるのに、落ち着いた印象を受けるその声は、返事を返すには十分な冷静さを取り戻してくれた。

「は、はい。福丸です。福丸小糸です」

「あー、よかったです。私、283プロダクションの七草はづきと申します」

ビジネスというのは、もっと緊張感のあつてかしまつたものだと思っていた。

思っていたのだが、はづきさんの声を聞いていると、もしかしてただの思い込みだったのだろうかと思えてくる。

それほどまでに、はづきさんの声は優しく、のんびりとしていて、落ち着く。

「先ほどはオーディション応募ありがとうございます。それで、面接の日程を調整できればと思って電話しました」

やはり、送信してしまった応募フォームを見て電話をしてきたらしい。

わざわざウェブでエントリーしているのに、こんなに早く電話がかかってくるなら直

接電話をしてもよかったかもしれない。

……つい数分前にその勇気があったならの話だけでも。

「福丸さんは学生さんですよね。明日の放課後……そうですね、一七時はどうでしょう？」

「え、えっ!？」

明日の用事などはないが、いかんせん話の展開が早すぎる。

まだ応募してから十分と経っていないのに、もう日程をどうするかという話が始まっている。

「もしご多忙なら、お友達との約束とかでも大丈夫ですよ。なにか用事があれば、いつでも必ずさせます」

しまった。

きっともう面接は始まっている。

面接で重要なのは相手からの第一印象。

何日にも渡って行うわけでもない面接で、参加者の評価をするのだから、第一印象の比重は当然重くなる。

つまり、今電話しているはずきさんが面接官だった場合、もうすでに第一印象のアップールは始まっている。

「ここは、きつぱりと決めなければ。」

「は、はい！ 大丈夫です！」

「よかったです。それでは、明日の一七時に、283プロダクションの事務所でお待ちしていますね。」

「よ、よろしくお願ひします！」

気がつけば礼をしていた。

電話越しでそんな動作が伝わるわけもないのに、体が自然と動いてしまっていた。

しかし、電話が切れるまで頭を上げることにはできなかった。

もしかしたらその動作さえも伝わっているかもしれないと、この呼吸ひとつひとつが伝わっているかもしれないと考えると、緊張を緩めることなどできなかった。

若干流れていたノイズが消えて、電話が切れたことが分かる。

「……………はあ。」

あまりにも、事が早く進みすぎている。

状況に対して思考が追いついていない。

しかし、事実として、間違いなく、明日面接があることは分かった。

面接が何回あるのか分からないが、最初の一回が肝心。

とはいえ、アイドルの面接は何を聞かれるのか。

芸能界に入るなんて考えたこともなければ、調べたこともない。

もう一日も時間はないけれど、準備はしておかなければ。

机の棚に置かれたノートを取り出して、ペンを握る。

自己アピール、アイドルになりたい理由について詳細に書き出していく。

こうなったら嘘でもいい、とにかく筋を通さなくては。

応募フォームに書いた事を、とにかく詳細に。

「つて、そんな思いつかないよ……」

項目だけ書き出すとペンは動きを止めて、それ以上一切進むことはない。

今までの人生を振り返っても、特徴的なことなどはひとつもない。

ただただ普通の、勉強を頑張ってきた高校生。

それ以下もなければ、それ以上もない。

これだけ早く返事の電話をくれて、スケジュールの調整をしたのだから、もしかしたら人が足りていないのかもしれない。

それなら、多少理由がしっかりしていなくても……。

「なんて楽観的にはなれないよ」

いくらなんでも都合がよすぎる。

人が足りていないのはあつたとしても、それで人を選ぶ基準が変わるとは思えない。

だからといって、何かいい案が思い浮かぶわけでもない。

そして、当たって砕けるような度胸もない。

嘘だって、上手くつけたことなんてほとんどない。

それなのに付け焼き刃のような嘘が通るはずもないことは分かりきっている。

結局ノートに書かれたのは項目だけで、中身は何も書かれないままその日は終わってしまった。

福丸小糸は失敗れない 1章 6節, 7節

今日の授業もほとんど聞いていなかった。

とは言っても、ほとんどが中学の延長で、ほとんど頭に入っていることの復習だったりするのでそんなに問題はない。

それよりも重要なのは今日これからの面接。

やってきたのは283プロダクションの事務所。

一階はペットショップかなにかだろうか。

見上げてみると、二階の窓には大きく283の文字が書かれている。

スマートフォンの地図で確認しても、住所はここで合っている。

ペットショップらしき店の横から建物に入り、階段を上がって二階へ。

一歩一歩上る度に、狭い空間に足音がこだましてくる。

服装は、とりあえず制服にしておいた。

スーツは持つておらず、私服にしようかと思っただけでも、どんな服を着ていけばいいのか分からなくなってしまうた。

なので無難に、学生らしく、制服で挑むことにした。

それに、この制服は努力の末に勝ち取った制服でもある。

中学時代をずっと一人で過ごして、透ちちゃんと円香ちゃんがこの高校に進学したのを知ってからずっと憧れていた制服。

ちよつとしたお守りのようなものだから。

二階にたどり着くと、アルミ製の扉に霞がかかったガラスが貼られていて、ドアの横には「283プロダクション芸能事務所」と書かれた表札が取り付けられている。

ここで間違いない。一度大きく深呼吸をしてから、インターホンを押す。

インターホンを……。

「あ、あれ？ えつと……あれ？」

インターホンがない。

かといって、勝手に入ってしまうのはいかなものか。

いや、いかなものかではない。ダメだろう。不法侵入だろう。

ともすれば、ノックでもしてみよう。

そう思つてガラスの部分を軽く二回叩く。

「……」

しかし、中から反応はない。

「え、えつと……」

一応、念のため、ドアを開けてみる。

……開いた。

「あの一、すみませーん」

顔だけをドアの中に入れて、誰かを呼んでみる。

顔だけなら不法侵入にならないよね……？

しかし、事務所に明かりが灯っているにもかかわらず、中から涼しげな空気が流れてきたにもかかわらず、返事はない。

振り返ってみれば、暗い廊下に白い蛍光灯がチカチカと音を立てている。

「で、でも、来るようについて言われたし……」

そんな言い訳を誰にするでもなく声に出して、事務所の中に入る。

これで立派な不法侵入だ。

いや、呼ばれているのだからきつと大丈夫。

人の気配を残したままの事務所の中は、想像していたものよりずっと綺麗だった。

もつとタバコの匂いが強かったり、その辺にゴミが散らかっていたり、怖そうな顔の人がいるものだと思っていた。

「あの一」

控えめな呼びかけを行いながら、奥へと進んでいく。

校長室に似たような部屋や、おそらく給湯室というものだろう部屋。

寄り道をしているうちに少しだけ楽しんでる自分に気がついて、少し恥ずかしくなる。

そして、一番奥。

何をする部屋なのかは分からないけれども、事務机が二つと、ソファアがコの字に置かれている。

壁際の棚にはテレビが置かれていて、社員の人たちはここでくつろいで……いや、お仕事をしているのだろうか。

そもそも、どんな仕事をしているのかも知らないのです、いまいちイメージできないものの、今ここに誰もいないのだからそれなりには忙しいということだろう。

「……すう」

小さく呼吸音が聞こえて肩が跳ねる。

悪いことをしているのではないと頭で理解していても、勝手に入ってしまったという事実は他人から見れば悪いことになりかねない。

声のした方向に視線を向けると、ソファアに女の人が横たわっていた。

一瞬だけ、倒れているのかと心配したが、よく見てみるとアイマスクまでしつかりと着けていて、寝ていることを全く隠そうとしていない。

最初に感じたのは、いくら夏とはいえクーラーが効いた部屋で寝ていては風邪を引きそうだということ。

次に思ったのは、女性が一人で、それも鍵も閉めずに無防備に寝ているのは危ないということ。

「つて、そうじゃないって」

方に手を伸ばして、軽く揺する。

「あ、あのう、すみません」

そこまでしてようやく、その人の腕が動く。

「ん、ん」

うめき声をあげながらアイマスクを取ると、あたりを見回して、目が合う。

「……あ、えっと」

そういえば、何も言わずに入ってきたのだった。

今更ながら、罪の意識が芽生え始めていた。

「あー。福丸さんですね。おはようございます」

もう日も暮れるけれども。

いや、芸能界の挨拶はおはようございますだと聞く。

これはきつとそういう挨拶だろう。

「お、おはようございますー」

戸惑いが口から出てしまったものの、とにかく元氣よくを意識した。

「おはようございます〜。えっと、プロデューサーさんはまだみたいなので、もう少し待っててくださいね〜」

無限ループに陥るかと思われた挨拶は、彼女が続けた言葉によって終わった。

そして、そんな彼女の、のんびりとした優しい口調には聞き覚えがある。

「あの、はづきさん……ですか？」

言ってから、間違っていたらどうしようと、いらぬことを聞くべきではなかったと後悔したが、はづきさんの反応は後悔する未来とは真逆のものだった。

「はい〜。覚えていてくれて、ありがとうございます〜」

そういう彼女の反応は、どこか嬉しそうな印象を受けた。

とはいえ、印象のほとんどはもとからのほほんとした掴みどころのない印象なので、確かなものかは分からない。

「一昨日から続けて、福丸さんで四人目なんですよ〜」

「は、はい」

透ちちゃんたちのことだろう。

はづきさんはアイマスクを外してソファ前のテーブルに置くと、手を差し出して座

るように促した。

一礼してはづきさんが座るソファと直角に置かれたソファに腰掛ける。鞆はとりあえず膝の上。

対面に近い形で、一気に緊張が高まる。

「あ、面接はまだなので、気楽にしてくださいですよ〜」

まるで見抜いたかのような物言いに、肩が跳ねる。

「えつと……なんの話でしたっけ〜?」

「えと、透ちやんたちの……」

「ああ、やっぱりお友達なんですね〜」

「ぴ、ぴやあ! え、えと、そ、そうなんですけど……えつと」

友達が始めたから、自分も受けてみようと思った。

なんて志望理由は、多分最悪。

では、その友達が辞めたら辞めるのか。

その友達と同じにはなれないがいいのか。

そんな質問が飛んでくるに決まっている。

「いいと思いますよ。お友達といると、楽しいですからね〜」

はづきさんはくすくすと笑っていた。

友達といると楽しい。

それは本当にその通りだと思う。

でも、楽しいだけでアイドルがやっているとイけるとは思えない。

それでもやはり、楽しくいたいと思ってしまう。

みんなと一緒にいるのは楽しいし、そういたいと思っているから今ここにいます。

アイドルになる理由として、それでいいのだろうか。

はづきさんにそれを聞こうとしたちようどその時、廊下からガチャンと音がした。

「あ、プロデューサーさん。例の子、来てますよ〜」

「ほんと？ ごめんね、少し遅れちゃったかな」

廊下からやってきたのは、雛菜ちゃんと同じくらいの背丈をした、男の人。

まだ暑さは残っているというのに、スーツをしっかりと着ていて髪も整っており清潔

感がある。

でも、どこか少しだけ頼りなさそうで、なんというか、喋りやすそうな人だ。

「い、いえ。大丈夫です！」

この人がこれから面接をする相手だと思うと、喋りやすそうでよかったと思う反面、

緊張で膝に載せた鞆を抱く手に力が入る。

プロデューサーさんはソファの後ろを通って机に鞆を載せた。

「それじゃあ、面接は一つ上の階でやるから、ついてきてくれるかな？」
「は、はい！」

いよいよ、これから先の二年間を左右する面接が始まる。

福丸小糸は失敗れない 1章 8節

事務所の上には、小さな体育館のようになっていた。

マンガで読んだバレエのレッスン場のような、大きな鏡が一つと、丸椅子がいくつつか。入り口で靴を脱いで、来客用だろうスリッパに履き替える。

「こんな場所でごめんね。他に場所がなくてさ」

「い、いえ。……えっと、みなさんはここでレッスンとかしてるんですか?」

プロデューサーさんは丸椅子を二つ持つてくると、部屋の真ん中に並べる。

その片方に座ると、反対側に座るように手を出す。

「どうぞ座つて。うん、みんなここでレッスンしてるね」

言われたとおりに、鞆を椅子の横に置いてから椅子に座る。

始まるのだと思うと、緊張で息が止まりそうだった。

心臓の鼓動が強くなっていくのを感じるし、プロデューサーさんが話し始めるまでのたった数秒がとて長く感じられた。

「さて、福丸小糸さん。で合ってるよね」

「は、はいっ!」

真つ直ぐな背筋をもつと伸ばして答える。

それに、プロデューサーさんは先程のはづきさんと同じようにくすくすと笑いながら返す。

「緊張しなくても……つて言つても難しいよね。そうだな……透とか円香とは知り合いなのかな？」

「は、はい。透ちゃんとも円香ちゃんとも、雛菜ちゃんとも小さい頃から一緒に……いつも一緒に遊んでた仲なんです」

話している間、一瞬だけプロデューサーさんの目つきが変わった気がした。怖かったわけではなくて、むしろ少しかっこいいと思うようなものだった。

それもほんの一瞬で、すぐに最初のような柔らかい笑顔へと戻った。

「へえ、そういうえば円香が君の……小糸のことを話していたな」

円香ちゃんが、私のことを？

「え、えと、どんなことを言っていたんですか？」

『新しい子が来てるなら早く行ったらどうですか？』つてね。どうやら僕はあまり好かれてないみたいで……」

円香ちゃんは顔立ちと普段の表情から厳しそうな雰囲気はあるものの、話してみたら優しいことがわかる人。

円香ちゃんがそんな辛辣なことを言うとは思えないけれども……プロデューサーさんの表情を見る限りは本当に困っていきそうだ。

「えと、円香ちゃんがなんでそんな厳しいことを言うのかは分からないですけど、優しい人なんです。わたしにもよくお菓子を持ってきてくれて、気配りもできて……」

「そうなんだ。小糸はみんなと仲がいいんだね」

「そう見えますか!? みんなとはいっても一緒で……」

そこで言葉が止まる。

いつも一緒だから、これからも一緒とは限らない。

その証拠に、中学は別れてしまったではないか。

それに、大学に進学するとなれば、また同じ大学に進めるとは限らない。

「うん、四人でやっていけたら面白そうだなって、俺も思ったよ」

止まった言葉を紡ぐように、プロデューサーさんは言った。

「それじゃあひとつだけ質問だけれど、小糸はどんなアイドルになりたい?」

「どんな……?」

どんなと聞かれても、どんなアイドルがあるのかも知らない。

「そうだな……元気にしたいとか、注目されたいとか。そんなざっくりとした感じでもいいよ」

プロデューサーさんは助け舟を出したつもりなのかもしれないけれども、余計に分からなくなる。

透ちやんも円香ちゃんもクールだし、雛菜ちゃんはほんわかしだ感じ。でも、それをまねすることなどできない。

「……」

何も、出てこない。

みんなと一緒にいられるならそれでよくて、それ以上を望んだりはしていない。でも、この答えは間違いな気がした。

「じゃあそうだな、それを探すのを、最初の課題にしようか」

「へっ？」

最初の課題……??

最初ということは、次があるということ??

「これからよろしくね」

よろしく。

その言葉が意味するところを、確認せずにはいられなかった。

対面してからまだ数分しか経っていないはずで、質問もそんなにされていない。

「あ、あの……それって」

こんなに軽くていいのかなんて思ってしまう。

もっと、何回も面接をして、いろいろな粗を探して、それらを回避して掴み取れるものだと思っていたから。

だから、騙されているのではないかと。

何かを試されているのではないかと。

その懸念は、プロデューサーさんの一言で消え去ってしまう。

「ああ、合格だよ」

まるで、霧がとれたように、視界が、目に映るもの全てが鮮やかになった。

吸い込む息が心地良い。

吐き出すのもつたいたいと思うほど。

「あ、えと、こ、ここちらこそよろしくお願いします！」

どこかへ飛んでいきそうな気分を胸の奥に押し込んで、挨拶は忘れずに返す。

「うん、いいね」

プロデューサーさんはなぜか満足げに頷いているのだが、その理由までは分からな
い。

「一応まだ学生だから、親御さんの許可はもらってるかな？」

親の許可。

その言葉がこんなにも重みに感じたことはなかった。考えてみれば当然。

まだ子供なのだから、親の許可なしにアイドル活動をさせて、あとあとからトラブルになるなんて事務所もよしとほしめないだろう。

親の許可など、取れるはずがない。

中学受験に落ちたあの日から、お母さんとは祿に話していない。

挨拶しても、必要な教材をお願いしても、返ってくるのは機械的な対応ばかり。

遊びも、勉強には関係のない習い事も断られ続けて、ここに来て夢みたいな話を許可するはずなどない。

でも、こうして掴んだチャンスを手放すのは嫌だ。

「だ、大丈夫です。ちゃんともらってますー！」

嘘をついた瞬間、急に息苦しくなった気がした。

胸の奥を何か大きい針で縫われたような感覚。

肩がぐつと重くなつて、背中が曲がってしまいそう。

「そっか、ならよかつたよ」

どうやら、騙せたようだ。

でも、こんなに苦しくなるくらいなら、騙さなければよかつたかもしれない。

ううん。

きつと有名になって、結果を残せるようになれば、お母さんだって認めてくれる。それまでは、この嘘を貫き通して、なんとかしてアイドルを続けなければ。

人一倍……いや、それじゃあ足りない。

二倍も三倍も頑張っていけないと。

「合格、とは言っただけでも、そんなすぐに活動が始められるわけじゃないんだ。多分一ヶ月はダンスや歌唱レッスンをしてもらおうと思う。それから宣材……みんなに見てもらったための写真を撮る。そしたら、ようやくアイドル福丸小糸としての活動が始まるんだ。ここまではいい？」

「は、はい」

胸につつかえた何かはまだ取れないけれど、アイドルとして活動を始めるまでに、まだ少しかかるという話だと思う。

「うん、じゃあレッスンの日を決めようか……と思ったけれど、他のみんなも一緒のほうがいいよね。調整してから、また連絡するよ。多分、明日か明後日になると思う」

そう言うと、プロデューサーさんは椅子から立ち上がる。

「少しバタバタする日々が続くと思うけれど、俺も精一杯サポートするから、一緒に頑張っていこう！」

一緒に、という言葉が嬉しい。

一人じゃなくて、プロデューサーさんと。

これから先はまだ不安でいっぱいだけれど、今は今できることを精一杯。

「は、はい！ 一緒に、ですね！」

立ち上がって椅子をもとの位置に戻してから、走り出す。

これから始まる、新しい居場所での新しい人生が。

2章

一瞬だけ、追いついた

「それで、どうだったの?」

いつものように、ベンチに並んでお弁当を食べていると、円香ちゃんが尋ねる。

「え、何が?」

「浅倉じゃなくて、小糸」

面接の話。

言わなくとも、円香ちゃんの瞳がそう語っている。

昨日の面接から一夜明けて、嬉しくて昂ぶっていた感情が落ち着くにつれて現実感がなくなっていく。

昨日はあんなにもドキドキしてなかなか寝付けなかったというのに、今日起きてからは違う意味でドキドキしっぱなし。

「え、えと、受かった……と思うんだけど」

現実感がなくなってくると、本当に合格をもらったのが不安になってくる。実は一次面接が合格だったとか、実は勘違いだったとかだと恥ずかしい。

「レッスンの予定は今日中に連絡するって言ってたけど……」

ポケットからスマートフォンを取り出して着信履歴を確認してみるが、新着はゼロ。やはり不安で、休み時間が来る度に確認している。

「え、もうそんな話してるんだ、早いね」

「雛菜まだなーんにも連絡ないよ〜」

意外そうに言う透ちゃんに、思わず首を傾げる。

「あ、あれ？ プロデューサーさんはみんなと一緒にできるようになって言ってたけど……」

直後に、円香ちゃんの眉間にしわが寄る。

「……」

何を想像したのかは分からないけれども、呆れのような、いらつきのような、そんなとてもではないがポジティブとはいえないため息が漏れている。

プロデューサーさんの話からして、もうみんなはレッスンを始めようとしているのだと思っていた。

みんな受かったのが昨日の今日なのだから、まだこれから予定を決めるつもりと言われても違和感はないけれど。

でも、一つ二つ程度の質問で採用したところから考えると、もしかすると結構適当な

のかもしれない。

「で、でも今日中には連絡するって——」

言葉を遮るように、まるでいまの話聞いていたかのように、スマートフォンが震える。

「ぴゃあつ」

びつくりして思わず落しそうになった。

画面を見ると、プロデューサーさんからメールが届いていた。

「今日の一七時にみんなで事務所に来てほしい。用事があればそっちを優先して」と、あまり可愛げのないシンブルな文章。

みんなに伝えなきゃと、顔を上げると同時に右から軽快な音楽が聞こえてくる。

「あ、プロデューサーからだ」

「マナーにしときなつて」

透ちやんのスマートフォンのものであった。校則でスマートフォンの持ち込みは許可されているけれども、音が鳴らないようにしておく必要がある。きつと透ちやんのことだろうから、休み時間だけマナーモードを解除するなんてことはしていない。つまり、午前の授業中にメールを受信していたら先生からお叱りをもらっていたはず。

「あー、忘れてたわ」

あまり反省の色を見せない透ちちゃんの横では、円香ちゃんがスマートフォン画面を見ながら顔をしかめている。

「やは、みんなで、だつて」

やはり、みんなに同じメールが届いている様子。

みんなで一緒に。

その姿を想像すると、なんだか安心できる。

アイドルとして今後どうしていくのかという課題をプロデューサーさんからもらっているものの、同時にすぐに出るものでもないことも知っている。

今は何よりもみんなと一緒にいられることが嬉しい。

「小糸ちゃん、嬉しそうだね」

「ぴゃあ！」

顔に出ってしまったのだろうか。出てしまっていたのだろう。

恥ずかしくて俯くと、雛菜ちゃんの顔が視界の端に入る。

「小糸ちゃん顔真っ赤にしてニヤついてる〜カワイ〜」

「そ、そんなんじゃないもん！」

ニヤけていたのは嬉しかったからだなんて、それこそ恥ずかしくて言えない。

「ほんとだ、かわいい」

嬉しいのは本当だし、みんながこうやって笑っていてくれるのもちよつとだけ嬉しい。

「……」

でも、笑われるのは、今でもちよつと恥ずかしい。

「ほら、早く食べないとお昼休み終わっちゃうよ！」

寝坊と目標と夜七時

「それでね、小糸ちゃんがガバって立ち上がった〜」

授業が終わって、帰り道。

普段ならコマ数の違いで別々に帰ったり、途中まで雛菜ちゃんと一緒に帰ったりしているのだけれど、今日は……これからは、違う。

みんなと一緒に学校を出て、みんなと一緒に事務所向かう。

その間に話すのは主に雛菜ちゃん。今日あった面白いことや楽しかったことをいつものように話してくれる。

「つて、なんでわたしの話ばつかなの!」

もう事務所まで階段を上るだけだというのに、雛菜ちゃんはここまで一人の話題しか出していない。話題にされること自体はいやではないが、体育のサッカーでボールに思いつきりぶつかりに行つたこととか、勉強に集中しすぎて教室移動に気がつかなかつたことばかり話すものだからさすがに恥ずかしい。

「え、だつて雛菜小糸ちゃんしか見てないよ〜?」

つい数時間前に一緒にお昼ご飯を食べていたはずだけでも。確かにその話をここ

に在る三人にされてもみんな知っていることしかないけれども。

「あ、私も今日樋口しか見てないわ」

思いついたように雛菜ちゃんに對抗する透ちちゃん。

「……張り合わなくていいから」

その標的となった円香ちゃんはといえば、いつも通り深くため息をついた。

「やは、透先輩、円香先輩の面白い話聞かせて」

「ん、えつと……」

「話さなくていいから、早く階段上って」

事務所の入り口を塞いで話し込んでしまっていた。

仕方ないなという様子で、透ちちゃんが階段を上るのについていき、事務所に入る。

「あれ、今日お客さん来るんだっけ？」

「あぼなしほーもん、ですか？」

事務所の扉を開けると、奥からバタバタと音が聞こえてくる。

「えつと、すみません、今日はまだ私たちしかいなくて……」

奥から出てきたのは、園田智代子ちゃん。283プロのアイドルで、放課後クライマックスガールズに所属している。名前をもじってチョコアイドルとしてのキャラを立たせている。その後ろから顔を覗かせているのは同じユニットの小宮果穂ちゃん。

小学六年生とは思えないスタイルだけれども、元氣や無邪気さは小学生そのもの。

その二人が、目をぱちくりさせながらこちらを見ている。

「えつと……誰？」

「と、透ちゃん！ 283プロの先輩だよ！」

透ちゃんの言葉は、きつと向こうの台詞だっただろう。

だからこそ、智代子ちゃんもびっくりしてしまっている。

「あ、ああ！ 新しく入ってきたっていうノクチルの人たちですか？」

「あ——」

「やはくたぶんそう〜」

聞き覚えのない単語が聞こえたので聞き返そうと思つたが、雛菜ちゃんに遮られてしまった。

「プロデューサーまだだよね？ じゃあソファーは雛菜がもーらい〜」

そう言つて、いつの間にやら靴を脱いだ足をパタパタと鳴らしながら奥の部屋へと消えていった。

「あ、ずる」

先を越されたとしても言わんばかりに、雛菜ちゃんを追いかけていく透ちゃん。何も言わずにその透ちゃんにゆっくりとついていく円香ちゃん。

そして残されたのは……。

「え、えと、騒がしくてごめんなさい」

「ううん、大丈夫だよ。ね、果穂」

「はい！ 賑やかな方が、あたしも楽しいですから！」

果穂ちゃんかびよんぴよん跳ねる。ライブ映像を少しだけ見たけれど、そっくりそのまま画面から出てきたかのような感じがした。この純粋な元気の塊は、やはり小学生ならではかもしれない。

……そういえば、智代子ちゃんは常にチョコを携帯しているという噂があつた気がする。

「あ、そうだ！」

そう言うと、智代子ちゃんはポケットに手を入れる。

「お近づきの印に……はい、どうぞ！」

本当に携帯していた。

智代子ちゃんの手握られていたのは、プラスチックで包装されたチョコ四個。

「みんなの分も含めて！」

「あ、ありがとうございます！」

智代子ちゃんに一礼してからみんなを追いかける。

奥のパソコンとかテレビとか、居間なのか作業場なのか分からないスペースでは、もうすでに雛菜ちゃんがソファーに寝そべっていた。

「み、みんな！ 先輩からお菓子もらったから食べよ？」

お菓子という単語に反応して雛菜ちゃんが勢いよく起き上がる。そしてその隙を見てソファーの半分を奪い取る透ちゃん。

「やは〜お菓子くれる先輩好き〜」

ソファーの背もたれ越しに手を差し出してくる雛菜ちゃんにチョコをひとつ。

隣に座る透ちゃんにもひとつ。

「円香ちゃんも、はい」

「ん、ありがとう」

全員に配り終わったところで、自分の分の包装を解いて口に入れる。

学校終わりで脳が糖分を求めているちょうどいい時間帯。そこに甘い甘い香りが染み渡る。

溶けていくチョコに名残惜しさを感じていると、背後でドアが開く音がする。

「おーい智代子、果穂。そろそろ行くぞ」

「プロデューサーさん！ おはようございますー！」

知らない男性の声に返す元気のいい果穂ちゃんの声。

——ああ、あれが智代子ちゃんたちのプロデューサーさんなんだ。

ちよつとびっくりしてしまつたが、果穂ちゃんの反応からして間違いなさそう。

「それじゃ、これからよろしくね」

小さく手を振りながら笑顔で出て行く智代子ちゃん。

「あ——」

返事を言う前に、扉は閉まつてしまつた。

「……やつぱり、忙しいのかな？」

調べて分かつたが、放課後クライマックスガールズはいま絶好調らしく、ラジオをつけてもテレビをつけても出てくるらしい。テレビもあまり見ないし、ラジオなんてそれこそ聴かないので知らなかつたが。

「まあ、そうなんじゃない？」

誰に聞いたというつもりはなかつたのだけれど、円香ちゃんが返事をくれた。

と思つていただけけれど、円香ちゃんの視線はこちらには向いておらず、事務所の入り口をじつと見つめていた。

「円香ちゃん？」

そこには何もないのに、何を見ているのか分からなくて、それが少しだけ怖くて、つい声をかけてしまう。

円香ちゃんは一瞬だけこちらに目配せして、何かを探すように目を泳がせてから深くため息をつく。

「……遅いなって」

円香ちゃんの視線を追うと、時計はちょうど五時。約束していた時間ちょうどのはず。

なるほど、それでプロデューサーさんが来ないか見ていたのか。

確かに、約束を守れないのは……あまりよくないと思う。

プロデューサーさんはプロデューサーさんで何か仕事があるのかもしれないけれど、それならそれで連絡は欲しい。

あれ、でもそれなら、何を探していたのだろうか。

「あれ、円香先輩もしかしてプロデューサーのこと気になっちゃってたり〜」
「え」

えっ。

まだ一回しか会ってないはずなのに。

しかし雛菜ちゃんの言葉は、円香ちゃん表情が、もう今にも吐いてしまいそうなほど、もしくはとつても不味い食べ物でも口にしたらかのように歪んだことで否定された。

そして、極めつけに一言。

「は？」

「やくん、円香先輩こわい〜」

雛菜ちゃんはケタケタと笑いながらソファーに沈んでいく。横に倒れたから多分透ちやんの膝を枕にしているだろう。

「んあ？」

同時に聞こえた間抜けな声。

「あー、ふああ。みんな集まってたのか」

声の主を探すと、事務机に置かれたパソコンから顔が現れる。

「寝坊じゃん」

「寝坊だ〜」

プロデューサーさんは二人の言葉に動じることもなく、苦笑しながら立ち上がる。

透ちやんたちの座っているソファーと直角に置かれたソファーに腰掛けると、再び眠そうに目を擦る。まだアイドルとしての活動は始まってないけれど、プロデューサーさんも忙しいのかもしれない。

「えつと、二人も……」

と、対面のソファーを勧めてきたので、言われたとおりに座る。

なんだろう、少し不思議な感じだ。

「それで、なんの話ですか？」

ああ、そっか。円香ちゃんが隣にいるんだ。

いつも隣にいるのは雛菜ちゃん、円香ちゃんとは一番遠い位置にいるから、それで違和感があつたようだ。

「うん、そんなに長くはしないよ。顔合わせ程度に思ってもらえればいいかな。といっても、四人は幼なじみだから、顔合わせするのは俺の方か」

愛想笑いをひとつ飛ばしてから、しかし表情は笑顔のまま続ける。

「まず、ユニット名は——」

「ノクチル」

そしてすぐに、プロデューサーさんの言葉を透ちちゃんが遮った。

「豆鉄砲を食らつたような顔で固まったプロデューサーさんに、透ちちゃんが続ける。

「さつき先輩から聞いた」

「そういうば、さつき智代子ちゃんが言っていた。ノクチルの人たち、と。」

「でも花は持たせてくれよ」

「ふふ、ごめん。私も持ってみたかつたんだ」

「ま、ならいいか。スケジュールとか、悩みとか意見とかあれば、遠慮なく言ってくれ。」

「それと……」

プロデューサーさんはソファアに座りながら後ろに腕を伸ばして、事務机に置かれたプリントファイルを手にとって、机に広げる。

「最初の目標は、年末に行われる新人向けオーディションWINNING優勝だ。早速だけど、レッスンの予定を決めようと思う。都合のいい日悪い日ってある？」

置かれたファイルには、マス目のようなものがびっしりと埋まっており、左には日付が、上には時間が書かれている。

プロデューサーさんはペンをノックして、さあ来いと言わんばかりに構えた。

「あ、えと、七時には……家にいたい、です」

それ以上遅くなると、お母さんに不審がられそうだった。それまでなら、なんとかみんなと遊んでいたとか、図書館で勉強していたとか言つてごまかせる気がする。

「小糸」

「ぴゃあつ」

突然円香ちゃんに呼ばれて、肩が跳ねる。

いつもより近い声で、いつもより大きな声で。

「な、なに、円香ちゃん」

隣に座る円香ちゃんの表情を伺ってみるものの、その表情から受け取れる情報はほとんどなかった。

でも、円香ちゃんの視線は何か、表情とかじゃなくてもつとにか別のものを探るようなもので、少しだけ、怖かった。

「……いや、なんでもない」

円香ちゃんは何を受け取ったのか、それで何を感じたのかなど分からない。目を逸らした円香ちゃんは小さくため息をついてから、プロデューサーさんの目の前に置かれたスケジュールに視線を向ける。

「他のみんなは？」

「ないかな」

プロデューサーさんが目配せすると、透ちゃんが答える。

「雛菜もべつに〜」

「ありません」

続けて雛菜ちゃんと円香ちゃんが答えたのを聞いてから、プロデューサーさんはスケジュール表に一本縦線を引いた。

ちょうど一八時のところに線を引いて、それより右に大きなバツをつける。

平日の左側はもともと灰色に塗りつぶされている。これで平日は一二時から一八時がレッスンとして使える時間になる。

「それじゃあ、まずは明日やってみようか。土曜日だけれど大丈夫？」

プロデューサーさんはとんとんと表の一番上を指で叩く。

「時間は……昼過ぎ一時から、二時間くらいでどうかな」

明日は土曜日で、もともと特に予定がない日。時間も二時間ということなので、おやつ時には終わりそうだな。

「具体的な内容は？」

「初回だから、踊りと歌のレベルをトレーナーさんに見てもらおうかな。それから先はどうするか考えるけれど、大体週に三回か四回レッスンがあると思っってもらっていいよ」

円香ちゃんの質問にもプロデューサーさんはすぐに返す。まるでその質問が来ることを期待していたかのように。

そして、その回答も知っていたかのような速度で、円香ちゃんが返す。

「随分とゆっくりなんですな」

それは確かにそうだなと思った。

週に三回、四回だと習い事と同じくらい頻度しかない。休日なんて朝から晩までレッスン漬け……なんて想像していたものだから、少しだけ安心できる。

「のんびり、いいんじゃない？」

ここにきて、ようやく透ちゃんの口が開く。その隣にいる雛菜ちゃんは横になって寝

てしまっている。

「雛菜も〜」

そんな寝ているはずの雛菜ちゃんが透ちゃん言葉に重ねる。何が雛菜もなのか分からなければいけません。

「雛菜、起きて」

透ちゃんが雛菜ちゃんの肩を揺ると、呻きを上げながら意識を戻す。

「雛菜はこの日がいいとかあるか？」

プロデューサーさんの問いかけに、少しだけ考えてから、隣に座る透ちゃんを見て抱きつく。

「透先輩がいる日がいい〜」

楽しさ、みつけたよ

土曜日の昼過ぎ、梅雨入りもしたけれど今日は運良く晴れていた。とはいえ、レッスンを屋外でするわけでもないのだからあまり天気は関係ない。

レッスンスチューズは事務所で調達することだけでも、すぐには届かないのでそれまでは体育で使用しているスチューズを使用することになった。

時間より少し前にレッスルームに行くと、すでにトレーナーさんが待機していた。

それからすぐに透ちゃんも円香ちゃんも雛菜ちゃんもやってきたため、時間通りにレッスンを開始となった。

「そうね、みんな初めてにしてはいいんじゃない？ 樋口さんは経験者？」

「いえ、まったく」

最初はストレッチと、ウォーミングアップに鬼ごっこのような簡単な遊びをしてから、ダンスレベルを見るからと振り付けを真似するように言われた。

「そう。市川さんは動きはちゃんとできてるけど、アレンジ加えすぎね。アイドルとしては必要なときもあるかもしれないけれど。浅倉さんも悪くはないけれど、もう少し動きに緩急をつけれるともっとよく見えるわ」

それから、とこちらを見るトレーナーさん。

「福丸さんは、体幹を鍛えましょう。体が小さいから、大きく動く必要があるからね」
振り付けを真似している途中、思いつきり転んでしまった。動きは見て覚えられたけれども、体がまったくもつてついてこなかった。

勉強はできるけれども、体を動かすことだけはずっと苦手だったのが、こんなところで足を引つ張ることになるとは思わなかった。

「まあ、最初だから課題として言っているけど、悪くないのは本当よ。……まあ、この事務所の子、ウォームアップで限界だった子がいるくらいだから、それに比べたら……」
完全に乾ききった笑いとともに、虚ろな表情をしていた。ちよつとしたトラウマのよ
うな気がしたので、あまり触れないでおこう。

「それじゃあ次は歌を見ましようか。その前に二十分くらい休憩をとりましよう。休むもよし、レッスンのもよし、外へ出るときは一声かけてね」

トレーナーさんに返事をしてから、透ちゃんと雛菜ちゃんはレッスンルームの壁を背に座り込む。

「あの、外に出てきます。時間までには戻りますので」

「はい。気をつけてね」

円香はといえば、レッスンルームを出ていってしまった。何をしに行ったか気になら

ないといえは嘘になるけれども、今は円香ちゃんについていくよりもやらなければならぬことがある。

「あ、あの」

トレーナーさんはバインダーに何かを書き込んでいたので、声をかけていいか少し悩んだけれども、それでもやはり大事なことだと思った。

「どうかした？」

「えと、ダンスの教材みたいなものってありませんか？」

今の自分は、ダンスに疎すぎる。そう思った。

疎いなら、勉強しなくては。

「どこか不安なところがあつたなら……」

「あ、えと、あるんですけど……」

ちらつと透ちやんの方向を見る。今ここで教うのは間違いだ。

透ちやんたちと一緒にいるために頑張っていることは否定しないけれども、頑張りは見せたくない。恥ずかしいとかとは違って、上手く言葉にはできないけれども、それは嫌だった。

「ああ、そういうこと」

今の言葉から何を受け取ったのか分からないけれども、トレーナーさんは小さくため

息をつくともスマートフォンを取り出した。

「そうねえ、福丸さんの場合はダンスの基礎と体幹が同時に鍛えられるといいから……」
そう言つてスマートフォンの画面をこちらに見せる。

「この辺がいいんじゃないかな。本当はダイエツト向けなんだけど、著者は元ダンストレーナーなの。ダンスに関して間違つたことは書いていないわ」

「あ、ありがとうございます」

本のタイトルは覚えた。表紙も覚えた。帰りに本屋に行つて買つていこう。

「福丸さんがよければあげるわよ。学生さんだし、お金も大変でしょ」

「ええっ、いいんですか?」

願つてもない申し出だった。

家の事情もあつてアルバイトも許可されていなかったため、正直所持金はあまり多くない。
い。

「ええ、尊敬してる人だったから買ったけれど、よくよく考えたら私にはいらな
いもの
だったのよね」

トレーナーさんは苦笑いしながら頬をポリポリと掻く。

「レッスンは終わったあと、ちよつと事務所で待つてね。取ってくるから」

「あ、えと、次のレッスンのときでも」

本当は今すぐほしくらい。でも、そのためにトレーナーさんの、他の人の労力を使ってしまうのは申し訳ないと思った。

「嘘はだめよ」

その言葉に、胸が痛む。

嘘……というつもりではなかったけれど、本心でないことを見抜かれてしまっている。

今こうしてアイドルを始められたのは嘘を貫けているから。でも、これだけすぐに見破られてしまうようでは、すぐに透ちやんたちにも……お母さんにも……。

「初日からそんなこと聞いてくる子が急いでないわけないじゃない。頑張ってる子は応援したくなっちゃうのよ。だから……ね？」

トレーナーさんの言葉でなんとか嫌な思考を断ち切ることができた。

でも、胸の痛みは……引かなかった。

「さて、そろそろ再開しましょう。樋口さんも……戻ってきたわね」

振り返れば、円香ちゃんはまだ戻ってきていて、透ちやんたちも立ち上がっていた。

「はい、じゃあまた並んで。今度は歌を見るわね」

言われたとおり並び。並び順はいつもお昼ごはんを食べているときや、一緒に遊びに行くときの並び。

「それじゃあ樋口さんから、私の声と同じ音をだして」

円香ちゃんと言われたとおり、トレーナーさんの「あー」という音と同じ音を出す。音は次第に高くなつていき、また低くなつていき。

「次、浅倉さん」

続いて透ちちゃん、雛菜ちゃんと続ける。

トレーナーさんの満足そうな表情からして、及第点は超えていそうだ。

少なくともみんなの声を聞いている限りは嫌な感じはしない。トレーナーさんときれいに声が重なっているし、みんならしい声で歌っているという感じがする。

「次、福丸さん」

「は、はい！ あー」

あれ？

なんというか、思ったような声が出ていない。

もうちよつと高い気がすると思つて高くすると、今度はもうちよつと低いような気がしてくる。

なんというか、思ったところに音が合わない気がする。

すると、トレーナーさんが一つ音を上げた。同じように音を高くしてみたものの、やはりどこか合っていない気がする。

「あはく小糸ちゃんへたつびく」

隣の雛菜ちゃんの声で、確信する。やっぱり音が合っていない。

自分でも知らなかったけれども、音痴なのかもしれない。

音楽の授業は体育ほどではないけれどあまり得意ではなかったし、みんなみたいに力ラオケも行ったことがない。

歌として歌うことなんて、これまでほとんどなかった。

「福丸さん、ちよつといいかしら」

「びゃあつ」

トレーナーさんが近づいてきて、怒られるのかと思いきや、腰とお腹に手を当てられた。

「息を吸うときに、思いつきりお腹を膨らませてみて。はい、吸ってー」

言われたとおりに、お腹を膨らませる。お腹に力が入って、お腹が張って少しだけ痛かったのでそこで止める。

「吐いてー」

それを合図に息を吐き始めると、トレーナーさんの両手に力が入る。お腹を押されて、お腹に溜めた空気が一気に口から漏れていく。

「はい、もう一度。吸ってー」

何をしているのかやはり分からないまま、言われるがままに息を吸うと、トレーナーさんの手も同じように広がっていく。

「次は声も一緒に、できるだけ大きな声で。あー」

その合図と一緒に、トレーナーさんの両手に力が入る。大きな声を出すと、トレーナーさんの出している音が分からなくなってしまうのだけれども、今は言われたとおりにしてみる。

「あー……びええっ!？」

思わず両手で口を塞いでしまった。

それは、自分の口から出た声が自分のものではないかのように思えたから。いや、今でも信じられない。しかし、周りを見回しても声を出しているのは自分一人しかない。

「そうそう、その感じ。もう一回、あー」

「あー」

今度はびつくりしなかった。でも、やはり自分の声ではないみたいだ。自分とは別の声なのに、大きく出しているからトレーナーさんの声はほとんど聞こえないのに、音が外れていないことが分かる。それに、不思議と気持ちがいい。

音が合っているからとか、自分のものとは思えない綺麗な声が出ているからとか、そ

ういうことではなくて、もつと単純に、頭の中がスッキリするような感覚。

「はい、オツケー」

一通り声を出し終わった。高い音は口をいっぱい開かないと出せなくて、ちよつと息苦しかったけれども、なんとか声を出すことができた。

「やはく小糸ちゃん上手」

雛菜ちゃんの感想も先程とは正反対のものに変わっていた。

右を見れば、雛菜ちゃんは拍手までしてくれているし、真似するように透ちゃんも拍手を始めた。円香ちゃんは拍手はしないものの、笑ってくれている。

「うん、いいんじゃない」

トレーナーさんの言葉を受けて、その後ろにある大きな鏡に映る自分を見て、ようやく今どういう表情をしているか知る。

見慣れた顔は、とつても嬉しそうで、楽しそうで。

褒められたから。もちろんそれもあると思う。でもそれ以前に、楽しかった。

この感じで歌を歌ったらどんな気持ちになれるのだろうか。それが楽しみで、すぐにも試してみたくて。ううん、楽しいに決まっている。

高校では音楽の授業がほとんどないことが残念だけれども、大丈夫。これから歌う機会はたくさん増えるのだから。

「歌うって、楽しいでしょ？」

きつとみんなについてこなかったら、知らなかったと思う。こんなに歌うことが楽しいなんて、体を動かすことが楽しいなんて。

それだけでも、アイドルを始めてよかったと思う。透ちちゃんに、みんなについていくことを選んで良かったと思う。

この返事は、トレーナーさんだけじゃなくて、みんなに対して。

「はいっ！」

初めてのオーデイション

七月の終わり。梅雨は終わって、ジメジメとした毎日とおさらば。と思いきや待つていたのは灼熱。

学校もとつくに夏服を解禁して、周りはみんな半袖になっていた。

そして、アイドル活動を初めて一ヶ月が経った。

レッスンには慣れてきて、体力もついてきた……と思う。まだ難しいダンスは踊れないけれども、基礎的なものができるようになった。トレーナーさんも上達を認めてくれたのか、別の教材をくれた。

平日のレッスンは短く、すぐに終わってしまうけれど、今までよりずっと長くみんなと一緒にいられるのだから、不満などない。

今日はプロデューサーさんから呼ばれていたため、みんなと一緒に帰ることはできなかったけれど、それでも毎日楽しいし、歌もダンスも楽しい経験ができています。

「小糸おつかれ」

「びゃあっ!?!」

事務所の居間——事務机とソファが置いてある場所をそう呼ぶことに決めた。そ

の居間にプロデューサーさんがいなかったため、探していると背後から声をかけられてびっくりした。

「ごめん、驚かせちゃったかな」

「い、いえ……」

プロデューサーさんは頭を掻くと、申し訳なさそうに続ける。

「この前の書類、ありがとうございます」

「は、はいっ……あの、何か間違っていましたか……？」

プロデューサーさんから書いてくるように頼まれた書類。同意書とか、親の確認書類とか。

もちろん、親に言うわけにもいかず、自分で書いた。筆跡が分からないように、自分のものとは分けて、少し崩して。判子を押す場所はお母さんがいない間にこっそり押した。

いけないことをしている自覚はあったけれども、だからといっていまさら引くこともできない。

「いや、不備はなかったよ」

それを聞いて一安心。したのもの束の間、ではなんで呼び出したのかという疑問が浮かぶ。

「でも、一応ちゃんと挨拶しておこうと思ったんだけど……やっぱり難しそうか？」

「……………はい」

プロデューサーさんにはお母さんは仕事で忙しくてほとんど家にいないと説明している。半分嘘で、半分は本当。なんなら今から家にいけばいるだろう。

「まあ、同意書も出してきてくれるし、また機会があれば教えてくれ」

「は、はい……」

最近、嘘をつくたびに息が苦しくなる。

アイドルを始めてよかったとは思っているけれども、純粹に楽しんだり喜んだりができない。そういう感情が湧き上がるたびに、嘘をついているという事実が心を抑え込む。

「それと……」

それに、最近プロデューサーさんに疑われている……気がする。気づいているなら書類をそのまま受け取ったりしないだろうし、直接言ってくるだろう。

だから、プロデューサーさんが次に何を言い出すのか、どうしても警戒してしまう。

「こんなオーディションが今度あるんだけど、受けてみるか？」

そう言っつて事務机から取り出してきた紙には、でかでかと「番組オーディションの案内」と書かれていた。

紙を受け取って詳細を見てみると、ラジオ番組でエンタメ界の新人を取り扱う番組らしく、その選考……オーディションがあるようだ。日付は今週末の土曜日。

「本当は四人で出てほしかったんだけどな。流石に断られたよ」

いつか来るとは思っていた。でも、こんなに早いとは思っていなかった。

アイドルなのだから、人気が出ればテレビに出たりすることも増える。そうなれば親に知られるのも時間の問題とは思っていた。でも、それくらい人気になればお母さんもきつと認めてくれると思っていた。

小さな仕事でも、その危険を負うことになるとは想像していなかった。

かといって、断るわけにはいかない。人気を出すためにはきつと必要なことで、通らなければならぬ道のはず。ラジオ番組ならお母さんが聴くこともほぼないだろう。

それになにより、プロデューサーさんに選んでもらったことが嬉しかったから。その期待を裏切りたくなかった。

「は、はいっ。任せてください！」

プロデューサーさんに気づかれないように、みんなと一緒にいるために、自信を持たふりをした。

「ありがとう。頑張ろうな！」



翌々日。オーディション当日。

オーディションは昼からだけれども、朝にプロデューサーさんと最後の打ち合わせを行うことになった。

行きはプロデューサーさんの運転で連れて行ってもらおう。帰りは一人で。

ディレクターさんはオーディションでも面白い人だから気軽に話すといいということ。

初めてのオーディションだから、合格することよりもどんな雰囲気かを見に行くつもりでしようということ。

でも、きつと最初で失敗したら、ずっと成功できない気がする。

そんな不安を抱えたまま、お昼ごはんを食べて、ラジオ局へとやってきた。

「それじゃあ、帰りは一人で大丈夫だよな？」

「だ、大丈夫ですつて！」

最初の面接のときからなんとなく思っていたことだけれども、プロデューサーさんはやたらと子供扱いしてくる気がする。そりゃあ、プロデューサーさんみたいな大人からしたら高校生なんて子供なんだろうけれど、この心配はいくらなんでも、だ。

「はは、ごめんごめん。それじゃあ、いつてらっしやい」

いつてらっしやい。

その言葉を聞いたのは、何年ぶりだろう。

お母さんからは……もう随分と聞いていない言葉だった。

だから、違和感があつて。でも不快なわけではなくて。

なんて返せばいいのか分からないまま、プロデューサーさんの車は行つてしまった。

それから「いつてきます」と返せばよかったのだと気づき、恥ずかしくなる。

恥ずかしさを紛らわすために、首を左右に振つて気持ちを入れ替える。

「えっと……」

振り返つてただただ広いエントランスを見て、頭が真っ白になる。

プロデューサーさんは帰りのことばかり気にしていたけれど、こんな場所に来るのは

始めてで、どこにいけばいいのか……。

「あ、受付……」

エントランスの一角に受付を見つけて、胸をなでおろす。多分ここで聞けば教えてくれるだろう。

「あのー！」

「はい……ああ、オーディションの子？」

「そ、そうですー！」

プロデューサーさんに教えてもらったように、とにかく元気に。受付の人が相手だろ

うと、ここにいる人はアイドルの福丸小系なのだから。

「えっと、その突き当りを右に曲がると案内があるから、そこで待っていてください
ね」

「は、はい！ ありがとうございます」

◇◇◇

「福丸小系さん」

控室で待つこと十数分。控室の中には数人の人がいて、アイドルばかりかと思ってい
たら、お笑い芸人らしい人がネタ合わせをしていたり、ずっとトランプをシャッフルし
ている人がいたりと、ちよつとだけ驚いた。

その人たちもいなくなって、新しい人も入ってきてと、いろいろな人が見れて退屈は
しなかった。

「は、はいー！」

手を上げて立ち上がる。

「こちらにお越しください」

もう何度目かの定型文。何人もの人がこの言葉とともに出ていった。

そして、ここから先は知らない。

控室を出て、少し歩いたところで案内のお姉さんが止まる。

「こちらです」

お姉さんに一礼してから、扉の前に立つ。控室と同じ扉のはずなのに、なんだかすごく大きい気がした。その扉を、二回叩く。コンコンと軽い音が響いて、どうぞと声がしてから中に入る。

「よ、よろしくお願ひしますー!」

中にいたのは二人のおじさん。

「はいよろしくね。えつと……283プロの福丸小糸ちゃん」

向かって左のおじさんは眼鏡を外して書類を読んでいる。

「えつと……ああ、アイドルなんだ」

「は、はいー!」

「あはは、オーディションはこれが初めてなんだって? 緊張しないでいいからね」

右の人からかけられたその言葉に、胸の中の不安が広がっていく。

緊張しなくていいと言われる。つまりは、緊張していることが相手に伝わってしまったという事。

それはきつと、素人っぽく見えたり、経験不足に見えているということ。

だから、できるだけ隠そうと思っていたのだけれど、一瞬で見破られてしまった。

「趣味は読書で……特技は勉強、ね」

それは、アイドルに応募するときにとりあえずで書いてあったもの。だからといって他になにかあるわけではないけれど、改めて言われるとなんの変哲もない、面白みのない内容だなと思ってしまう。

きつと本当はここで趣味や特技のアピールをするべきなのだろうけれど、何をすればいいのか浮かばなかった。

「ああ、ごめん。僕は構成作家の白鳥です。で、こっちの怖そうなのがディレクターの小島さん」

向かって右のおじさんが紹介を始めてくれた。助け舟を出されたようで少しみつともないとも思ったけれど、心の不安は少しだけ紛れた。

「怖そうって、白鳥くうん。……やっぱり、そう見える?」

「ぴ……いい、いえっ」

最初の印象は怖かった。あまりこっちを向かずに難しそうな顔をして書類とにらめっこしていたから。

でも、今の一言で印象は変わってしまった。怖そうに見えると言われて本当に悲しそうな顔をするものだから。

「はは、よかった。強面だからよく怯えられちゃうんだよね」

そう言うと小島さんは再び書類に目を落とす。

「実は僕も小島さんも、君と同じく、らいの子供がいてね。どっちも勉強が大嫌い」「そ、そうなんですか?」

そう言う白鳥さんの横で、小島さんがうんうんとうなずいている。

「まあそういうわけで、勉強が特技っていうのはちよつと気になるんだよね。問題出してみていい?」

「は、はい!」

そう言うと、白鳥さんは部屋の横に置かれたホワイトボードを引っ張ってきて、何やら書き始めた。

「じゃあ白鳥くんが問題を書いている間に簡単な質問いいかな?」

「は、はいっ、大丈夫です!」

「小系ちゃん、アイドルをしてから一ヶ月ってことみたいだけど、どう? 楽しい?」

「はい!」

それだけは、即答することができる。

別に準備していたわけではないけれど、否定したくないし、否定されたと思われたくもない。

「みんなと……えと、ノクチルのみんなと一緒にいられるのは楽しいです。それに、レッ

スンも知らないことだらけで、毎日新しいことを教えてもらって、とつても楽しいです！」

言い終わる頃には、白鳥さんは席に戻ってきていて、うんうんと頷いてくれていた。

「うんうん、それならよかったよ。うちもそういう楽しんでる子を紹介したいからね」

ということとは、回答としては間違っていないかったようだ。

それから小島さんは、ホワイトボードに目を向けて、ぎよつとする。

「ちよつと白鳥くん」

ホワイトボードに書かれていたのは方程式。

その下には、グラフを描けと、いかにも問題っぽく書かれている。

「これ三年生の内容。小糸ちゃんまだ一年生だよ？ もー、そういういたずらするのやめてあげなつてー」

「あはは、ごめんごめん、勉強が特技なんてあるから、つい——」

解けた。

席を立ち上がって、ホワイトボードに向かう。

「え、あれ……？」

なにか声が聞こえた気がしたが、あまり気にならない。今はこの問題を解けばいいのだから。

数学はやり方だけ覚えてしまえば解ける。三年生までの内容は、もう終わっているから。

幸いそれほど難しくくない。三次方程式のグラフ。

微分式を書いて、増減がゼロの場所……極値を調べる。それから極値の両端、その間の増減を調べれば、あとはそのとおりに描いたら完成。

「こりゃあ……」

問題を解き終わって振り返ると、小島さんも白鳥さんも表情が固まっていた。

「え、えと、あつてます……か？」

「あ、ああ。ごめん、あつてる……あつてるよ。すごいね君」

「この特技は本物だわ」

解答があつていたことに安心すると同時に、褒められたことが嬉しかった。

「うん、ありがとう小系ちゃん」

小島さんが立ち上がって言うのと、白鳥さんも立ち上がる。

「結果は追って事務所に連絡するよ」

——あ、あれ。なんというか。

褒められて嬉しかったけれども、さつきまでの柔らかかった空気がなくなってしまうた。

「は、はいっー!」

——なんだか、終わりの雰囲気……?」

「あ、あの……もう終わり、ですか?」

その言葉に、白鳥さんと小鳥さんは顔を合わせて笑う。

そのあと答えてくれたのは、白鳥さん。

「あはは、話し足りない? まあ、次の機会に色々聞かせてよ」

その言葉は、もう終わってしまったことを意味する。

まだ全然アピールしていないし、きつともつと伝えないといけないことがたくさんあったはず。それを伝えずして終わってしまったということは……。

「あ、ありがとうございます……!」

「うん、こちらこそありがとう。楽しかったよ。気をつけて帰ってね」

小鳥さんの言葉が、これが社交辞令というものなんだなと実感した。

そして数日後、事務所には番組オーディション合格のお知らせとともに、白鳥さんから謝罪の連絡が入っていたことをプロデューサーさんから聞いた。

「ついでにすがすがし過ぎちゃったね。また今度、打ち合わせで色々聞かせてね」

◇◇◇

事務所に来た直後に、透ちゃんも雛菜ちゃんも円香ちゃんも押しのかたプロデュー

サーさんに肩を掴まれた時にはさすがにちよつと怖かった。絶対に怒られると思ったし、怒られそうな要因はたくさんあったから。

先週末に行つたオーディションに合格していたらしく、その連絡を今日もらつたらしい。

嬉しいには嬉しかったけれども、自分よりはしやぐプロデューサーさんを見ていると、不思議と冷静な気持ちになれた。

「やるじゃん、小糸ちゃん」

透ちゃんに認めてもらえたような気がして、嬉しかった。

「小糸ちゃんおめでと〜」

雛菜ちゃんに祝つてもらえて嬉しかった。

「……」

円香ちゃんは何も言わなかったけれど、その表情は穏やかなものだつた。

いつそのこと、プロデューサーさんと一緒にバカ騒ぎしてもよかつたかもしれない。でも、やはりそんな気分にはなれなかつた。

嬉しくないわけじゃない。あの対応で良かったんだと安心したし、褒められて嬉しい。認めてもらえたことも嬉しい。

けれどそれは、嘘の上に立つた事実。

その嘘が、まるでネバネバとした液体のように体中にまとわりついてくる。

根本にこの嘘がある限り、ずっとこの感覚がなくならないと思うと、いつそのことすべて話してしまおうかと考えてしまうほど。

でも、それはできない。

この嘘を暴かれれば、プロデューサーさんは間違いなく家に来る。そしてお母さんに知られたら、そこまで。もうアイドルとしての福丸小糸はいなくなる。

きつとあと少しだから、あともう少しだけ頑張れば、後に引けないほど人気になれば、お母さんだって認めてくれる。

だから、今は。嘘の笑顔を。

「えへへ、ありがとうございますー！」

プロデューサーさんは居間に戻ると、雛菜ちゃんと透ちゃんがその後ろを追いかける。

「雛菜ソファーもーらいー」

「あ、ずる」

ついこの間見たようなやり取りが、再び目の前でなされて、二人とすれ違うように戻ってきたプロデューサーさんの手には、一枚の紙が握られていた。

「えっと、収録は二週間後の金曜日。スタジオは前と同じ建物だな。昼過ぎからの収録

だから、午前の授業が終わったくらいに迎えに行くよ。学校にはもう伝えてあるから安心してくれ！」

最後に親指を立てて自信満々なプロデューサーさん。

つまり、その日はみんなと一緒にご飯は食べられないんだな。そんなことをぼんやり思っつて、気がつく。

「ぴえっ!? 学校にですか?」

「ああ、さすがに何も言わずに抜け出すわけにはいかないだろう?」

それは確かにそのとおりだけれども。

つまり、学校にはもう、アイドルを始めたことを知られているということ。

そして学校というものは、親との関わりがとて深い。当然だ、学生はまだ子供なのだから、大人は大人同士で話を進めたいだろう。

学校に知られているのならば、お母さんに知られるのも時間の問題。

「あ、えと、その……」

「そういうの、本人の意思は聞かないんですね」

困るとも言えず、かといって返す言葉も、驚いたことを隠す言葉を見当たらないまま視線を動かしていると、円香ちゃんが呟いた。そして、大きいため息をつけてから、続ける。

「日程が平日で、学校と被っているなら一度確認を取るのが常識では？ それとも、これが業界での常識ですか？」

言葉はとてもきついものだと感じた……けれど、その言動に反して、不思議と苛つきのようなものは全く感じなかった。

「あ、ああ。すまん、そうだよな」

プロデューサーさんは一度視線を紙に落としてから、再びこちらを見る。

「この歳で嬉しくて舞い上がっちゃうなんてな」

はは、と愛想笑いを飛ばした直後。

「で？」

と、円香ちゃんの追撃が入る。

「うん。大丈夫そうか、小糸？」

そこまで言われて、ようやく円香ちゃんの言いたいことが分かった。

本人の意思に関係なく物事を決めるなど、そう言っているのだ。

でも、もう学校に知られた事実は変わらない。後になんて引けない。引いても、何もいいことはないから。

それに、せっかく選んでもらったのだから、期待に応えたい。

「は、はい。だ、大丈夫です。任せてください！」

壊れた、脆い嘘

レッスンは終わりに、プロデューサーさんに呼ばれた。もう夏も真っ盛りといった気温で、日が落ちきる前に帰ると暑いので少しだけ嬉しかった。

きっと、お仕事の打ち合わせだろう。本番も一週間後に迫っており、初めてのお仕事だから打ち合わせが多くなるとも言っていた。

だから、ソファアに座ってプロデューサーさんが口を開いてから、その言葉を理解するまでに時間がかかってしまった。

「すまない、小糸」

謝られていると自覚するまでに、やたらと時間を使ってしまった。開口一番がその言葉だったし、プロデューサーさんに謝ることはあったとしても、謝られることなんて身に覚えがなかったから。

「小糸の……家に連絡させてもらったんだ」

家に……連絡……。

「びえっ!?!」

思わず口を塞ぐ。

ここまでやってきたのに。初めてのオーディションに合格して、これから有名になっていこうという時期なのに。

どうしてあと少し、もう少しだけ待ってくれないのか。

「親御さんと電話越しだけれど少し話したよ。……アイドルのこと、何も言ってなかったんだな」

すぐに謝らなければ。そう思ったはずなのに、頭に浮かぶのは、よく見る夢。

中学受験に失敗して、お母さんも透ちちゃんも雛菜ちゃんも円香ちゃんもいなくなってしまう、あの夢。

随分と見なくなった気がする。でも、これでまた――

「小系に黙って連絡したこと、謝らなきゃな。この前円香にも指摘されたばかりだったのに。……すまない」

プロデューサーさんはソファアールから立ち上がって深く頭を下げる。

「もつと……小系の話を聞くべきだった」

「それはっ！……それは、私が嘘をついていたから……」

きつと、プロデューサーさんの言葉に甘えて、プロデューサーさんのせいにしてしまえば、楽なのだろう。

しかし、嘘をついていたことを棚に上げるなんてできない。ついてしまった嘘などで

はなく……意図してついた嘘なのだから。

「うん、嘘をつかせてしまつて、すまない」

プロデューサーさんが怒っていないということが、理解できなかった。

嘘をつくのは悪いことで、悪いことをしたのだから怒られるだろうと思っていた。

それがなぜ、逆に謝られているのか。

理由を聞いても、答えてはくれないのだろう。

プロデューサーさんがどれくらい自分のことを知っているのかは分からない。どう
いう理由で嘘をついていたのかも。……アイドルになった理由は、もしかすると知って
いるかもしれない。

「でも、ちゃんと親御さんとお話をしないといけない。だからその前に、ひとつだけ確認
させてくれないか？」

頭を上げたプロデューサーさんは、再びソファアに座る。

いつの間にか持ち上がったいた腰を再びソファアに落とすと、プロデューサーさんが
続ける。

「小糸は今でも、アイドルを続けたいと思ってるか？」

もちろん。

そう即答したいのはやまやまだけれども、状況がそれを許さない。

視線を落として、プロデューサーさんの膝の上に組まれた手を見る。

「……」

やはり、怒られているとも似たような状況で、自分の意見を言っていないはずがない。

『小糸の話を聞くべきだった』

プロデューサーさんがつい先ほど言った言葉が、脳内に再び流れてくる。

そして、ひとつの可能性にたどり着く。

もしその可能性が正しいなら、プロデューサーさんが怒らない理由にもなるし、今投げかけられている質問の意図も分かる。

そんなはずはないと、今までそんな人は一人たりともいなかったじゃないと、諦めるように告げてくる自分がある。

お母さんでさえ、見ていてくれなかったのだから、分かってくれなかったのだから。

それを、たった一ヶ月一緒に過ごしただけの人が見てくれるはずがない、分かってくれるはずがない。

でも、可能性に気づいてしまったから。もしかすると思ってしまったから。

それを確認するために、顔を上げる。プロデューサーさんの目を見て、確信する。

——なら、全部話しちゃおう。

プロデューサーさんが他の誰でもない福丸小糸を見ていたから。アイドルとしてで

はなく、普通の高校生……子供として見ていたから。

だから、味方になってくれなくてもいい。話を聞いてくれて、理解しようとしてくれる人がいるのだから。

同時に、そんな人に嘘をついていたという事実が胸を抉る。その事実は、ちゃんと理解してもらえないように、どう話せば分かってもらえるかという思考を加速させた。

「えと……最初は……アイドルにならなきゃみんなと一緒にいられないって思ったんです。また……置いていかれちゃうって。それで、透ちちゃんと同じ事務所に応募したんです」

話す間も、視線はプロデューサーさんから離さない。

ちちゃんと、伝えないといけないから。嘘の一つもない、崩れ去った嘘の奥にいる福丸小糸を。

「実際に始めてみたら、知らないことがたくさんあつたんです。みんなと一緒に長くいられることも嬉しいですけど、レッスンで新しいことを教えてもらう度に、色んなことを知れて楽しかった……」

違う。過去形じゃない。今、楽しいんだ。

「今が、楽しいんです。……頑張らなきゃ……透ちちゃんたちにも追いつけないし、全然、ダンスも歌もまだまだですけど……」

プロデューサーさんが目を閉じた。瞬きとは違って、数秒、何かを考えるように。目を開けたプロデューサーさんは、再びこちらを見て、何も言わなかった。

まだ、答えを聞いていないから。言っていないから。

「お母さんが……いいって言うわけないから、嘘を続けなきゃって思っただから、嬉しかったから。……でも、楽しくなる度に、嬉しくなる度に、嘘がバレるのが怖くて……素直に喜ばなくて……でも、楽しいから余計に言えなくなつて……。ごめんなさい、プロデューサーさん」

「……うん」

「まだプロデューサーさんからもらった課題も答えが見つかってないですけど……それでも、アイドルをやりたいって……続けたらって、言ってもいいですか……！」

そこまで話して、ようやくプロデューサーさんの表情が変わった。怒るでもなく、呆れるでもない。ただただ、小さく微笑んでいるだけ。

「もちろん、いいさ。それが小糸のやりたいことだもんな」

プロデューサーさんは立ち上がって、手を頭にのせてきた。

手のひらは大きくて、でも指は細くて。そんなプロデューサーさんの手が、頭の上でゆつくりと動く。

「ありがとう」

たったそれだけの、時間にして一秒にも満たない感謝の言葉を言われたのは、随分と久しぶりだった。

透ちやんたちに言われることは度々あったけれども、そういう、友達同士のものじゃなくて、感謝されているんだと感じるような、温かい言葉。

「……つとと」

慌てて手を離すプロデューサーさんに首を傾げる。苦笑いしながら頬を掻いている。

「円香にこの前怒られたばっかりだった。女性にすぐ手を出すなんてどんな教育を受けて来たんですか……って」

円香ちゃんが言っている声が脳内で再生された。うん、言いそう。

宙に放り出されたプロデューサーさんの右手は、ゆっくりと下へ落ちて、目の前にやってきた。

「さて、それじゃあ、親御さんと……お母さんとお話ししなきゃな」

「……っ」

プロデューサーさんに話すのと、お母さんに話すのでは意味が違ってくる。

お母さんがだめだと言ったら、それはいくらプロデューサーさんでもどうしようもないことだから。

そして、中学からの……いままでのお母さんを見ている限り、許可を出すとは……思

えない。

「大丈夫、小糸の思っていることを言えばいい。俺も一緒についてるから、ダメだったときは……また一緒に考えよう」

そう言いながら、差し出されている手は、震えていた。

プロデューサーさんだつて、怖いんだと思った。少し意外だったし、考えてみれば当然だった。

ちやんと、答えなきや。

「……はい、よろしくお願ひします！」

希望を連れてお願いを

家の居間。いつも朝食も夕食も食べているテーブルには、珍しくお茶が三つ置かれていた。

「突然訪問してしまって、すみません」

まさか、ちゃんと話そうと決めたその日に、その足で家に来るとは思っていなかった。心の準備はまだできていないし、心臓の音は外に漏れているのではないかというほど大きく鳴っている。

「それに、勝手に娘さん……小糸をアイドルとしてスカウトしてしまったことも。すみません」

「い、い、い、めんなさい……」

謝罪の言葉に、お母さんは深いため息をつく。やはり、きつと怒っている。きつと次には嫌な……厳しい言葉をぶつけられる。

震える手を押さえようとテーブルの下で拳を握り、歯を食いしばる。

「でも、まず小糸と話して欲しいんです。どうか小糸の話を聞いてあげて欲しいんです」
しかし、次に聞こえた言葉は自分に向けたものではなく、さらにお母さんから放たれ

たものですらなかった。

ゆつくり顔を上げると、隣でプロデューサーさんが両手を机について、頭を深く下げている。

「小糸がここまで頑張ってきたことと、これからしたいこと。聞いてあげてください」
そう言うと、プロデューサーさんは椅子から立ち上がって、もう一度お母さんに深くお辞儀をする。

「小糸、大丈夫。ちゃんと、伝わるから」

肩にのせられたプロデューサーさんの手は、とても温かかった。その手が離れて、だんだん遠くなっていく。

「……」

プロデューサーさんが出て行ってしまつて、居間は一気に静かになってしまった。

膝が震えている。

まだお母さんに話すのは怖いけれども、肩に残った温もりが、プロデューサーさんがくれた勇気が、そつと背中を押してくれる。

大きく息を吸って、吐く。

顎を上げて、前を……お母さんの目を見る。

「あ、あのね……お母さん」

お話を、ちゃんと聞いてもらわないと。だから、ちゃんと目を見て話さないよ。

「わたし、中学受験に落ちてから、ずっと……透ちやんたちと一緒に学校行くために頑張ってたの」

話し始めると、お母さんの視線がゆっくりとこちらに向いてくる。

その表情から何を考えているのかは分からない。あの日から、いつもこうだった。興味がないような、常に不機嫌なような。

でも今日だけは、今だけは気にしていられない。そのために、プロデューサーさんに背中を押してもらったのだから。

「きっかけは……透ちやんだったんだ。透ちやんが……アイドル始めたって言うから、わたしもって。でも、今はちがうの。みんなと……一緒にいられることも嬉しいけど、それだけじゃなくて」

気がつけば、膝の震えは止まっていた。高鳴っていた心臓の鼓動はそのままだけけれど、その鼓動は怖くない。ちゃんと、知ってもらいたいから。知ってもらえないほうが、ずっとずっと怖いから。

「知らないことがいっぱいあったんだって気づいたんだ。トレーナーさんも透ちやんたちも……プロデューサーさんも、いろんなことを教えてくれて、新しいことを覚える度に楽しくって。この前、オーディションにも受かったんだよ」

結構喋った気がするけれども、お母さんはまだ黙ったまま。それでようやく、お母さんが話を聞いていてくれてに気がつく。聞いていないなら、話している途中でも止めてくるはずだから。

ちゃんと聞いていてくれるから、この言葉を言える。一番、伝えたいこと。一番、知ってもらいたいこと。

「まだどんなアイドルになりたいとか、どんな大人になりたいかとか、そういうのは決まってるけど……わたし、アイドルを続けたい。もっと、知らないことをいっぱい知りたい！」

椅子から立ち上がって、机を回り込んで、お母さんの横に立つ。

両足の踵を合わせて、手を指先までまっすぐ下に伸ばして、背筋もまっすぐ。

おしりを突き出さないように、腰を折り曲げて、深く頭を下げる。

「お願いします……アイドルを続けさせてください……！」

すう……と、息を吸う音が聞こえた。お母さんの表情が見えないから、何を言われるのか想像もつかない。断られるのか、分かってくれるのか。

深く、とても深いため息が聞こえた。

その音にゆっくりと顔を上げると、お母さんは右手で目を覆っていた。そのあと、ゆっくりと首を横に振る。

「小糸」

その姿勢のまま、お母さんは眩くように言った。その声は、いつもより少しだけ……ほんの少しだけ優しく思えた。

「さっきの人を呼んできて」

◇◇◇

「アイドルとしての活動を許可します」

お母さんの言葉が、ここまで嬉しく思えたのはいつぶりだろうか。

階段で妹の紗織と話していたプロデューサーさんと呼んで、居間に戻って、お母さんのこの言葉を聞くまではずっと心臓がうるさいくらいに鳴っていて、手も震えていたほどなのに。

この瞬間に、泣きそうだったはずの表情が一気に笑顔に変わったと思う。自分で自分の顔を見ることはできないけれど、見なくても分かる。だって、それほどまでに嬉しかったのだから。

「は……」

プロデューサーさんにこの嬉しさを伝えようと横を向くが、プロデューサーさんの表情はあまり変わっていないかった。

まるで、お母さんの言葉に続きがあることを知っていたかのよう。

「難しいと思うけど……」

——ああ、そっか。

たったの十数分話をした程度で、お母さんからの評価が変わるわけがない。

歌もダンスも全然できない状態でアイドルを始めたのだから、難しいだろうとは自分でも思う。でも、それでも始めてみたアイドルは楽しかったし、知らないことがたくさん眠っているアイドルという場所は、素敵な場所だと思う。

たとえお母さんに期待されていないとしても、アイドルを続けてもつともつというんなことを学びたい。

「門限は設けます。八時までには家に帰ってくることに。仕事でどうしてもという場合は一週間以上前に連絡すること」

本当は、この門限についても嫌だと言いたい。けれどお母さんの目は、ここが最低限のラインだと言っている。これが守れないなら、アイドルはやらせないよ。

「はい、ありがとうございます！」

プロデューサーさんは椅子から立ち上がって深く頭を下げる。

「あ、ありがとうございます！」

いろいろと気に入らないことはあるものの、ひとまずアイドルを続けられるようになったのだから、許可してくれたお母さんにはお礼を言っておかなければ。

顔を上げると、お母さんがこちらを見ていた。

「小糸、少しだけ席を外して」

お母さんの表情を見てみるが、やはりどこか怒っているように思える。許可は出してくれたものの、今まで嘘をついて活動をしていたことは事実。

もしかしたら、プロデューサーさんを監視役にして、もつといろいろと制限をかけられるかも知れない。そんな不安を抱えながらこれからも活動を続けるのは……正直嫌だ。

「ここから先は、大人同士のお話だから」

「……………はい」

いまお母さんに逆らうことが、どういう結果を招くかくらい想像できる。

だから、ここは従う以外に選択肢はなかった。

プロデューサーさんの表情を伺うと、お母さんの方を向いていたプロデューサーさんの瞳がこちらを向く。そして、小さくため息をつきながら、頷く。

プロデューサーさんもお母さんも、なにか分かったような様子なのだが、それが理解できない。けれども、いまはプロデューサーさんを信じるしかない。

あまり音を立てないように椅子から立ち上がり、椅子をしまつて居間の外へ出る。

「小糸のことですけれど……」

お母さんが何かを話し始めたけれど、ドアを閉めるとその言葉は聞き取れないくらいに小さくなってしまった。盗み聞きしようかとも考えたけれど、目の前にいた人がそれを許さなかった。

居間を出てすぐ、二階へと続く階段に紗織が座っていた。

「あ、お姉ちゃん。お話終わった?」

「う、ううん。まだ、プロデューサーさんとお母さんが話してる」

あまりそこには興味なさそうに、足を上下に揺らしている。

紗織は三つ下の妹で、いまは中学に入学したばかり。勉強もできて、部活は陸上部。中学はわたしと同じ中学校に入学した。

「紗織は……プロデューサーさんと、何話してたの?」

先ほどプロデューサーさん呼び出したときに、紗織はプロデューサーさんとなにか話していた。紗織はわたしと違って友達も多く、知らない人相手でもすぐに仲良くなれるのでプロデューサーさんと喋っていること自体に疑問はない。けれども、その内容はとても興味がある。

「ううん、特になにも。あの人がお姉ちゃんの自慢するのをずっと聞いてただけだよ」

その細かい内容も気になるのだけれども……。

「でも、あの人ってお姉ちゃんのことすっごくいたくさん知っててびっくりしちゃった」

プロデューサーさんとはまだ出会って一ヶ月しか経っていないけれども、レッスンはよく見に来てくれてるし、レッスンの前後に世間話をするのもしばしば。

「アイドルって大変なんだよね？　って聞いたら、大変だけど、お姉ちゃんは頑張ってるって言ってたよ」

アイドルをしていたことは、もちろん紗織にも隠していた。だからきつと驚いたに違いない。紗織は優しいから、隠していたことに対して怒ったりしない。

「うん……大変だけど、楽しいよ」

「いいな」

「紗織は、スカウトされなかったの？」

身内自慢ではないけれども、紗織の容姿は大分いい方だと思う。中学一年生なので、小宮果穂ちゃんより一つ年上だし。それこそ、アイドルだったり、読者モデルだったりスカウトされてもおかしくないと思ってる。

「ううん、ぜんぜん。わたしもお姉ちゃんと一緒にやりたいなって気持ちはあるけど、お姉ちゃんはまだ透ちゃんたちと一緒にやってるんでしょ？」

「どうやらプロデューサーさんはそこまで話していたようだ。もう、隠す必要がないことだけでも。」

「う、うん。みんなすごいんだよ。ダンスも歌も、すぐ覚えちゃって」

「ぶーん」

そして再び、興味をなくしたような返答をする。質問を投げかけてくる割りには、興味を示すときと示さないときがあつて困る。

一回目はお母さんとプロデューサーさんが話していると云つたとき。二回目は、透ちゃんたちの話をし始めたとき。アイドルに興味がない、ということとはなさそう。

「でも、わたしは応援してるよ」

どういう話題を振ればいいのか思考をめぐらせていたら、突然放たれた紗織の言葉に驚かされる。

「お姉ちゃんかわいいから、絶対アイドルできるもん。テレビ出たりするんでしょ？」

「う、ううん。それはまだだけど……」

という返答に、今度は口をとがらせながら「えー」と反応する。

別に、紗織の機嫌をとるために話しているわけではないので、深く気にする必要はないのだけれど、紗織がどういった思いを持って話しているのかは気になってしまう。

「今度……来週の金曜日に、ラジオの収録があるんだ」

「えっ、ほんと!? 生放送?」

この話題には、いままでで一番興味を示した。うーん、やっぱり分からない。

とりあえず、紗織の質問に返すために記憶を探る。

先週プロデューサーさんから見せて貰った資料には、オンエア日時も書いてあった。

「えっと……うん、そうだよ。来週金曜日の、三時から」

紗織はスマートフォンを取り出して、何やら弄り始める。

「二二日の……三時……つと」

「これは絶対に聞くつもりだろう。」

「でも、紗織は部活あるでしょ?」

「多分ないからへーきだよー」

雛菜ちゃんみたいな返答をされてしまった。

初めての収録なのだから、変にプレッシャーをかけないで欲しいと思いつつも、聞いてくれる人が一人でもいるという事実が、少しだけ嬉しかった。

「ちゃんと部活やらなきゃダメだよー」

「やーだー。だって——」

紗織の言葉を遮って、居間のドアが開く。

中からプロデューサーさんとお母さんが一緒に出てきて、一気に緊張感が増す。

「それでは、今日はありがとうございました。それに、突然すみませんでした」

「いえ、こちらからも……よろしくお願ひします」

「このやり取りからして、とりあえずアイドル活動は続けられるようだ。」

「小糸」

安心して胸をなで下ろしたのも束の間、お母さんに呼ばれて肩が跳ねる。そして、なぜか後ろでは紗織がくすくすと笑っている。

「この人……プロデューサーさんを送ってあげて」

「あ……は、はい！」

プロデューサーさんは最後にもう一度玄関で深く礼をして、家を出た。ドアが閉まる寸前に、玄関から紗織がひらひらと手を振っているのが見えて、もしかしてと思いプロデューサーさんを見ると、今日一番気の抜けた表情で同じように手を振っていた。

プロデューサーさんの車は近くの駐車場に止めてあり、さすがにそこまでの位置が分からなくなるといふことはないはず。けれど、きつとお母さんのことだから万が一と思っただけに道案内を頼んだのだろう。

街灯に照らされた夜道を歩いていると、少しだけ悪いことをしている気分になる。こんな時間に道を歩いたのは随分久しぶりで、小学生のときに透ちゃんたちと花火をしに行った時以来だろう。そのときはもちろんお母さんも一緒にいたけれど。

「小糸」

思い出に浸りつつ、ちよつとしたわくわく感を楽しんでいると、プロデューサーさんに呼ばれた。見上げれば、プロデューサーさんは笑っている。

「頑張ろうな！」

「は、はいっ！」

うん、頑張らなくては。

せっかくプロデューサーさんの協力で手に入れたチャンスなのだから、失敗なんてできない。

「お母さんも妹さんも、いい人だな」

「そ、そうですか……？」

紗織に関しては、ほんとうによくできた妹だと思う。別に育てたわけではないので、威張るようなことではないけれども。

お母さんに関しては……個人的にはまだ少し苦手だ。

今日の態度を見ていると、お話を聞いてはくれたものの、興味は失ったままのように見えた。結局、中学受験に失敗したあの時から、何も変わっていないのかなと。

『難しいと思うけど』

アイドルを続けることを許可してくれたときのお母さんの言葉が、やけに胸に引っかかる。

そんなことない。そう即答したいのに。あの時だって、そうしたかった。でも、できなかった。

透ちちゃんみたいになかつこよさは持つていないから。雛菜ちゃんみたいになかわいさも持つていないから。円香ちゃんみたいいな度胸も持つていないから。そんな、才能なんてないから。

難しいことは十分承知している。

けれど、やつぱり……。

「ああ。俺もできる限りを尽くすから」

プロデューサーさんは期待してくれている。だから、いまはそれだけで十分。

「欲しいものとか、して欲しいことがあればなんでも言ってくれよな」

いまだけでも十分すぎるというのに、これ以上何を望めばいいのだろうか。プロデューサーさんはわたしに、透ちちゃんと一緒にいる場所をくれて、その場所を守つてくれて。これ以上望むものなど、なにもない。

今度は、わたしがお返しする番だから。

「はい！…わたし……頑張りますね！」

お返しするには、それしかできないから。

他のみんなも頑張っている。だから、その二倍も、三倍も頑張るしかない。才能と努力で結果が決まるなら、才能のないわたしは、その分努力すればいいだけなのだから。

それしかできないけれど、全力で返していこう。

プロデューサーさんからの期待に、
応えるために。

3章

短いラジオを精一杯

知らない場所、知らない部屋、知らない機会、知らないボタン、知らない人。

頭につけたヘッドホンは少しだけきつくて、何時間もつけていたら頭が痛くなりそう。

聞こえているのはヘッドホンから流れている音ではなく、心臓の大きな音。

ガラス越しに、このラジオ番組のオーディションをしてくれた白鳥さんと小島さんが腕を組んでこちらを見ている。

大丈夫、ちゃんと打ち合わせしたんだから。

ガラス越しに、なにやら難しそうな機械をいじっている人が手を上げる。

これが、番組が始まる合図。

同時に、ヘッドホンから軽快な音楽が流れてくる。さっきのりハーサルで、大体の音量は分かっていたはずなのに、心臓の音をかき消した音楽に肩が跳ねる。

たった数秒流れた曲は、ゆっくりと音量が小さくなっていき、ガラス越しに挙げられていた手が下ろされる。

「はい、みなさんこんにちはー！ パーソナリティのカズトでーす」

最初は、メインパーソナリティのカズトさんの挨拶から。先週一度ラジオを聴いてみた印象では、金髪で髪の毛が全体的にツンツンしていて、ちよつと不良っぽいイメージを勝手に持っていた。

しかし、実際に会ってみるとそんなことはなく、髪は染めていないし打ち合わせの間は至つて普通のいいお父さんみたいな印象だった。正直、本当に同一人物なのかと疑つてしまうほど。

「さて、今日のゲストは〜？」

カズトさんが言うと、ガラスの向こうから指をさされる。

「つ、283プロダクションから来ました！ ふ、福丸小糸ですっ！」

「あつはは、小糸ちゃんカフ、カフ」

「ぴええっ!？」

カズトさんに言われて思い出す。喋る前には、カフと呼ばれるレバーを上げなければならぬ。それをすっかり忘れてしまっていた。

カズトさんの声が耳元で聞こえたということは、ヘッドホンにカズトさんの声が入っていたということで、それはつまり全国にいま起きていたことを知られてしまったという事。

恥ずかしさで火照る顔を頑張ってこらえながら、カフを上げる。

「283プロダクションから来ました、福丸小糸……ですっ!」

なんとか後半は持ち直して、元氣よく挨拶できたと思う。少しばかり自棄になっていた気がしなくてもないけれども、きつと気のせい。もう言ってしまったのだからいいじゃないか。

「えっと、小糸ちゃんはアイドルなんだよね?」

「はいっ! そうです……といつても、まだまだ駆け出しなんですけど」

なんといつてもまだ一ヶ月。駆け出しも駆け出しなのだから。

「いいじゃないじゃない。初々しさを見られるのって今だけだからね! 早速見せても

らっっちゃったわけだし」

「び、びええっ」

カズトさんはこちらにウインクしながら、両手を合わせて謝罪してくる。

「いやあごめんごめん。小糸ちゃんかわいいからさ、ちよつといじめたくなっちゃった。

……えっと、特技が勉強? 勉強好きなの?」

勉強が好きかと言われると、どうなのだろう?

勉強は答えが決まっているし、すればするほど学校での成績は上がっていく。けれどもそれは、透ちやんたちと一緒にいるための手段だった。

高校に入學しても必死に勉強を続けているのは……どうしてなのだろう。

「えつと……好き、かどうかは分からないんですけど、得意……だとは思いますが」

「いやディレクターさんから聞いたんだけどね、小糸ちゃんまだ高校一年生なのに、三年生の問題解いちゃったんだってさ」

このラジオに出演するためのオーディション。いまガラスの向こうにいる白鳥さんと小島さんとの面接で、数学の問題を解いた。高校の勉強はもうほとんど済ませてしまっているうえに、数学は解法だけ知っていれば解けない問題はほぼない。

「誰かから教えてもらったりしてるの？」

「い、いえ、全部独学で……教材はお母さんに買ってもらってるんですけど」

「ほー、いいお母さんだねえ」

いいお母さん……なのかな？

教材を買うことに関して反対されたことはないけれど、これがきつとマンガだったりゲームだったりなら、きつと反対される。

あくまで、成績を上げるために必要なものを買い与えてもらっているだけ。

そう考えると、別に好きで勉強をしているわけではないと思う。もつと透ちゃんたちと遊びたいし、いろいろなところへ遊びにも行きたい。

それができないのは、お母さんの存在があるから。

アイドルだって、お母さんがいなければもつと正直に……。

「さて、もうそろそろ時間だから、最後の質問いっちゃおう！」

カズトさんの声で我に返る。今はラジオの収録に集中しなくては。

「小糸ちゃんはアイドルになつてからまだ日は浅いけど、何かやつてみたいこととかある？」

やつてみたいこと。

ないと言えば嘘になる。なんなら、たくさんある。

「アイドルになつてみて、知らないことがたくさんあるんだって知ったんです。歌もダンスも、今このラジオの収録も知らないことだらけだったんです。具体的に何がしたいっていうのは言えないんです。何かあるのか分からないから。でも、だから知らないことをたくさん知っていききたいなって思います！」

あまり内容をまとめずに喋ってしまったけれども、それが本心。知らないこと全部、知りたい。

しかし、わたしの言葉にカズトさんは黙ってしまった。表情を伺うと、目を大きく見開いて、半口を開けていた。

何かダメなことを言ってしまったのだろうか。そんな不安にかられていると、我に返ったカズトさんがつこり笑う。

「俺、小糸ちゃんが勉強好きな理由分かったわ。というか、リスナーのみんなも気づいてるっしょ？ みんな、マストチェックですよ？」

今しがた自分の中で好きではないと結論づけた勉強は、なぜか好きなのだ伝わってしまった。理由はまったくもって分からないし、どこにそう判断する要素があったのかもさっぱり。

「それじゃあ今週の未来のビッグウェーブはここまで、お相手はパーソナリティーのカズトと」

理由を確認する暇もなく、番組の締めに入ってしまう。この展開は事前の打ち合わせで確認した。

「つ、283プロダクションの、福丸小系でしたっ！」

と返せばよかったはず。今度はカフも上がっているから大丈夫。

「それじゃあ、また来週〜」

カズトさんの言葉を最後に、カフを下げる。これでもうラジオに声は入らないはず。

ふう、と一息ついてヘッドホンを外す。汗で湿った耳の周りにエアコンの風が当たってひんやりする。それに、頭を締め付けていて若干痛かったこともあり、その解放感で放送終了の満足感が得られた。

「お疲れ、小糸ちゃん」

「お、お疲れさまですー！」

カズトさんもヘッドホンを外して、席を立つ。

「短かったけど楽しかったよ。またどこかで一緒になったらよろしくね」

そう言って、手を差し出してくる。

思わず首を傾げると、カズトさんは困った表情で頬を搔く。

「握手握手。小糸ちゃん絶対将来有名になるから、握手しとこつてね」

慌てて右手を差し出して、カズトさんの手を握る。

暖かくて大きくて、触れた瞬間少しだけびくりしてしまったけれど、カズトさんが握り返したので離せなかった。腕を数回上下に振ると、パツと離してブースから出て行く。

あまりにも展開が早くて、慌ててカズトさんについていくことしかできなかった。

ブースを出ると、ガラスの向こう側……白鳥さんや小島さんがいるところに、プロデューサーさんも来ていた。

「小糸お疲れ」

そして、真っ先に声をかけてくれた。

「お、お疲れさまですー！」

「あはは、そうじゃないそうじゃない。収録お疲れって意味だよ」

仕事の挨拶かと思ったら、違ったようだ。ううむ、業界用語というのは難しい。

「いやあ、やっぱりいいね小糸ちゃん。思った通り初々しさ抜群！」

恥ずかしがる暇もなく、小島さんが胸を張りながら笑っている。

「あ、ありがとうございます……ごいませす？」

初々しさがあるということは、アイドルとしてはまだまだということ。実際にまだまだなのだから否定することはないけれども、純粋な褒め言葉として受け取っていいものか悩みどころだ。

その横では、プロデューサーさんと白鳥さんが会話をはじめていた。

「個性もあるし、見てて飽きないねえ。ノクチル、でしたっけ？ 小糸ちゃんがいるユ

ニットは」

「ええ、そうですそうです」

「なるほどねえ」

やり取りを聞いていても、なんの話をしているのか分からないけれども、きっと仕事の話で、大人の話なのだろう。

あの日、プロデューサーさんが家にやってきた日にお母さんと二人きりで話していたような、そういうお話なのだろう。

なににせよ、感じ取れる雰囲気から察するに、収録は成功したようだ。

きつと、そうに違いない。

◇◇◇

プロデューサーさんの車に乗せてもらって事務所に戻って来たものの、事務所にはひとりもいなかった。珍しくはづきさんもない。

時計を見ると、もうすぐ四時。透ちちゃんたちは授業も終わって、もうすぐ事務所に到着する頃だろうか。

そんなことを考えながら、柔らかいソファアに座って宿題を進めていると、大きな音と共に事務所のドアが開く。

振り向いて、入り口を覗くと雛菜ちゃんが走っていた。こちらに向かって。

「ひ、雛菜ちゃん!?!」

「やはく、ラジオで聴いた声だく」

雛菜ちゃんがソファア越しに抱きついてくる。頬ずりまでしてきたので、さすがにそれはと思い、頭を遠ざける。

ラジオの放送は午後二時。まだ授業の真っ最中のはず。にも拘わらず、ラジオの放送を聴いていたということは……。

「雛菜ちゃん、また授業サボったの!?! だめだよ、ちゃんと受けなと!」

「あはく、小糸ちゃんのラジオの方が大事く」

本当に、雛菜ちゃんは卒業できるのだろうか……。いや、卒業どころか、進級できるのか不安になってくる。

「緊張してる小糸ちゃん、かわいかった」

そんな感想を漏らしたのは、あとから歩いて居間にやってきた透ちゃん。

「つてことは、透ちゃんも……」

「ううん、私は受けてたよ」

ならよかった。透ちゃんまでサボっていたとなつては、学校の人たちからの印象が悪くなってしまう。

安堵の息をついて、すぐに気がつく。透ちゃんが授業を受けていたのならば、なぜラジオ放送を聴けたのか。

「袖にイヤホン仕込んでたんだからちゃんと授業受けてなかったでしょ」

そんなツツコミを入れたのは円香ちゃん。

「でも樋口もじゃん」

「……」

円香ちゃんは一瞬だけ透ちゃんから目を逸らして、こちらを向く。すぐに視線を透ちゃんに戻して、深くため息をついた。

「ま、よかったんじゃない」

褒めてくれる理由は少しばかり気に入らないものもあるけれど、それでもみんな認めてくれている。

お母さんはまだ認めてくれないけれども、わたしだってアイドルをちゃんとしてきているんだ。これからもっともっと頑張る必要があるけれども、間違いなく確かな一歩を踏み出したのだと、そう思えた。

次なる一歩に向けて

昨日アイドルとして初めてののお仕事があった。

たった十五分の収録だったにもかかわらず、一日があつという間に過ぎ去ってしまった。昨日があつたという事実には違和感を覚えるほど。

しかし、周りの人間はそうではない。

しっかりと昨日があつて今日を迎えている。今日は土曜日で学校はないけれどもレッスンはある。実感が湧かないままに事務所へ来ると、昨日ここでみんなに褒めてもらえたことを思い出し、ようやく実感が湧いてくる。昨日の収録は上手くできたのだと自信を持てる。

だからといって気は抜けない。

今日は朝から円香ちゃんがお仕事で居らず、三人でのレッスン……のはずなのだが。

「あらら、見事に誰もいないわね」

「ぎょ、ぎょめんなさい……っ！」

目の前で苦笑するトレーナーさんに謝罪しながら、チェインから電話をかける。雛菜ちゃんはともかく、透ちゃんが遅刻するのは何かあったのかもしれない。

スマートフォンを耳にあてると、数回コールが聞こえてから音が消える。

「……」

しかし、スピーカーからは何も聞こえてこない。

「と、透ちゃん？」

「んー」

こちらの呼びかけに反応するように声がした。何か伝えるというより、ただただ応答した鳴き声のような声。完全に気が抜けていて、意思のようなものは一切感じない。つまり――

「透ちゃん、もしかして今起きたの!？」

「んー、おはよ樋口」

「わ、わたしは小糸だよー!」

完全に寝ぼけている。この状態だと、ちゃんと目を覚ますまでに三十分、そこから身支度と事務所に行くまでに一時間はかかるだろう。

「と、とにかく、早く起きて事務所に来て! 今日レッスンでしょ!」

「あー……。そっか、忘れてた」

忘れていそうだなと思った。きつといつもは円香ちゃんが起こしているのだろう。そこまで知っていたのだから、もっと早く気がついていればもっと早く連絡して時間に

間に合うように手を回せたかもしれないと思ってしまふ。

だからといって過去に戻るわけではない。これからも同じような状況は何度も出てくるだろうから、次はちゃんと起こせるようにしよう。なんなら、朝のランニングという名目で起こしに行ってもいいかもしれない。

「と、とにかく早く来てね!」

「はい」

返事とほぼ同時に通話が終了する。

「雛菜ちゃん……は多分無理だろうなあ」

無理だとは思いつつも、念のため雛菜ちゃんに電話をかける。

「やっぱり……」

三十秒近くコールしたものの電話に出ない。多分起きすらしていないだろう。これが透ちちゃんからの電話だと一瞬で出るのだから不思議。なにか特殊な電波でも送られているのだろうか。

「えつと……その……」

「ま、仕方ないわね。……今日はやめとく?」

「えっ」

確かに四人のうち一人しかいないのだから効率は悪いだろう。それでも……いや、だ

からこそ一人でレッスンを受けたかった。ずるいかもしれないけれど、みんなに追いつくにはみんな以上にレッスンを積まなければならない。

もしかして怒らせてしまったかもしれない、失望させてしまったかもしれない。思わず俯いていた顔を上げてトレーナーさんの表情を伺うと、困ったような、呆れたようなため息をこぼした。

「冗談よ冗談。福丸さんが一番レッスンしたいのは知ってるから、やりましょうか」

「は、はいっ!」

からかわれたことには気がついたけれども、それ以上にレッスンを受けられることが嬉しかった。今までと同じように、きつと今日も知らないことをたくさん教えてもらえるはず。それが楽しみで仕方なくて、嬉しくて仕方がなかった。

「よろしくお願いします!」

◇◇◇

一人きりのレッスンが終わる頃に、ようやく透ちやんと雛菜ちやんがやってきた。二人がトレーナーさんに怒られているのを見て、今まで通りじやだめなんだと改めて感じた。

二人はトレーナーさんから宿題を出された。宿題といっても、次のレッスンまでに今日やった内容を覚えてくるようにというもの。補習と言った方が正しいかもしれない。

レッスンは終わって、事務所の居間に戻ってくる。雛菜ちゃんの特等席ははづきさんが占領していたために使えなかった。頬を膨らませる雛菜ちゃんは、透ちゃんから撫でられることで機嫌を取り戻した。

今日はレッスン後に打ち合わせという話だったので、こうして事務所に待機しているわけだけでも、もうレッスンは終わって三十分が経とうとしている。何もすることがない三十分は非常に長く感じる。この三十分の間に何度時計を見直したか分からないし、何度スマートフォン画面を点けたかも分からない。

「戻りましたー」

さすがに暇すぎるので、今日のレッスンを復習しようかと思っただちようどそのとき、プロデューサーさんが帰ってきた。

「……」

遅れて、円香ちゃんがやってくる。

「あーやっぱりクーラーが効いてる部屋は快適だー」

「お、お帰りなさいプロデューサーさん」

「おかえり」

「おかえり〜」

円香ちゃんを除く全員の挨拶を受けて、プロデューサーさんは改めて全員いることを

確認するように見回す。

「さて、今日集まってもらったのは他でも……うわあっ!? はづきさん!」

言いながらソファーに座ろうとして、はづきさんの存在に気がつく。気づいていなかったらはずきさんの上に座っていたのだろうか?

そんなシーンを見てみたくなかったと言えは嘘になる。はづきさんもプロデューサーさんも、どのような反応をするのか気になる。

「……あー、プロデューサーさん。おつかれさまですー」

プロデューサーさんの声に目を覚ましたはずきさんは、プロデューサーさんに挨拶してから周囲を見回す。

「みなさんも、おつかれさまですー」

若千呂律が回っていないけれども、状況を理解したのかソファーから起き上がり、事務机の前で座ると机に突っ伏して再び寝息を立て始める。

「はづきさんそこ俺の……まあいいか」

いいんだ。

この場にいた四人、口には出さなかったけれどもみんな同じことを思ったに違いない。

「いいんだ」

訂正、透ちゃんが口に出しました。口に出さなかったのは三人です。

はづきさんが起きてちゃんと仕事をしているところを見たことがないけれども、社会人というのはこんなな寝ていられるものなのだろうか。

プロデューサーさんの態度からして、仕事はちゃんとかなしていると思うけれども、いつやっているのか。

「ああ、うん。まあ、いつものことだから」

いつもこうなら、なおさらいつ仕事をしているのだろうか。

興味本位で聞こうとした瞬間に、プロデューサーさんが本題に入ってしまったため聞くことはできなかった。今度本人にでも聞いてみよう。

「さて、気を取り直して。再来週の土曜日……九月の頭だな。ライブハウスでの初ライブが決まった！」

プロデューサーさんがすごく嬉しそうに言うものだから、きつとすごいのだろうかと思っただ。

「お〜」

そんな雰囲気の流れされて、透ちゃんが拍手なんてするものだからこちらまで自然と手が動く。

円香ちゃんの言葉が発せられるまでは。

「二週間って、随分と急なんですね」

週に三、四回のレッスンを二週間。きつとそのうち一回はリハーサルにあてられるのだから多くても七回。曲はいま練習しているノクチルの曲でいいとしても、まだ一度もちゃんと通せたことがない。それをたったの二週間で、たったの七回のレッスンでこなして本番を成功させろと言うのだから、急だという話にもなる。

「それに関しては……すまない。時間の確保に手間取っちゃって」

「御託は結構ですけど、本当に二週間で……」

隣で立ち上がった円香ちゃんは、ふと我に返ったように周りを見渡す。まるで、プロデューサーさん以外の人がいると困るかのような反応に見えた。

「……はあ」

そして、ため息と共にソファアに沈んでいった。

「ま、大丈夫じゃない？ いまでもそこそこできてるんだし」

と、お気楽そうに透ちちゃん。ここから先が大変なのだと思うけれども、ある程度の動きはできているのだから大丈夫かもしれない。それに初めてのライブなのだから、多少の失敗くらいは許してもらえらるだろう。

「雛菜は楽しければいいよー」

いろいろと不安要素はあるものの、きつと大丈夫。この前のラジオ収録だつてうまく

いったのだから、きつと大丈夫。



一週間、ライブの告知を受けてからこれまでに行ったレッスンの回数は四回。今日は五回目のレッスンで、アンティーカのみなさんとの合同レッスンとなっている。

合同レッスンといっても、実際のライブで一緒に歌ったり踊ったりするわけではない。当日の段取りを、本番を想定しながら確認するのがメインとなっている。

ノクチルとしては、歌もダンスもそこそこ形になってきたように思う。思っていた。

「すず」……」

誰が漏らしたかわからない。自分かもしれないし、違うかもしれない。ただとにかく、誰かが漏らした言葉。

アンティーカのパフォーマン스는、想像を大きく超えていた。個々で見れば軸がぶれていたりステップが小さかったりと指摘はできるだろう。

それはあくまで個人として見たときの話。アンティーカとして見たとき、その指摘は一体感へと変わる。

揃っていないのに、揃っている。誰かの軸がぶれていても、全体がそれを補ってミスは個性へと変わる。

「さくやん、さっきの動きだとステージはみ出しちゃうんじゃない？」

「ああ、確かにそうだね。完全に失念していたよ」

咲耶さんは言うのと、反対側に立っている摩美々さんの方を向きながら少しずつ後ろに下がる。

「恋鐘がそこで、摩美々がそこだから……この辺かな？」

首を左右に揺らしながら見る角度を変えて位置を微調整……していることに気がついた摩美々さんが、ゆつくりと霧子さんの方に動いていく。

「私が……だと……？」

そう言いながらも霧子さんの方へと移動し続け、とうとう手が触れる位置まで近づいてしまう。

咲耶さんはそんな摩美々さんに困ったような表情を向けながらも、結華さん、恋鐘さんを見ながら再度位置を確認する。

「ああ、あの会場ならここで大丈夫なはずだよ」

そこまでの会話でようやく気がつく。今いるこの場所と本番の場所ではステージの広さが違う。

歌いきること、踊りきることばかりに意識が向いており、本番の想定が一切できていなかった。今は周りとの距離感のみで配置を考えていて、ステージの大きさや見せ方は考えていなかった。

ステージ上で最適な配置をするためには、情報が足りない。

ノクチルは初めてのライブで初めての会場なのだから、ステージの横幅も奥行きも分からない。

「あ、あのー！」

分からないときは、聞けばいい。知らぬは一生の恥というのだから、恥じる前に、失敗する前に聞いておかなくてはならない。

「どうかしたかい？」

真つ先に反応してくれたのは咲耶さん。他の四人の視線もこちらに向いていて、緊張で真つ白になりそうな思考をなんとか繋ぎとめる。

「え、えと、わたしたち初めてのライブで……その……」

聞かなければいけないことは分かるのだけれども、失礼ではない言葉選びをしようとする、言葉が出てこない。

「ああ、なるほど。ようやく合点がいったよ」

何かを察した咲耶さん摩美々さんに目配せをすると、わたしの肩に手をのせた。

「プロデューサーが合同レッスンなんていうものだから、何かあるとは思っていたんだ。さ、こちらへ」

肩から背中へ、背中から腰へと伸ばされた手には、自然と歩き出せるようにゆっくり

と力が込められていく。それに従うように足を動かすと、込められた力が少しだけ抜かれていく。

先ほど咲耶さんが立っていた位置まで移動すると、腰にあてられた力は完全になくなった。

「……です」

「ひななんはここねー」

「ひななんって呼ばれたの初めてかも」

見れば、透ちちゃんたちも立ち位置に誘導されていた。

「んー」

「ん」

摩美々さんの呻きにも近い声に何を感じたのか頷いた透ちちゃんは摩美々さんの指した場所に立つ。

「うちにもなんかさせんね!」

「ここがたんはあと二歩くらい後ろかなー?」

恋鐘さんは言われたとおりに二歩下がると、その左右に均等になるように結華さんと霧子さんが立つ。

そして、左右の壁から少し離れた位置に咲耶さんと摩美々さんが立っている。

「いま私たちがいるあたりがステージの端だよ。手を伸ばしても当たらないくらいの範囲で踊れば大丈夫だと思うけれど」

思っていたより狭く感じた。

咲耶さんが隣にいるからかもしれないけれど、隣にいる円香ちゃんがやたらと近く見える。手を伸ばしてぎりぎり当たらないくらいだろうか。それに、なんとというか少しだけ窮屈にも感じる。

「もし窮屈なら……」

咲耶さんは言いかけて、止まる。それから少しだけ位置をずらして全体を眺める。

「……いや、これは大丈夫かな」

何を言いかけたのか気になったけれども、言う必要がないなら言及する必要もない。

「それじゃ三峰たちここに立ってるから、そのまま練習してみよっか」

「えー、休憩はー?」

「雛菜も休憩にさんせー」

休憩もなにも、ノクチルはまだなにもしていない。強いて言うならば、今しがた立ち位置の確認をしたばかり。

明らかにこれからレッスンをするはずだった空気は、雛菜ちゃんのひと言でがらりと変わってしまう。わたしはこの空気の中で意見を言えるほど強くはない。

「五分」

透ちゃんは、それができる人だった。

「五分だけ、しよつか。休憩」

みんなが戸惑い何も言えない中で出された提案は、誰ともわからないため息とともに承認された。

「まあ、五分なら……」

気のせいかもしれないけれども、一番最初に休憩を所望したはずの摩美々さんがこの中で一番困惑していたように見えた。

それがどうしてなのか、結局今日のレッスンが終わっても理解することはなかった。

紫の光を身に受けて

アンティーカとの合同レッススが終わった。短いように思っていた三時間は、アンティーカと交代でレッスンを行ったにも関わらずいつもよりずっと長く感じた。

理由は明白で、慣れと焦り。

いつものレッスンよりも少しだけ狭い配置。何度か円香ちゃんともぶつかってしまったのは、いつもどおりにしか動けないから。

アンティーカの人たちはまだ一週間あるから慣れればいいと言ってくれたけれども、もう一週間しかない。レッスンにあてられる時間は多くとも十時間程度。その短い時間でこの一ヶ月程で培った感覚を修正しなくてはならない。

時間がないという焦りは、レッスンの休憩を取るたびに加速した。ノクチルが休憩を取るということは、その時間はアンティーカのもの。そのたびにあの目を奪われるような一体感を見せられてしまえば焦りもする。この人たちと一緒にステージに上がるのだから、足を引つ張らないようにしなければならない。

その焦りとは別に、正体のわからない違和感がレッスン中につきまとっていた。

この違和感は今回に限ったことではない。今までのレッスンで何度も感じていたも

の。今までは気のせいと言われれば納得できる程度の違和感だったけれども、今回のレッスンで間違いないものになってしまった。

同じ違和感を透ちちゃんたちが持っているかは分からないし、違和感の正体もわからないので確かめようもない。

「透先輩、アイス買って帰ろ〜?」

「いいね。行こっか」

「え、ちよつ、ちよつと!」

レッスンが終わってすぐに帰ろうとする二人を呼び止める。

このままではきつといけない。アンティーカの人たちはもう帰ってしまったけれども、わたしたちは……ノクチルはまだまだ課題が残っているはずだ。

「どうしたの、小糸ちゃん」

呼びかけに振り向いた透ちちゃんと雛菜ちゃんの表情から察するに、きつと二人はこの違和感に気づいていない。そして、それが危険だとも認識していないだろう。

「まだ、もうちよつと練習、していかない?」

しかし、この言葉に対する返答は予測できていた。できていたけれども、予想を裏切ってくれると期待してわずかな望みに賭けた。

「雛菜、今はレッスンよりもアイスの気分かな〜」

しかし、その望みが叶うはずがない。返ってきたのは予想通りの返答で、その先どう受け答えるかも考えていない。いや、考えたところでこの考えを押しつけることなどできない。

これはあくまでわたしが感じている違和感で、確かなものではない。具体的になにがどうおかしいのかなども説明できない。そんな状態で何かを言い返せるわけもなかった。

「うん、明日でいいんじゃない?」

透ちやんがこう言ってしまうから、この話はこれで終わる。

誰が決めたことでもないけれども、そうなのだから、そうなのだ。

「う、うん……そうだよね……」

納得はできていない。けれども、明日があるということもまた事実。今日答えが出なかったとしても、一度家に持ち帰ってリラックスして、明日になればなにか分かるかもしれない。

透ちやんも雛菜ちゃんも円香ちゃんも違和感を持っていないのなら、それはきつとわたしの実力が足りていないから。みんなには実力があるから違和感を抱くことはなく、わたしには実力が足りないから違和感がある。

やらなければと思った。だから、ひとつだけ嘘をつく。

ついこの間まで苦しめられていた嘘を、今度はプロデューサーさん相手ではなく、ずっと一緒に過ごしてきた友達に対して。

「今日、トレーナーさんから借りてた本返さなきゃだから、みんな先に帰ってて！」

本当はそんな予定はない。そもそもトレーナーさんが教材を貸したことなどない。どれもこれも譲ってもらった。これは、これから居残り練習をするための口実でしかない。

「ん、わかった。気をつけてね」

透ちゃんも笑顔のまま片手を挙げてレッスン場から去って行く。雛菜ちゃんも円香ちゃんも、同じようについていく。

その瞬間、中学時代を思い出した。

ずっと孤独で、だれとも遊ばず、ずっと勉強ばかりしていたあの頃。

同じ高校になって、またみんなと一緒にいられると思った。アイドルになって、もっとみんなと一緒にいられると思った。

けれども、まだ足りないらしい。

足りないのだから、頑張るしかない。私には人より何倍も頑張ることしかできない。それでようやく、みんなと並べるのだから。

これからずっと一緒にいられるとは思っていない。いつかはきつとまた離ればな

れになってしまふのだから。だからせめて、そのときまではみんなと並んでいられるように。

「絶対、見つけなきや」

しかし結局、ライブ当日まで何度かレッスンをしたけれども、最後まで違和感を見つけることはできなかった。

◇◇◇

一週間もすれば、この違和感も気のせいだったのではないかと思えてくる。

なにかが変な気がするのだけれども、これだけレッスンを重ねて誰からも指摘がないということとは、気のせいだという可能性が高くなる。

それにもうライブ当日で、本番まで三十分も残っていない。いまさら違和感がなにか分かったところで、直している暇はない。

それに、リハーサルは結構上手かったのだ。

レッスンでは頻繁にぶつかっていた円香ちゃんと、ついにぶつかることなくリハーサルを終えることができた。本番も同じようにできれば、きつと大丈夫。

「小糸ちゃん、緊張してる」

「し、しし、してないよー」

リハーサルがうまくいったから、などというのはただ安心したいから。心の中では

さっきのリハーサルが本番だったならよかったのにと思っている。

逆に、リハーサルでうまくいってしまっただからこそその緊張がある。うまくいったときの感覚があるからこそ、どうすればその感覚が掴めるかが分からない。

透ちゃんには見栄を張ったけれども、本当は今すぐにでもここを出て行きたいくらいには緊張している。

いつそのこと早く始まって、早く終わってしまえばいいのに。

「あはは、してるしてる」

そんな見栄すらお見通しな透ちゃんからは、緊張のかけらもみられない。

「いいんだよ、いつも通りで」

いつも通り。

そう、いつも通りを積み重ねてきた結果が今回のリハーサル。ならばリハーサルと同じ結果をだすならば、いつも通りを積み重ねたいいつも通りを、本番でやればいい。

筋が通っているような通っていないような。すこしだけ無茶苦茶言っているような気もする。

いつも通り、いつも通りを意識すれば。

「い、いつも通り……いつも通り……」

なんて、そんなうまくはいかない。

考えれば考えるほどいつも通りが分からなくなってくる。あのターンはいつもはどうしていたかとか、あのパートの声はどうやって出していたかとか、普段あまり意識していないところをどうやって意識すればいいのか分からない。分からないから、いつも通りも分からない。

目を閉じて考えてみるけれど、頭に浮かぶのは分からないという言葉だけ。

もう何が分からないのかすら分からなくなつて――

「ちよつと」

「びいっ!？」

そんな思考を、円香ちゃんの声が遮る。

目を開けると、手も足も震えていることに気がつく。心臓の鼓動も激しくなつていて、いつの間にか息も切れていた。

「気になるんだけど」

クレームを入れられてしまった。

確かに、円香ちゃんの隣でこれだけ震えていれば気になりもするだろう。

「う………、ごめんね」

「別に」

円香ちゃんは再び手元のスマートフォンに視線を戻して、人差し指を下から上に何度

もなぞる。

「小糸ちやくん、リラックスリラックス」

椅子に座ったまま体を反らして、円香ちゃんの奥に座っている雛菜ちゃんを見る。椅子を大きく後ろに下げた雛菜ちゃんは、両手を前に伸ばして机に突っ伏している。

「この机ひんやりしててきもちよ」

「リラックスしすぎなのも問題」

円香ちゃんは相変わらずスマートフォンを見ながら、大きくため息をつく。

「円香先輩も……」

と、雛菜ちゃんの言葉はそこで止まってしまふ。

「雛菜ちゃん？」

「……」

声をかけてみるけれども、返事はない。

慌てて立ち上がって、雛菜ちゃんの肩を揺する。

「ん〜。……アイスつめた〜い」

「もうすぐ本番だから寝ちゃだめだよ雛菜ちゃん！」

揺する力を大きくすると、ようやく雛菜ちゃんの瞼が開く。そのまま首をゆっくり回してこちらを見る。

「もう出番く？」

「ま、まだだけど——」

言葉は控え室のドアがノックされる音で遮られる。

「ノクチルさん、準備お願いしまーす」

「あ、はい」

知らない声に応答したのは透ちゃん。相手は知らない声だけれども、きっとスタッフさんだろう。

「じゃ、行こっか。初ライブ」

そう言つて立ち上がると、一度だけ目配せをしてから入り口へと向かう。

円香ちゃんも雛菜ちゃんも、何も言葉を返すことなく透ちゃんについていく。もちろん、わたしも。

透ちゃんについていけば楽しいことが待っているのは知っているから。それがたとえ失敗するかもしれないライブでも。

——あれ、緊張。してない？

自信はないけれども、少なくとも体の震えは止まっている。心臓はまだうるさいけれども、嫌な感じはしない。

手を胸にあてて、深呼吸をする。少しだけ、鼓動が収まった気がする。

「小糸、置いてくよ」

円香ちゃん呼びかけで、無意識に止めてしまった足を再び動かす。

みんなと一緒なら、きつと失敗しない。そう信じて。

◇◇◇

「みんなお疲れさま」

本番は、リハーサル以上にあつという間だった。

ステージに出て、透ちゃんがなにかを喋っていた気がするけれども、ぼんやりとしか覚えていない。

ただただ必死で、緊張する暇さえなかった。頭が真つ白のまま、やるべきことをやつた……はず。

そのあとの歌唱も、ミスがあつたかどうかどうかも覚えていない。ただなんとなく、ステージから見た客席がペンライトでキラキラしていて綺麗だなあと思ったことは覚えてい

る。
ノクチルと入れ替わりでステージに出て行ったアンティークの人たちはなにやらお喋りをしているけれども、笑い声や歓声はここにも聞こえてくる。

「あはく、すつごいキラキラしてた」

「ね、綺麗だった」

やはりみんなあの光景は印象に残っているようだ。

「ああ、みんなよくできてたと思うよ」

舞台袖で見ていたプロデューサーさんが言うのだから、きつと大きな失敗はなかったのだろう。

「紫一色でしたけどね」

「それはまあ……あくまで前座だからな」

観客の人たちはあくまでアンティーカーを見に来ている。今日のライブではノクチルが出てくるという告知すらされていない。

あくまでアンティーカーが出てくる前に場を暖める立場なのだから、ノクチルのイメージカラーがなくても仕方のないことだとは思いう。

「次はちよつとくらい増えるんじゃない？」

今日この会場に来ているのは数百人程度。少なくともそれだけの人たちにノクチルを知ってもらえただけでも、今日は収穫があつたと言えるのではないだろうか。

だから次はきつと、少しはファンの人に来てくれると……。

「あ、あれ。次つてもう決まってるの？」

透ちゃんの口ぶりが、あまりにも当然のようだったから受け入れてしまった。けれど、そもそも次のライブがあるという話はまだ聞いていない。

今日の記憶はほぼないので、今日の打ち合わせで言われていたとしたら忘れてるだけかもしれないけれど。

「え、知らないけど。あるんでしょ、次」

透ちゃんも知らずに、それでも次があることが当然だと思っていただけの様子。

四人の注目が集まる中で、プロデューサーさんは少しだけなにかを悩んでから口を開いた。

「ああ、あるよ。近いうちにね。でもその打ち合わせはまた今度。今はもつとしなきゃならないことがあるだろ？」

しななければならないこと？」

なんだろう。早く控え室に戻って帰る支度をするかどうか。もう出番は終わっているはずなので、それほど急ぐような用事はないと思っていたけれども。

「えー反省会ー？」

なんとなく嫌な雰囲気を感じたのか、雛菜ちゃんが不満を漏らす。そんな雛菜ちゃんに対して、苦笑しながらプロデューサーさんは続ける。

「反省会してもいいけど、それもあとで、かな。ほら、もうすぐアンティーカーの曲が始まる。参考にしろとは言わないけど、見てなにか感じたなら、きつとそれがみんなにとつて足りなくて、目指すべきところだから」

プロデューサーさんが指をさすと、ちょうどステージが暗転していた。

これからアンティカのライブが始まる。トークとはまるで雰囲気が変わって、冷めかけていたはずの雰囲気が一気に暖まっていくのを感じる。

次の瞬間、スポットライトが五人を照らし、重々しい雰囲気のシンフォニックな楽曲と共に、会場は熱気に包まれた。

ちゃんと知ってもらいたいから

初めてのライブ……前座だったけれども、初めてのライブには変わらない。そんなライブが終わって、ほぼ一週間が経った。ラジオの放送もあったことだし、もしかしたら学校で少しくらいは話題になるのかななんて思っていたけれども、現実はそのほど甘くなかった。

考えてみれば当然のこと。ラジオの放送は授業中だったし、ライブだってアンティーカーのファンしか来ていない上に、アンティーカーを目的としてきているのだから前座などそれほど記憶には残っていないだろう。

だから、わたしたちの日常はいつも通り。

いつも通り雛菜ちゃんが寝坊して、いつも通りお昼ご飯を一緒に食べて、いつも通り一緒にレッスンに向かう。

この事務所に来るのもいつの間にかいつものことになってしまった。まだアイドルをはじめ三ヶ月程度で、ここに来ている回数も毎週三回か四回程度なのに、最近は帰りに直接家に向かうことに対して少しだけ寂しさを感じるようになっていた。

そういえば、あの日……プロデューサーさんが家にやってきた日以降、またお母さん

とはあまり話していない。とはいえ、それもいつも通りといえ、いつも通り。そもそも今まで話す回数が少なすぎたのだから、たった一回話し合った程度でたくさん話すようになりました、なんてことは起きえない。

しかしながら、アイドルを続けていることに対して何も言われていないというのは、少しだけ意外だった。門限に遅れるなんてことはもちろんないけれども、それでもギリになることは何度もあった。その度になにか言われるのではないか、制限を厳しくされるのではないかと不安に思っていたけれども、良い方向でも悪い方向でも何も言われることはなかった。

そして今日も、門限にはギリギリになりそうだった。学校が終わって事務所に着くのが四時過ぎ、そこから休憩を入れつつ二時間レッスンをすれば六時過ぎる。普段ならここで帰るので門限である八時には随分と余裕がある。みんなで寄り道することだってできる。

けれど今日は、レッスン後に打ち合わせをするということを事前に知らされていた。こういう日の帰宅時間はだいたい八時近くになってしまう。なんかプロデューサーさんに車で送ってもらったこともあった。

今日の打ち合わせはなにを話すつもりなのだろうか。もしかしたら、前回のライブでフアンの人たちが一気に増えて次のライブが……なんて、上手くいくわけではないか。

「——というわけなんだけど、オーディションと本番、日程的に大丈夫かな？」

「雛菜は大丈夫」

変な妄想をしていたせいか、プロデューサーさんの話を完全に聞き逃してしまっていた。

周りを見ても、もちろん打ち合わせ中に妄想に耽るような人はおらず、みんなにも言わずに頷いている。

こうなってしまうと、なかなか「聞いていませんでした」とは言い出しづらい。かといって聞かなければならぬにも分からないというもの。聞かなければならない、けれども聞き出せないまま視線を泳がせていると、隣に座っていた円香ちゃんが小さく身を乗り出す。

「また随分と急な話ですね。ゴールデンタイムのオーディションなんて、倍率も高いのに。たった一週間でその準備をしろだなんて」

「俺もそう思うよ。ただ、失敗しても受けられるなら受けた方がいいと思っただ。正直なところ、デビューして一年にも満たないアイドルが踊っていいものオーディションに出られること自体が奇跡みたいなもんだしな」

踊っていいともといえ、わたしも知っている。ゴールデンタイムに放送される歌唱番組。人気急上昇の新人から大御所のベテランまで多くの有名人が出てくる番組だ。

まだ人気も出ておらず、ついこの間初めてのライブを終わらせたアイドルが出ていい番組ではない。

283プロダクションという事務所の力なのか、それともプロデューサーさんの手腕がすごいのか。要因を考えていると、プロデューサーさんの目線がこちらに向いていることに気づく。

「小糸がこの前やったラジオ。あのディレクターさんが推薦してくれたんだ」

ラジオのディレクターさんといえば、あの怖そうな顔を気にしている小島さん。まだ数回しか会っていないし、それほどお話もできていないけれど、状況からするにどうやらラジオのお仕事も上手くできていたようだ。

「彼は踊っていいともには関わっていないんだけれど、まあ業界の横の繋がりが広いからね。噂もすぐに広がるし、円香のモデルの話ももう知られていたよ」

円香ちゃんの……モデル？

そんな話は聞いたことがなかった。

「え、そんなことしてたの」

どうやら透ちゃんも雛菜ちゃんも知らない様子。

もともと円香ちゃんは自分の仕事の話をしなさそうではある。それにモデルということはないかの雑誌のモデルだろう。円香ちゃんが載っていると知っていれば話は別

だけでも、ファッション誌なんてものに縁はほとんどない。

そして当人である円香ちゃんは、まるで苦虫をかみつぶしたかのような顔でプロデューサーさんを睨んでいた。知られたくなかったのだろう。

そしてその視線をもっともせず、プロデューサーさんは続ける。

「二週間は確かに短いけど、この前ライブを成功させたこともある。大変かもしれないけれど、一緒に頑張っていこう」

プロデューサーさんもこの前のライブは成功だと思ってくれている。

アンテーカーの前座ではあつたけれども、前座としての役割はしっかり果たせていたはずなのだから。同じようにオーディションに臨めばいいはず。いや、それどころか一週間のレッスンを経てのオーディションなのだから、この前のライブを超えるような仕上がりを出せるはず。

「うん、がんばろ」

「じゃあ雛菜も頑張る〜」

珍しくやる気を見せている透ちゃんと雛菜ちゃん。それに対して、ため息をつきながら頭を抱える円香ちゃん。

「雛菜あの番組好きだから、雛菜も出たい〜」

ああ、確かに透ちゃんも雛菜ちゃんも踊っていいともは好きそう。きつと毎週欠か

さずに見ていることだろう。アイドルになったのだから、そんないつも見ている番組に出たいという思いも分かる。

それはわたしも一緒だった。毎週見ているわけではないけれど、これだけ大きな番組に出られればきつと人気も出る。そうすればアイドルは難しいなんてことを言っていたお母さんも少しは見直してくれるはず。

プロデューサーさんは失敗してもいいなんて言っているけれど、そんな考えはない。受けるからには、絶対にオーディションに合格するつもりで挑まなくては。

◇◇◇

オーディションまであと三日。プロデューサーさんからオーディションの話を知ってから四日が経った。

オーディションに向けてほとんど休むことなくレッスンをしているけれども、それは致し方がないこと。

ダンスも歌もまるで素人で、ゼロからのスタートをしているのだから、みんなに追いつくにはみんなの何倍もレッスンをこなす必要がある。

だから、ノクチルとしてレッスンをしない日でもこうして事務所に来ては練習をしている。朝一番、日が昇りはじめるくらいの時間にレッスンに行こうかとも考えたけれど、そんな制限の穴を突くような行動を取っているのは、制限をきつくされてしまうだけだと

いう結論に達して諦めた。とはいえ、学校に行く前に軽くランニングと、近くの公園でダンスの練習はしているけれども。

283プロの先輩たちは仕事で忙しいようで、レッスンはいつも空いている。ごく稀に人がいた場合は隅だけ貸してもらっている。公演で一人踊っているのもいいけれども、大きな鏡があると自分の動きがよく見えるし、なによりもミスに気づきやすい。一人でレッスンすることにはデメリットもある。

みんなと一緒にいられないこともそうだけれども、それよりも怖いのは門限の存在。レッスン場には時計があるものの、鏡とは反対側についているし、集中していれば時計を見る余裕もないので気づけば門限が迫っている、なんてこともしばしば。

そういうときは、いつも事務所にいるプロデューサーさんをお願いして車で送ってもらっている。

「そ、その、ごめんなさい」

後部座席に座って、車が走り出して少ししてからプロデューサーさんに謝る。

プロデューサーさんはルームミラー越しに目を合わせてから、再び前を見る。

「なにか壊しちゃった?」

仮に何か壊したとして、プロデューサーさんは怒るのだろうか。理由にもよるだろうけれど、レッスンで使用していたものだったり、ちゃんとした理由があれば怒らないだ

ろう。

それはそうとして、今回謝罪した理由は別だ。

「毎日送ってもらっちゃって……その、迷惑……ですよね」

最初はこれも仕事のうちだからと言ってくれていたけれども、それもこう毎日続ければ仕事にも支障がでることだろう。

わたしはこれで家に帰れるけれども、きつとプロデューサーさんはこのあと事務所に戻って送り迎えをした分の時間だけ遅くまで仕事をしていくのだろう。

「ああ、そういうことか。それは気にしなくてもいいんだ。これも仕事のうちだから」
そう言ってくれることは嬉しいけれども、やはりどこか後ろめたさがある。

ならば時間に余裕を持ってレッスンを切り上げればいいのだけれども、集中してしまおうと周りが見えなくなるように、毎回プロデューサーさんに時間だと教えてもらっているのが現実だ。

「そういう条件……ですもんね」

アイドルを続ける条件として門限があるのだから、守らなければ続けられない。幸い今まで門限に遅れたことはないけれども、門限という制限ともいえる条件が、これほどまでに煩わしいとは思わなかった。

「うん、約束したもんな」

プロデューサーさんの言葉とともに、車が制動をかけ始める。前を見てみると、赤信号だった。交差点の先頭で待つこの車は、前を走っていた車と次第に離されていく。

目の前の横断歩道に今しがた人が通り始めたことから、ちやうど赤信号になったのだろう。

「それにな」

プロデューサーさんは再びルームミラー越しにこちらに視線を合わせる。

「頑張ってる小糸を見てると、俺も頑張らなきゃなってると思うんだ」

「べ、別に普通ですよ。これくらい……」

「はは、そっか。それならよかった」

「正直な事をいえば、頑張っていると思う。高校受験の勉強よりもずっと分からないことは多いし、時と場合でやることは全然違ってくる。」

この前のライブだってそうだ。アンティイカの人たちから教えてもらえたからよかったものの、ステージの大きさも分からずにライブ本番を迎えるところだったのだ。

「でもさ、無理はして欲しくないから」

苦笑いをしてから、再び視線を前に向ける。

「小糸はもしかすると、頑張ってるのを見られるの、嫌かもしれないけどさ」

頑張っていると認めてもらえていることは素直に嬉しい。けれども素直に喜べるこ

とではない。

透ちやんたちと一緒にいることが当たり前で、一緒にいられることが当たり前でなければならぬ。頑張つてようやくくしがみついているようでは、いつか息切れを起こして追いつけなくなってしまう。

それに、みんなはきつと優しいから、わたしが頑張っていると知ったら止まってくれらるだろう。でも、それはみんなに迷惑をかけていることに他ならない。だから、わたしが追いつかなければ。

「俺は知っておきたいから。小糸がどれくらい頑張つてるのかってこと。気が向いたときでいいから、こつそりと教えてくれると嬉しいな」

頑張つているという事実は変わらないけれども、頑張つていることは知られたくない。頑張つていることを認めて褒めてほしいけれども、頑張つているとは思われたくない。

矛盾していることは分かっている。かといって、どちらを割り切ることもできない。でも、プロデューサーさんは教えて欲しいと言ってきた。きつと、わたしが言いたくないということを知って、それでもなお知りたいと言ってきた。

プロデューサーさんがどこまで気づいているのか分からない。全部かもしれないし、なにも知らないかもしれない。

だからちゃんと知ってもらいたいと思った。

まだ自分の中でも答えを出せていないこと、みんなに追いつかなければならないこと、そのために頑張っていること。

全部話したら、きつとプロデューサーさんは認めてくれる。一緒になって頑張ってくれる。きつとそうだって思った。

「プロデューサーさんは、わたしが頑張ってるって思いますか？」

「ああ、もちろん」

即答だった。

でもその頑張るといふのは、わたしにとつての頑張る。一般的なものとは違う。ましてや、みんなの頑張るとは、まるで違う。

「だけど、わたしが頑張ってるやつとみんなにとつての普通と同じなんです。だから、これは頑張ってるうちには入らないんです。これが……普通のことだから」

プロデューサーさんは一瞬だけルームミラーでこちらを見る。

「そんなこと……」

「みんな、すごいんですよ」

プロデューサーさんが否定してくれようとしたのを遮って続ける。

「ダンスも歌も、みんなすぐに覚えちゃって。円香ちゃんなんて最初のレッスンから褒

められてたんですよ。昔からそうだったんです。小さい頃から、みんななんでもできて……きつと、特別なんです。わたしもそうなりたくて、いつも……」

そこで、今まで誰にも言ったことがないことを、プロデューサーさんに話そうとしていることに気がつく。

本当に話していることなのか。これを認められたら、もしかしたら満足してしまうかもしれない。もう頑張れなくなってしまうかもしれない。

でも、プロデューサーさんは初めてちゃんと話を聞いてくれた人だから。わたしが頑張っている理由も知ってほしいから。

「一緒にいるはずなのに、ひとりぼっちになるんじゃないかって……だからわたし、全然よゆうなんです。そういうふうに、言っていないといけないんです」

「うん、そうか」

プロデューサーさんは首を左に振る。カチカチとウインカーの音がして、車は大通りからゆつくりと路地へと入っていく。

「だけど、結果がどうであれ、小系が頑張ったことは絶対に変わらないよ。努力ができるってことも、才能のひとつ……特別なことなんだ。だから、その事実を、少なくとも俺だけは知っておきたいんだ。小系はこれだけ頑張ったんだって、これだけ成長したんだって」

頑張ることが……特別なこと。

そんなはずがない。特別ではないから頑張っているのに、それが特別なことなんてはずがない。

でも、プロデューサーさんが言うと、本当のように思えてしまう。

出会ってからまだ半年にも満たないのに、きつと今までの人生で一番わたしのことを見ていてくれて、理解しようとしてくれている。そんな人の言葉を、そう簡単に否定することなどできない。

「小糸の頑張ったこと、頑張ってること、全部知って応援して……それで、できることがあればなんでもサポートしたいと思ってる」

「プロデューサーさん……」

この思いはずっと、誰にも知られないように胸の内に秘めておかなければならないと思っていた。隠しごとではないけれど、威張って言うことでは決してないから。

だからだろう。理解してもらえると言うことが、こんなに嬉しいことだとは知らなかった。

「そのために俺がいるんだからさ、なにかさせてくれると嬉しいな」

ちゃんと話を聞いてくれて、理解してくれて、その人がどう思っているかも教えてくれて。だから、プロデューサーさんの気持ちも大切にしたいと思った。

「も、もう。仕方ないですね！ プロデューサーさんは……！」

いつかちやんと成長したところを見せられるように、これだけ頑張ったんだって言うように。わたしがではなく、プロデューサーさんとわたしが、いつか振り返ったときに。

いまはまだ、精一杯の背伸びを。

「わたしがいないと、何もできないですもんね……！」

取り返せないけれど、これから

まさか、小糸が中学受験を失敗するなんて思っていなかった。

私は中高と成績はそこそこ、大学も普通の国立大学を卒業して、そこそこ大きい企業に就職した。そこで今の夫と出会い、寿退社。

二人の子供を授かって、夫は子供が小さい頃から海外に単身赴任することになってしまったけれど、幸せな家庭を持っていたと思う。

姉の小糸は随分とやんちゃな子供だった。一緒に遊んでいた子たちの影響もあるのだろうけれど、きつと親離れも早いのだろうと思っていた。

あの日、中学受験の合格発表日までは。

あの日のことを、忘れられるわけがない。普通なら、普通の子供ならば、不合格だったと分かればきつと泣きながら帰ってきただろう。けれど、小糸は違った。

小糸は何も言わずに、どこを見るでもなくただただ虚ろな瞳のまま自分の部屋へと戻っていったのだ。

その表情を見た瞬間、不合格だと分かった。もし合格だったなら、嬉しそうに、自慢げに語りかけてきただろう。私自身もその姿しか想像していなかった。

だからだろう。帰ってきた小糸に声をかけてあげることができなかった。

これまで一緒に遊んでいた透ちゃんや円香ちゃんがその中学校に行っていたのは知っている。だから小糸が同じ中学校を受験しようとしていることも知っていた。それ故に、受験に落ちてしまったショックは大きかっただろう。

当分はその話題には触れないであげようと思った。

中学に入ってから一ヶ月。小糸は酷く落ち込んだままで、学校に行くことに対してひどく消極的だった。

それも時間が解決してくれると思っていた。中学で友達ができればいいだろうし、休日なら透ちゃんたちとも遊べるだろうと思っていた。

けれども、いつの日が境目かは覚えていないけれども、気がつけば狂ったように勉強をするようになっていた。

狂ったように、という比喻は間違っているかもしれない。あれは、明らかに狂っていた。

学校での勉強は当たり前として、家に帰ってきてても勉強、休日はもちろん一日中勉強。買って欲しいと頼まれたのは少女マンガではなく問題集。とてもではないが今どきの

中学生とは思えないほど勉強に没頭していた。

今思えば、このときに止めてあげるべきだったのかもしれない。しかし、このときはまだ熱中できるものを見つけられたのだと、勝手に前向きに思っていた。

これがおかしいと気づいたのは、小糸が二年に上がった頃。小糸が欲しいと言ってきた教材が三年生の分野だと知ったときだった。

それはつまり、一年生のうちに二年生の内容を終わらせていたことに他ならず、それほどまでに勉強に熱中していれば他のことは何もできていないことくらい想像がつく。なによりも、その事実から目を逸らして、小糸が落ち込んでいるのは時間が解決してくれるだとか、熱中するものを見つけられただとか、言い訳をしていた自分が情けなかった。

しかし、二年もともに話していない娘相手になにを話していいか分からなかった。どうやって切り出せばいいのか、どういう話をしたらいいのか。

絶対に話した方がいいと思っていた。ただ、自分が口下手なのは知っていたし、下手に話して誤解させてしまっただけなのではないかとも思っていた。

そんなことを悩んでいるうちに、一年が過ぎていた。

私ができることと言えば、学校の教師に呼び出されて小糸のいないところで難関高校の受験をしてほしいとの提案を断ったくらいだ。

三年ともなれば、小糸が仲良くしていた透ちゃんや円香ちゃんが進学した高校は分かっていたし、小糸がその高校を目指していることも知っていた。だから教師の提案は断つたし、理由も伝えた。

そのときの教師の目は、きつと一生忘れない。キラキラと輝いていたのだ。

きつと小糸が志望している高校も知っていて、小糸にはもつと大きな可能性があることも知っていて、きつと悪気もなかったに違いない。

ただ、そんな教師でさえ小糸の思いを汲んでやろうとは思わなかったのだ。小糸をまるで道具のように、自分の評価を上げるための切り札のように切り捨てようとしている。

その日、学校から帰った私はしばらく鏡を見ていた。

二年間も小糸に寄り添うこともできずに、小糸の話を聞こうともせず、小糸が欲しいと言ったからという理由だけで教材を買って、それを良しと思っていた私は、もしかしたら同じ目をしていたのかもしれない。

何時間見ていたのか分からない。なにせ自分の目を見てもあのキラキラはなく、かといってそれが自分の目だからなのかどうかは分からないのだから。

「お母さん？」

突然背後から声をかけられて肩が跳ねる。

振り向くと、小糸……ではなく、紗織が心配そうにこちらを見ていた。

「紗織……」

よかった、小糸では——

「お姉ちゃんじゃなくて、安心した？」

まるで心を見透かしたような紗織の言葉に、思わず表情を伺ってしまう。

「お母さん、お姉ちゃんのこと、応援してあげてね」

紗織はいつたいたいから気づいていたのだろう。小糸が狂ってしまったことに。

それは今でも分からないけれども、少なくとも私よりも先に気がついていたことは間違いない。

そして小糸は主席で高校に入学した。

当然だろう。自己採点とはいえ、全教科満点だったのだから。

そしてその事実を、妹である紗織からしか聞き出せないまでに、小糸との距離は離れてしまっていた。

高校に入つて、小糸に笑顔が増えた。だからだろうか、小糸に距離を置かれていることに寂しさを感じるようになっていった。

ちようどその頃……お盆が明けて少し経った頃。知らない人物から電話がかかってきた。

283プロダクションなどという怪しげな芸能事務所からだった。その人の話によれば、小糸はアイドル活動をしているらしい。

「そんな話は聞いていませんが……」

「えっ……でも、小糸からは親権者同意書を出してもらっているんですが……」

先方は少しだけ間を空けてから続ける。

「まさか……いや、そうか……」

少し間が空いたことで、私も考える時間ができた。もしかしてと思い、受話器を耳にあてながら貴重品を入れている棚を空ける。

私の認印の位置が、いつもとは違っていた。それに、その周辺にある物の位置もところどころ違和感がある。

受話器から声が聞こえた。

「すみません、一度お会いしてお話しできないでしょうか？　できるだけ早く……今晚、七時にでもお邪魔させていただけませんか？」

本来なら、勝手に印鑑を使ったこと、それを黙っていたこと、相手に嘘をついたこと、そのすべてに対して怒るべきなのだろう。本来なら怒りの感情が湧き上がるべきなのだろう。親としてそうあるべきなのだろう。

しかし、私は親として、もつと先にしなければならぬことがある。

「分かりました。その前に、ひとつお願いが……」

「なんでしよう?」

私のために、小糸のために。

「先にあなたが小糸と話してください。小糸の話を、ちゃんと聞いてあげてください。私には……できなかつたから」

こうして……ここまでしてようやく、私は小糸の話を聞くことができた。

◇◇◇

「小糸」

「ぴゃあっ!?!」

家に帰つてくると、お母さんに声をかけられた。

お母さんから声をかけられたのはいつ以来だろうか。普段から互いに話さないように生活しているの、わたしから話しかけることもなければ、お母さんから話しかけられることもない。「いただきます」「ごちそうさまでした」「いってきます」くらいしか話さない。どれも返事はなく、一方的な言葉となっていた。

この前プロデューサーさんが家に来たときに何年ぶりに話した。そしてそのあとまたお母さんとは話していなかった。必要最低限のことを言って、返答がないまま過ぎ去っていた。

それに、最近はわたしがお母さんを避けていたこともある。門限の時間ギリギリに帰ってきていることが多いこともあり、もしかしたら門限を厳しくされてしまうかもしれないという不安があつた。だから、お母さんから声をかけられたときにはもしかしたらと不安に駆られた。

「少しお話ししたいのだけれど……いい?」

「は、はい……」

やはり、最近門限が近すぎることに關してだろうか。どちらにせよ、わたしに拒否権はない。

玄関からそのまま居間へと入り、お母さんが座った椅子とは反対側の椅子に座る。

「小糸」

トーンの低い声に震えていると、お母さんが話を続ける。

「最近、帰るのが遅いけれど……」

やはり、その話のようだ。きつと、門限を短くされてしまうのだろうか。

「やっぱり……難しかった?」

しかし、お母さんの言葉は予想外のものだった。というか、なんの話をしているのか分からなくなってしまった。

難しかったとは、なにに對してだろうか。いまの話からして、帰るのが遅いことに対

してだと思っただけけれど、それに対してなにが難しいのかが分からない。

「え、えつと……」

分からないから、どう反応したらいいかも分からない。

「その、時間……守るの、大変？」

大変かと聞かれれば、もちろん大変だ。

もう少しレッスンができる時でも、門限があるから帰らなければならぬ。みんなが帰ったあとに居残りもできないし、プロデューサーさんに送ってもらっているの、プロデューサーさんは気にしないでいいと言っていたけれども、きつと迷惑をかけている。

しかし、それを正直に言っただけのものか。なにかを試されているような気がして、どうしても警戒してしまう。

『難しいと思うけれど』

突然脳内に流れたのは、間違いなくお母さんの言葉。

あの日、プロデューサーさんが家にやってきた日。お母さんがアイドルを続けるときに放った言葉。

あの時は、アイドルをすることに對して言われていたのだと思っていた。わたしなんかに務まるはずがないと、そういう意味だと。けれども、いまの流れから察するに、あの時の言葉は門限に對して言っていたのではないだろうか？

ずっと、お母さんはわたしがアイドルをすることに對して否定的だと思っていた。

思い返してみても、お母さんがはつきりとアイドルに對して否定的な発言をしていたことはなかった。

「ううん、大変よね」

お母さんの顔を見ると、ちょうど大きいため息をついていた。

「お母さん、あのね……」

「まって」

もしかしてを聞こうと、間違っているもいいから確認しようと思った。しかし、お母さんはそれを遮った。

「私の話を聞いてほしいの」

そして、お母さんと目が合った。

「小糸が……中学受験を失敗したとき、なんて声をかけてよかったのか……。それで、勝手に小糸が勉強に夢中になってくれたと思って……。気づいたときにはそれすら言えなくて……ごめんなさい」

中学時代はお願いすればなんでも教材を買ってくれた。なんなら、頼んでもない教材も買ってくれた。それはきつと高校受験を失敗することは許さないということかと思っていた。

話す機会は中学に入ってから一気になくなってしまった。それはきつとお母さんがわたしを避けていると思っていた。

アイドルのことも、否定的だと思っていた。

その全てが、勝手な勘違い。

「小糸は私のことを嫌いかもしれないけれど、私は小糸を好きだし……心配だし、応援してるから……」

お母さんのことを勘違いしてしまっていた。

わたしに興味がなくなっていたわけではなかったし、アイドルだって許可してくれたし、応援してくれてさえいる。

それなのに、お母さんはわたしに興味がないと決めつけて、嘘をついて、勝手に判子を使つて。

いつたい、なにをしているのか。

ちゃんと……ちゃんと謝らなければ。

「わたしこそ、ごめんなさい。ずっと、お母さんはわたしのこと……嫌いだと思つてた。

お母さんのことを避けて、なにも言われないうようにしてた」

その全てが間違いだっただなんて思わない。けれど、お母さんに対する態度は間違っていたと、そう思わなければ。

「アイドル、楽しいよ。いろんなこと教えてもらえるし、みんなと一緒にいられるし。門限は……お母さんとの約束を守るのは大変だけど、それでも頑張ろうって思ってるよ」
「うん、時間のことは……大変なら連絡してくればいいから」

きつと、今日はこのことを言いたかったのだろう。ただそれだけを言ってしまったのは、わたしもお母さんも誤解したまま。だから、お母さんはちゃんとお話をしようと考えてくれた。

「ありがとう、お母さん」

なんだか、体が軽くなった気がした。息苦しくないし、お母さんはまだちよつと怖いけれど、話せないなんてことはない。むしろ逆で、話さなければという思いが強い。

「今度の土曜日、テレビの……踊っていいとものおーディションがあるんだ。合格したら、次の日に放送だと思う」

頑張るからと、絶対に合格するからと、そう思いを込めて。

お母さんは目を泳がせてから、恥ずかしそうに、ぎこちない笑顔で頬を掻いた。

「うん、えつと……がんばってね」

いつも通りはいつの通り？

お母さんと話してから、数日が経った。

たった数日だけだけでも、いつもよりずっとレッスンに集中できていたと思う。おかげで、明日に迫ったオーディションもいい状態で挑めそうだ。トレーナーさんから褒められる回数もずっと増えたし、同じように指摘を受ける回数もずっと減った。

今日は最後のレッスン日……というわけではなく、今日のレッスンはお休み。プロデューサーさんからは、前日はしっかりと休むようにと言われた。

とはいえ、この前プロデューサーさんに話した通り、わたしは頑張つてようやくみんなに追いつける。そしてなにより、頑張ることが私にとっての特別なら、プロデューサーさんのその言葉を信じて頑張りたい。

だから、プロデューサーさんにはお願いしてレッスンルームを確保してもらつてある。

今日はみんなと一緒に帰らずに、一人で事務所へと向かうことにする。

「透先輩、今日透先輩の家行きた〜い」

「いいよ。樋口は？」

下校途中。途中まではみんな一緒に、わたしは一度家に帰ってから事務所へと向かう予定。

隣に立つ雛菜ちゃんは明日がオーディションだと分かっているのかどうか、緊張感など微塵も感じない。仮に雛菜ちゃんが緊張を見せるようなことがあれば、きつと明日は記録的な灼熱になるか、まだ冬は遠いのに雪が降るかもしれない。

「……今日はやめとく」

円香ちゃんにしては、めずらしいなと思った。

こう言っつては失礼かも知れないけれど、いつも透ちゃんの家にいる印象が強かった。その円香ちゃんが透ちゃんの家に行くことを断るなんて、めずらしいと思った。

顔を見ようと前のめりになってみたものの、一番遠くにいる円香ちゃんの表情は残念ながらよく見えなかった。

「えー、円香先輩ノリわるい」

「明日起こさないから」

「え、困る」

「(まる)」

雛菜ちゃんを起こすのはわたししの役割だけれど……。

「早く寝て寝坊しなければいいだけでしょ」

円香ちゃんの見解はごもつとも。そして、透ちゃんと雛菜ちゃんが夜遅くまで盛り上がった姿も容易に想像できる。なるほど、円香ちゃんが透ちゃんの家に行かない理由が分かった気がする。

「雛菜は明日日本番だからこそいつもどおりでって思うけどな〜」

「勝手にすれば？」

雛菜ちゃんの言うことにも一理ある。下手にいつもと違うことをするよりも、いつも通り過ごした方がリラククスできて、結果的にしっかりと休息も取れる。なにより、プロデューサーさんはしっかりと休むようにと言ったのだから、いつも通り過ごすということも間違いではないように思う。

明日もいつも通りパフォーマンスをすればいい。

いつもレッスンをやっているように、いつも一緒に過ごしているように……。

「あっ！」

ここずっと抱えていた違和感。

初ライブのレッスンを始めたときから、ずっと抱えていたもやもやが、急に晴れた気がした。

わたしがいて、雛菜ちゃんがいて、透ちゃんがいて、円香ちゃんがいる。いつもそうだった。

お昼休みだつて、透ちやんの隣には円香ちやんと雛菜ちやん。それがいつも通りの並びだった。

ところがライブではどうだろう。私の隣には円香ちやんがいた。それに、一番端には透ちやんが。

きつと、それが違和感の正体。たつたそれだけだけれど、何年も一緒に過ごしてきたからこそ当たり前になつてしまつてしまつてのこと。

ライブでの並び順は、特に誰かが決めたわけではない。たまたま、打ち合わせの時に座つていた順番がそのままライブでの並び順になつただけなのだ。

「小糸ちやん、忘れ物？」

「わ、忘れ物じゃないけど……」

とはいえ、オーディションは明日。いまから提案したところで、修正できるかと言われれば……分からない。きつとみんなは大丈夫だろう。しかし、わたしができる自信がない。

「き、気になることがあつて、ちよつとだけでいいから、公園に寄りたいんだけど……」

「いつてらつしや〜い」

自身を持ってない中でなんとか勇気を振り絞つたというのに、雛菜ちやんに一瞬でフラれてしまった。

「じゃなくて……みんなで……いー」

雛菜ちゃんが不満そうな表情をしているのを分かっていて、それでも腕を引つ張る。最近のレッスンで鍛えられているとはいえ、もともとの筋力と体格差で微動だにすることはなかった。

「今日は暑いから——」

雛菜ちゃんが不満を漏らす中で、その横を透ちゃんが通り抜けていく。腕を引くのもやめて、ただただその姿を目で追うことしかできなかつた。

しばらく歩いてから、透ちゃんは足を止めて振り返る。

「行くんでしょ、公園」

その言葉の直後に、ため息が横を通り抜けていく。円香ちゃんがやはり不満そうな表情で、けれども透ちゃんのあとを追いかける。

その直後、引つ張ることを忘れていた腕が引つ張られる。制服の裾を掴まれていることなど気にならないかのように、わたしの腕ごと連れて行ってしまおう。

「やはくみんな行くなら話は別かも」

◇◇◇

家の近くにある公園は、昔からみんなで遊ぶのに使っている。普段から人気の少ない小さな公園には、ブランコと背の低い鉄棒と半分埋まったタイヤくらいしかない。いず

れも年季が入っており、タイヤに関しては一部撤去されて歯抜けになっている。

遊具は公園の隅に置かれており、真ん中は開けているので走り回るもよし、地面に模様を描いて遊ぶもよし、というところ。

「え、えつと……」

「……帰っていい？」

公園の真ん中で輪を作るように並んで、数分が経ったと思う。違和感の正体は分かったものの、それをどうやってみんなに伝えたものか。

「ま、待って」

「待つ待つ」

考えてみれば、そもそもみんなは違和感など感じていないのだから、そこから説明が必要。けれども、違和感を説明するには実際に曲を流して踊ってみなければ難しい。

「え、えつとね……うまく言えないんだけど、レッスン中ずっと違和感があつて……」

一度、みんなの反応を待ってみる。もしかしたらみんな同じ違和感を持っていたかもしれない。いつもではなくても、一度だけでもあれば、この違和感は確かなものになるから。

「あゝ雛菜もそれ思ってた」

「雛菜ちゃん……!」

共感を持ってくれたのは、予想外にも雛菜ちゃん。一番興味がなさそうに見えて、案外いつもと違うことに対しては敏感なのかもしれない。

「レッスンスルームのエアコン効いてないよね〜」

「あー、たしかに暑いよね」

……少しでも期待したわたしが愚かだった。そう思うことにしよう。

「プロデューサーには何度も言ったのに、あれくらいが普通だから〜って聞かないんだよ〜？」

たしかにレッスン中は暑いけれど、エアコンが効きすぎていても体を冷やしてしまふ。実は一度プロデューサーさんから釘を刺されていた。雛菜ちゃんが変えようとしたら止めさせるようにと。

「つて、そうじゃなくて！」

あぶない。流されそうになっていた。

「みんな、曲をやるときみたいに並んでみて」

「え〜」

「いいから！」

雛菜ちゃんが不満の鳴き声をあげるけれども、透ちゃんも円香ちゃんも言われたとおりに移動したのを見て、雛菜ちゃんが間に入る。

わたしから見て、円香ちゃん、雛菜ちゃん、透ちゃんの順番に並んでいる。

「こ、この並びがおかしくて、違和感の正体ってこれだったんだって」

「あー」

わたしから一番遠い位置に立っている透ちゃんが、感情のこもっていないような間の抜けた声を出す。それから一拍おいて。

「なるほどね」

透ちゃんはゆっくりと歩いて、円香ちゃんと雛菜ちゃんの間に入る。

「片側が寂しいなって思ってたの、これだったんだ」

透ちゃんが移動したから、わたしは反対側の雛菜ちゃんの横へと移動する。

これで、いつもの並び通り。わたしの隣に雛菜ちゃんがいて、透ちゃんの両隣には円香ちゃんと雛菜ちゃん。

これでこそ、いつもどおりのわたしたち。

「やるじゃん、小糸ちゃん」

「え、えへへ……」

透ちゃんはゆっくりと顔を上げて空を見る。視線を追うと、空は赤から紫のグラデーションがかかっていた。

「明日さ、これでやろうよ」

「は？」

透ちゃんの提案に真っ先に不満を漏らしたのは円香ちゃん。

「もう練習する機会ないんだけど？」

本番はもう明日。今から配置を入れ替えて練習したところで付け焼き刃にしかならない。

だから、円香ちゃんの見解もよく分かる。今までずっとレッスンを重ねてきた配置で、しっかりと合格を目指さなくては。その考えは至極当然で、ここにプロデューサーさんがいても同じことを言うと思う。

「でもさ、いつもどおりの方がよくない？」

作られたノクチルではなく、あくまでいつもの、普段と同じわたしたちを見せたい。

……なんてことまで透ちゃんは考えていないだろうけれど、似たような思いが込められていると思う。たぶん。

「雛菜も透先輩の隣がいいよ」

「それは今まででもそうでしょ」

たしかに。

雛菜ちゃんは顎に指を当ててから考えて、補足を入れた。

「小糸ちゃんの隣がいいよ」

そして本番と、本番へ

「283プロダクションから来ました。ノクチルです。よろしくお願ひします」

透ちゃんの言葉に合わせて、目の前の三人にお辞儀をする。

ついにやってきた踊っていいとものオーディション。プロデューサーさんの運転でテレビ局までやってきて、待つ暇も練習する暇もウォームアップする暇もなく収録スタジオへと案内された。

観客席には審査員の三人と、プロデューサーさん。あとは見知らぬアイドルだろう人たちがポツポツと座っている。

「はい、まあ、ちやちやつとやつちやつて」

審査員さんの一人が言った。

その声からはとてもではないが、これから真剣に見ようという意思は感じられなかった。仕方ないから形式上この場にいる、といった様子。

理由はなんとなく察することができた。

プロデューサーさんがこのオーディションに落ちてもいいからと言っていたことも、オーディションまでの期間が異常に短いことも。283プロが、ノクチルが入る枠など

元々なく、無理を言って作ってもらった枠なのだろう。だから予定よりも早く始まって、現場に来てから落ち着く暇もなくオーディションが始まって、審査員の人たちもめんどくさそう。

これでは、落ちろと言っているようなもの。オーディションに合格する可能性などないに等しいではないか。

こんなことなら、気がつかなければよかった。自分のことだけに集中して、いつも通りにも知らないままにパフォーマンスを終わらせたかった。

——それならもう、いつそのことやらなければ……。

無意識のうちに、助けてほしくて、視線を右に……みんなのいる方向へと向けていた。

「……………」

みんなの表情は、まちまちだった。けれど、透ちゃんも円香ちゃんも雛菜ちゃんも、やめようという表情ではなかった。

透ちゃんはまだ楽しそうに、これから起こることが楽しいことだと分かっているかのように、審査員ではなくて会場を見ていた。

円香ちゃんは呆れた表情を隠そうともせず、しかし表面だけは笑顔のまま。

雛菜ちゃんはとでも残念そうだった。見られていないことがではなくて、これから起こる絶対に楽しいことを見逃してしまうかも知れない人たちに対して、哀れんでいた。

——やっぱりみんな、すごいや。

わたしだけが諦めようとしていた。

みんな状況を理解しているはずなのに、やめようだなんて思っていない。そもそも、審査員を満足させようだなんて思っていないのだ。

自分たちが楽しんで、それを見た人が楽しければいい。そういう考え方をしているのだ。

わたしにそれができるだろうか？

分からないけれど、いまはみんなを信じて。絶対に楽しいと思っっている透ちゃんを信じてやりきるしかない。

大きく息を吸って、ゆっくり吐く。

それを見ていたのかは分からないけれど、ちょうど吐き終わったタイミングで透ちゃんが言った。

「じゃあ、はじめます」

◇◇◇

奇跡的にか、それともこれが必然か。パフォーマンスは大きなミスなく終わった。

初めての並びで、初めて見る景色だったはずなのだけれども、踊っている間はどのレッスンよりも安心感があつた。

手応えがあったかと言われれば、自信はない。

オーディションはまだ始まったばかりで、これから何人もの人たちが審査員さんたちへのアピールをしていく。それがわたしたちと比べてどちらが上かなど分らない。

曲が終わってスタジオを出ると、プロデューサーさんが追いかけてきた。

「おつかれ」

第一声はそんな素っ気ない言葉だった。

怒っているのかも喜んでいいのかも分からない。ただの機械的な言葉。

それでもプロデューサーさんのなにかを揺さぶるようなものではなかったのかと思うと、少しだけ悔しい。

「並び順、いつ変えたんだ？」

プロデューサーさんは今まで何度もレッスンを見に来ていた。見張り役とか保護者役程度に思っていたけれども、すっかりレッスンを見てくれていたようだ。

「昨日変えた。こつちのが私たちらしいからって」

透ちゃんの声はいつも通りだったけれども、なんとなく悪い空気を察したのか少しだけ緊張していた。

「それなら俺にも相談してほしかったな。俺の見てるいつも通りとみんなの見てるいつも通りは別かもしれないけど、それも含めて知りたいから」

プロデューサーさんの声に、怒りの感情は含まれていなかった。いや、いつそのこと怒ってくれたほうが楽だったかもしれない。

こんなにも悲しい顔をされるくらいなら。

ノクチルを担当するプロデューサーとして、寄り添いたいという立ち回りは今まで何度もあったはず。それなのに無視してしまったわたしたち……今回の件を言い出したわたしには、大きな責任がある。

謝ろう。口を開いた瞬間、声を出すよりも先に声が聞こえた。

「ごめん。うん、分かった」

どうして透ちやんが謝るのか、一瞬理解に戸惑った。

私が責任を感じているのと同じように、透ちやんにもなにか思うところがあったのだろう。その気持ちを整理して、次の行動に移すまでがわたしより早かっただけのこと。でも、その思いはわたしのものとは違う。だから、わたしはわたしでやることがある。

「(い、い)めんなさ……」

円香ちゃんも雛菜ちゃんも、何かを言うわけではないが、この空気の中で何も言わないこと自体が反省していることの意味表示かもしれない。

「……さてとー」

プロデューサーさんは少しだけ目を閉じて、大きくいきを吸うと、パツと目を開けた。「それはそれとして、この並びのほうがあたしかにしつくりくるな！ 昨日つてことはろくに練習もしてないのに成功させるなんて、すごいぞ！」

プロデューサーさんの言うとおり、練習など全くしていない。完全にぶつつけ本番の勝負だった。

「やは、やつぱり〜？」

どこに対してのやつぱりなのかは分からないけれど、雛菜ちゃんが嬉しそうなことだけは確かに伝わってきた。

「ああ、配置が換わるだけであんなに見え方が変わるんだな。勉強になったよ」

腕を組みながらうんうんと頷くプロデューサーさんを見て、やはり何かが違うと思っただ。自分が言い出したことなのだから、どんな叱責も覚悟していたというのに、怒声の一つも飛んでこない。

普通なら、きっと怒られているはず。わたしはあまり経験がないけれど、周りの人はそうだったから。普通でないことをすれば怒られる。それが普通のはず。

「あ」

どうして怒らないのか、この場で聞くべきなのか迷っていると、透ちゃんの間の抜け

た声に先を越されてしまう。

「練習ならしてたかも」

「そうなのか？」

首を傾げるプロデューサーさんに対して、透ちゃんは自信たっぷりの声と表情で答える。

「何年も練習してきたやつだから、カンペキ」

◇◇◇

オーディションの結果は合格……ではあったけれども、審査員さんたちの表情はあまりいいものではなかった。

二番目以降のグループが、続けて大きなミスをしてしまったのだ。転んでしまう人もいれば、声が上がってしまいう人もいた。結果として失敗のなかったノクチルと、最近人氣が急上昇しているアンティフォナというグループが合格となった。

審査員さんたちが不服な原因は間違はなくノクチルだろう。飛び入り参加で、消去法で尺のために仕方なく選ぶのだから、番組に真剣な人たちからしたら納得行かない気持ちも分かってしまう。

「雛菜、帰りにケーキ食べたーい！」

そんな事情を知ってか知らずか、雛菜ちゃんは車の中で跳ねる。

「揺れるんだけど」

助手席には透ちゃんが座り、後部座席ではわたしが円香ちゃんと雛菜ちゃんに挟まれている。なので、雛菜ちゃんの揺れの影響をより強く受けているのはわたしのだけだ。

「じゃあ円香先輩のケーキはなしね〜」

「はっ。」

円香ちゃんの視線を受け流しながらも不満の声を上げる円香ちゃん。表情を伺うと、眉間にシワが寄っている。これは冗談とかではなく、本当に不満なのだろう。

「あー、じゃあ明日、収録終わったらみんなで行くか」

居心地の悪い空気に挟まれていると、プロデューサーさんが助け舟を出してくれた。

「明日があるから今日は抑えて、明日収録が終わってから食べに行こう。ほら、テストが終わったときみたいなさ」

「いいね、テストは今日だけ」

五人で食べるとなると、どこがいいだろうか。二人がけか四人がけ、もしくはカウンタ―席が普通だから、五人となると少し探すことになりそうだ。

ああ、事務所に持ち帰って食べてもいいかもしれない。それなら、以前お世話になったアンティーカさんたちにも買ったほうがいいだろうか。

「それはものの例えでだなあ。……まったく、油断も隙もあつたもんじゃないな」

そうそう、本当にそう。油断するとすぐに都合よく解釈されてしまうのだから、プロデューサーさんも気をつけたほうがいい。

「小糸ちゃ……」

透ちゃんに呼ばれた。返事をしなくてはいけないのに、ものすごくめんどくさい。

事務所まであとどれくらいだろうか。せつかく居心地がいいのだから、少しでも長く
なるといいな。

「んう……」

「あく小糸ちゃん寝ちやつてる〜」

「小糸ちゃん見てたら私も眠くなってきたわ」

「じゃあ助手席交代な」

「え、じゃあ起きてる」

「静かにしたら？」

もう少しだけ、この幸せな時間を、もう少しだけ。

◇◇◇

目を覚ましたはず、というのは理解できた。視界から情報を得るより先に、体は息を吸うことを求めた。大きくいきを吸うと、高鳴っていた鼓動が少しだけ落ち着いた気が

した。

——今日が……本番……

昨日は帰りに車の中で寝てしまったようで、気がついたら家に着いていた。

夜寝るときに急に緊張してきて、なかなか寝付けなかったはず……なのだけれど。

「もしかしたら夢だったかも……なんて思っちゃう」

でも夢ではない。夢であってほしくない。

昨日のオーデイションも、これまでのレッスンも、プロデューサーさんと話したこと
も、お母さんと話したことも、全部本当のことであってほしい。

「ん、んー」

体を伸ばすと、ぼんやりしていた意識が一気にはつきりする。

なんだか恥ずかしいことを呟いていたと自覚して、周りに人がいないことを確認す
る。誰かに聞かれていたら恥ずかしい。

大丈夫。全部本当のことだから。

つい数ヶ月前まであれほどまでに重かったドアノブは、今ではすっかり軽くなった。

ドアを開けて部屋を出る。廊下に出て奥の扉を開ければ居間だ。

「お母さん、おはよう」

「おはよう、小糸」

なんてことない、親子の挨拶。そのはずだが、この状況ではなんてことある挨拶。お母さんは洗い物の手を一度止めてこちらに振り向く。

この数カ月で、お母さんとの関係は大きく変わった。

そもそも、互いにちゃんと話し合わなかったから気まずかっただけで、お母さんの考えていることが少しだけ分かるようになったいまは、話しかけることに抵抗は少ない。それはきっと、お母さんも一緒なのだろう。

まだなんとなくぎこちない関係だけれども、時間が経てば慣れてくると思う。

自分の席に座って目の前に用意された朝食を食べていく。ご飯と鮭フレークとお味噌汁と冷たいお茶。ゆつくり食べながら、今日の予定を思い出す。

一度事務所に行つてから、プロデューサーさんの車でスタジオへ。打ち合わせをしてから一時間の収録、もちろん生放送だ。実際の出番はほんの数分だけれど、収録の雰囲気も見ておきたい。

お茶を飲み干して、茶碗を重ねていく。

「ぢちそうさま」

流し台の横に食器を置くと、お母さんの手が素早くそれを回収していく。

「今日の番組って、何時からだっけ？」

お母さんの声は相変わらず平坦で、声から感情を読み取るのは難しい。けれど、この言葉はそれが透けて見えて、思わず苦笑い。

「七時からだよ。わたしたちの出番は半くらいからだと思うけど」

もうこれで何度目だろうか。昨日オーディションに合格したと話してから時報のように聞いてくる。

それだけ期待してもらえていると思うと、嫌とも思えない。だから毎回呆れつつもちゃんと答える。

「あと、帰りはご飯食べてくるから、晩御飯はいらさないかな」

少し前まで、晩御飯がいらさないなんてことを言ったことはなかった。それまでには家に帰るものだし、外食は昼にするものだったから。

「うん、分かった」

居間を出て洗面所へと向かい、顔を洗って歯を磨き髪を整える。それから自室で着替えてからかばんを持って玄関へ。

「それじゃあ、行ってきます」

「行つてらっしゃい。がんばってね」

ようやく聞けた返事は、まだ少しだけくすぐったい。

◇◇◇

「おかーさん、始まつちやうよ?」

「洗い物終わつたら——」

「そんなのあとでいいじゃん」

いつもより一時間早く夕食を済ませて、小糸が出演する番組を見ようと思つていた。けれど、慣れというのは恐ろしいもので、紗織に言われるまで忘れてしまつていた。忘れていたら忘れていたで、きつとご飯を食べながら見ていたのだろうけれど。

夕食をなんとか早めに作り、食べ終えたはいいものの、片付けが間に合いそうになつた。

紗織の言う通り、片付けは後回しにしよう。

小糸のテレビ初出演は、今日しかないのだから。

もちろん録画もあるし、ダビング用のBDディスクも買つてある。けれども、やはりリアルタイムで見たいものだ。

「そうね」

洗つていたお皿を桶に戻して、手を拭いてからテレビの前に戻る。

ちやうど番組と番組の間で、CMが流れていた。時計を見れば番組が始まるのはもうすぐ。たしか小糸の話だと、出番は三十分後くらいらしいけれども、その瞬間を見逃すわけにはいかない。

そうして、普段見ていない番組を見続けること三十分。

『それでは登場していただきましょう。アンティフォナとノクチルのみなさんです!』
「あつ出てきた!」

カメラはどうやら、アンティフォナというグループの方をメインで撮りたいようで、そちらが中心となっている。しかし、ここにいる二人の視線はその後ろをついてきている四人に釘付けだ。

「わあ、お姉ちゃんすっこいかわいい衣装」

夏を連想させるような白を基調とした衣装。小糸はいつものように髪を後ろで二つ結び、緊張しているのか歩き方が若干ぎこちなくなっていた。

『アンティフォナのみなさんは、最近大分調子がいいみたいですね?』

インタビューというか、質問もほとんどアンティフォナというグループが持っている。あくまで小糸たちはおまけという扱いのようだ。

そのグループが歌唱を終わって、続けてノクチルの出番。

画面がパツと切り替わって、四人が横に並んでいるところが映し出される。

曲が流れ始めた瞬間。四人にスポットライトが当たる。

いままで緊張していたのが嘘のように、キラキラと光を反射しながら踊り始めた。それを見て思い出したのは、小学生の頃のまだやんちゃな小糸。あの頃の眩しい、楽しそうな笑顔は、中学に入ると同時になくなってしまった。それがいま、テレビ越しではあるけれど、しっかりと確認できる。

「お姉ちゃん、楽しそうだね」

「ええ……」

始まる前は、どうなるのかと不安でいっぱいだったけれども、いまの小糸を見ているととても安心できる。

この笑顔を取り戻してくれたのがアイドルなら、あのプロデューサーなら、やはり私はそれを応援しなくては。

まだ、小糸がアイドルをすることには不安がある。夜遅くなるのは心配だし、テレビにでていろいろな人の目に触れるのも心配だ。

けれども、きつともう子離れする時期なのだろう。

小糸はまだどんなアイドルになりたいか決まっていないうつていた。なら、それが見つけられるように応援しよう。私の心配は、きつとあのプロデューサーがしてくれる。

「はあくお姉ちゃんほんとかわいい〜」

気づけば、紗織が隣で蕩けていた。表情は緩みきって、軽く赤面している。紗織は小糸のことになると、たまにこうなる。

私が小糸と話すのをためらっている間、何年も小糸のことを見続けてきた紗織だからこそ分かることもあるのだろう。かといってここまでになるのは異常かもしれないが。

「応援……しなきゃね」

「もっちろん！」

小糸がなりたい小糸に、なれるように。

4章

突きつけられる、わたしたちの真実

踊っていいよもの収録が終わった。

前半はほとんど出番がなく、後半も番組の中心はオーディションに合格したもう一つのユニット、アンティフォナだった。

いくつか投げられた質問はすべて透ちやんが受け答えて、あとは歌って、それから先はただただじっと座っているだけだった。

不満がないといえば嘘になる。けれども今は、有名な番組に出られただけでも十分ではないだろうか。

「なんか、テレビで見るほど面白くなかったね〜」

楽屋に着くと、雛菜ちゃんが開口一番愚痴を漏らす。

「そりゃテレビ見るのとは違うんだから」

「ね〜近いからもつと楽しいかと思ってた〜」

テレビ越しに見るあの空間は、きつとテレビの向こうから見ると楽しいはず。そう思う気持ちは少しだけわかってしまう。少しだけその雰囲気期待していた

自分もいる。

苦そうな顔をする雛菜ちゃんに対して、透ちゃんは意外そうな声で返す。

「え、そう?」

テレビ的な扱いでは、透ちゃんがリーダーとかセンターとか、そういう扱いに思えた。一番かつこよくて、周りからは透ちゃんを中心に見えても不思議ではない。

だからきつと、透ちゃんだけは感じ取った雰囲気だっただろうと、そう思った。

「モニター見てたら面白かったよ」

なんて、そんな特別感は当人にはなかったようだ。

収録中、特にカメラに写っていないときはいつにも増してぼーっとしていると思ったけれど、まさかモニターを凝視していたとは。

まさかテレビ番組に出演しながらテレビ番組を見ている人がいるとは誰も思わないだろう。

「ちゃんとやりなよ」

「まあ、写ってなかったし」

「それはそれで問題なんじゃ……」

反省会のような、ただの雑談のような会話をしながら帰る準備を進めていく。

「雑菜、櫛」

楽屋から出ようとした雑菜ちゃんを円香ちゃんが止める。その指さす先には、折りたたまれた櫛が置かれている。

「あは〜円香先輩さすが〜」

そんな二人の行動を見て、楽屋を見回すことにする。忘れ物をしていたら迷惑をかけるてしまう。

「……よ、よし〜！」

「よくない。髪留め変えてないでしょ」

鏡を見ると、髪を縛っている髪留めがキラキラと光を反射していた。

これは衣装用の髪留めで、着替えるときに戻すのを忘れていた。

たった数時間だけだけでも、体が慣れてしまふと違和感がなくなって、存在そのものを忘れてしまう。

「うん、よし」

「浅倉は家出るときからアウトでしょ」

「あれ、なんかあつたつけ？」

透ちゃんが首を傾げると、円香ちゃんはゆっくりと深いため息をついた。

「いま右手に持つてる飲み物、奢ったつもりはないんだけど」

「あー、そっか」

透ちゃんは右手を持ち上げて、自分が持っているペットボトルを見つめる。

ラベルの外、また薄水色の液体が残った下の方から円香ちゃんを見て続ける。

「明日返すわ」

二人がそんな会話をしている間に髪留めをつけ変える。

今度こそ準備万端、忘れ物もないことを確認して楽屋を出る。なんというか、旅行から帰るときのような、少しだけ寂しい気分を味わいながら、楽屋の扉を閉める。

「あ、おつかれさまです」

透ちゃんの突然の挨拶に、思わず背筋が伸びる。

視線を向けると、今日の共演者がいた。

アンティフォナ。

昨日簡単に調べただけだけでも、アンティフォナは最近右肩上がりです、そろそろ踊っていいともにも出演するのではないかと期待されていた。

まるでわたしたちが出てくるのを待ち構えていたかのように、三人はこちらへと歩いてきて、透ちゃんの挨拶とともに足を止めた。

「あんたら」

わざわざ挨拶に来てくれた……という雰囲気ではなかった。

アカリと呼ばれていたその人は、カメラの前とは大分イメージが違って見える。「なんのためにアイドルやってるわけ？」

投げられた問いは、答えるどころか考える時間さえもらえなかった。

「収録でもステージでもね、アイドルってのは誰かを笑顔にしたり、楽しませたりするためのものよ」

学校でよく見た説教のよう。けれども、決定的に違うことは、彼女の言葉にはあからさまな嫌悪感と怒りが込められていること。

「あんたらだけが楽しむ場所じゃないの。それが分からないなら今すぐ引退して」
ふんと鼻を鳴らして通り過ぎていくアカリさん。

遅れて、残りの二人が両手を合わせて申し訳なさそうな表情をしながら追いかけていく。

「何様？」

突然の出来事で、止まっていた意識を円香ちゃんが呼び戻す。

「なんかやらかしたっけ？」

「ぴえっ……し、知らないルールとか……？」

雛菜ちゃんを見ると、はちきれそうなほど頬を膨らませて、口を尖らせていた。

「雛菜は楽しかったもんね〜」

一見、アンティフオナの一人が怒っていたように見えたけれど、落ち着いて考えるとあの言葉は三人のものであったのだろう。そうでなければ、怒り出したアカリさんを他の二人は止めていたはずだから。

「お、みんな準備できてるな」

まるでアンティフオナの人たちと入れ替わるように、聞き慣れた声と共にプロデューサーさんが姿を現した。

プロデューサーさんの表情から察するに、いまのアンティフオナとの会話は聞こえていなかったようだ。それはもう、満足そうに満面の笑みを浮かべている。

「約束どおり、とっておきの店を予約しといたから、正面玄関を出たところで待っていてくれ」

そう言い残してプロデューサーさんは踵を返す。キーリングに指を通して、車の鍵をくるくる回しながら遠ざかっていく。

「ふふっ」

そんなプロデューサーさんの姿に笑いをこぼしたのは透ちゃん。

「なんだかんだ、一番楽しみにしてるじゃん」

昨日の帰り道、プロデューサーさんが運転する車の中でそんな約束をしたらしい。今日の収録が無事に終わったら美味しいものを食べに行くとか。

らしい、というのはわたしの記憶がほとんどないから。昨日の帰りはプロデューサーさんの車の中で寝てしまっており、気づけば家の前に着いていた。降りる直前にプロデューサーさんから教えてもらったからよかったけれども、聞きそびれていたらお母さんが晩ご飯を用意してしまっていただろう。

「で、出口ってどっちだったけ」

◇◇◇

スタジオを後に、プロデューサーさんの車に乗り込むと、すぐにレストランに向かうと言われた。レストランと言われて想像していたのは、よくあるファミリーレストラン。ソファアールのような椅子がいくつも並んで、やはり五人だと座る場所に少しだけ困りそうなイメージを持っていた。

今いる場所とはいえば、雰囲気からしてまるで違う。

全体的に暗く落ち着いた雰囲気の中に、テーブルは片手で数えられるほどしかない。椅子は少し高めで、座れば足が若干届かない高さ。しかし座り心地は悪くない。テーブルの上に置かれた燭台に灯った灯がゆらゆらと揺れて、落ち着いた雰囲気をより一層醸し出している。

「あは〜すつ〜い高そ〜」

「え、メニユーに値段書いてないけど」

「あーそれびつくりするよな。俺も初めて来たときびつくりしたんだ」

隣に座る円香ちゃんのメニューを覗き込んでみる。隣に座っているとはいえ、机の大きさは五人ほど座れそうな幅に二人しか座っていないため覗き込むには大きく身を乗り出さないといけない。

「ほら、落ちるでしょ」

それに気づいた円香ちゃんがメニューをこちらに見えるように広げてくれた。

「あ、ありがとう」

確かに透ちゃんの言った通りメニューには料理の種類と名前しか書かれておらず、どんな見た目のものなのか、値段がどれくらいなのかは一切書かれていなかった。

料理の名前もすぐくざっくりしていて「ポークカレー」「ビーフカレー」「ビーフステーキ」「鮭のムニエル」「ハンバーグ」といった具合に、テレビで見るようなやたらと長い名前はしていない。

「まあお金のことは大丈夫だから、好きなの選んでくれ」

「じゃあ雛菜はステーキとパフエ〜！」

「はーい」

即決した雛菜ちゃんに返事したのは店員さん。もっと堅苦しい感じの返事が来るかと思っていたけれど、予想よりもずっと家庭的な感じの返事だった。

「早いな……ちなみに俺のオススメはビーフカレーで……」

「じゃあ私もそれで」

「お前も早いな……」

まるでなんでもよかったかのように、プロデューサーさんのオススメを選ぶ透ちやん。そして透ちやんの言葉で半ば強制的にカレーになってしまったプロデューサーさん。

「鮭のムニエルをお願いします」

少しだけ遅れて決めた円香ちやん。

わたし以外の全員が決まってしまつて、少しだけ焦る。焦るけれども、どれを選んだらどんなものが出てくるのか全く想像もつかないので、なかなか決められない。

少しだけ背伸びをして、よく分からない名前の料理を注文したい……したいけれども、その欲求をぐつと抑えて、無難な選択を取る。

「は、ハンバーグで！」

「お、ここのハンバーグは美味しいぞ！」

「カレーがオススメなんじゃないの？」

「カレーもオススメだ！」

プロデューサーさんの反応的にハズレではないようだ。

店員さんが厨房に入っていくのを見届けて、少しかだけ落ち着く。正直、こんなにもちやんとした場所に來るのであれば、もう少し服装だったり身だしなみだったりを気にして來たのにも思ってしまう。

他のみんなはこういう場所に慣れているのか、緊張しているようには見えない。

「さて」と

今まで子供のようにはしゃいでいたプロデューサーさんの笑顔が変わる。笑顔なのは変わらないけれども、嬉しくて笑っているという感じではなく、微笑んでいるというのが正しいか。

「収録終わってから、何かあったか？」

プロデューサーさんの言葉に、雛菜ちゃんが露骨に不機嫌な表情をする。

「料理が来るまででいいから話してくれないか？」

この話をするためにここに連れてきたのかと一瞬考えたけれども、プロデューサーさんのはしゃぎ具合からしてここに来ることは収録より前に決まっていたのだろう。

「別に、向こうの人たちが気に入らなかつただけらしいですし」

円香ちゃんの言つた通り、そういう捉え方も確かにできると思う。けれども、彼女の……アンティフォナの言つていたことは、確かに的を射ていたはず。

「私らがなんのためにアイドルしてるのかつて怒られた」

そのことは、ここにいる四人全員が分かっているはず。そうでなければあの時、アンティフォナの人たちにも胸を張って答えられたはずだから。

「それと、ステージは私らだけが楽しむところじゃないって」

透ちゃんの感情を声から推測することは難しい。けれども今の二言目に関してだけ言えば、なんとなく苛つききのような感情が見えた気がした。

「うん」

「それだけ」

プロデューサーが続きを催促してきたけれども、アンティフォナから言われたのはこの二つだけ。これ以上はなにもない。

「あ、そうか。ありがとう」

プロデューサーさんは少しだけづが悪そうに、グラスの水を一口飲み込む。グラスを置くと、ふうと一息ついてから続ける。

「みんなはどう思った？」

「まあ、そうかも？」

真つ先に答えたのは透ちゃん。しかしその答えははつきりしたものではない。円香ちゃんも雛菜ちゃんもわたしも、透ちゃんについていくようにアイドルを始めた。

始めた理由はみんな特になかったのだと思う。透ちゃんがアイドルを始めたのだから

ら、当たり前のようにアイドルを始めようと思った。

わたしはこの場所を守るためにアイドルを始めたいけれども、この場所に居続けようと思う理由は特にない。それが当たり前で、そうしているのが一番楽しいし幸せだから。

「雛菜が幸せくて、それを見たみんなが幸せくならないじゃんって思ったよ」

雛菜ちゃんの言うことは理想だろう。それができたならそれこそ雛菜ちゃんの言う通り、わたしたちのライブを見に来た人全員を笑顔にすることだってできると思う。

「仕事はしてるんで」

円香ちゃんの意見はストイックなように聞こえるけれども、仕事はちゃんとこなした上で文句を言われたのだからそういう不満が出るのも当然といえば当然。

わたしは……どう思ったのだろう。

今日の収録で曲を披露して、それが生放送で全国に放送されて。

「わ、わたしは、ちゃんとできてた……と思います」

自分のことに精一杯で、周りを見る余裕なんてなかった。

「うん、ありがとう。俺はその人の言葉は半分その通りだと思う。みんなが楽しむことはもちろん大事だし、雛菜の言う通りファンの人たちに共有することも魅力的だと思う」

プロデューサーさんはもう一度グラスの水を一口飲むと、軽いため息をついてから続

ける。

「でも、どうしてアイドルをやっているのか、どんなアイドルになりたいかかっていうのは、今すぐじゃなくてもいいけれど、いつかは考えないといけないと思ってるよ。俺個人がそれを聞き出そうとは思ってないけれど、各々の中では決めておいてほしいんだ」
どんなアイドルになりたいのか。

それは、わたしが初めてプロデューサーさんと出会った日に出された課題でもある。

その答えはまだ出ていなくて、最近は続けることに必死でその課題も忘れていたけれど、改めて考え直しても今すぐには答えが出てこない。

続けていればいつか答えに近づけるかと思っていたけれど、どうやらそうではないのかもかもしれない。

「お待たせしました。ビーフステーキでございます」

「やはくおいしそ〜」

店員さんが持つてきた大きな鉄板には、湯気を放ちながらキラキラと輝いているステーキが載っていた。

ファミレスで見るような薄くて固そうなものではない。ナイフを入れれば何の抵抗もなくすつと入っていくのだろうと見ただけで分かるような柔らかさをしている。

「それじゃあお先に〜いただきま〜す」

わたしと同じは嫌だから

踊っていいよもの放送から一夜明けて、朝は少しだけ寝坊してしまった。

いつも学校には余裕を持って登校しているので、遅刻するなんてことはないけれども、それでもやはり疲れていたのだと実感した。

いつもと登校時間がずれてしまったからかは分からないけれども、登校時に透ちゃんたちと会うことはなかった。ちなみに雛菜ちゃんは遅刻した。

午前中はずっと、昨日食べたハンバーグの香りが口の中に残っているようだった。息を吸う度にあの甘辛いソースの香りが鼻を刺激して、胃を刺激し続けていた。おかげで、何度もお腹が鳴ったし、鳴る度に周りに聞こえているかもしれないと恥ずかしくなった。

そして待ちに待ったお昼休み。授業が終わる頃には、いつの間にか雛菜ちゃんもすっかり着席していたので、購買について行ってから一緒にいつものベンチへと向かう。

「び、びえっ！」

いつもどこのベンチと決まっているわけではない。いくつもあるベンチのうち、どれか二つを四人で使っている。だから毎日、先に来ているであろう透ちゃんたちを探すわ

けだけれども、今日はめずらしいことに、一つのベンチに人だかりができていた。「これじゃー奥行けないね〜」

車が一台通れるくらいの幅はあるはずなのに、その道を完全に塞いでしまうくらいの人だかりは、まるでそれが一つの生き物であるかのように絶え間なく動いていた。

「あ、透先輩だ〜」

雛菜ちゃんが人だかりの中心に向かって手を振るけれども、わたしの身長では人だかりの中など到底見えない。

ジャンプしてみても、ようやく奥がチラツツと見える。透ちやんだろう頭と円香ちゃんだろう頭が見えたただけだけれども。

「ねえ」

円香ちゃんの声で、騒がしかった人だかりが一気に静まりかえる。

「小糸たちと食べたいんだけど、お昼ご飯」

その言葉は、本当にその言葉通りの意味しか持っていないはず。けれども、いまここにできていた人だかりを散らすには十分すぎる言葉で、実際に人の密度は一気に下がっていった。

「あ、ありがとう円香ちゃん」

「別に」

空いた隣のベンチに座って、弁当箱を膝の上に置いて開ける。

「二人とも大人気だったね〜」

「あんなの、口実を見つけて寄ってきただけでしょ」

身近に有名人がいれば、とりあえず一度でいいから生で見たいという感じだろう。その気持ちは分からなくもない。自分たちがそうなるとは、数ヶ月前は想像もしていなかったけれども。

それほどまでに、昨日の放送は多くの人に見てもらえたのだろう。それは素直に嬉しいことだし、アイドルとしての活動が順調であることを示している。

ただ、こうしていつもの生活に支障が出てしまうのは少しだけ息苦しいかもしれない。

「ねえ」

思考がマイナス方向に振れ始めたので、考えるのをやめてトマトに箸を伸ばそうとしたらちょうどその時、透ちゃんが思いついたように声を上げた。

箸を止めて視線を透ちゃんに向けるけれども、透ちゃんは黙ったまま。

「なに」

注目だけ集めておいて、その先に何の展開も起こらないことにしびれをきらした円香

ちゃんが催促する。

「週末さ、久々に遊びに行こうよ」

その提案は突然だったけれども、驚きはしなかった。

なんとなく透ちゃんがそう言う気がしていたから。

いや、わたしも同じ気持ちだったから。

「やは～さんせい～」

「どこ行くの?」

そしてやはり、みんな同じ気持ちだったようだ。透ちゃんの突然の提案に、誰一人動じていない。

なぜかということは分からない。けれども、どうしてかみんなと遊びに行きたい。そんな気分だった。

「まあ、適当にご飯食べて、適当に買い物して……って感じ?」

「なんにも決まってるじゃないじゃん」

そうは言うものの、円香ちゃんは決して否定しないし、嫌がりもしない。円香ちゃんの質問は、計画があることの確認ではなくて、計画がないことの確認だったのかもしれない。

「ほら、昨日プロデューサーから奢ってもらったけど、うちらで打ち上げしたいじゃん

？」

「あくなんか分かるかも」

「わ、わたしも行きたい……けど……」

わたし個人が行けない、ということではない。

昨日の放送で、学校内だけでも目に見えて知名度が上がっている。書き入れ時ともいえるこの時期に、こちらの都合がいいようにお休みがもらえるかどうかは分からない。

打ち上げということであれば、四人揃わなければ意味がない。四人揃つてのオーディションやお仕事であれば、その帰りにどこか寄つたりできるのだけれども、個別のお仕事だとそうはいかない。

「仕事がなければね」

そう、円香ちゃんの言う通り、仕事がなければ。

あくまでもわたしたちはアイドルなのだから。

◇◇◇

最寄りの駅前には、それほど栄えているわけではない。コンビニはあるし、飲食店もいくつかあるけれど、ここで遊べるかと言われれば正直微妙。

だからこそ集合場所にはちょうどいい。人通りもそれほど多くなく、集まったあとは

電車でどこへでも行ける。

「お、おはよー!」

「おはよ」

駅の南口、駅入り口の階段横に透ちゃんと円香ちゃんが立っていた。

そして視線を落とすと、円香ちゃんの手と繋がれた手が一つ。円香ちゃんが小さな子供を連れていた。

その視線に気づいた透ちゃんが屈んで、これから紹介しますと手をさす。

「樋口の子供」

「ん、んん、子供……!?!」

円香ちゃんはまだ学生で、それ以前にアイドルで、そんな円香ちゃんが子供を……しかも、見た様子だと四、五歳の子供だから生まれてきたのはそれくらい前で、そうなりと円香ちゃんはまだ中学生で……。

「変な嘘言わない」

「ふふ、ごめん」

「え、え……?」

嘘というのは多分円香ちゃんの子供ということが嘘なのだと思う。だとすれば、この子供は誰なのだろう?

円香ちゃんの親戚とかだろうか？

「迷子らしいんだけど、ね」

透ちゃんの耳打ちで納得した。

納得はしたけれども、それならばどうしてこんなところにいるのだろうか。

「そ、それなら早く探してあげなきゃ！」

「いやー！」

親御さんも探しているだろうから、探すのを手伝ってあげようと思った。しかしそれを拒否したのは、迷子であるはずの子供本人だった。

「と、こんな調子」

ため息交じりに円香ちゃんがこぼす。

透ちゃんが口に手をあてて反対の手で手招きをしているので、耳を近づける。

「家に帰りたくないんだって」

なるほど。思っていたほど単純な話ではないようだ。

「それじゃあ、とりあえず交番……とか？」

「いや、迷子だと思われるの恥ずかしいだろうし」

確かに、本人としては家を出てきたような気分だろうけれども、周りからすればただの迷子。その事実も知られたくないだろうし、そう扱われることも嫌だろう。

とはいえ、こんな場所でどうしたものか。

親御さんを探そうにも、手がかりはなにもない。

「あれ、円香先輩の子供？」

横からの聞き慣れた声に視線を向けると、ちょうど雛菜ちゃんが駅入り口の階段から下りてきたところだった。

「違うって言ってるでしょ」

「え、雛菜今来たばかりだよ？」

まるで今までの会話を聞いていたかのような雛菜ちゃんの言動に、円香ちゃんのため息交じりにこぼすけれども、それくらいなんというか、ありそうな絵面なのだから雛菜ちゃんの気持ちも分かってしまう。

「おかしいでしょ」

「円香先輩がお母さんで」

「聞いている？」

多分聞いていない。

「透先輩はお父さんで、雛菜はお姉ちゃん」

嫌な予感と好奇心とがぶつかりあった。わたしは何になるのだろうか。

雛菜ちゃんと目があって、数秒の間が生まれる。

ドキドキしながら待っていると、雛菜ちゃんは満面の笑みで口を開く。

「小糸ちゃんはペット〜」

「ぴ、ぴええっ!? なんでもー!」

嫌な予感の中。

何も言われなかったらそれはそれで寂しいけれども、人ですらないとは思わなかった。せめて妹とか、もつとあると思うけれど……。

「あは〜そういうところ〜」

どういふところなのかさっぱり分からない。

「あー分かる」

透ちゃんはずかしく共感しているし、円香ちゃんは顔を逸しているけれども肩が震えている。

「もー! せめて人間にしてよ!」

あははと笑う透ちゃんと雛菜ちゃんを見ていると、この嫌な予感も案外悪くないかな、なんて思えてしまう。

「ぶ、あはは!」

そして、まるでつられるように笑い出したのは、今まで円香ちゃんの手を握りながら

頬を膨らませていた子供。

「お、やつと笑った」

ということは、私ができる前からずっと不機嫌だったのか。

子供は今までこらえていた笑いをすべて吐き出すかのように片手で腹を押さえながら笑う。

「だって、お姉ちゃんたち、面白いんだもん！　ねえ、僕は？　僕は？」

興奮気味の子供に対して、円香ちゃんがしゃがんで目線を合わせる。

「じゃあ、名前教えて。君とかあなたとかじゃ呼びづらいから」

「みなと！　ほら、これ！」

食いつくように答えるみなとくん。差し出されたのは透明なビニールケースに入れられたカード。そこには「鈴木　湊」と名前が書かれており、連絡先も載っていた。

「湊くんね。……………雛菜、パス」

円香ちゃんはしゃがんだまま湊くんの手をゆつくりと雛菜ちゃんの方へと持っていく。

「円香先輩思いつかないんじゃない？」

雛菜ちゃんは不満そうにしながらも、湊くんの手を取ると、円香ちゃんを入れ替わるようにしゃがみこむ。

「えつとね、それじゃあ湊くんは雛菜の弟で、小糸ちゃんのお世話役ね」

「な、なんでわたしがペットのまま進んでるの!？」

しかもこんな子供にお世話をされるなんて。なんというか、ちよつとだけ悔しい。

「えつと、ひななお姉ちゃん」

「は〜い」

湊くんが指をさしながら呼ぶと、雛菜ちゃんは大きく手を上げて返事をする。

「こいとちゃん」

「ひゃ、ひゃいつ……つて、そうじゃなくて! あ、頭撫でないで——」

背伸びをして頭を撫でてくる湊くんは少しだけかわいいけれども、こんな小さい子供に撫でられても嬉しくはない!

「とおるお父さん」

「うん」

そういえば、円香ちゃんの姿が見えない。

ついさつき雛菜ちゃんに湊くんを受け渡して、それからどこかへ行ってしまった。

「湊くんは、おうちで何か嫌なことがあった?」

返事に続けて、透ちゃんが質問を投げる。

「だって、お母さん何するのもダメって言うし、何しても怒られて、僕なにもできないん

だもん……!」

「あー」

湊くんの言葉に、雛菜ちゃんが苦そうな顔をする。そんな雛菜ちゃんの気持ちを代弁するかのようには、透ちゃんが頷く。

「分かるなあ。お母さんのためとか思つてやつても怒られちゃったり、だからといって何もしないとそれはそれで怒られたりね」

怒られたことを思い出したのか、湊くんは先ほどまでの元気をなくしてしまい、透ちゃんの言葉にも小さく頷くだけ。

「だから僕、とおるお父さんの子供になる!」

「あーそれはムリかも」

「えっ」

今まで寄り添つてくれていた透ちゃんだから、もしかしたら受け入れてくれると思つていたのかもしれない。

でも、他人の子を預かるような歳でもないし、そもそもこれは湊くんの問題であつて、わたしたちが解決していい問題ではない。

でも――

「私らが親になるのはムリだけど、友達にならなれるよ」

「友達……?」

「そ、友達。こう見えて私らアイドルなんだ」

アイドルが自分からアイドルだと身を明かすことは、普通ならリスクでしかない。昨日の学校みたいに人だからができたりしたら、関係のない人たちに迷惑をかけてしまうし、プロデューサーさんにも怒られるし、きつとプロデューサーさんも誰かに怒られてしまう。

けれど、それくらいはきつと透ちちゃんでも分かっている。なんせ、昨日その渦中にいた人間なのだから。それを分かっただけで、湊くんにも身分を明かしている。

「だから、ライブに来たらいつでも会える」

「それに、きつとすつごい楽しいと思うよ」

ファンとしてではなくて、友達として。見てもらうためではなくて、一緒に楽しむために。そんなステージを作れたらいいと思っている。それは透ちちゃんも雛菜ちゃんも、円香ちゃんもきつと同じ。

「でも、ライブに行くにはお金があるんだよね。お母さんと仲良くしてないと会えない

んだ」

「湊！」

背後から聞こえた緊迫した声に、急に緊張感が高まる。振り向くと、円香ちゃんと知らない人がこちらに向かってくる。……いや、どことなく湊くんに似ている。きつと湊くんのお母さんだろう。

「すみませんでした」

急ぎ足で向かってきた湊くんのお母さんは、湊くんの手を取ると軽くこちらに一礼して足早に去って行く。

「あー、やっぱり怒られちゃうんだろうね」

こちらとしては全く迷惑とは思っていないし、ペット扱いされたのは少しだけ癪だったけれども、楽しくなかったと言えば嘘になる。だから湊くんには怒られるような理由はない。お母さんに謝られる理由ももちろんない。

それ以前に、なんとなくではあるけれども、今の湊くんの状況に今までのわたしとお母さんの状況を重ねてしまう。

何も言わなくても、自分で解決できるかも知れない。けれどもし、このまま家族と気

まずい雰囲気のまま今後何年も過ごしていくかもしれないと考えてしまう。

「ちよつと——」

「あの！」

円香ちゃんの言葉に被ってしまったけれども、これはちゃんと伝えたい。

「小糸？」

「あの！ 湊くんのお母さん！」

「は、はい？」

二度目の呼びかけで、足を止めてくれた。湊くとわたしの離れている距離は、わたしが迷っていた時間。その分、声を大きくしなければならぬ。

「えつと、お願いがあるんです！」

きつと、こんなに大きな声を出す必要はない。けれども、ちゃんと伝えたいから、万が一でも間違つて伝わつてほしくないから。

「ちゃんと、湊くんの話聞いてあげてほしいんです。それで、湊くんにちゃんと話してあげてほしいんです。そうじゃないと、いまはまだ平気でも、ちよつとずつ距離が離れ

ていつちやうから……!」

わたしの言葉に、湊くんのお母さんは怪訝そうな表情で軽く首を傾げる。

まあ、当然の反応だと思う。湊くんとも出会って十数分。お母さんとは一言も話していない。そんな相手に、こんな偉そうなことを言われても納得などできないだろう。

でも、いつか、なにかの時にこの言葉を思い出してくれたらと思った。

もつと、もつとなにか伝えられる言い方があるはず。もつと伝えなければいけない内容があるはず。もつと――

「小糸」

肩に触れた感触と同時に、円香ちゃんの声が聞こえた。

「あ……」

気がつけば、湊くんたちは声が届かないようなところまで離れてしまっていた。

「大丈夫?」

「う、うん。大丈夫だよ!」

落ち着いてようやく、心臓が大きく鼓動していたことに気がついた。息をする度に肩が揺れていたし、手は震えていた。

「え、偉そうなこと言っちゃったかな……?」

周りから見ればまだまだ子供なわたしがあんなことを言ってしまったってよかったのだから。そんな不安がゆつくりとこみ上げてくる。

けれども、わたしの不安は透ちちゃんが笑顔でかき消してくれる。

「ううん、めっちゃかっこよかったよ」

「あと、かわいかった」

「もう！ ペットの話はもう終わりー！」

まだ心臓はドキドキしているけれど、まだ少し息も荒れているけれど。

みんなと一緒にだから、みんなが大丈夫って言ってくれるから。大丈夫。

「じゃあ行こっか」

「行ってくて、どこ行くか決めてるの？」

透ちちゃんが歩き出して、どこかへ向かう。

どこへ向かうか知らないけれど、分からないけれど、一緒に行けばきつと楽しいから。

「んー、これから決める」

分からないけれど、届いたかも

問一

四五度の斜面を滑り落ちる質量 m の物体の時間 t での速度を求めよ。

問二

点Aから点Bまで、重力のみで最速で移動する軌跡を描け。また、この軌跡をなんと呼ぶか。

問一はパズルだし、問二は知識の問題。どちらも間違えることはない。今日学校で習っただばかりだし、入学してからすぐに予習したところだから。

答えは頭で浮かんでいるのに、どうにも書く気が起きない。

「何が正解なのかな……」

ため息をこぼしながら、シャーペンの芯を出したり入れたり。ペン先で削れた芯のクズがノートに落ちると、ため息で飛んでいく。

今日は透ちゃんと同香ちゃんは一限だけ多いので、雛菜ちゃんと二人で事務所にやつ

てきた。その雛菜ちゃんはいえ、わたしの膝を枕にして心地よさそうに寝息を立てている。

踊っていいよとの放送から一週間が経って、ノクチルの人気は一気に伸びた。元々他にあまりない名前ということもあるけれど、ネットで調べれば一番上に出てくるし、CMや他のテレビ番組のオフアームももらえている。

本来であれば、もつとはしやぎ回っていてもいいのだろう。そうなれないのは、答えが出ないから。

どうしてアイドルになりたいのか、どんなアイドルになりたいのか。どれだけ考えても答えは出てこない。

アイドルを始めたのは透ちゃんたちと一緒にいたいから。アイドルにならなければ置いていかれてしまう気がしたから。せつかく頑張ってみんなと同じ学校に入ったのに、一緒にいられないなんて嫌だったから。そのために上手くもない嘘についてまでして、アイドルを始めた。

いまはその理由に後ろめたさを感じてしまっている。

『アイドルってのは誰かを笑顔にしたり、楽しませたりするためのものよ』

その言葉が頭から離れない。それほどまでに衝撃的な言葉だったということと、衝撃を受けたということは、意識していなかったということ。

あの人の言うとおりに、アイドルは誰かを笑顔にしたり、楽しませたりする存在であるべきだと思う。わたしが今まで見てきたアイドルもそうだったと思う。

自分の居場所を作るためにアイドルを始めたわたしは、これからどうしていけばいいのだろうか？

それはプロデューサーさんから最初に出された課題とも繋がってくる。

例えば雛菜ちゃんは分かりやすい。いつも言っているように、自分が幸せで、幸せな自分を見ている人も幸せなはずだと。実に雛菜ちゃんらしい考え方だと思うし、幸せということに人一倍敏感な雛菜ちゃんだからこそできることだと思う。

透ちゃんはいえば、周りに対して何かしようという意思は感じないけれども、少なくともわたしたちは一緒にいて楽しいのだ。それが他人でも変わらないように思う。

円香ちゃんは一番アイドルに向いていると思う。表情があまり動かないけれど、優しいし、歌やダンスだけではなくて、なんでもできてしまう。ただ、どんなアイドルになりたいのかなんてことはわたしには分からない。

ではわたしはとなると、やはり分からない。

そもそも、わたしはみんなではないのだから、正確な答えなんてものは分かるはずも

ない。

なにか特別なことができるわけではないし、アイドルとして何かを成し遂げたいわけでもない。

ただみんなと一緒にいたいというだけの理由でアイドルになったけれども、それだけならアイドルである必要なんてない。

「お疲れ様です」

透ちゃんの声が聞こえて、慌てて時計を見る。気がつけば一時間近く経っていた。

結局答えは出ていないし、宿題も進んでいない。

結果として残ったのは、ただただ何もせずに過ごした一時間だけ。

◇◇◇

「みんな聞いてくれ」

迷いに答えが出ないまま、二日が経った。レッスンにもいまいち身が入らず、予習もいつものようにうまく進まない。ずっと頭の隅で「どんなアイドルになりたいか」の問いがチラチラと姿を見せてくる。

「聞かせるために集めたんでしょ?」

最近、円香ちゃんのツツコミが早く、鋭くなってきた気がする。

そもそも、わたしたちに対するツツコミは早くて鋭いけれど、だんだんと近づいてきたように思う。

「まあそうだけど、改めてつてことで……」

「早く言いません？」

プロデューサーさんは軽くため息をつくとき、わざとらしく咳払いをする。

「ラジオの収録オフアアがあつたんだ！」

やはり、新しいお仕事の話だった。

これも最近分かったことだけれども、プロデューサーさんは案外子供っぽいところがある。喜怒哀楽がはつきりしているというか、隠そうという気が感じられない。

だから今日も、事務所に入ったその瞬間から何か話したいのだという雰囲気が出ていた。

「しかも毎週土曜日公開だから、聞いてくれる人は多いと思うぞ！」

単発としてではなくて、定期放送としての番組枠をもらえたということだろうか。

それならば確かに、プロデューサーさんがこれだけ喜ぶのも納得がいく。

番組枠を用意してもらえということとは、それなりに安定した人気を認められたということでもあり、新たなファンを獲得する機会をもらえということでもある。

休日公開ということも大きいだろう。平日はなかなか時間を確保できなくて、溜めて
いるうちに聞かなくなってしまうなんて人も多いだろう。

「十五分の短い番組で、ネットラジオで、生放送ではなくて収録放送で、収録は二週間に
一回。それも土曜日にある」

プロデューサーさんは目を閉じて小さく息をつく。なにか覚悟を決めたような。

「さて、二週間に一回とはいえ、収録時間は三十分とはいえ、実際には移動時間や打ち合
わせ時間も含めて二時間は取られると思う」

プロデューサーさんの言いたいことがよく分からなくなってきた。

今の言葉はつい先程意気揚々と発した言葉と同じ内容に聞こえた。少なくともそう
受け取れた。

「ごめん、よく分からない」

それはわたしだけではなくて、今ここにいる四人全員が同じ。

ただ、はつきりと分かることは、プロデューサーさんはなにか言うのに躊躇っている
ということ。

「あー」

プロデューサーさんは頬を搔くと、再び小さく息をつく。

「みんなの貴重な時間をもらうから、都合が悪かったり、遊ぶ時間が減るのが嫌なら断ろうかと思つてな」

「ふん」

即座にプロデューサーさんの言葉をあしらうように笑つて捨てたのは円香ちゃん。

「いまさらすぎませんか？」

その言葉には、言葉通りの意味だけではなくて、了承の意も含まれていた。いままで確認されずともやってきたことを、いまさら確認しなくてもいいと。

「ラジオつて言つて雑談系？」

「そう聞いている」

透ちゃんの質問にプロデューサーさんが即座に答えると、まるで連鎖反応のように雛菜ちゃんが笑う。

「じゃあいつもと一緒じゃん」

「ね、一緒だ」

ラジオでの雑談と、普段からしている雑談はすこし違うかも知れないけれど、それでも雑談には変わりない。どうせ収録現場まではみんな一緒なのだから、二週間に一回みんなどとお出かけするのだと思えばいままでと大して変わりはない。

「私は大丈夫だよ」

「雛菜も〜」

「わ、わたしも!」

「問題ありません」

だからこのラジオのお仕事を断る理由はない。

むしろ、お仕事ももらえるし、みんなと一緒に居られる時間は増えるのでわたし個人としては大歓迎なお仕事。

「そっか、じゃあ先方にも伝えておくよ。初回收録は来週末の土曜日だけど大丈夫?」

「それ、断ってたらやばいやつじゃない?」

いままでずっと、お仕事が決まっただけで一週間や二週間くらいで本番になることが多かったので少しだけ感覚が麻痺していたけれども、本来一週間後のスケジュールが今日知らされるなんてことは異常だ。

「踊っていいとも放送翌日に来たCMのオフアードでさえ一ヶ月以上先のもの。一週間後なんていうのは、もう出演も決まっただけで、打ち合わせも終わっているような状態じゃなければおかしいのだと思う。」

「多分困ってたんじゃないかな。……いや俺だって昨日聞いたばかりだから? 別に情報を出し渋ってたとかじゃないからな?」

「なんだか言えば言うほどな気もするけれど、こればかりはプロデューサーさんを信用するしかない。というか疑ったところで答えなど分からない。」

「昨日の夜突然小島さん……って、この前小糸が出たラジオの監督さんなんだけど、その人から電話があつてさ。ものすっごい軽いノリで『どう?』って。そんな軽いノリの話じゃないんだけどな」

「う、打ち合わせとかはないんですか?」

「普通なら事前に打ち合わせがあつて、そうでなくとももう少し詳しい話をプロデューサーさんとしてから本番を迎えるのだと思う。」

「打ち合わせにわざわざ来てもらうのも大変だろうからってことで、資料を送ってくれそうさ。多分今週末には届くと思う。向こうが作りたい番組のイメージはあるだろうから、それに合わせる形にできればと思ってるよ」

なるほど、確かにそっちの方が効率がいいかもしれない。

それに、小島さんなら一度会っているしなんとなくではあるけれども安心できる。

「他に質問があれば聞くよ」

「ううん、大丈夫」

「答えたのは透ちゃんだけだけれども、わたしからも特にはない。詳しい話は資料が来てからでも十分だろう。」

雛菜ちゃんと円香ちゃんも無言で問題ないことを示す。

「何かあったらその都度聞いてもらえばいいからね。……さて、じゃあ」

プロデューサーさんは立ち上がって、事務机に移動すると、机の下に潜ってしまう。

「あだっ」

机が揺れると同時に鈍い音が居間に響き渡る。

「大丈夫？」

「あ、ああ」

プロデューサーさんは立ち上がると、肩幅よりも小さいくらいの段ボール箱を抱えて戻ってきた。

「実は、みんなにファンレターが届いてたんだ。一応変なものがないかチェックするために全部読ませてもらったことは先に言っておくな」

プロデューサーさんは段ボールを机に置くと、輪ゴムで縛った手紙の束をそれぞれに配り始める。数はそれほどではなくて、一人あたり数通といたところ。箱で管理するほどの量ではないし、きつとこの箱にも随分とスペースが空いていただろう。

「おー、なんかアイドルっぽい」

「いや、アイドルでしょ」

しかし、なんだかこの目の前に置かれたファンレターが急に怖く感じてくる。

プロデューサーさんがチエックしたと言っていたから、きつと誹謗中傷のような内容はないと思うけれども、もしこれを読んで酷いことが書いてあったらどうしよう……なんて思ってしまう。

そんな緊張を感じていないのか、雛菜ちゃんは何食わぬ顔でファンレターを束ねていた輪ゴムを外して便せんを開ける。

そういえば今どき便せんなんて売っているのだなと思う。便せんの手紙どころか、はがきですらほとんど送ったことはない。最近はメールでほとんど済んでしまうから。

「……はあ」

円香ちゃんから漏れたのは呆れのため息か、それとも覚悟を決めたか。手紙を手にとった。

そんな円香ちゃんを見ると、視線の先でまだ手紙を手にとっていない透ちゃんと目が合った。

「なんか緊張するね、こういうの」

「う、うん………う、ううん、へっちゃらだよ……！」

少しだけ虚勢を張って、手紙に手を伸ばす。

輪ゴムを取ると、届いていたのは三通。うち二通ははがきで、残り一通はかわいらしい封筒だった。

封筒はやはりなんとなく開けるのが怖かったので、まずははがきから読んでいくことにする。

どちらも手書きで書かれており、片方はかわいらしい絵も描かれている。

一人はこの前のアンティーカーのライブに来ていたようだ。フォーメーションが変わっていることに関して、わたしが端っこに行ってしまったのは残念だけれども、前よりもずっと格好よく、可愛く見えたのだそう。

そう言ってもらえると、あのとときみんなに立ち位置の変更を提案したのもよかったと思える。正直なところ、未だに少しだけ不安ではあった。

もう一人は、踊っていいともを見てくれた人からだった。四人とも楽しそうで、歌っていないときは緊張しているのに、歌い始めたら四人の中で一番楽しそうにしていた姿に惹かれたと。

緊張していたのがバレバレなのは少しだけ恥ずかしいけれども、こんなわたしを見て楽しんでもらえていたのなら、それはとても嬉しいことだ。歌っているときは無我夢中であまり覚えていないけれども、なんとなく楽しかったことは覚えている。ライブでもそうだったし、収録中でも楽しかった。

なにより、わたしが何かをしたことで誰かの心を動かせたという事実がただただ嬉しい。

「……」

さて、最後の一通。

丁寧に封筒に入れられた手紙を取り出す。封筒は封が切られた跡が残っていたが、プロデューサーさんが中身をチェックしたからだろう。

「えっ……！」

中身を取り出して、最初に目に入った名前に驚く。

鈴木 湊。

ファンレターに本名を書いてくる人はなかなかいないと思うのだが、今回はそのおかげで誰からの手紙か知ることができた。

少し前に駅前で迷子になっていた子供。その子がファンレターをくれたのだ。

もしやと思い、みんなの手元を見ると、それぞれ同じ柄の封筒を持っている。つまり、湊くんは四人全員に手紙を書いたということだろう。

手紙に漢字はほとんどなく、字もとてもきれいとは言えない。けれども……だからこそだろうか、一生懸命さというか、頑張ってくれたのだという気持ちがより一層伝わってくる。

手紙は二枚組だったので、一枚ずつ読んでいくことにする。とはいえ、内容はそれほど多くない。

この前のお礼と、わたしが出ていた踊っていいともを録画で見たという報告だけ。字にも勢いがあつて、元気よく書いたことが分かる。こんな手紙を書いていることから、お母さんからはそれほど怒られなかったのかなと思いつつ、二枚目に目を通す。

「そっかあ、よかった……」

二枚目は一枚目とは打って変わって、きつちりと整った字で、漢字も多く丁寧に書かれていた。そして同じように、この前のお礼と、踊っていいともについて書かれている。こちらは、湊くんのお母さんからのお手紙。

私に言われたことを思い出して、湊くんと話し合う時間を作ったようだ。あのとき何を言ったか、もうすでに覚えていないけれども、きつと話を聞いてあげてほしいという

ことを言ったに違いない。わたしがそうだったように、話し合わなければ不幸になると感じたから。

そして、お母さんが想像しているよりも多くのことを湊くんは考えていて、それをたかが子供の言うことと聞き流していたことに気がついたと、そう書かれています。

本来なら面と向かってお礼を言わなければと思っっているけれど、手紙でごめんなさいとも書かれていた。

あのときは必死で、何を言っていたか覚えていないのに、面と向かって話すのは少しだけ抵抗がある。嘘は言っていないだろうけれど、変なことを言っかけていたかもしれないし、なんとなく責任を感じてしまう。

それに、手紙のほうが余程手間がかかるはずなのに、わざわざ書いてくれたのだから、失礼などあるはずがない。

「あれ、小糸ちゃんは二枚なんだ」

透ちゃんに言われて、再びみんなの手元を見ると、どうやらお母さんからの手紙をもらったのはわたしだけのようだ。

「う、うん。湊くんのお母さんからだったよ……!」

「へー、なんて?」

「え、えっと……」

湊くんのお母さんがわたしにだけ手紙を書いた理由を考えてみた。もしかすると他のみんなには知られたくない理由があるのかもしれない。

しかし、答えは出なかった。読み直してみても、みんなに知られてはいけない内容はないと思われる。

「港くんとお話、したって。それで、仲直り……できたみたいだよ……！」

仲直りという表現が正しいのかは分からないけれども、以前出会ったときの二人が、仲が良かったように見えなかった。

「え、それだけ？」

それ以上になにか望むことがあるだろうか……？

「こう、井戸端会議で広めました的な」

「あつたとしても書かないでしょ、そんなこと」

確かに、評判を広めてくれることは嬉しいけれども、今回はそういった内容ではないのだから、円香ちゃんの言うとおりに仮にあつたとしても書かれていないだろう。

「まあでも、よかつたじゃん。ちゃんと仲直りできて」

「うん……！」

わたしの言葉があつたから、だなんてことは思っていない。まだ人生経験の浅いわたしにそれほどの発言力はないだろうから。

それでも、わたしの言葉がほとんど関係なかったとしても、ほんの小さなことの、何かのきっかけになったのならば、それだけでも嬉しい。

この気持ちを言葉にはできないけれど、心の中になにか温かいものが生まれたのを感じた。

ラジオでヘッドホンで建前で

ラジオの収録が決まってから、あつという間に二週間が経った。正確には一週間と半分だけれども、今日がみんなでの、ノクチルでの初めてのラジオ収録であることには変わりない。

打ち合わせはなかったけれども、とても丁寧に作られた資料が送られてきた。丁寧だけれどもどこか緩いというか、ところどころふわふわした内容の資料は、どうやら番組監督の小島さんが作ったものらしい。

作家さんはやはり前回と同じく白鳥さん。知ったのはスタジオに入ったついさつきだけれども。

初対面の透ちゃんやんが小島さんを怖そうだと言って、落ち込んでいる小島さんをゲラゲラと笑っていたのもついさつきだ。

「お手紙だけど、この中から好きなのを二つか三つ選んでね」

そう言って、まだにやけ顔がとれていない白鳥さんが渡してきたのは、十枚ほどの紙の束。

「初めてなのにお手紙あるんだ」

今日は間違いなく初収録で、初放送はまだ迎えていない。そんな番組に手紙が届くことは不自然だ。

「事前にしてたでしよ、告知と募集」

「そうなの？ 樋口詳しいじゃん」

「そういうこと。じゃああととはよろしくー。何かあつたら指示出すから」

白鳥さんはブースを出ると、ガラス越しの、色々と機械が置いてある部屋へと移動した。

一つの机にヘッドホンとマイクが四つずつ。机を囲うように配置されている。

「なんか高そーだねー」

真つ先に椅子に座つたのは雛菜ちゃん、次に円香ちゃんが反対側に座つた。

「あはー、円香先輩の顔ずつと見えるー」

「隣だとうるさいだけ」

必然的に私と透ちゃんが反対側の席になった。

「これ、いくらするのかな」

それは興味本位なのか、それとも壊す予定でもあるのか。いや、前者だと信じよう。

座つて、ヘッドホンをつけてみると、サーという小さなノイズとともに、遠くの方でなにか喋つという声が聞こえてきた。

口の動きから円香ちゃんが喋っているのだと推測できたが、距離と音量が合っていないので違和感がある。

「あ、これでいいのかな?」

「ぴゃあっ!?!」

突然、耳元で透ちゃんの声がした。

目の前のマイクに喋りかけたからだろう。どうやら会話はヘッドホン越しに行うようだ。

「あはー、透先輩の声が近い〜」

そう言う雛菜ちゃんの声も相当近い。目の前にいるのだけれども、それよりもっと近い位置で会話しているかのようだ。

「あ、そうだった。お手紙、どれ読むか決めよー」

紙の束が視界に入ったおかげで、今やらなければならぬことを思い出した。

「じゃあ、回し読みして決めよ」

紙を手を取った透ちゃんはまずは一枚、円香ちゃんに渡す。

「先に浅倉が読まないでしょ」

「あ、そっか」

手元に戻して、数秒。再び円香ちゃんに手渡す。

「早くない?」

「いや、短いつて。見てみ?」

怪訝そうな表情で紙を受け取った円香ちゃんは、瞳を左右に数往復させると、わたしに渡してきた。

同時についたため息は、どこか気が抜けていたように感じた。

「まあ、ラジオだし」

◇◇◇

「そういえば、雑談って聞いてたんだけど、いざ雑談って何話そつか?」

「雑談だけってわけでもないでしょ。ほら、手紙読んで」

「あ、そうなんだ」

ラジオ収録が始まって、簡単な自己紹介が終わった。そして、変な間が少しだけ空いてから透ちちゃんが笑いながら切り出した。

手紙を手を取った透ちちゃんは、再び固まってしまう。

「と、透ちちゃん?」

「名前、ペンネームだっけ?」

「ペンネームでもラジオネームでもいいんじゃない?」

「じゃあ、ペンネームのがかっこいいからペンネームで。ペンネームチルト製品さんから。アンティーカーのライブを見に行ったら、楽しそうに歌っている四人を見て惹かれました。そのあとも踊っていいともに出演していて、これは慌てて追いかけなきゃと思いましたがメールしました。あ、これメールだったんだ」

「どう見ても手書きじゃないでしょ」

「手書きだともっと嬉しいよ」

「ひ、雛菜ちゃん、そういうこと言うと、送りづらくなっちゃうかな?」

「あくそうかも。じゃあ、メールでも嬉しいよ」

「えっと、四人とも他のアイドルとは違って、キラキラしてないなと思ったのが第一印象でした。それなのに、目が離せなくて、見ていると心が落ち着く人たちだと感じました。だって」

「これ褒められてる?」

「ど、どうなんだろ……?」

「んー褒められてるんじゃない?」

「少なくともクレームではないでしょ」

「ならうれしく」

「あはは、単純だ」

「そ、そうそう、あれが初めてのライブだったんだよね！」

「まあ、前座だったんだけど」

「でもよかったじゃん。見てくれてた人、ちゃんとしたし」

「うん、よかったよね！」

「あーでもさ」

「……………でも、なに？」

「いや、次のライブも見てほしいなって思った」

「それってー、小糸ちゃんのやつー？」

「ぴえっ……………わ、わたし……………？」

「そうそう、小糸ちゃんのやつ」

「え、え、わ、わたしなにかした……………？」

「フォーメーションのことでしょ。ちゃんと言いなつて」

「そうそう、それ」

「それー」

「小系ちゃんの提案で、あのライブからフォーメーション変わってるんだよね」

「テレビで流れたときはもう変わってたでしょ」

「でも、見てほしいじゃん、生で。あ……でも、次のライブ決まってるわ」

「で、でも次……次あるもんね！」

「浅倉、時間」

「え、あ、やば。……ふふ、監督さんめっちゃ慌てる」

◇◇◇

最初に軽く自己紹介をしたこともあつてか、結局二通目のメールはあまり時間が取れなかった。

一人だと長いと思っていた十五分だけでも、みんなでの収録となるとあつという間に過ぎてしまった。

途中で透ちやんが、思いっきりマイクに頭をぶつけていたり、それで笑い出した雛菜ちゃんかなかなか収まらなかったり。

「ね、ねえ……こんなのでいいのかな……？」

正直、ラジオとして聞けるものになっているのか不安でしかない。個人的には学校や事務所での会話を、そのまま持ってきたような感覚だったので楽しかったけれども。

「んー？ 雛菜は楽しかったよー？」

「あ、もちろん……わたしも楽しかったよー！」

楽しかったけれども、耳にこびりつくように流れてくるのはあのときの言葉。

『あんただけが楽しむ場所じゃないの』

思い出すたびに、怖くなってしまふ。

その言葉の意味が分からないわけではない。アイドルなのだから、見てくれる人たち……今回は聞いてくれる人たちを楽しませたり、喜ばせたりするのが仕事だ。

けれど、今回の収録でそれができていたかと言われると……正直分からない。

他人からの評価など言われなければ分からないのだから、当然のことかもしれないけれど、言われないからこそ不安にもなる。

「なんだか、いつもと変わらない気がして……いいのかなって……」
「いつも通りだし、いいんじゃない？」

いつの間にか俯いていた顔を上げると、透ちゃんと目が……合っていないかった。

透ちゃんの視線はわたしを通り越して、もっと奥を見ている。

振り返ると、ガラス越しに両手で大きく丸を描いている小島さんがいた。

「そもそも、そういうコンセプトの番組なんだし、ダメってことはないでしょ」

たしかに、生放送ではなくて収録なのだから、ダメなら止められているはずだ。

「ほら、呼ばれてるし、行く」

見れば小島さんの横では白鳥さんが手招きしている。

透ちゃんは立ち上がって、そのままブースを出ていこうとする。

「浅倉、へ——」

慌てて円香ちゃんが止めようとしたときには、もう遅かった。

透ちゃんの首から、正確には首にぶら下がったヘッドホンから伸びているケーブルが、ピンと張る。

「ぐえ」

まるでアイドルとは思えない汚い鳴き声とともに、大きくのけぞる。

「……はあ」

円香ちゃんのため息と同時に、ガラス越しでも聞こえるくらいの笑い声が、反対側から聞こえてきた。

◇◇◇

「いやーよかったよ。いかにも日常って感じで」

ブースを出るやいなや、小島さんが嬉しそうに話しかけてきた。

透ちゃんに言われて安心していたものの、こうしてちゃんと結果を聞けるとさらに安心できる。

「でもさ、よかったの？　こんな雑談ばっかで」

「えっ」

思わず透ちゃんを見るけれど、いつも通り何を考えているのかよく分からない表情の透ちゃんだった。

つい数分前……というか数十秒前にブース内で同じような問いかけをしたときにはいつも通りだからいいと言ってくれたのに。

「いやいや、単発のラジオならともかく、毎週流すものだからね。多少身内間が強い方がリスナーは喜んでくれるさ」

そう答えたのは、よく分からないボタンやらスライダーやらがたくさんついた機器の前で座っている白鳥さん。

「あーたしかに」

透ちゃんには思い当たる節があるのだろう。わたしはラジオだとかそういうものは少し疎いので、よく分からないけれども。

「それじゃあ、今回はこれでおしまい。来週からは二週間に一回、二回分ずつ収録していくからね」

そういうえば、初回は簡単な打ち合わせも込みでやるから収録は一回分だけと、もらった資料に書いてあった気がする。

「はい、本日はありがとうございました」

「ありがとうございました」

プロデューサーさんが丁寧にお辞儀をしているのを見て、改めて小島さんと白鳥さんは偉い人なのだなと実感する。話しているところにも駄菓子屋のおじちゃんくらいの印象を持つてしまう。それくらいに態度というか、空気が軽いのだ。

「いやいや、こちらこそありがとうございます。ノクチル、なかなか面白いユニットだと思うよ」
白鳥さんは椅子から立ち上がると、軽く一礼。

「ところで、次のライブが決まっていけないっていうのは本当？」

「え、ええ。お恥ずかしながら」

小島さんの問いかけに、苦笑しながら返すプロデューサーさん。

「そっかあ、もったいないなあ。次があれば絶対見に行くのに」

「小島さん、そんな余裕ないでしょ」

白鳥さんは笑いながら小島さんの肩を叩く。

踊つていいもの件といい、今回のラジオ番組といい、仕事をくれているのは小島さん。もしかすると、わたしが思っているよりもずっと偉くて、忙しい人なのかもしれない

い。

「そこはほら、現地調査的なやつで……ね？ それに白鳥くんだつて行きたいだろ？」

「そりやまあそうですけどねえ」

そんなやり取りを、きつと他愛もないやり取りなのだと思いつながら聞いていた。

しかし、プロデューサーさんの一言でこのやり取りに含まれた意味に気がついた。

「はい、ぜひお二人とも招待させていただきます！」

つまり、見たいから関係者席として用意をしてほしいと。そういうことらしい。

「あはは、ごめんね、そんなつもりじゃなかったんだけど」

「え、違ったの」

和やかだったはずの空気は、透ちやんの何気ない一言で、一気に凍りつく。

世間を知らない自覚はあるけれども、いまの空気の変わりようは分かる。透ちやんはきつと、言つてはいけないことを言つてしまった。

「あ、やば」

「すみません、悪気はないので」

流石に本人もその空気を感じ取つたのか、表情は変えずに小さく呟くと、円香ちゃん

がすかさず謝る。

小島さんも白鳥さんも、プロデューサーさんさえも笑顔のまま固まること数秒。ようやく動いたのは小島さん。

目を閉じて、深くため息をついて、目を覆うように右手を顔にあてる。

「いや、うん。そうだね」

隣に立っていた白鳥さんは、再び椅子に座るとこめかみを抑えて俯く。

それから、また数秒。

合わせても十秒に満たないくらいの時間のはずなのだけれども、その時間は何倍にも感じられた。許されるなら、今すぐにでもここを抜け出したいくらいに気まずい空気の中で、わたしたちは立ち尽くすことしかできない。

「歳……いや、違うか。よくないね、慣れてしまうのは」

小島さんが再び呟くけれども、やはり言葉は理解できても、内容は理解できない。

「当たり前だって怖いですね」

白鳥さんの口からも、ため息とともに呟きが漏れてくる。

「あ、えと、すみません……？」

どうして疑問系なのか。いや、もし怒られていたら納得できないでも普通に謝つていたかもしれないけれど、この状況は、何を言えばいいのかわたしも分からない。

「ああいや、透ちゃんの言うとおりだからね。こう言っておけば関係者として招待されるとか、そういう経験というか、悪い風習だよ」

「そんな、わざわざ仰らなくても招待は……」

プロデューサーさんの言葉は、しかしながら途中で途切れてしまう。問題の本質がそこにはないと気がついたから。

「うん、それはありがたく受け取ります。ただ、これは自己嫌悪的な……ね」

同意を求められた白鳥さんは、軽くため息をついてから顔を上げる。

「ええ、まさか娘と同じくらいの歳の子供に気付かされるなんてね。少しだけシヨックですね」

「盲目的になっていたことに気が付かされたよ。ありがとう」

小島さんは、深く頭を下げて、落ち込み気味なまま、スタジオを出ていこうとする。

「あー、えっと。ラジオでも言ったんだけど、小糸ちゃんのやつ、ほんとすごいから」

「浅倉」

円香ちゃんが止めようと声をかける。けれども、いつもは止まるその言葉で、透ちゃんは止まらなかった。

「めっちゃいい席、用意しとく」

◇◇◇

「透う……！」

小島さんたちが立ち去って、わたしたちもすぐにスタジオを出た。帰りは事務所までプロデューサーさんの車だ。

車に乗るやいなや、プロデューサーさんはエンジンをかけるよりも先にハンドルにしがみつきのながらうなだれていた。

「ごめん、いらんこと言い過ぎた」

助手席に座った透ちゃんはシートベルトを締めると、項垂れているプロデューサーさんの表情を覗き込む。

「本当に肝が冷えたぞ……。今回はよかったけど、ああいうの嫌がる人もいるから、気をつけてくれよ？」

「うん」

二つ返事の透ちゃん、本当にわかっているのか怪しい気もする。だからといってわたしはそれを指摘する立場にはない。どちらかといえば、透ちゃんと一緒に領かなければならない立場なのだから。

透ちゃんはゆっくりと顔を上げて座り直す頃には、プロデューサーさんもハンドルから手を離して車のエンジンをかけた。

「あ、でもさ、あれ、大丈夫?」

「あれって?」

プロデューサーさんと同じように、わたしにも何のことだか見当がつかない。

「めっちゃいい席、用意できるのかなって」

直後に車が、まるで急停車でもしたかのような衝撃と、まるで何かが爆発したかのような音を発して、静かになってしまった。

「わっ、え、な、なに……?」

「……………だっさ」

「すまん、思いつきり足滑ってエンストした。驚かせちゃったな」

よく分からないけれども、なにか失敗してしまった様子。エンスト……もよく分からなかったけれども、プロデューサーさんが再びキーを回して車のエンジンをかけたので、エンジンが止まってしまったのだと理解した。

「え、あの、壊れたりとか……?」

意図せずに車のエンジンが止まるなんて聞いたことがない。どこか調子が悪いなら、直してもらわなければいけない。

「小糸、車は大丈夫だから。人は直してもらったほうがいいかもですけど」

「はは、面目ない。それから、透の不安だけど、それは大丈夫だと思う」

「お、まじか」

透ちゃんは驚いているような口ぶりをする。表情もあまり動いていないように見えるけれども、それはどこか子供っぽい、期待に満ちた眼差しだった。

プロデューサーさんは今度こそゆっくり車を前進させて、左右の確認をしつかりしてから道路に出る。

プロデューサーさんのことを信用していないわけではないけれども、気になってわたしも左右を確認してしまう。

道路に出てすぐに、信号で停車すると、プロデューサーさんは続けて言う。

「ファンからすれば最前を狙いたくなるだろうけれど、彼らは作家と監督だから。その二人に見てほしい場所なら用意できるよ」

ファンの人たちと小島さんたちがどう違うのかはわたしには分からない。ライブを見に行ったりしたことはないけれども、なんとなく前の席の方がよさそうな気はする。とはいえ、わたしなんかよりもずっと業界に詳しいプロデューサーさんが言うのだから、おそらく間違いではないのだろう。

そもそも、わたしたちはライブに向けて歌とダンスの練習で手一杯なのだから、そう

した手配はプロデューサーさんに任せる意外の選択肢がない。

「で、その予定はあるんですか？」

「う……」

円香ちゃんの指摘とも似た言葉に、プロデューサーさんは言葉を詰まらせる。

「それはまあ……がんばるよ」

「がんばれー」

「がんばれ〜」

透ちゃんのやる気のなさそうな応援に、雛菜ちゃんが合わせる。

「他人事みたいに言ってるけど、みんなも頑張るんだぞ？」

あくまで役割分担をしているだけなのだから、当然だろう。

プロデューサーさんはアイドルとしての仕事を準備する仕事。それを実行するのが

わたしたち。片方だけが頑張ったところで、なんの意味もない。

「大変じゃないのがいい〜」

「いいー」

プロデューサーさんと円香ちゃんの深いため息とともに、信号で止まっていた車は再び進み始めた。

福丸宅へと行ったとき

「そんな話は聞いていませんが……」

小糸のお母さんと初めて話したとき、失敗したと思った。

小糸は母親が忙しくてなかなか連絡後つかないといっていたから、ダメ元で電話してみた。

小糸のことを信じてやれなかったことにも後悔したし、小糸が嘘をつかないといけなような状況のまま、アイドルとして活動させていたことにも後悔した。

確かに親の話をするとき、小糸の反応には違和感があったけれども、小糸が大丈夫だと言うから大丈夫なはずだと、勝手にそう思い込んでいた。

これはきつと、俺が口を挟んでいい問題ではない。反射的にそういう思考になつていた。

「先にあなたが小糸と話してください。小糸の話を、ちゃんと聞いてあげてください。

私には……できなかつたから」

だから、その言葉を聞いたとき、どうすればいいか分からなかつた。明らかに家庭の問題で、俺が口を出してしまえば状況は更にややこしくなると、そう思った。

でも、小糸を信じなければならぬのと同じように、小糸のお母さんの言うことも信じなければならぬ気がした。

『そうやって、今までどれだけ損をしてきたんだ？』

俺が、語りかけてきた。

無駄にお人好しで、嘘がつけなくてバカ正直な性格で、今までどれだけいいように使われてきたことか。

たとえそれが自覚できても、直せるようなものではない。けれど、意識を向けて回避することはできる。

『家庭の事情には、口出しできないので』

そう言うだけで、この明らかに複雑な問題とはおさらばだ。

「……はあ、馬鹿だなあ」

だって、知ってしまったのだから。知ってしまったって、知らないふりをできるほど器用な人間ではない。

それが損だったとしても、それが自分のためにならなくても、誰かのためになるのなら。

「分かりました。ただ、お家には今晚伺います」

「……はい」

自信のなさそうなお母さんの返事は、やはりどこか小糸に似ていた。



小糸の家について、一通りの謝罪を済ませ、二人きりにしてきた。

責任を放棄したわけではない。他の誰でもなく、小糸本人の口から伝えなければならぬことで、そこに俺がいるのは邪魔だったから退散したまでのこと。

と、部屋を出てきたはいいものの、どこで時間を潰そうか。他人の家を勝手に探検するわけにもいかないし、外で待っているというのも少し離れすぎている気がする。

「おーじさん」

廊下の向こうから声がして、視線を向けると、小糸と同じような、少しだけ青が混ざった髪の毛の女の子が、階段で座っていた。

「つてより、おにーさん？」

「の方が、俺は嬉しいかな」

そういうえば、小糸には妹がいると聞いたことがある。しかし、この子がそうだとして、随分と小糸とはイメージが違った。

小糸が子猫だとして、この子は元気に駆け回る犬といったところか。出会ってたったの数秒だったけれど、それほどまでに違う印象を受けた。

「紗織っていうの、よろしくね」

そう言うのと紗織ちゃんは階段の端に寄った。隣に座るよう催促されたと判断して、隣に座る。どうせ立っただけでも行く場所はないのだから。

「ね、ね、お姉ちゃんのどこがいいと思ったの？」

隣に座るや否や、身を乗り出して、目を輝かせながらそんなことを聞いてくる。

「紗織ちゃんは、小糸のことが大好きなんだな」

「え、分かる？ 分かっちゃう？」

照れて頬を掻きながら嬉しそうに答える紗織ちゃん。

「頑張り屋さんなどこでしよ、しつかり結果を残せるところでしよ、まんまるな顔でしよ、ちよつと癖がある髪でしよ、たまに強引などこでしよ……もう、全部！ 全部大好き！」
「はは、ほんとに好きなんだね」

少し怖いくらい、というのはい伏せておく。

でも、それくらいに元気で、明るくて、聞いているだけで楽しくなってしまう。もしかしたら、この子の方がアイドルに向いているかもしれない。

「おにーさんは違うの？」

純粹そうな眼差しを向けられたけれども、瞳の奥に、少しだけ揺らいでいるものが見えた。

「先に君に会ってたら、君をスカウトしたかもね」

その瞳に何を映していたかは分からないけれども、その質問に込められた意図は感じ取れた。

「試している……というよりも、不安なのだろう。大好きなお姉ちゃんを誰とも分からない相手に任せていいのか。」

「でも、今の小糸を見ているから、それはない。今、二人のうちどっちを選ぶかと言われ

たら、迷わず小糸を選ぶよ」

「なんで？」

紗織ちゃんの瞳の中で揺れていた何かはもう見えなくなった。そうして残ったのは、ただただ純粹な、歳相応の無垢な視線だけ。

「まだ、分からない。けれど、時折パツて光るんだよな……つて言っても分からないよな」

首を傾げる紗織ちゃんを見て、思わず苦笑してしまう。

「うまく言えないけどさ、こーう、綺麗なんだよ。普段はなんともないのに、その瞬間だけは見惚れちゃうんだ。それで、もう一度だけ、もう一度だけつて、何度も求めちゃうんだよな」

「じゃあ、ずっと見惚れてる私の勝ち〜」

いや、勝ち負けではないと思うけれど。

そう言おうと、苦笑いのまま、嬉しそうに笑っているはずの紗織ちゃんの表情を見た。笑っていると思っていたはずの表情は、今までで一番不安が表に出ていた。

「その、ありがと。高校に入ってからでも、なんとなく元気なかつたけど、アイドル始めてから、少しだけ昔のお姉ちゃんに戻った気がするんだ」

俺は、昔の小糸を知らない。どうして今の小糸になったかも知らない。けれど、アイ

ドルになることが小糸にとって何かいい方向に向かっていたらなら、向かっているなら、一人のプロデューサーとしても安心できる。

「お母さんとは、不仲ってわけじゃないんだよ。でも……」

「大丈夫」

きつと、そうなのかもしれないと思っていた。

小糸みたいな素直な子が、理由もなく嘘をつくとは思えない。それこそ、すぐに知られてしまうような嘘であればなおさら。小糸は頭の回転はいいのだから、それが分からないような子供でもない。

親の話をしたときだけ、違和感があった。だから、親となにかあるのだとは思っていた。不仲ではないと気づいたのは、お母さんからの電話をもらったとき。

「ただ、噛み合っていないだけだもんな」

ただ、二人のコミュニケーションが取れていないだけだと、すぐに分かった。

もし親が嫌いななら、小糸がそれなりの態度を見せるだろうし、お母さんだって仕方ない様子を見せるはず。

アイドルをしたい小糸と、それを拒否はしていない親。その二つの中で、小糸が嘘をつく理由は一つだけだったから。

「うん……ありがと」

二度目の感謝の言葉は、受け取ることができない。

「俺はもう、何もしないけどな」

「えっ？」

「言っただろ、噛み合っていないだけだつて。俺が下手に手を入れるより、ゆっくりと合わせていった方がいい。だから、あくまで小糸に近づいて行ってほしいんだ。俺はその手助けをするだけさ」

自分に保険をかけているだけだと、そう言われればそれまで。偽善者だとか、半端に首を突っ込んでいるだけだと蔑まれるかもしれない。けれど、将来を見たときに、一人で立っていられる小糸になつてもらいたいと、そう願っているから。

「……はあ、びつくりしたあ」

「はは、ごめんごめん」

「なにになに？ 芸能界ってこんな人ばつかなの？ なら私はやらなくてもいいやー」

驚かせるつもりはなかったのだけれども……これは嫌われてしまったかな。というか、もしかしてアイドルをやるつもりだったのだろうか。

突然、ガチャリと音を立てながら、目の前のドアが開く。中からは、不安そうな表情

のままな小糸が出てくる。

「ぶ、プロデューサーさん、お、お母さんが話したいって」

「うん、分かったよ」

流石に、一度機会を設けた程度では、あとは手放しでというわけにはいかないようだ。それでも、小糸ならなんとかなると、そう願わずにはいられなくなっていた。



「小糸のことですけれど……」

小糸が居間から出ていって、お母さんと二人きりになってしまった。

大人の話し合いということだけでも、そう言われてしまうと身構えずにはいられない。
い。

「父親は、いないんです」

「えっ」

少しだけ予想外で、けれども一応考えてみれば、そうかもしれないといったところ

だった。

とつきに出てくる嘘というのは、大抵真実が織り込まれているもので、お父さんは忙しくてあまり帰ってこないだとか、そういう状況を考えていた。

「あつ、えつと、その……」

この慌てる仕草はなんとなく小糸に似ているな、なんて思った。

「いないというのは、国内にということ……えつと、家にはほとんど帰らないんです」

海外の単身赴任ということか。これはこれで予想外というか、しかしながら考えていた状況には限りなく近いようだ。

「なので、えつと……あなたには、小糸の父親になつてほしいんです」

「は……」

思わず声も漏れる。ここに来るまで色々な展開を予想して、それに対する回答も用意してきた。けれども、この展開は予想していない。というか、予想しろという方が無理がある。どんな性癖の持ち主なんだ俺は。

「えと……そ、その、違つて……」

「すみません、俺も取り乱しました。落ち着いてからで結構です」

漏れてしまった声が、高圧的だったかもしれない。そんなつもりはなかったけれども、そう受け取られてしまっても仕方がないとも思う。

少しだけ間を空けて、数回の深呼吸のあとにお母さんは続ける。

「父親となる人がいなくなつたんです。だから、代わりに私や夫ができなかったことを、やっていたら良かったんです。……都合のいい話だということは承知しています」

「すみません、それはできないです」

小糸にも、お母さんにも申し訳ないけれども、それはできない。

独身で今まで生きてきた俺に、父親としての器量はないし、それ故に代わりを務めることなどできない。俺はあくまでもプロデューサーであつて、それ以上のなにかにも、それ以下のなにかにもなれない。

「でも、アイドルとしての小糸を見てやることはできます」

俺が、もうやめておくと語りかけてきた。これ以上何かを言うのは自分の首を絞めることになる、そう言ってきた。

「二人の子供の人生を預かつている身です。親として立ち回ることではできませんが、近くに寄り添える大人として、できることはしていこうと思つています」

その言葉は、想定なんてしていなかったし、考えてもいなかった。だからうまく纏まっているとは思えない。

そんな言葉を放って、最初に感じたのは後悔だった。

わざわざ言わなくても、プロデューサーとしてみんなのことを見守る気ではいた。けれども言葉にはしてこなかった。言うことで逃げ道がなくなってしまうから。あくまで自分に保険をかけて、失敗したときに言い訳をして、自分を押し潰してしまわないための保険だった。

けれども、言わずにはいられなかった。たとえそれが自分を苦しめる選択だったとしても、相手を苦しめるよりはマシだと思ってしまうから。

お人好しだと、自己犠牲がすぎると、内心では苦笑しているけれども、そうやって今まで生きてきたのだから。そうやって生きてきたから、283プロに入れたのだし、透や円香、雛菜や小糸と出会うことができた。

だから、これからもそうやって、不器用に、苦しい選択をしながら生きていくのだろう。代わりに、たくさんの幸せを得られるはずだから。

「ありがとうございます」

「でも、ゆくゆくはお母さんの方から、小糸に話してあげてくださいね」

自分よりも年上の相手なのだけれども、そのときだけはどこか幼い印象を受けてしまった。言つてから、偉そうなことを言ったかもしれないと不安になったが、お母さんの表情からして、その心配はいらないようだった。

「それで、小糸のこれからの活動についてですけれど……」

前に進む、そのために

最近、少しだけ考えがまとまってきた。それは、踊っていいともの収録後、アンティフォナの人から言われた言葉。

『なんのためにアイドルやってるわけ?』

『収録でもステージでもね、アイドルってのは誰かを笑顔にしたり、楽しませたりするた
めのものよ』

アイドルを始めた理由は、みんなと一緒にいたいから。みんなに追いつかなければま
た置いていかれてしまう気がしたから。

アイドルになって、無事にみんなと一緒にいられるようになったわたしは、いったい
どうしたいのだろうか?

アイドルになって、大きく変わったことが一つある。小さな変化はたくさんあるけれ
ど、そのなかでも、とりわけ大きな変化。

それが、お母さんとの関係。

プロデューサーさんに支えられながら、なんとかお母さんに自分の気持ちを話すことができた。そして、お母さんの気持ちを聞くこともできた。

少し前までは、自分の部屋から出ていくだけでも勇気が必要だったのに、今では何一つ抵抗がなくなっていました。

アイドルになって、みんなと一緒に居られることと同じくらい、お母さんとの関係がよくなったことが嬉しい。

最近、お母さんと紗織と三人でご飯を食べるときに、私のラジオや番組ばかり流すものだから、少しだけ恥ずかしいけれども。

それと、最近私にとって大きな出来事が一つあった。

周りから見れば、なんでもないこと。迷子を助けて、感謝をされただけのこと。

わたしが考えていることは、まさにその出来事がきっかけ。

もしかしたら、わたしと同じように、湊くんと同じように家族と……いや、家族でなくとも、誰かとすれ違って孤立している人がいるかもしれない。原因は違って、寂しさを感じている人がいるかもしれない。そう考えることが最近増えてきた。

そして同時に、なんとかかしたいと思うようにもなっていた。寂しさを紛らわす……というよりも、ここに居てもいいという安心感を与えたい。偶然か必然か、それを与えられるかもしれない立場にわたしはいる。与える立場だと断言できないのは、アイドルが与えるものとして正しいかが分からないから。

アイドルといえば、笑顔だったり楽しさだったり、安心感とは少し違う方向の体験を与えるものだと思うている。

わたしの考えが個人としては正しくとも、アイドルとして正しいかどうかは未だに答えが出ていない。だから、まだプロデューサーさんにも、みんなにもこの考えは伝えていない。伝えてしまったら、きつと協力されてしまうから。

アイドルとして正しいか分からないことに注力させるわけにもいかない。

では、したいことをするために、ここに居てもいいと伝えるために、何ができるだろうか？

残念ながら、わたしにできることはそれほど多くない。

『努力ができるってことも、才能のひとつ……特別なことなんだ』

いつかの帰り道、プロデューサーさんに言われた言葉が、わたしのやるべきことを教えてくれた。プロデューサーさんには申し訳ないけれども、まだその言葉をその通りだと受け入れることはできない。けれども、他の誰でもないプロデューサーさんの言葉だから、信じたいと思った。

「小糸、おまたせ」

そのために、今日は事務所に来ていた。

「小糸から話があるなんて珍しいな」

忙しいだろうプロデューサーさんと呼ぶのは少しだけ気が引けたけれども、これも必要なことだから。

「は、はい……っ！」

電話で話があると呼び出したのはいいものの、いざ話すとになると緊張してくる。

ただ、いつもとは違って、それで頭が真っ白になることはなかった。それほどわたしの中で変えたくないものだと思うと、少しだけ勇気が湧いた。

「え、えと……少しだけ、ううん、どれくらい分からないですけど、時間がほしいんです」

「……時間？」

プロデューサーさんの声は、少しだけ怖かった。もしかすると、これから忙しくなる時期なのかもしれない。踊っていいともをきっかけに、明らかにお仕事は増えていたから。

「みんなとじゃなくて、わたし一人で……一人じゃなくてもいいですけど……とにかく、少しでも多くレッスンをしたいんです」

「もう少し詳しく聞いてもいいか？」

全部話してしまうのが一番伝わる方法だし、全部話せば楽になるのだけれども、そうしてしまえばきつと協力してくれてしまう。だから、できる範囲で。

「前に、踊っていいともものあとに言われた言葉の答えが、出るかもなんです。……わ、分からなくてすけど」

曖昧で自信のない回答に、プロデューサーさんが鼻を鳴らす。困らせてしまっただろうか。

「どうしても、今じゃなきやだめか？　もう少しあととかじゃ」

「はい……！」

食い気味に答えてしまった。けれど、今でなければだめなのだ。これから先、いつあるかも分からないライブや、毎週放送されるラジオで、知らない誰かに伝えるには、今すぐにでも答えを確かめなければならない。

プロデューサーさんは、腕を組んで俯く。

「いつだったか、同じようなことがあった気がする。」

「何度かうーんうーんと唸ったあとに、一つ深いため息をついてから目を開ける。」

「二週間、ラジオ収録以外は小糸の好きにしている。はづきさんにも伝えて、こことは別の、いつでも使えるレッスン場を用意するよ。それでいいかい？」

「……っー」

嬉しきで、声が出ないことなんてあるのだなと驚いた。

「言っておくけれど、これは二週間で成果を出さない、ということだからね」

嬉しきから一転して、一気に不安が湧き上がってくる。プロデューサーさんは成果が出せなければ、という話をしてこない。何もないだろう……なんて思えるほど樂觀的な性格はしていない。いや、何もないかもしれない。もしくは、なにもかも、なくなってしまうかも。今まで頑張ってきたことが、なにもかも。

怖くないわけがない。また、あの頃の……一人ぼっちだった頃に戻ってしまうかもしれないなんて、わたしの足を止めるには十分すぎる可能性。

だから、試してみるという感覚でいてはいけない。そんな、中途半端な覚悟ではなくて、もつと、大きな覚悟を。

「わ、分かりました。わたし……や、やります……!」

自信はない。けれども、やらなければ。

やらなければ、わたしはいつまでも同じことを悩み続ける。どうしてアイドルを続けているのか、アイドルになって何をしたいのかを、これから先、ずっと。

「今までより、ずっと苦しむかもしれないぞ?」

「それでも、やりたいです……!」

一人になることも、悩み続けることも嫌だ。わたしは弱いから、一人で決めることはできないけれども、他の誰でもなく、目の前にいるプロデューサーが信じてくれたから。わたしの強みが頑張ることだと教えてくれたから、それを信じて、前に進みたい。

「よし、分かった。じゃあ、三週間後にライブを用意するから、そこで答え合わせをしよう。それでいいな?」

「はい……っ！」

これから先、どうなるか分からないけれども、もうあとには退けない。退かない。絶対に、わたしの答えを見つける。

「そ、それでなんですけど……今日早速レッスン場を使いたくなって……」

プロデューサーはぐつと大きく伸びをして、腰に手をあてて、胸を叩く。

「おう、任せとけ！」

なんとなく古臭い動きだな、という言葉は胸の奥に仕舞っておいた。



小糸には、ああ言ってプレッシャーをかけたけれども、実際のところ失敗しても何もペナルティはない。

WING 出場可否が決まるのが四週間後。そこに向けて、対外的な活動を増やしているかと思っていたから、つつい威圧するような反応をしてしまったのは反省だ。思い通りにならなくて八つ当たりするなんて、大人として恥ずかしい限りだ。

けれども、あの小糸がやりたいと言ってきたことを断りたくはない。正直、あの小糸が自分で自分のことを決めている姿に成長を感じて、少しだけ泣きそうだった。

だから、二週間という期間を設けた。それまでに小糸が、小糸の思う何かを見つければ、こちらとしても残り二週間でなんとかできるだろう。

「意地悪ですねー、プロデューサーさん」

「……はづきさん、いたんですか」

だからなんで俺の机で寝てるんだ。確かにソファで寝られたら邪魔だったけれども。

意地悪。確かにそうなのかもしれない。WINGは一つの目標ではあるけれども、絶対的なものでは決してない。たとえ本選に進めなかったとしても、それでアイドル活動が終わるわけではない。だから、もういつそのことWINGを諦めてしまうという手もあった。

「そうですね。でも、なにか一つを決めるなら、短期間ですっぱり決めたほうがいいと思うんです。それが変わってしまったてもいいから」

「なるほどー、それも一理ありますねー」

そう、変わってもいいのだ。

これから先、目標なんていくらでも変わりうる。むしろ、変えられなくて自分を締め

付けてしまうのは、ただただ苦しいだけで、誰も得をしない生き方になってしまう。

「ただ、それには本人で気づいてほしいんです。精一杯頑張って、得られるものをそれなりに得られて、そこで迷ってほしいんです。これから先、同じ場所を目指すのか、別の何かを目指すのか」

「ふふっ」

……なにか笑われるようなことを言っただろうか。

「すみません。でも、なんだかみんなのお父さんみたいだなって思ったんですよ」

お父さん、か。

「そんな、すごいものじゃないですよ」

あくまで、一人の少女を預かっている身として、他人の人生を左右させている身として、考えなければならぬことを、考えているだけ。

「いいえー、それはすごいことなんですよー?」

「そう……ですかね」

そうなのかな、そうだといいな。

いや、そうでなくても構わない。すごいことをしているなら、嬉しくはあるけれど、それは重要ではないから。

「……さて、それじゃあ残業といきますかー」

「頑張ってくださいねー」

「そこは協力してくれないんですね！」

仕方なさそうに俺の席を立ち上がったはづきさんは、向かいにある自分の席に座った。

なんだかんだ、こうやって助けてくれる人がいるからこそ、俺はちゃんと仕事ができるのだと、改めて感じた。

ヨンブンノイチ 夢はなに？

思い返してみれば、今まで飄々と生きてきたなと思った。

大抵のことは周りがなんとかしてくれだし、特にこれといって大きな問題もなかった。

小学校のときの夢は、サッカー選手だった。当時ワールドカップが開催されていて、流行っていたこともあり、体を動かすことは嫌いではなかったので楽しそうだなと思った。別に、サッカーが上手かったわけではない。

中学のときの夢は、パティシエだった。たまたま寄ったケーキ屋さんのケーキがとても綺麗で、とても美味しかったから。別に、料理は得意ではない。なんなら下手な方だと思う。

これらはどちらも、卒業のときに文集に書いた夢であって、長い期間持ち続けた夢ではない。

いつも大体一ヶ月。夢を見続けるのはそれくらいが限度だった。短いときには次の

日には変わっていたし、それを真剣に目指そうなどとは思っていなかった。

警察官、弁護士、医者、野球選手、アナウンサー、天気予報士、パイロット、レーサー、SE、ウエディングプランナー、役所の職員。

夢は何かと聞かれたときに、その時興味があつたものを答えてきただけ。本気でなろうなどと思っていないし、なれないものもあることは分かっていた。

「努力すれば夢は叶う！ 諦めないことが大事なんです。みんな夢を持ちましょう！」

そんな言葉をよく聞く。学校での知らない人の公演だったり、先生からだったり、テレビだったり。

その度に、私には夢があるのかを疑問に思ってしまう。それもほんの数秒で、次の瞬間には考えても仕方ないと諦めているのだけでも。

『私たちの夢は、もらったものを何倍にもして返せるような、そんなアイドルになることです！』

そう書いてあつたのは、事務所で読んだアイドル情報雑誌の記事。写真に写っている

のはつい先日一緒にテレビに出演して、帰り際に怒ってきたアンティフォナの三人。
「夢、夢かあ」

雑誌から目を逸らして、見上げてみる。天井が見えた。天井のヒビのような模様は、不規則に走って、どのヒビがどこまで続いているのだろうかと目で追いかけてみる。
そして、やめる。

「私の夢って、なんだろう」

アイドルになること……はもうなっている。と思う。

そもそも、何かになるということが夢なのだろうか？

アイドルを目指している人には失礼かもしれないけれど、長年の夢でアイドルになつたわけではない。

あの人がかここにいたから。ただそれだけ。

それを夢と言えるのかといえ……どうだろうか？

多分先生とかには否定されるだろう。

では、どうやって夢を持つのか。普通の人は、どうやって夢を見つめるのだろうか。そもそも夢というのは、持つものなのだろうか？

「……しーらない」



「はい、オツケーです」

「どうやらオツケーらしい。」

「ありがとうございます」

「はいおつかれ。浅倉さん、やっぱクールねえ」

「クールらしい。」

「あー」

今まででも似たようなことを言われたことはあった。学校ではちよくちよく声をかけられるし、失敗してもかわいいたか、かっこいいとか、色々言われてきた。

ただ、そんな自覚はない。

「あぎます」

アイドルって、思ったよりも何もしないのだなというのが最近の印象。

今日の写真撮影だって、カメラのレンズを見ていたら黒い部分が広がったり縮まった

りで面白いなあなんて思っていただけだ。あとは言われたとおりにポーズをとるだけ。

「ほら、これなんていい感じだと思おうの」

「おー、すごい」

驚きの言葉は、二つの意味を持っている。

一つは、自分が思っている以上にかっこよく撮ってもらえていたこと。自分の顔はそんなにまじまじと見ることはないけれど、目の前にある写真は、いつも見ている自分とは明らかに違っていた。

もう一つは、カメラで撮った写真がこうもすぐにモニターで見られるということ。スマートフォンなんかであれば当たり前だけれども、大きい一眼レフカメラでも同じなのだということに驚いた。

「これ、雑誌に載るんですね」

「……………？ ええ、もちろんそうよ？」

今隣に立っている女の人は、多分偉い人。名前は確か田中さん。なんとというか、雰囲気だけでも、この場所がこの人を中心に回っている気がするのだ。だからきつと、偉い人。

「なにか気になる？」

「あ、いや。アイドルなんだなーって」

アイドルになって、もうすぐ半年になる。ライブもやったし、ラジオ番組の収録もしてきたけれど、未だにアイドルをやっているという実感は薄い。

なんというか、いつものみんなと一緒に遊んでいるだけという感覚でしかない。

「あはは、面白いこと言うわね」

田中さんは口に手を当てて、くすくすと笑う。その動作だけでもなんとというか、強そうだ。

「浅倉さんがアイドルをして、私たちがいい写真を撮らせてもらえる。これって、とてもいい関係だと思っているの」

どういうことだろうか。そう聞き返す前に、田中さんは続けてくれた。

「互いにいいことしかないもの。あなたはアイドルとして宣伝になる。私たちは雑誌の売り上げが上がる。だからもしも、あなたが今の撮影に不満があるなら遠慮なく言ってほしいの。それはあなたの望んでいる宣伝にはならないはずだから。あなたが満足しなければ満足するまで考えて撮るわ」

ふと、周りを見てみると、いつの間にかスタジオの撤収作業が止まっていた。

「あ、いまのは事務所には内緒ね。怒られちゃうから。それで、どうする？」

もし迷惑をかけているようなら、すぐにでも適当に言い訳をして断っていただろう。ただ、周りを見てしまったから、できなかつた。誰一人として、嫌そうな顔をしていな

かったから。

別に今回の撮影に不満があるわけではないけれど、いまやってみたいことはある。

「……じゃあ、お願いします」



絶対に無茶を言っていたと思う。私にも分からないものを見つけてもらおうとしていたのだから。

かわいい感じとか、面白い感じとか、いろいろ試してもらった。けれど、やっぱり一番最初に撮ってもらった写真が一番よかった。

「ごめんなさい。けれど、いつかリベンジさせてもらうわ」

撮影が終わって謝ろうと思ったら、逆に田中さんに謝られてしまった。

わがままを言ったのは私なのに、結果を残せなかったのも私なのに、なぜか謝られる。こんなに不思議なことは今まででなかった。

「……あーでも、なんか」

——なんか、悔しい

事務所に戻ってきて、誰もいない中で再び天井を見上げる。

天井のヒビは、昨日とはまったく変わっていた。そう見えただけでも。実際には同じ場所を見ていないだけで、ヒビが変わっているはずなどない。

「……なんだろう」

迷惑をかけたからとか、無駄な時間を使ってしまったからとか。

「そういうんじゃない、ないな」

だったら、この悔しさはどこからやってきているのか。こんなこと、いままで考えたこともなかった。ただ、この悔しさから目を逸らせないことだけは分かる。

いつものように、まあいいやと思ってみても、次の瞬間には、悔しさがさらに強くなって込み上げてくる。

「あー」

「なに呻いてんの」

上を向いて鳴いていたら、頭上……背後から樋口の声が聞こえたので、頭を更に上に向けると、逆さまに立っている樋口がいた。

「危ないからやめな」

「はーん」

怒られてしまったので、首を戻す。

「で？」

樋口は私の隣に座ると、足と腕を組んだ。

「え？」

「呻いてたの、なに？」

心配されていたのだと気づく。

「あー」

樋口は私よりもよっぽど世間を知っていて、相談したらなにか分かるかもしれない。

『あのさ、人生ってなんだろう？』

聞いているところを想像して、やめた。いくらなんでも恥ずかしすぎる。

「なんだろう？」

「……そ」

そう言うと、樋口は鞆から財布を取り出す。

「忘れ物」

見覚えのある財布だと思っていたら、私の財布だった。

そういえば、昨日残金を確認して机の上においたままだった気がする。

「おー、あざす」

受け取って、鞆に仕舞う。

「……はあ」

わざとらしいため息のあとに、樋口は再び鞆に手を入れる。まだ何か出てくるのかと注目していると、今度は本が出てきた。

「あれ、なにそれ」

それは私のものではない。

本はたまに読むけれど、いま樋口が持っているような難しそうな本は読まない。漫画か、読んでも話題の小説くらい。

「浅倉のじゃないけど？」

「……あ、そっか」

てつきりまたなにか忘れていたのを樋口が持ってきてくれたのかと思っただけでも、違ったようだ。

樋口は再び小さくため息をつく、本を開いた。

「樋口さん」

「ん」

視線はこちらに向けなければ、返事はしてくれない。

「アイドル、どう？」

「どうって、別に」

別に……別になあ。

てつきり、それで終わりかと思っていたら、少しの間をおいてから樋口は続ける。

「案外簡単だなんて、それくらい。笑っておけばいいんでしょ、要するに」

樋口は学校でも密かに人気があつて、すこし怖いところも含めてかつこいいいなどと女子から人気が強い。

そんな樋口だから、モデルの仕事だつて難なくこなしてしまう。この前知らない間に受けていたらしいモデルの仕事は、雑誌を立ち読みしてみたけれどやはり別人のようだった。

作られた樋口のような気がして、少し距離を感じてしまうほどに。

「あと——」

まだなにかあるようだ。

期待しながら耳を傾ける。

「そういう話、本読む前にしてくれない？」



二回目のラジオの収録。

一回目の公開はつきつき。雛菜曰く結構いっぱい聞いてくれているらしい。

そのおかげもあつてか、収録が始まる頃には前回よりも多くのメールが届いていた。前回同様回し読みをしていると、気になるメールにあたった。

『踊っていいともで知りました。私は将来、アイドルになりたいと思っています』

そんな内容。文章の拙さからしてもまだ子供なのだろう。

夢を持っていない私を見て、夢を持つなんてことがあるのだなと内心苦笑しながら読んでいく。

『ラジオを聴いて、こんな仲良しな人たちとアイドルができたらいいなって思いました』
だそう。

この人のように、アイドルになりたいと思っている人はきつとたくさんいるのだろう。

でも、私は違う。なりたくてなったわけじゃない。かといって嫌なわけでもないけれど。

この子が見ているのは、あくまで表面的なところ。実際にアイドルを始めてみれば、

歌のレッスンやらダンスレッスンやら、撮影やらライブやらで、自由な時間は一気に減ってしまう。

では、アイドルになることを勧めないのか。

いや、答えはノー。

知らないことを知る度に、世界が広がって、目に入ってくるいろいろなもの見え方が変わってくる。

歌のレッスンをしたから歌うことの難しさを知った。

ダンスのレッスンをしたから思ったよりも運動が苦手ということが分かった。

撮影をしたから人のこだわりを知った。

ライブをしたからステージの広さを知った。

ライブをしたから、あの海の広さを知った。

こんなに楽しいことが転がっている世界、他人に勧めないわけがない。

ただ、夢を見ていても、現実を見たら挫折してしまうかもしれない。私はそれを何度も何度も、それはもう数え切れなくらいに経験してきている。

でも、夢を見る前に楽しいと分かっていたら、頑張れるかもしれない。
「あ、そっか」

思わず声が漏れる。

気づいてしまった。いや、たった今できてしまった。私の夢が。

——この楽しさを、もっと知ってほしい

それが、たっただけでできた、私の夢。

こんなに世界は広くて、こんなにも楽しいことに溢れていて、飽きることなんてありやしないのだと。そう伝えたい。

——ほら、やっぱり作るもんじゃないじゃん

作ったものではない、できた夢。それを諦めることなんて、できやしない。



「さて、今日はリベンジよ」

「ういっす」

前回の撮影から一週間しか経っていないけれども、今見えているものは前回とはまるで違う。

誰が何を考えていて、私にどうしてほしいのか、どういう写真を撮りたいのかとか、そういうことがよく見える。

だから――

「今日、試したいんですけど」

「……へえ」

その全ては、私が壊す。

いや、壊すは言いすぎかもしれない。壊すというより、汲み取ると言ったほうがいいだろうか。

田中さんの視線が急激に鋭くなって、少しだけ驚いたけれど、関係ない。いや、関係あるか。これからの撮影は、今この世界をすべて詰め込んだ撮影になるのだから。そうしてみせる。

「いいわよ。どうするの？」

田中さんの問いに、笑って答える。

我ながら、頭がおかしいとは思うけれど、これが一番近道だから。

「思ったこと、全部試そうかって。それで、感じたこと全部伝えたい。私だけじゃなく

て、ここにいる人全員が感じたこと、全部」

田中さんの鋭い視線を受けつつ、目を逸らしたくなりつつも、絶対に逸らさない。

急がば回れ、なんて言うけれど、別に急いでいなくても回ればいい。

そこで見たことが伝えられるなら、それは私の夢につながるはずだから。

「……あつははー！」

狂った言葉を受けて、今度は田中さんが狂ったように笑い出す。

「いいわ、やりましょう。プラグマティズムは私も好きよ。ただ、やるなら絶対に逃さないわよ？」

ぷらぐ……何かわからないけれど、受け入れてもらえたらいい。ただ、逃してももらえないらしい。

別に構わない。逃げるつもりなんてないのだから。

「ばつちん！」

この夢は、私の夢だから。

ニブンノイチ 狂気

大抵のことは、それなりにできると思っている。

勉強も運動も、芸術も遊びも、特別頑張ることなく、人並みかそれより少し上くらいにはこなせる。

もちろんなんでもできるわけではないけれど、できなくて困ったことはほとんどない。

そのおかげか、周囲からの評判はおおむねいいものだった。いい子だとか、しっかりした子だとか、そんな評判をよく耳にした。

それは逆に、なにか完璧にできることがない、ということでもあった。

これだけは誰にも負けない、なんてものは私にはない。個性なんでもものも持ち合わせない。

何もしていなくて、当然のことばかりしているのに褒められるというのは、それほど気持ちのいいものではない。決して悪い気はしないけれども、かといって達成感とか満足といったものもない。

ただ、人生としてみた場合、順調なのだろうとは思う。

失敗という失敗をせず、罪という罪を負わず、安全に、山もなく谷もなく生きていく。社会に出ればそういった生き方が必要になってくるのだから、今から慣れておいて損はないだろうと思っていた。

だから、たまに透たちを見ているとイライラしてくることがある。

変なことばかり思いついて、変なことばかりしているのに、楽しそうにしていることが、妬ましく思える。

透がアイドルを始めると言ったとき、正直いい加減にしてくれとさえ思った。

思いつきで行動することはよくあったけれども、これから先何年も続くようなことをそんな簡単に決めないでほしいと。

それに、アイドルは本当に小さい頃、まだ無謀だった頃に一瞬だけ夢に見たものでもあった。

アイドルを夢見たきつかけも透。透を見ていて、アイドルみたいだと、そうなってみたくないなんて思ったことがあった。もちろん、現実的ではないとすぐに諦めたけれど、他にもない透に掘り返されるとは思ってもみなかった。

そして、四人でいる、この楽しそうな雰囲気から離れられない私は、追いかけるようにアイドルになった。

こんな平凡な人間をよく合格させたなど思った。それとも、なにか裏があるのかと疑いもした。いや、疑いに関しては現在進行形でしている。

最初のうちはどうせすぐに飽きるだろうなんて思っていた。けれども、続けられ続けるほど後には退けない状況になっていく。これ以上深入りしたら、本当に戻れなくなる、何度も何度も自分に言い聞かせながら、三人が進もうとするのを抑えてきた。

「円香、モデルの仕事なんだけど、いいか？」

初めての仕事をあの人が取ってきたときには、本気で殴ってやろうかと思った。どうして四人で始めたものなのに、一人での仕事を取ってくるのかとか、どうして最初が私なのかとか、モデルなんて目立つようなものなのかとか、色々と思うところはあった。

「よくないって言つて、やめられるものでもないんでしょ」

精一杯の強がりだった。

一人での仕事なんて怖いに決まっているじゃないか。何も知らないのに、いきなり知らないことをやるなんて怖いに決まっているじゃないか。

でも、そんな弱みを表に出せるほど強くもない。

ここで失敗してこの人に私は平凡な人間なのだと見せつけてやろうなんて考えた。

無理だった。

そんなことができたなら、強がりなんてしていいのだ。

結局私は、臆病で震えていることしかできない、ただの臆病者だ。



事務所にやってくると、小糸がいた。一緒に来るはずだった透は宿題を忘れたので居残りを食らっている。

「いっ——」

声をかけようとして、やめる。宿題に集中している間の小糸の邪魔をする気はない。というか、その必死に問題を解いている様子がなかなか面白から、黙っている。

対面に座つても気が付かないのだから、相当集中しているのだと思う。ちなみに雛菜は小糸の膝枕を借りて寝ている。

これだけ集中していたら触つても気づかないだろうか？

そんな疑問が心を揺さぶった。そして、そんな好奇心に対抗するまでもなく、行動に

移す。

ソファアールから立ち上がった、小糸の後ろに回り込む。視界は遮らないように、ゆつくりと二つに縛った髪を解いていく。

そして、ゆつくりと撫でるように髪を梳きながら一箇所にとめて縛る。

満足したので、再び小糸の対面に座って眺める。うん、いい仕事ができた。

「ふう」

満足したところで小糸がため息をついたので、つい身構えてしまう。別に悪いことは……してたか。

そして集中の切れた小糸は周囲を見回して、私と目が合う。

「あ、円香ちゃん。き、来てたんだ」

「ん」

どうやら本当に気づいていないようだ。ここまで無防備だと逆に心配になってくる。集中している間に変なことをされていらないだろうか。

「な、何してたの？」

「小糸、見てた」

「ぴえっ……!!? わ、わたし?」

まあ、嘘ではない。嘘ではないけれど、本当のことも教えない。

「小糸は宿題？」

これ以上掘り下げられても困るので、適当に話題をそらす。

「う、うん、今日出たところ」

小糸は偉いなど、つくづく思う。ちゃんと努力して、ちゃんと結果を残していく。

アイドルを始めてからも、小糸が誰よりも努力していると思う。その分、最初の頃と比べて一番成長しているのも小糸だ。

「小糸は偉いね」

「そ、そうかな。えへへ」

嬉しそうに頬を掻くので、余計心配になってくる。怪しい人にくろつと騙されそう
だ。

「と、透ちゃんは？」

「宿題忘れて居残り」

「そ、そっか……」

噂をすればなんとやら、階段を駆け上がってくる音が聞こえてくる。……けれども、
これは透じゃない。

思わず舌打ちしそうになるのをなんとか堪える。

「円香！ よかった、ちよつといいか？」

「なんですか?」

息を切らしながら勢いよくドアを開けて、小走りで私のところに来ると、両手を合わせて頭を下げてくる。

「明日、緊急で撮影のモデル、できないか?」

「とうとうスケジュールの管理もできなくなっただんですね」

殴りかからなかったただけ褒めてほしい。一週間後でも急だというのに、明日とはどういうことか。なにをどういう仕事をしたらそんなことになるのか。

「実は明日予定の子が熱を出してしまっただけなんだ。それで、代役を頼めないかって先方から連絡がきてな」

それを聞いて、安心してしまっただけ自分がいた。

代役ということは、それほど期待されてもいないということ。

それならば、求められるものもそれほど高くはないだろう。

「円香さえよければ、これから打ち合わせなんだが……」

最近、この人は無駄に私たちの了解を得ようとしてくる。ともに売れていないアイドルなのだから、拒否権などないというのに。無駄な手続きを踏まないでほしいと毎回思ってしまう。

「べつに、断る理由もないですし」

「そうか……！　じゃあ、車を取ってくるから待っていてくれ！　……小糸、髪型変えたんだな。似合ってるぞ！」

嬉しそうに事務所を出ていくのを見送って、ついため息が漏れる。

「え、え、髪型……？」

小糸は戸惑いながら自分の髪を両手でペタペタと触る。

「いいんじゃない？」

「ま、円香ちゃん！　勝手に髪いじらないでよー！」

◇◇◇

車で連れられて、アイドルとして初めての仕事をした撮影スタジオへとやってきた。

スタジオで打ち合わせなんて変な話だと思っていたけれど、どうやら本当の撮影予定は今日だったらしい。当日欠員が出て、人を確保できなかつたけれども、雑誌は出てしまうので、何かを撮らなければならない。そんな状況でなんとか翌日にもスタジオを確保したということらしい。

「よかつたー。ありがとう樋口さん」

「いえ、特に用事ありませんでしたから」

撮影を担当するのは、前回の撮影と同じく田中さん。優しそうな見た目をしているが、実は編集部の偉い人らしい。

「実は、前回の樋口さんの写真、結構評判良かったのよ」

なんてことを突然言われるものだから、反射的に身構えてしまう。

どうして芸能界というのは、こうしてハードルを上げたがるのか。そんなことを言われたら、前回以上のものを見せなければいけないくなるではないか。

「それは……ありがたいです」

前回……つまり、アイドルとして初めての撮影では、一週間近く時間があつたので、入念に準備をしてから撮影に臨んだ。立ち方、ポーズの種類、カメラマンとのコミュニケーション、ケーション、支持の出し方等々。勉強になった反面、とても疲れたのを覚えている。

「今回は春向けの服を紹介したくて——」

打ち合わせは、あれよあれよという間に進んでいく。そして、進むにつれて色々なことが決定していき、私の逃げる場所はなくなっていく。

決まったこと一つ一つに対して、何を調べて、何を注意しないといけないか。それを脳内で整理していき、明らかに時間が足りないことに気が付きつつも、今更断ることなどできずに、提示された案にただただ頷いていく。

一回頷くごとに、私の逃げ道は埋められていき、八方塞がりになったあとも、更に外

を埋められていく。

もう、逃げられなどしない。

「それで、記事の内容はこんな感じで進めよう——」

突然、テンポよく進んでいたはずの打ち合わせが、止まってしまふ。

田中さんは私を見たまま固まってしまった。

と、思ったら突然笑い出す。

「楽しそうね、樋口さん」

楽しそう……？

そんなわけがないじゃないか。こんなにハードルを上げられて、外堀を埋められて、こんな状況が楽しめるほど強い人間じゃない。

意味が分からず首を傾げると、田中さんは小さく息をついてから続ける。

「ごめんなさい。それで、記事の内容がこれだから——」



本当なら今日は透の家でご飯を食べる予定だった。

けれど、どっかの誰かさんのおかげでそんな暇はなくなってしまった。

パソコンで記事を調べて、スマートフォンで単語を検索。それをひたすら繰り返して、時には実際にポーズをとってみたりして、頭に叩き込んでいく。

きつと透や雛菜なら、こんなこと調べなくてもその場の雰囲気でやりきるだろう。小糸なら周りが教えてくれるように立ち回る。私にはそんな才能はない。だから、せめて周りに迷惑をかけないようにしなくてはならない。

埋められてしまった外堀は、一つ一つ調べて、確実に自分のものにしていく。

それがたとえ、時間ギリギリだったとしても。寝る時間がなくなったとしても。



「今日は、よろしくお願いします」

「ええ、本当に急だったのに、ありがとう」

「いえ、大丈夫です」

結局、寝たのは一時間程度。よく起きられたと思う。もちろん起きれるように準備を進めたからなのだけでも。

「それじゃあ、あまり時間もないから、早速始めましょう」

そうして始まった撮影は、私の想定どおりなんのトラブルもないまま進んでいった。

「いいねいいね、じゃあ次、こう手を広げる感じで」

指示を受ければ、そのとおりのポーズを、自然になるように別のポーズと組み合わせていく。

カメラマンさんも前回と同じ人で、撮影が進むにつれて、テンションが上がっていく。正直暑苦しいのは苦手なのだけれども、あまり悪い気はしない。

「あの、こつちからとかどうですか？」

もちろん、カメラマンさんへの提案も忘れない。

「おつ、さすが。じゃあそのままちよつと体を前に傾けてみてさ」

「こんな感じですか」

言われたとおりに、言われたこと以上の意図を汲み取る。調べたところ、別に違ってもいいらしい。汲み取れる範囲で汲み取って、自分なりの解釈を出せばいいと、そう書いてあった。

「いいねえー！」

カメラのシャッターを切る間隔が少しずつ短くなっていく。

「はい、オツケー！」

田中さんの大きな声とともに、撮影が止まる。

気がつけば、息が切れていた。それほどまでに撮影に必死だったということだろう。

近づいてくる田中さんが視界に入ったので、向き直して頭を下げる。

「ありがとうございます」

「いいえ、こちらこそありがとうございます。だいぶいい絵が撮れたと思うわ」

内心では、ガッツポーズをしていた。

失敗せずに仕事をできたこと、期待を裏切らなかつたこと、その両方に安心していた。

だからだろうか、次に聞かされる言葉を、一切警戒していなかった。

「まだ時間があるから、こっちも撮りたいんだけど——」

田中さんが持っている服は、明らかに今とは雰囲気の違いがあった。

服が違えば、与える印象も変わってくる。それはもちろん、表情やポーズにも影響する。この仕事は、服の良さを伝えるために工夫をせねばならず、その服その服で考える

ことが変わる。

つまり、服が変われば準備しなければならないことも変わるといふこと。

そして、今の田中さんの提案は、準備なしでそれをやってみせろということに他ならない。

そんなの無理に決まっている。

今回だって付け焼き刃とはいえ、ほぼ徹夜で準備を進めてようやく失敗しなかったのだから、準備なしなど考えられない。

「樋口さん、楽しそうね」

楽しい……？

昨日の打ち合わせのときも言われたけれど、楽しいはずがないじゃないか。必死に準備して、必死にこなして、その上まだ求められるなんて、辛いに決まっている。

だから、断ればいい。

期待を裏切つて、相手をがっかりさせて、この場を終わらせてしまえばいい。

そんな考えが頭を埋め尽くしていたはず。

その中で、一瞬だけ別の考えがチラついてしまう。

『いいねえ!』

『いい絵が撮れたと思うわ』

その言葉を思い出しただけで、断ることができなくなってしまう。それが我が身を滅ぼすと分かっている。

——ほんと、誰かさんに教わらなければ、こんなことにはならなかったのに

頑張るといふ言葉が嫌いだ。頑張つて必死になつて、報われる保証などどこにもないのだから。

だから何事も適度にやってきました。深入りしないように、言い訳を交えながらそれなり

のことができる程度で抑えてきた。けれども、報われるということがどういふことか知ってしまった。知りたくもなかつ

たし、知らないように立ち回ってきたのに。

嫌ならやめればいいと言う自分もどこかにいる。何かを考えているとき、常に横で囁きかけてくるのだ。

やめれば楽になれる。やめればもう頑張らなくてもいい。

けれども、やめたらあの感覚はもう味わえない。

「はい、やらせてください」

たった一瞬の快樂のために、身を削りながら、息苦しさに耐えながら、それでも求めてしまう。

——ほんと、狂ってる

脳裏に浮かんだのは、あの無鉄砲で無計画な人の幼稚で無責任で純粋な笑顔だった。

ヨンブンノサン 幸せのかたち

——幸せて、どんな形してるのかな？

樂をするなどとか、頑張らないと将来辛い思いをするとか、そんなことは今まで何度も聞かされてきた。

でもそれは、私の幸せではない。

私ではない誰かが、自分の幸せのために私を利用しようとしているだけ。それで私が幸せになれるのだっいたらいいのだけれど、そうではないのなら言うことを聞く義理はない。

そもそも、私が私の幸せについてどう考えようがいいではないか。だって私の一度きりの人生なのだから。この機会を精一杯楽しまない理由はない。

透先輩たちと一緒にいるのも、私自身の幸せのため。

いつも突拍子もないことを思いつく透先輩と、加減しつつも見守る円香先輩。あと、すつごく素直でいじり甲斐のある小糸ちゃん。

その三人と一緒にいると、時間があつという間に過ぎてしまう。その間はずっと楽し

くて、夢中になれて、これが幸せなんだと実感できる。

最近、その中に一人増えた。プロデューサー。

透先輩がアイドルを始めると知って、すぐに事務所に向かった。アイドルは大変そう
なイメージが強かったけれども、透先輩たちと一緒に楽しめそうだと思ったから。

そして、プロデューサーと出会って、この人はきつと私の幸せを理解してくれると、そ
う感じた。アイドルを目指すような理由はなくて、私の価値観を伝えただけなのに、一
緒に頑張ろうと言ってくれたから。そうでなかったら、アイドルにはなっていなかった
かもしれない。

でも、それは間違っていたかもしれない。最近はそのような気持ちが少しだけ、見え隠
れしている。

忙しいのは知っていたけれど、レッスンは大変だし、やたらと注意されるし、変な人
たちにはイチヤモンをつけられるし。

市川雛菜は市川雛菜で、他の誰でもないというのに、どうしてこうも価値観を押し付
けてくるのだろうか。

「最初は楽しかったのになあ」

最近、事務所においてもレッスンをしているも、どこか息苦しさを感じてしまう。そ
れでもみんなと一緒になら、みんなと一緒にいる楽しさが勝っているから我慢できるけれ

ども。

こんなことを考えなければいけなくなるなら、アイドルなんてやらなければよかったな、なんて、そう思ってしまう。

でも、楽しくないのは私だけではないかもしれないと、周りもそうなのかもしれないと、そう思ってみてみる。

けれども、透先輩も円香先輩も小糸ちゃんも、大変そうにはしているけれども、それなのに楽しそうにしている。

「……なんでだろう？」

今日もレッススが終わって、みんなはもう少し残っていくと言っていた。

私は知っている。小糸ちゃんは夜まで自主レッスンしているし、小糸ちゃんが帰ったあとに円香先輩も自主レッスンをしている。透先輩は、何をしているか知らないけれど、大抵家にいるので特に何もしてないかもしれない。

疑問に思ったのは、それでもみんな楽しそうにしているということ。別に、頑張ることが悪いことだとは思っていない。けれども、今ある時間を使ってまで頑張ることかと言われると、首を傾げてしまう。

けれども、みんなは楽しそうなのだ。あれだけ汗をかいて、あれだけ息を切らして、それでもなお、楽しそうにアイドルとして活動している。

「あれ、雛菜」

「ん〜？」

聞き覚えのある声が出て、顔を上げる。

「あくプロデューサー」

適当に遠回りをしながら家に向かっていただけでも、こんな何も無い道でプロデューサーと鉢合わせるとは思っていなかった。

「レッズンは……もう終わった時間か」

「そうだよ〜みんなならまだいるんじゃないかな？」

なんとなく、嫌な予感がした。

雰囲気がそうなっていたし、プロデューサーの声も嬉しそうなものではなかった。とてもではないが、褒められるような空気ではない。

「雛菜はみんなと一緒にやらないのか？」

やっぱり、いい質問ではなかった。

今まで何度も経験してきた質問。

「うん、そうだよ。オーディションの時にも言ったけど、雛菜、だいたいなんでもできるから、トレーナーさんにも怒られてないし〜」

「でも、これからオーディションも厳しくなっていくし……」

みんながやっているのだから、お前も同じようにしなさいというもの。

それで、幸せになれるなら、やってもいい。でも、楽しそうではないじゃないか。嫌々周りに合わせて右に倣って、それがなになるというのか。

「雛菜、これから見たい番組あるからもう行くね〜バイバーイ」

「……ああ、おつかれ」

適当な理由をつけて逃げようとした。てつきり呼び止められるかと思っていたのに、そうではなかった。

やはり、プロデューサーは他の人とはどこか違う気がする。

だからなのか、それともただの気まぐれなのかは私にも分からない。けれど一言だけ、言っておこうと思った。

「今のプロデューサー、嫌いかも」

その言葉が、プロデューサーに聞こえていたかどうかは分からない。



みんながどうして楽しそうにしているのか、その答えが出ないままに一週間が過ぎてしまった。

とはいえ、別にずっと考えていたわけではない。というか、それほど気にしてもいい。変に気にしていても楽しくないし、疲れてしまう。何度か思い出したことはあつたけれども、面白くないことだからとすぐに考えるのをやめた。

そうしているうちに、レッスンに出ることが本当に必要なことなのか分からなくなってきた。

みんなと一緒にいるだけだったら、別にレッスンに出る必要もない。なんならアイドルを続ける必要すらない。

それなのに、どうして私はアイドルを続けているのだろうか。それは私にとって必要なことなのだろうか。

「あゝ円香先輩だゝ」

「……なに？」

明らかに警戒の色を見せる円香先輩。警戒しなくても変なことは……多分しないのに。

「雛菜はね々々お散歩々々」

「そ、じゃ」

「ぶゝ円香先輩冷たくないですか？」

私の言葉に、歩き出そうと一步を踏み出した円香先輩の足が止まる。

ゆっくりと振り向いた円香先輩の表情は、いつもの呆れ顔とは違って、嫌そうな顔とも違って……。

「雛菜、熱でもあるの?」

「えーないよー?」

「測った?」

「んーんー」

首を横に振る。測ってはいないけれども、体温なんてそう毎日測るようなものでもなし、体がだるいわけでもないからきつと熱はない。

そもそも、円香先輩はどうしてそんなことを聞いてきたのだろうか。

「そう、なら……変わったんじゃない」

変わったとは……?」

「べつにいいけど」

そう言うと円香先輩は再び歩きだしてしまふ。

結局、円香先輩は何を言いたかったのか分からずじまいだったし、そもそも何に悩んでいたのか分からなくなってしまう。



「やっぱり透先輩の家で寝転がってるほうが楽〜」

これで透先輩がいたら最高なのだけれども、残念ながら今日はレッスンに行っていない。

別に、今日のレッスンに出なかつたとしても問題はない。トレーナーさんは前回の復習だと言っていたし、前は完璧にできていると言われたのだから。

「……」

楽しかつたはずの気持ちは、一瞬で消え去ってしまった。

別に、レッスンに行っていない罪悪感などではない。透先輩がいないからでもない。そうではなくて、今しがた自分の言った言葉に、違和感を覚えてしまったから。

楽だから、レッスンに出ないのか。

いや、私は私が幸せになる選択をしているだけのはず。なのに、ふとした言葉に出きたのは楽という言葉。

楽しくいることは重要だけれど、それと楽をすることは別物だ。楽をしたからと言って楽しくなるわけではない。

優先順位が、変わっている気がした。

楽しく過ごすためのものが、いつの間にか楽をすることにすり替わってしまっている。

それはきつと、楽しいことではない。

『みんなと一緒にやらないのか?』

脳裏によぎったのは、プロデューサーの言葉。

「あー、そういうことー?」

ため息を漏らしながら、ゆっくりと立ち上がる。

やはりプロデューサーは、他の人とは違うようだ。

プロデューサーは、私がみんなと一緒にレッスンしていなかったことに対して言っていたわけではない。

私が今の幸せを幸せだと思えなくなっていることに気がついていて、優先順位が変わってしまったことにも気づいていて、それを指摘しようとしてくれていた。それでもなお、あくまで私の意思を尊重したままで。

もう一度、自分にとっての幸せと向き合ってみようと、そう思った。



「あは〜今日も楽しかった〜」

三回目となるラジオの収録。初回は一回分だけで、二回目以降は二回分、計三十分ずつ収録しているのので、今日の収録はラジオ放送としては第四回と第五回の収録となっているはずだ。

「おつかれー。雛菜、今日元気だったじゃん」

「ん〜？ 雛菜はいつも元気だよ〜？」

「え、そう？ じゃあ、今日はいつも以上に」

どうやら私は、これからもずっと幸せとは何かと考え続けなければならないようだ。でも、それが嫌なわけではない。

もっと大きな幸せのために、もっと楽しい幸せのために。

そのためならば、私が幸せになれる選択ならば、喜んで取れると思う。嫌なことは嫌なので嫌だけでも。それでも。

——ねえ、幸せの形って、どんな形なんだろうね？

スマートフォンを取り出して、カメラを起動する。自撮りになっていることを確認してから、左腕を伸ばす。

背後にスタジオを出ようとする小糸ちゃん、円香先輩、透先輩が写っていることを確認して、右手でピースを作りながら、左手の親指でタップする。

ポン

ポポン

カシヤ

リズムよく効果音がなった後、写真が撮られる。

効果音でびつくりした小糸ちゃんに、嫌そうな顔をした円香先輩。それと、ギリギリで気がついてピースを作ろうとしている透先輩が、私の背後に写っている。

「今の幸せはね〜こんな形〜」

ヨンブンノヨン もうすこしだけ

プロデューサーさんから時間をもらって、それから二週間はあつという間だった。ラジオ収録と、学校と寝ている意外の時間はほとんど自主レッスン。おかげでみんなと帰ったり、おしゃべりしたりする時間はほとんどなくなってしまった。

みんなとの距離が離れてしまう感じがして、少しだけ怖かった。けれども、自分で決めたことだから、ちゃんと最後までやりたいという気持ちが背中を押してくれた。

もう二週間は過ぎていても、今週末のライブまではもう少し時間がある。みんなとのレッスンの後に、居残りで自主レッスンをするのは、もはや日常の一部になっていた。

鏡に向かって踊っていると、視界の端にプロデューサーさんの姿が映った。もうそんな時間なのかと、それしか思わなかった。

プロデューサーさんがやってくるのは、だいたい帰らなければならぬ三十分前。だからそろそろ、今日のまとめをしないといけない。

今はとにかく、この曲を通してみる。しかし、踊っている途中にもいくつも課題が見つかる。

もつとターンを早く、早くしたところは指が伸び切っていない、歌を意識した呼吸ができていない等々。やればやるほど、新しい課題が見つかってしまう。

けれども、それは楽しかった。

トレーナーさんに教えてもらわないと気づけなかったことは、おおよそ自分で気づけるようになった。ダメな箇所が分かるということは、直し方もおおよそ分かるということ。

問題を解いたら終わりではなくて、問題を解くと更に問題がでてくる。それが、延々と終わらない。

こんなに楽しいことがあるだろうか。

「はあ……はあ……」

それでも、体力は減っていく。確かに、あと三十分保てば上出来かもしれない。そういう意味では、プロデューサーさんはちょうどいいタイミングで来てくれた。

「も、もう一回……」

課題が分かったのだから、次はそれを直してもう一度。

最初の位置……みんながいることを想定して、レッスンの端の方に向かって、躓い

た。

「わっ……!」

「小糸!」

躓いて、重心がかかるはずだった足が宙に浮く。それでも体は重心を傾けて、慌てて戻そうとするも間に合わず、倒れてしまった。

すぐに、プロデューサーさんが駆け寄ってくる。

「ま、まだっ!」

「……小糸?」

プロデューサーさんは、優しいから。きっと今日はもう終わろうと止めてくれる。

でも、それじゃあだめなんだ。

「ごめんなさい、ありがとうございます。……でも、まだ、まだ大丈夫ですから、止めないでください」

ふと、少し前にプロデューサーさんに言われた言葉を思い出した。

『小糸はもしかすると、頑張ってるの見られるの、嫌かもしれないけどさ』

その時は、なんと返しただろうか。多分、頑張っただけでみんなと並べるとか、そう

返したと思う。

その時は、自分が頑張っていると認めたくなかった。頑張らないとみんなと一緒にいられないなんて、そう思われることが嫌だったから。

でも――

「いま、自分でもびつくりするくらい……が、頑張ってるなつて思います。今までが一番頑張つてると思います。プロデューサーさんが教えてくれた言葉を、頑張ることがわたしの強みだつて言葉を、信じてたいんです。だから、止めないでください」

たとえそれが、呪いのようにわたしを苦しめたとしても、プロデューサーさんが教えてくれたわたしの価値を信じたいから。

プロデューサーさんは伸ばしていた腕を下ろして、腕を組んで目を閉じる。

やつぱり、これはプロデューサーさんがなにかを考えるときの癖なのだろう。

そして少しだけ間を空けて、その場に、私が今倒れているすぐ傍にあぐらをかいて座ってしまう。

「ぶ、プロデューサーさん?」

呼びかけてみるけれども、プロデューサーさんは何も言わず、隣の床をポンポンと叩

く。

隣に座るように催促されていると判断して、その通りにする。本当は今すぐにでもレッスンを再開したいのだけれども、きつとなにかあるのだろうと思っただけで従うことにする。

「少しくらい休憩したほうが、効率がいいぞ」

「それは——」

そうかもしれないけれど、その時間も惜しいほどなのだ、しかしその言葉は遮られてしまう。

「俺は大人だから、そう伝えるべきなんだろうな」

そう言われたと思ったから、反論しようと思った。

思わず首を傾げると、プロデューサーさんが恥ずかしそうに笑う。

「でもそれって、俺が安心したいだけなんだよな。小糸のことが心配で、無理してほしくなくて、それが我慢できないだけなんだよ」

「そ、そんな……」

そんなことはない、言うことはできない。まだ出会って一年も経っていない相手の

ことを、分かったようになって言えない。

「小糸からみたら、それなりな大人に見えるかもだけどき、多分俺はそんなに強くないんだよ」

「そ、それは……違います」

だって、プロデューサーさんは、わたしとお母さんが話す機会を作ってくれたし、わたしとちゃんと向き合って話を聞いてくれたし、たくさんお仕事をとってきてくれるし、いろいろなことを教えてくれる。

そんなプロデューサーさんが弱いなんてはずがない。

そもそも、弱いとはなんなのか。

「あはは、ありがとう。でも、強くないから……弱いから、小糸のことを心配しちゃうんだ」

はにかみながら、プロデューサーさんは立ち上がる。

「これは俺のわがままでから、俺の弱さだから、これからも小糸の隣にいさせてほしい」

そう言っつてプロデューサーさんは手を差し伸べてくる。

その手をとって、立ち上がる。あと三十分、頑張れる。

「も、もう！ 本当にプロデューサーさんは仕方ないですね！」

それでもなお、気を使ってくれるプロデューサーさんは、やっぱり強いなと思った。



「そういえば、結構遅い時間だけど、お母さんは心配してない？」

結局、そのあと一時間レッスンをしてしまった。

というか、プロデューサーさんが止めてくれず、気づいたら一時間経っていた。それはプロデューサーさんのせいではないけれど。

「は、はい……えっと、門限も、ちゃんと連絡すればいいってことになって……あ、あはは、ここ最近はずっと連絡してますね」

事務所から家までは、プロデューサーさんの車で送ってもらう。わたしは後部座席に座って、プロデューサーさんの後ろから流れていく夜の街を眺めている。

「じ、実は、この前お母さんから話してくれたんです」

一瞬だけ、バックミラー越しにプロデューサーさんと目が合う。驚いたような、でも嬉しいような表情は、視線が逸れたあともそのままだった。

「へえ、よかつたじゃないか。それで、ちゃんと話せた？」

「も、もう！ 子供じゃないんですよ！ でも、ただすれ違っただけなんだって、勘違いしてただけなんだって、分かりました」

信号で止まっていた車は、少しだけ大きく、まるでため息を吐くようにエンジンを鳴らしてから進み始める。

「そっか。なら、本当によかった」

やっぱり、プロデューサーさんは最初から……初めてわたしの家にやってきたあの時から気づいていたのだろうか。

だとすれば、どうして言ってくれなかったのか、という疑問は、しかし一瞬で解決する。プロデューサーさんから言われていても、受け入れることは出来なかっただろうから。

やっぱり、プロデューサーさんは大人なんだと思う。さつきは自分が弱いなんて言っていたけれども、わたしにわたしの強さがあるように、プロデューサーさんにはプロデューサーさんの強さがあるのだと思う。

「さて、今週末……っていつても、もう数日だけけど。ライブは大丈夫そうか？」
「はい！ 任せてください……って、言いたいですけど……わ、分からないです」

やれることはやってきたけれど、これで誰かの居場所を作れるのかは分からない。ここから先は、実際に見てくれる人たちに伝えられるかの勝負。

プロデューサーさんは、このライブで答え合わせをしようと書いていた。今週末のライブをして、見てくれるみんなにこの気持ちを伝えられるか不安で仕方がないけれど、も

うやるしかないから。

「大丈夫、きつと合ってるよ」

プロデューサーさんには詳しい内容を伝えていない。けれどもプロデューサーさんは合っていると言う。というより、信じてくれるのだろう。

「で、ですよね！ 絶対……絶対！」

確認テスト

「え、えと、その……」

ライブのリハーサル前。最近ライブに向けて一緒にレッスンすることも多かったけれど、それ以外の時間はほとんど別行動していた。

「じ、実はね、最近一緒に遊べなかったのは……」

「一人でレッスン、してたんでしょ？」

透ちやんに遮られて、みんなのを見ていなかったことに気がつく。それどころか、俯いてしまっていた。みんなに伝えなければならぬのに。

顔を上げると、みんな笑っていた。

「知ってた」

いたずらっぽく、透ちやんが笑う。

「え、えつと、お仕事とかも迷惑かけちゃって……」

「別に、とかいうかラジオ収録には来てたし、迷惑もかかってない」

円香ちゃんが、呆れた表情でため息を吐きながら言う。

「まあ、誰かさんの面倒見るのは大変だったけど」

「ほんとにね〜」

雛菜ちゃんが楽しそうに笑う。

「二人に対してだけど?」

「えっ、私も?」

思わぬところから流れ弾を受けた透ちゃんが、それでも嬉しそうに驚く。

「ご、ごめんね……?」

それはわたしがいなくても同じな気がするので、謝っていいものか分からず、ついつい疑問系になってしまった。

「別に」

たった二週間だったけれど、こんなやり取りが懐かしくて、また一緒にこうやってお話しをできることが嬉しい。

やっぱり、わたしはみんなと一緒にいたいのだと、改めて思うことができた。

「それで、見つかった?」

一応、簡単な事情はプロデューサーさんから教えてもらっているはず。プロデューサーさんがどこまで伝えているか分からないけれど、何かを探しているということは伝えてあるようだ。

「わ、分からない……」

「えっ」

でも、答えはまだ分からないから。透ちゃんの問いには、こう答えるしかない。

「わ、分からないけど、これから確かめるから……！」

「あ、なんだ」

嬉しそうに笑う透ちゃんの横では、円香ちゃんが見たことのない笑顔を見せていた。嬉しいとも、面白いとも違うけれど、どこか楽しそうで、それは初めて見る円香ちゃんだった。

「じゃー大丈夫だねー」

「だ、だからこれから確かめるから、まだ大丈夫かどうかは——」

本当に、雛菜ちゃんは人の話を聞いていない。まだ大丈夫かどうかは分からないと言っているではないか。

「ノクチルのみなさーん、準備お願いしまーす」

と、スタツフさんに呼ばれた。もうリハーサルが始まるようだ。

「じゃ、確かめにいこっか、みんなで」

ステージへ向かうみんなの背中、前より少しだけ、大きく見えた。

けれども、大きく見えたのは距離が縮まったからだ、みんなを追いかけて気がつい

た。



ライブは無事終わった。といっても、無事だったのは曲の部分だけで、トーク部分ではイヤモニ越しにスタツフさんの悲鳴が聞こえてくるほど長引いてしまったが。

それでもなんだかんだで、スタツフさん含めて、あの場にいた全員が笑ってくれていた。

そんな大成功のライブから一週間経って、今日はラジオの収録。

ファンレターもたくさんもらったけれど、それはあくまでライブ前のもの。ライブが過ぎてから、ファンの感想を聞くのは、このラジオが初めてになる。

昨日は、緊張でまともにご飯が食べられず、お母さんを心配させてしまった。どうせなら今日が来なければいいのになんて思いながら、朝まで熟睡していた。

「おっ」

透ちちゃんから回ってきたラジオ宛のお便りを、円香ちゃんが渡してくる。この紙に何が書いてあるのか。気になる反面、不安でもある。

固唾をのんで紙を受け取り、内容を読んでいく。

「ライブ、すっごく楽しかったです」

「なんか雰囲気変わった……けど、前より好きかも！」

「なんとなくで行ったけれど、思わず見とれちゃった」

やはり、お便りはライブの感想がほとんどだった。

「うわー」

透ちゃんが、手紙を読みながら唸る。

なんだろうと、円香ちゃんが読むのを待ってから、手紙を受け取って私も読んでみる。

「僕は転校続きで、あまり友達がいません」

手紙はそう始まっていた。出だしから重い内容だと分かってしまい、透ちゃんが唸る

のも頷ける。

でも、その内容は、私にとっては特別なものだった。

「ね、ねえ。わたし、これが読みたいな……！」

そう言うと、円香ちゃんがあからさまに不満そうな表情を見せる。

「重くない？」

「で、でも、これってすごいことだって思ってる……」

でも、円香ちゃんの言うとおり、これを読めばラジオの雰囲気は一気に落ち込む。い

つもの賑やかさは薄れてしまうだろう。

「いいじゃん、読もうよ」

賛同してくれたのは、透ちゃん。

「なんか、いいことした気分にならない？」

「……別にいいけど」

ため息をつきながらも、円香は許しを出してくれた。

「ぶー」

と、鳴き声が聞こえたので、声の主を見ると、机に突っ伏してこれでもかというほど頬を膨らませていた。

「まだ雛菜見てないー!」



「それでは次のお便りです」

「ラジオネーム、きゆうりさんから……好きなの？」

「え、えと……。僕は転校続きで、友達があまりいません。そんな中で、ふと聞いたノクチルのラジオがきつかけで、この前のライブに行きました。周りは知らない人だらけだと思うと怖かったけれど、どうしても見たかったので頑張つて行こうと思いました」

「わく頑張ったね〜」

「ね、頑張った」

「そ、それで、ライブを見ていて、ノクチルの四人と一緒にいるような、不思議な感覚になりました。まるで、皆さんと友達になったような感じで、とつても嬉しかったです。本当にありがとうございます。……だつて」

「なんか、いいことした気分になるね」

「浅倉、それさつきも言つてたけど」

「だっけ？」

「で、でも、透ちゃんの言つてること、分かるよ！」

「雛菜も、幸せな人が増えたら嬉しいな〜」

「まあ、いいけど」

「で、ライブさ、めっちゃ疲れるよね」

「浅倉」

「え、疲れない？」

「つ、疲れるけど、今はそういう話じゃなくて……」

「でも、楽しいよ〜」

「うん、めっちゃ楽しい」

「会場が青色に染まってる」

「う、海みたいだよね！」

「分かる〜！」

「海……行きたいね」

「もう冬だけど？」

「人いないから、独占できるかもよ？」

「あは〜それ楽しそう〜」

「う、海で、屋外ライブとか……？」

「おー、すごそう」



「あれ、プロデューサーまだ来てないの？」

横たわる雛菜ちゃんの頭を膝に載せて宿題を進めていると、透ちゃんがやってきた。透ちゃんと円香ちゃんは一限だけ多かったので、雛菜ちゃんと一緒に、先に事務所に来ていた。

ライブが終わって一段落して、気は緩めていないけれど、いつも通りの毎日が戻って

きたように思う。

「ち、ちよつと遅れるって連絡あったよ……!」

言うのと、透ちゃんはスマートフォンを取り出す。

「ほんとだ」

隣で円香ちゃんが眉間にシワを寄せながらソファの横に鞆を置く。

円香ちゃんがソファに座つてすぐ、外から階段を駆け上がる音が聞こえてくる。

事務所のドアが勢いよく開いて、プロデューサーさんが駆け込むように入ってくる。

「いい加減時間を守ることを覚えませんか?」

そういう円香ちゃんも、かなりギリギリだったのだけれど。

「す、すまん……」

プロデューサーさんは息を切らしたまま、円香ちゃんに軽く一礼すると、今まで見たことがないくらいのも、とびっきりの笑顔で言う。

「みんな、聞いてくれ!」

声の大きさに、少しだけ驚いてしまった。

そのせいもあったのかもしれない。プロデューサーさんの言葉を、すぐには理解でき

なかったのは。

「WING本選に、出場が決まったぞ！」

数秒……いや、十秒以上かもしれない。沈黙が続いた。

「あ、あれ……みんな、嬉しくない……のか？」

WINGという単語を、随分久しぶりに聞いた気がする。そういえばわたしたちノクチルの最初の目標は、そのWINGで優勝することだった気がする。ノクチルが結成されて、最初の頃にプロデューサーさんから言われた……ような気がする。

WINGの優勝が目的ならば、本選に出場するのはまず一歩進めたということだろうか。

「えっと、それってすごいやつ？」

「お、おう。めっちゃすごいやつ」

そのめっちゃすごいやつで、優勝を目指していたなんて、今まで意識したことはなかった。それはプロデューサーさんのせいであり、プロデューサーさんのおかげなのかもしれない。

わたしが相談したときでさえ、WINGの名前を出さなかったのだ。きっと、意図し

て意識しないようにしてくれていたのだろう。

「じゃあ、やばいじゃん」

「おう、やばいぞ」

「あはゝ雛菜は楽しければなんでもいゝよゝ」

WINGについては、当時調べた記憶がある。

結成して一年以内の、活動歴も一年以内の人間のみで結成されたユニット、または個人だけが出場資格がある、国内最大の新人オーディション。

年末にオーディションがあり、半年近く前から逐次審査が行われる。

知らない間に、審査をくぐり抜けていた。

そして、そんな大きなオーディションに、出場が決まっていた。

思い出せば思い出すほど、理解すればするほど、胸が高鳴る。手が震えて、足も震えてくる。

「び……」

「びっ」

首を傾げるプロデューサーさん。視界の端では、耳を塞ぐ円香ちゃんの姿も目に入っていた。

そんなすごいことになっていたなんて、思いもしなかった。考えてもいなかった。

その感情は、全て口から溢れ出てくるのだ。
「びえええっ!!」

5章

どこへ行こうか？

WING本選への出場が決まってから一日明けて、起きてすぐに夢ではないかと疑ってしまった。それを実感したのはお昼を過ぎてから。

今日は週明けだというのに、学校には行っていない。朝から雛菜ちゃんを起こして、事務所へと直接向かった。それからすぐに、プロデューサーさんの車でテレビ局へと移動。打ち合わせもほどほどに、リハーサルと本番。

今日は歌番組の収録で、大まかな流れは踊っていいときとものときと同じだった。違ったのは番組の雰囲気、あの時ほどの緊張感はないように感じた。

そして、やはり歌番組。歌うだけでは終わらない。

「ノクチルといえば、WING出場おめでとーございます！」

司会の人と言うと、スタジオに拍手が流れる。もちろん本物の拍手もあるのだけれど、主に聞こえてくるのはスピーカーからの音。

だからといって、偽物だと非難する気はない。実際に番組の時間を使って祝ってもらっているのだし、あくまで番組を盛り上げるためのものだということは理解できる。

「あざます」

司会者に応えるのは透ちやん。これももちろん番組の計画通りなのだけれども、ここから先は何も決まっていらない。

「結成からわずか半年、それも幼馴染四人のユニットでの出場！ どうですか？」

「あー……」

リハーサルでは、こういうことを聞きますとだけ言われていた。だからこの先を聞くのはこの場にいる全員が初めて。なのだけれども、その言葉はいつになっても出てこない。

何か言ったほうがいいのだろうか。しかし、それで番組の進行を妨げるわけにはいかない。そうして悩んでいる間にも、時間だけは過ぎていく。

しびれを切らした円香ちゃんが口を開くのが見えた。ほぼ同時に、透ちやんがようやく続きを喋った。

「内容飛んだわ」

一瞬の静寂ののち、どつと笑いが沸き起こる。

「忘れるんかい！」

司会者のツッコミで、笑いは更に大きくなる。

「やー、でも僕は好きですけどね、ノクチルのこういうマイペースなところ」

マイペースなのは主に透ちちゃんなのだけども。

ただこれは、周りから見ればそういう評価を受けている、ということでもある。

「貴重なアピール時間でノクチルらしきを見せていただきました。お次は〜」



番組収録は無事に終了した。

歌もダンスもまだ課題はあれど満足できる仕上がりになっていたと思う。そしてやはり、アイドルとして続けていくにはまだまだ課題があるのだと実感した。

踊っていいともでも感じたことだが、トーク力が全くと言っていいほどない。というか、基本的に透ちちゃんにしか質問がいかないし、他の三人はトーク中はただただじっとしているだけというのが現状だ。

マイペースな透ちちゃんが喋っているのだから、マイペースな雰囲気になるのは当たり前で、ノクチルがマイペースなユニットと言われることにも納得がいく。

「ふう……」

楽屋に着いて、衣装から着替えて椅子に座って一息。

トークは何もしていないとはいえ、歌って踊ったのだし、それなりに緊張もしていた。

もうお昼はとうに過ぎていて、もうすぐ日が沈み始める時間。

朝からこの時間までずっと緊張していたのだから、疲れないはずがない。自分に意味のない言い訳をしながら周りを見してみる。

もうみんな着替え終わっていて、あとは楽屋から退出する時間を待つのみとなつてい

る。
WINGの準決勝までは、あと二週間。昨日準決勝進出が発表されると同時に、大量に事務所へ電話がかかってきた。もちろん全てプロデューサーさんが受け取っていたけれども、聞いていた感じではどれもお仕事の依頼で、一旦全て保留にしていたようだった。

今はまだ、プロデューサーさんが次の新しいお仕事の話をしていないことから、スケジュールを調整しているのだろうと思う。

どちらにせよ、元々受けていたお仕事に、追加で受けるかもしれないお仕事。それにレッスンと学校が重なればとてもではないが遊んでいる時間などなさそうだ。

そう思っていたから、透ちゃんの言葉を聞いたときには驚いた。

「今度の水曜日さ、仕事ないじゃん。遊びに行こ」

「び、びえっ!?!」

それこそ、声の出でしまうくらいに。

確かに透ちゃんの言うとおりに、今度の水曜日にお仕事は入っていない。レッスンの予定も今は入っていない。

なので自主レッスンをするつもりだった。結局、プロデューサーさんとの約束を過ぎた今も、レッスン場はたまたま借りている。

「浅倉、その日は……」

円香ちゃんが何かを言いかけて、やめる。代わりにため息をひとつ。

「どう、小糸ちゃん？」

まるで円香ちゃんも雛菜ちゃんも大丈夫だと分かっているかのように、透ちゃんはわたしにだけ問いかけてきた。

それはおそらく、最近までわたしが一人で自主レッスンをしてきたからだろう。

そして同じ理由で、わたしはみんなと遊びに行きたいとも思っていた。

ここ最近ずっとみんなと遊んでいない気がする。最後に行ったのは……踊っているものあとだろうか？

たしか九月の中頃だったから、二ヶ月近く遊びに行っていないことになる。

レッスンもお仕事も楽しいし、不満はないけれども、寂しくないといえれば嘘になる。やはりみんなと遊びたい。

今までは精神的にも時間的にもその余裕はなかったけれど、本当は今もないけれど、

それでもみんなと遊びたいから、頷いてしまった。

「う、うん。大丈夫だよ……！」

「やった」

「あは〜みんなで遊びに行くの久しぶり〜」

つつきり、わたしが一人でレッスンしている間もみんなで遊びに行っていると思っていたけれども、雛菜ちゃんの口ぶりからするに、どうやら違うようだ。

もしかすると気を使わせてしまっていたかもしれないと思うと、少しだけ申し訳ない気持ちになった。

「あとはプロデューサー……」

透ちちゃんはそう言うのと、周りを見回す。けれども、そこにプロデューサーさんの姿はない。

「浅倉」

円香ちゃんはため息混じりに言うと、透ちちゃんの肩に手をあてて首を横に降る。

「そっか……プロデューサーはもう……」

「おい、勝手に殺すんじゃない」

重い雰囲気崩したのは、他の誰でもなく、今しがた楽屋に入ってきたプロデュー

サーさん本人。

「乙女が四人集まってる楽屋にノックもなしで入ってくるなんて、とんだ変態ですね。幽霊なら許されるとでも思いました？」

「あはゝ変態だゝ」

「えっ、ぷ、プロデューサーさん……変態さん、なんですか……？」

頭で考えるよりも先に口に出ていた。

あとから失礼なことを言っていないかと不安になったけれども、なんだかそういう雰囲気なので流れに身を任せたということで、自分に言い訳をしておいた。

「こ、小糸まで……って、そもそも準備できたからって呼んだのは円香だろ!？」

それは知らなかった。けれども、特に驚くことではない。円香ちゃんはちゃんと周りを見れて、先に先に手を打っておく人なのだから。

「ほら、もう行くぞ。準備は……できてるから呼んだんだもん」

そう言つて踵を返すと、楽屋を出ていくプロデューサーさん。

追いかけるように、透ちゃんと雛菜ちゃんが出ていくのを見て、ふと振り返る。

「わ、忘れ物は……」

雛菜ちゃんの忘れ物は……ない。

わたしの髪留めも……大丈夫。

透ちゃん……も今日は大丈夫だったはず。

「よ、よし……！」

とは言ったものの、やはり不安だったので円香ちゃんの表情を伺う。

「ん」

小さく頷くと、円香ちゃんは少しだけ口角を上げながら楽屋を出ていった。

今日の朝、この部屋に着いて、準備をして、収録をした。

どう映っているかは、放送されるまで分からないけれど。

——みんなが楽しんでくれると、いいな



「で、プロデューサーは行く？」

「え、なんの話だ？」

プロデューサーさんの運転で、車が発進してまもなく、助手席に座る透ちゃんが質問を投げかけた。

「さっきの……あー、明後日遊びに行くって話してた」

どうやらプロデューサーさんが聞いていたのは死んだことにされたところからだっ

たらしい。透ちゃんも途中で気がついたのか、聞き方を変えていた。

「今度の水曜日は……」

一瞬だけ、バックミラー越しにプロデューサーさんと目が合った気がした。わたしが後部座席の真ん中に座っているので、プロデューサーさんはおそらくただ後ろを確認しただけだろう。

そういえば、円香ちゃんも同じような反応をしていた気がする。そう思つて円香ちゃんを見ると、しかめ面で運転席を睨みつけていた。

「いや、俺は遠慮しとくよ」

そう言うところプロデューサーさんは車を止める。赤信号だ。

「またすぐに忙しくなるだろうし、みんな楽しんでくるといい」

小さく、透ちゃんの体が跳ねた気がした。気のせいで、ただ曲がっていた体を起こしただけかもしれない。

「あ、えー……そっか」

その声は、どこか落ち込んでいるようにも聞こえた。

直後に、円香ちゃんがわざとらしい、大きなため息とともに、小さく呟いた。

「ほんと、そういうところばっか」

その言葉の意味は分からないままに、次の話題へと変わってしまった。

「雛菜、海行きたい〜」

「いいね、海」

「正気？ もう寒いに決まってるでしょ」

真冬とはいえないものの、もう冬には違いない。行ったことはないけれども、きつと冬の海は寒いだろうというのはなんとなく想像できる。

「え〜じゃあ山〜」

「いいね、山」

「一緒でしょ」

「じゃあ川〜」

「わざとやってる?」

なんとなく雛菜ちゃんがあウトドアなことをしたいのは伝わってきた。けれども、アウトドアで外なのだから、もちろん寒いに決まっている。

「え〜円香先輩不満ばかりじゃん〜」

信号が青になり、車が再び進み始めると、プロデューサーさんが言う。

「じゃあ、バーベキューなんてどうだ?」

「話聞いてました?」

プロデューサーさんは左手で頬を掻きながら、あははと笑う。

「屋内でもできる場所があるんだよ。みんなの家からは少し遠いから……送迎はするよ」

屋内でバーベキューをするのは、それはバーベキューと言えるのだろうか？

バーベキューセットでお肉を焼いていたら実質バーベキューなのかもしれない。きつとそういうものだろう。

「それでもいいなら、学校終わったら事務所で待っていてくれ」

プロデューサーさんに送迎してもらうのなら、集合場所は家よりも事務所のほうがいいだろう。それに、明後日はオフとはいえ学校はあるのだから、多少下校がばらつきでも事務所に集合するのなら問題はない。

円香ちゃんは終始不満そうにしていたけれど、それ以上なにかを言うことはなかった。



番組収録から一日。家に着くと、台所にはお母さんが待っていた。

時間はもう十一時を過ぎている。今日も居残りでレッスンをしていたらこんな時間になってしまった。

毎日わたしよりも早く起きて、朝ごはんとお弁当を作ってくれていることを考えると、お母さんはもう寝ていてもおかしくない時間。

「おかえり」

「た、ただいま」

それでもこうやって、晩ごはんを温めて待つていてくれる。

「あ、あとはやるから、お母さんは寝てもいいよ……？ 明日も早いでしょ？」

なら、もつと早く帰ってきたらどうだと、自分に指摘される。けれど、レッスンをやめたくはない。

だからせめて、お母さんへの負担を少しでも減らせたらという気遣いのつもりでもあった。

「いいから、早く荷物おいてきなさい」

一蹴されてしまった。

けれども、わたしはわたしで、レッスンで疲れている。申し訳ないとは思うけれど、ここはお母さんの気遣いに甘えることにする。

階段を上がり、かばんを置いて、制服から着替える。再び階段を下りると、居間では

もうご飯の準備が終わっていた。

「いただきます……!」

フライパンを洗っているお母さんの背中に、少しだけ大きな声で。

すると、お母さんは水を止めて、タオルで手を拭きながらこちらに振り返る。

「ういんぐ……だっけ? いつやるんだっけ?」

「も、もう、何回目!? 来週の土曜日だよ!」

「ここ最近、毎日のように聞かれている。

何度聞いたところで答えは変わらないし、カレンダーにもしつかり書いてあるというのに。」

「ご、ごめんね?」

そんなお母さんに、ううんと首を横に振る。

「ち、ちよつとだけ、ほんのちよつとだけ不安だし、怖いけど、楽しみだよ!」

きつと、お母さんも不安なのだ。もしかしたら、わたし以上に。

「お母さんは緊張で胃が痛いわ……」

「わ、わたしより緊張しないでよ!」

あははと笑うお母さんを見て思い出した。明日のことを伝えなければ。

「明日なんだけど、透ちゃんたちとご飯食べに行くから……その……」

いつもご飯を作ってくれている人に対して、わたしの都合でいららないなんて、言っていないのだろうか。

躊躇いは言葉を止めてしまおう。

「いらない?」

しかし、お母さんは嬉しそうに笑っていた。

「う、うん……えっと、ごめんね?」

疑問系で謝ってしまった。笑っているお母さんを見ていたら、謝るのが正しいのかすら分からなくなってしまったのだ。

「ううん、いいの。遅くなりすぎないようにね。車、出す?」

「う、ううん。プロデューサーさんが出してくれるから大丈夫!」

それに、家にある車は確か四人乗りだから、みんな乗ることができない。わたしだけ別で帰るというのも寂しい。

「そ、そうよね。……その、プロデューサーさんはどう?」
どう、とは。

元気にはしている……と思う。

頑張ってくれているとも思う。

けれどそのどちらとも、お母さんの意図とは違う気がした。

首を傾げると、お母さんが慌てて補足する。

「……実はね、わたしが親らしいことを小糸にしてあげられなかったから、プロデューサーさんに代わりになってってお願いしたの」

「ぴえ……っ!?!」

一体何をお願いしているのか。

思い返してみれば、レッスンのときもいつも迎えに来てくれるし、明日だって車を出してくれるし、子供扱いされてばかりかもしれない。

でもそれは、あくまで大人と子供という関係であって、親と子という感じではなかった気がする。

どうやら、感じたことは間違いではなかったようだ。

「でも、断られちゃった。あくまで一人の大人として、プロデューサーとして接するってね」

「と、当然だよ……もうっ!」

プロデューサーさんだってお仕事でやっているのだから、そんなお願いを聞けるわけがない。

でも、お母さんの言っていることが本当だとすると、どうしてだろう、プロデューサーさんが少しだけ遠ざかるような感じがした。

けれども今は、お母さんに伝えなければならぬことがある。

とても大切に、誤解してほしくないこと。間違えてほしくないこと。

「お、お母さんは、ちゃんとわたしのお母さんを……してくれてるよ」

やりたいけど、やりたいなら

落ち葉が道のあちこちに残って、道を赤くしている。たまに踏みながら、避けたりもして歩く。

「うー、さむっ」

二つ隣を歩く透ちゃんやんが身を震わすと、正反対を歩く円香ちゃんやんが深くため息をつくのが聞こえた。

「だからもう一枚羽織ったらって言った」

「えー、朝が一番冷えるかなって」

わたしもお母さんに言われなければ同じように震えていたかもしれない。朝は少し冷える程度で、上着はなくなるとかなんと思っていた。

けれども、昼を過ぎてもなかなか気温が上がることはなく、日が落ちてきた今は、朝と同じか、それ以下になっていた。

「う、上着とってくる？」

まだ集合時間までは余裕がある。一度家に帰ってもなんとか間に合う時間だろう。

「大丈夫、歩けば温かくな……さむっ」

叱咤するように、北風が吹いた。

「じゃあ、雛菜が温めてあげる〜」

そう言つて、雛菜ちゃんは透ちちゃんの腕に抱きつく。

「おー、ぬくぬくいぬくい」

勢いよく抱きつかれて、一瞬バランスを崩した透ちちゃんは、すぐに立て直すと雛菜ちゃんを受け入れた。

そして、寒いままの左腕を見つめて、手をグーパーさせる。それから、落とした視線を上げて、円香ちゃんを見——

「しない」

見た瞬間に断られていた。

「えー」

透ちちゃんが、とてもやる気とは思えない抗議の声を上げて苦笑いをする、ようやく事務所が見えてきた。

事務所には大体誰かしらがいるので、おそらく暖かいだろう。

「あれ、もしかしてー?」

と背後から声をかけられる。知らない人の声だけれども、聞き覚えはある。

振り向いてみると、胸あたりまで伸びたグラデーシヨンのかかった髪を揺らしながら

こちらへ歩いてくる人物が一人。

「あ、やつばそうじゃん〜！」

何かに気づいたその人は、歩くペースを早めてこちらに来るが、こちらは誰も何も言わない。

「あつ」

近くで見えて思い出した。

「知り合い？」

すかさず透ちゃんが聞いてくる。

「え、えと、ストレイライトってユニットの、愛依さんって人……だったと思う」

自信がないのは、ネットで調べたときと、印象がだいぶ違っているから。

もつと目力が強いというか、怖い感じの人の印象がある。

「あー先輩」

透ちゃんがそうつぶやく頃には、愛依さんは目の前まで来ていた。

「やばー、初めてだよね？ なかなか挨拶できなくてごめんね〜」

「あー、こちらこそ？」

透ちゃんが視線を落としながら言う。

「それで？ みんなもこれからレッスンなん？」

も、と言うからには、愛依さんはこれからレッスンのだろう。自主レッスン中に他のユニットの人が入ってくることは多々あるけれど、最近はストレイライトの来る頻度が高い気がしていた。

この愛依さんという人はまだ高校生のはずなのに髪を染めているし、動画を見ている感じだと少し怖い感じなのであまり近づかないようにしていた。

「えーと、ごはん？」

そしてやはり疑問系の透ちゃん。

「事務所でご飯？ まーやってるとこはあるけど……」

「すみません、正確には事務所で待ち合わせてご飯に行く、です」

円香ちゃんの補足で納得したのか、大きく頷きながら笑う。

「あーそれなら分かるわー。とりあえず事務所でーみたいな感じになるよねー」

なるのだろうか。と、思ったけれど、わたしたちも結構な頻度で事務所を待ち合わせ場所に使っている気がする。そのほとんどはレッスンのための待ち合わせだけでも。

「それはそうと、ノクチルももうすぐWINGつしょ？ いやー懐かしいなー」

「へー、出たんだ」

透ちゃんはその言い方は誤解を招くような気がした。出るようには見えないと言っているようにも受け取れるから。

知らないのは仕方がないけれど、それをわざわざ口に出す必要はないのに。

しかし、幸いにも愛依さんはその言葉に悪意はないと捉えてくれたようだ。

「出た出た。もーめっちゃ緊張したわ。……つて、これじゃプレッシャーかけてるみたいじゃんね」

「ねね、勝ったん?」

その一瞬。ほんの一瞬だけ、愛依さんの笑顔の奥に、なにか別のものが見えた気がした。

「もち〜」

と、次の瞬間には先程までと変わらない笑顔でブイサインをこちらに向けていた。

「でもさでもさ、ノクチルのみんなもいまめっちゃノッてるし、大丈夫だって!」

そう言うと、愛依さんはこちらを睨む。

「ぴっ……」

なるほど、蛇に睨まれた蛙とはこういうことかと、体に反して思考は思ったよりものんびりしていた。

周りが止める猶予もなく、愛依さんは私の目の前まで歩いてくる。

「ぴえ……」

目の前に迫った愛依さんはとても大きくて、目力に圧されて思わず目を逸らす。

次の瞬間には、頭を引つ張られる感覚と共に、顔に柔らかいものがあたっていた。

「こんなかわいい子がいるんだしさ〜」

後頭部を撫でられるような感覚で、抱きつかれているとようやく理解した。

「ぴええ……っ」

周りに助けを求めてみるけれども、胸に押し付けられた口からは籠もった声しか出てこない。

しかし数秒経って、違和感に気づく。

別に息が苦しいわけではないし、頭を撫でる手の動きも力が入っておらず、ゆっくりとしてふんわりしている。

純粹に心地よくて、すこしだけ懐かしくて、このままでもいいかも、なんて思っただけで、もうほど。

「あの、そろそろ行つたほうがいいんじゃない？」

「ああつ、ごめんねー。びつくりさせちゃった……よね？ いやー前見たときから撫でてみたいと思っただけでっ」

円香ちゃんの一言でようやく解放された。けれども、少しだけ名残惜しさを抱いてしまっている自分もいた。

あははと笑う愛依さんは手を振りながらわたしたちを追い越して事務所へと入って

いく。

気がつけば、わたしもひらひらと手を振っていた。完全に無意識のことで、なんだか恥ずかしくなつて慌てて手を下げる。

そんなわたしに、今度は透ちやんが近づいてくる。顔を近づけて、そつと囁く。

「ね、どうだった？」

顔が近すぎたので、後ずさりをしながら距離を取る。

「ど、どうつて、なにが……？」

「ほら、柔かった？」

透ちやんの言葉の意味を理解するまでに、五回瞬きをした。首を傾げた頃に、ようやく理解する。

そして、顔にあたった感触を思い出して――

「も、もう透ちやん！ なに言ってるの！」



事務所に着くと、わたしたちを追い越したはずの愛依さんがいなくなつていた。

そもそも愛依さんはレッスンに来ているはずなのだから、事務所にいないのは当たり前

前ではある。

胸に、なにかもやもやとしたものが生まれていた。

その正体は分かっている。わたしたちはレッスンをしなくていいのかという不安と焦燥感。

しかし、今日事務所に来ている目的は別。ご飯を食べに来たのに、レッスンの準備をしてきているわけがない。……一応一通りのジャージやシューズはレッスン場のロッカーに置きっぱなしだけでも。

そもそも、プロデューサーさんとの待ち合わせ時間まであと三十分もない。そんな短時間ではウォームアップしただけで終わってしまう。

「したい?」

思わず透ちちゃんを見てしまう。

誰がとか、なにをとか、そういうものをすべて取っ払った、本当にシンプルな問い。

それを見た円香ちゃんが、口を開いて何かを言う寸前で止める。代わりに口から出てきたのは小さなため息。そしてその視線はわたしの方へと向けられる。

雛菜ちゃんは笑顔を変えないままわたしを見ている。

「……わ、わたしたちも、れ、レッスンしたほうがいいのかもって思う……けど、今日は……」

今日はレッスンをしに来たのではないと、そう言おうとした。

言えなかったのは、透ちゃんが歩き出してしまったから。

「と、透ちゃん……!」

そもそも今日はストレイライトの人たちが使っているからレッスン場は使えない。

それに、もうすぐプロデューサーさんが来て、それからみんなでご飯を食べに行くのだから、レッスンの時間などない。

透ちゃんは足を止めて振り返ると一言だけ呟くように言ってから再び歩き出す。

「やろうよ、レッスン」

まるで何かのキャッチフレーズかのようなその言葉は、それでもみんなを動かすには十分過ぎた。

「ま、円香ちゃん、雛菜ちゃん……!」

透ちゃんを追いかける二人を追いかけて、わたしは事務所を出た。



レッスン場のドアを開けた瞬間、空気が固まっていたように感じた。

愛依さんは笑いながらストレッチしていたし、冬優子さんは笑顔でこちらを見ていた。あさひさんは……ウオームアップだろうか、しばらく駆け回ったあとにこちらに気づいて足を止めた。

「あ、お疲れ様です！」

「おつかれーっす」

あさひさんの挨拶に、同じような気軽さで透ちやんが返すと、冬優子さんが近づいてくる。

ウオームアップが終わったあとだったのか、その余裕そうな笑顔とは裏腹に、髪は少しでも汗で湿っていた。そんな冬優子さんが口を開いたたちようどその時、あさひさんが言う。

「あれ、今日ってわたしたちだけっすよね？　なんかあつたんすか？」

冬優子さんは開いた口を一度閉じてから、もう一度開く。

「あさひちゃんの言うとおりでっすと思えますけど……ふゆたち、間違えちゃいました？」

「あーいや、えーと……」

珍しく言葉に詰まる透ちやんに、助け舟を出したのは円香ちゃん。

「すみません、そちらは間違えてないです」

それだけ言うと、円香ちゃんはこちらに視線を向ける。まるで……まるでではない、間違いなく、続きは任せたと云っている目だ。

そんなこと突然言われても、ここに来た理由はみんなが来たからで……。

いや、違う。

わたしはわたしの意志でみんなについてきて、わたしの意志でここにいるはず。でなければ、みんなを止めていたはず。

そもそも、レッスンをしたいと思ったのはなぜか。

わざわざ事務所まで来たから？

でも、今日はレッスン場が使えないことを知っていた。

まだ少しだけ時間があるから？

でも、練習するのに必要な時間はないことを知っていた。

視線を泳がせると、愛依さんと目が合った。笑って手を振ってくれた。

……いま思いついた言い訳かもしれない。けれど、思ったことは本当だ。

「え、えと……お邪魔なのは承知なんですけど……せ、先輩たちに教えてもらえないか

なって、お、思って……」

でも、それはただのわがままで。

この時間のこの場所はストレイライトのものだと決まっている。だから、ここで断られたなら、素直に事務所に戻ろう。

「……ノクチルさんたちが大事な時期なのはふゆも知ってます……けど——」

「いいつすよ！」

冬優子さんの言葉を遮って、先ほどの挨拶と同じ口調で返事したのはあさひさん。

その言葉に冬優子さんは、一瞬だけ固まってから反応する。

「あさひちゃん、ふゆたちももうすぐライブでしょ？　まずはふゆたちの完成度を上げないとだよ？」

冬優子さんの言うとおりでと思った。逆の立場なら、同じことを思っているだろう。実際に発言できるかは分からないけれども。

「ん……いいんじゃない？」

諦めよう、そうみんなに言おうとしたとき、先程までストレッチしていた愛依さんが、いつの間にかあさひさんの隣に立って言った。

「ノクチルのみんなもそんなに長くしないっしょ？　ほら、教えるのも勉強になる的な？」

「そうっすそうっす!」

少し距離が空いていたから定かではないけれども、あさひさんの相槌で、冬優子さんの頬がヒクヒクと震えていたように見えた。

「……でも、ふゆたち厳しいかもですよ?」

「そ、それじゃあ……!」

その言葉を、教えてくれるということだと受け取った。

「ばっちこーい」

気の抜けたような透ちゃん、気合いの入った言葉は、果たしてストレイライトには伝わっただろうか。



集合時間にまたしてもギリギリになってしまった。

また円香に小言をつかれるなど苦笑しながら事務所のドアを開けた……のだけれども、そこに四人の姿はなかった。

「あれ、今日……だよな。だって今日は……」

誰もいない、静まり返った事務所で、微かににぎやかな音が聞こえてくる。

そういえば、今日はストレイライトのレッスン日だった。ストレイライトも、もうすぐ大きなライブを控えていて、今が正念場という時期だろう。

しかしそのにぎやかな音には、違和感があった。

音が多い気がする。普段と違う物音が何度も聞こえてくる。

もしやと思った。まさか違うという考えは一瞬で消える。やりかねない……というか、それしかないと確信していた。

急いで階段を上り、レッスン場のドアをゆっくり、少しだけ開けて中を覗く。

「あー！ ちがうっすー！ ころっす、ころっす！」

「……ころっす？」

「じゃなくて、ころっす！」

ドアを開けてすぐに聞こえてきたのは、ストレイライトの芹沢あさひちゃんの声。そしてそれに応えているのは、透。

その隣では、黛冬優子さんが円香に何かを教えている。

「ゆっくり吐いて……そうそう、そんな感じですよ！」

「声出すのに、こんなゆっくり吐いていいの？」

「これはあくまでトレーニングですよ。肺活量を増やせば、ブレス間際でも苦しくならないですよ！」

「……そうですね」

そして、そのさらに隣では、雛菜と小糸が和泉愛依さんに教わっている。

「あーここでの位置移動難しそーだねー」

「そ、そこは両端に立ってるわたしと円香ちゃんが少し早めに移動してて……」

「えーそうだったっけ〜?」

「ひ、雛菜ちゃんは真ん中だから知らないだけだよ!」

「あつはは。じゃあさじゃあさ、いつこ前のフレーズでこの辺に行くとか……」

そんな光景を見て、最初に思ったのは「止めなくては」ということ。

大事なライブを抱えているストレイライトを邪魔してはいけないと、そう思った。

——そんなこと、できないな

それは俺の勝手な気持ちだ。そもそも本当に邪魔だったなら、ストレイライトの三人が黙ってはいないだろう。それならばきつと、俺の出る幕はない。

音が出ないように、ゆつくりとドアを閉めて、今上がつてきた階段を下りる。下りながら、ポケットからスマートフォンを取り出して、電話をかける。

俺はあくまで裏方で、みんなが余計なことを考えなくていいようにしなければならな

い。だから、今やることは一つだけ。

「あ、今日予約していた者ですが……はいそうです。時間を少しずらしたいのですが……」

ビバ、ハピバーベキュー

「ごめん」

「え、何かあったか？」

プロデューサーさんに呼びかけられてレッスンが終わるまで、結局一時間以上経過していた。ストレイライトにお礼を言っ出ていこうとしたところを、冬優子さんに止められて、レッスン後のストレッツチにさらに十五分。

当初の予定からは随分と遅くなってしまった。

しかし、プロデューサーさんがそこに言及することはなく、なんとなく気まずい雰囲気のまま車に乗り込んだ。

「あーえつと……遅れたこと、連絡してなかったから」

車が発進してから数分。会話は透ちやんの謝罪から始まったというわけだ。

「大丈夫。お店には連絡して遅れること伝えまし、みんなの為になるならこれくらいお安い御用さ」

プロデューサーさんが左手でレバーを操作すると、ゆっくりと前方に力がかかる。シートベルトはしているけれど、リラックスしているので自然と前のめりになってい

く。

「でもまあ、たしかに連絡は欲しかったかもな。それは次気をつけてくれればいいよ」
前方向にかかった力はゆっくりと解かれていき、代わりに反対の後方への力に変わっていく。

「知ってたなら止めればいいのに」

隣に座っているわたしにしろうじて聞こえるくらいの声で、円香ちゃんが呟く。顔を向けると、その表情からは不満……というよりは、呆れのようなものが感じられた。

再びゆっくりと前に力がかかっていき、車は停止した。車が止まったからか、会話の続きが分からない絶妙な間を空けて、透ちやんがプロデューサーさんを見る。

「ねえ、ほんとに来ないの?」

「あは〜それ雛菜も聞こうと思ってた〜」

「ああ。俺がいたら気も休まらないだろ? それに実は今日、近くで打ち合わせを入れられたんだ。……もちろん、終わった頃に迎えに来るから安心してくれ」

それに、透ちやんは小さく、それでもプロデューサーさんにも聞こえるはずの声で呟いた。

「違うんだけどなあ……」

プロデューサーさんは顔を透ちちゃんに向けると小さく首を傾げる。

「え？ すまん、聞き取れなかった」

「んーん、なんも」

透ちちゃんが首を振ると円香ちゃんが大きなため息をつく。なんとなく良くない空気を察したけれども、原因がわからないし、何を言っているのかわからない。

「前。信号」

円香ちゃんの言葉を受けて、正面を見ると信号は青に変わっていた。

「つとと、いけない」

プロデューサーさんは慌てて座り直すと、左手のレバーを動かして車を発進させた。

「打ち合わせ場所もそんなに遠くないから安心してくれ。それと……」

バックミラー越しに、プロデューサーさんと目が合った。前にも似たようなことがあった気がするけれども、きつと後ろを確認しただけだろう。

「いや、なんでもない」

「え、なに。気になる」

「気になる」

するとプロデューサーさんは、わざとらしく考えるような唸り声を上げて、答える。

「明日からまた忙しくなるだろうから、今日のうちにたくさん羽を伸ばしておこうな」
「こわ、スパルタじゃん」

「じゃあ、小糸ちゃん明日も起こしてね〜」

別に毎朝雛菜ちゃんを起こしているわけではない……と思ったけれど、ほぼ毎日どこかしらで起こしている気がする。

「も、もう！ 自分で起きてよー！」

ふと、反対側に座る円香ちゃんの顔が視界の端に写った。それはちようど、眉間にシワを寄せてミラーを睨みつけ終わったところ。驚いて今度はしっかりと顔を向けてみるけれど、そこにあるのはいつもの円香ちゃん。

「なに？」

「う、ううん。なんにも」

「……へんなの」

そう言つて外を眺める円香ちゃんは、笑っていた。



じゆう。

油が落ちて、赤く光った穴へと落ちていく。

赤くて薄いお肉は、網に乗せればすぐさま色を変える。隣では緑や赤の野菜たちもほんのりと湯気を上げている。

「うま」

肉の一つを透ちちゃんが手にして、小皿に注がれた甘ダレにすつと通してから口へ運ぶ。

じゆう。

すると、新しいお肉が網に載せられる。落ちた油は一瞬だけ炎を強くして、消えていく。

「野菜も食べたら？」

「ん、いいや」

「食べろって言ってるの。雛菜も」

「あとでね」

お肉を載せているのは円香ちゃん、食べごろになったお肉は順番に、透ちちゃんか雛

菜ちゃんの口へと運ばれていく。

わたしはといえば、残されてしまった玉ねぎや人参、ピーマンたちを、焦げないように網から救出して、少しずつ食べている。

よく火が通った野菜は甘みが出ていて、それを甘辛いタレをつけることで、甘みが増すのだ。

バーベキューが始まってからまだ十分と少し。円香ちゃんはずっとお肉を焼いていて、少しも食べていない。

「ま、円香ちゃん。変わろっか？」

「ん、じゃあよろしく。お肉は焼けたと思ったらその小皿に盛っていいから」

「う、うん！ 分かった！」

円香ちゃんからトングを受け取った。じしんまんまんを受け取ったけれど、実は焼くのは初めて。

家族やみんなと焼き肉に行くことはあったけれど、なぜだか誰もお肉を焼かせてくれないのだ。

大丈夫。焼き加減は昨日調べた。

トングをカチカチと鳴らして気合を入れる。一度やってみたかった。お肉は一度に多く置きすぎない。網が冷えてしまうから。五枚程度を、十分に間隔を空けて置く。

お肉の水分が飛んで、油が表面に出てきたら焼き加減を確認。焦げ目が少しだけついたところでひっくり返す。

裏面も同じように、焦げ目がつくかつかないかのところでお肉を引き上げる。お肉の内側は見えないけれど、多少中の色が変わっていなくとも、予熱で処理されるはずだ。

「よ、よしー」

まずは第一陣。初めてにしてはよく焼けたのではないだろうか。

円香ちゃんに言われたとおり小皿に移して、今度は野菜を載せておく。第二陣は野菜によって下げられた網の温度が戻ってから。

そこでふと、違和感に気がつく。

先ほどまでまるで奪い合うかのように食べられていたお肉だが、今は小皿に移したあともそのまま湯気を発している。

「小糸ちゃん」

呼ばれて、振り返る。

みんな食べないのかと言おうとして、大きな破裂音に遮られる。

「ぴええっ！」

思わずトングを落としそうになってしまった。

飛び出しそうな心臓を落ち着かせて、後ろに立っていたみんなを見ると、それぞれ円錐形のもの……クラッカーを持っていた。

「お、ほんとに何も出ない」

「あは〜。小糸ちゃんすんごい跳ねてた〜」

透ちゃんと雛菜ちゃんは楽しそうにしているけれど、状況が理解できない。

「小糸ちゃん、おめでと」

何がだろうと、何かあっただろうかと思考を巡らせて、その答えはすぐに出る。

「お誕生日おめでと〜！」

「おめでと」

拍手は三人しかないけれど、嬉しかった。

予定を合わせられなかった中学生のときにはなかった、誕生日というイベント。もちろん覚えてはいるはずもなく、ましてや祝ってもらえるなど想像もしていなかった。

「昨日慌ててクラッカー探してき、色々飛び散らないやつ」

「へ、へえ〜」

たしかに、クラッカーといえばカラフルなテープだったり紙吹雪だったり飛び散るイメージがある。火を扱っている場所で、食べ物がある場所で使うものではない。

透ちちゃんはわざわざこのために、中から何も出てこないクラッカーを探したのだから。

「浅倉」

「ん？ あ、そっか」

円香ちゃんに促されて、透ちちゃんはポケットに手を伸ばすと、ビニールに入った、水色の布のようなものを取り出した。

「はい、これプレゼント」

「えっ……いい、いいの？」

受け取ってみると、リストバンドだった。

「すっごい選んだやつ〜」

そう言われると、開けづらい。なんというか、大切にしなきゃ、汚さないようにしなきゃと思つて開けるのを躊躇ってしまう。

「じゃなくて、この前のライブグッズの売れ残り」

「じゃなくて〜倉庫にあったやつ〜」

それは、勝手に持ち出していいやつなのだろうか。……透ちゃんは親指を立てているけれど、一応あとでプロデューサーさんに確認しておこう。

「それを売れ残りって言うんでしょ」

「え〜ちがうくない〜?」

そして、言い合っている円香ちゃんと雛菜ちゃん、親指を立ててウインクしようとして変な顔になっている透ちゃんの手首に、同じリストバンドがあることに気がついた。

「ほら、なんか団結感的ななにか出そうじゃない?」

「別に」

団結感的ななにかは分からないけれど、みんなとおそろいの何かを身につけられるのは嬉しかった。

包装を解いて、リストバンドを左手首に着ける。

「え、えへへっ、おそろい!」

少し子供っぽいかもと思ったけれど、そんなことどうでもよくなるくらい嬉しかった。

みんなと一緒にだと、そう感じられるから。

「ん」

「おそろい〜」

「うん、おそろいだ」

透ちやんの手にはまだ一つリストバンドが残っていた。

透ちやん自身は手首に着けていて、円香ちやんも雛菜ちやんもそれは同じ。

だから、ただ余ったから持っていただけかと思った。

「これはプロデューサーの分」

透ちやんが聞くよりも先に答えてくれたおかげで、目的は理解できた。それだけではなくて、やたらと透ちやんがプロデューサーさんを誘っていた理由も、なんとなく理解できた。

リストバンドを渡すためということもあるだろう。

ただ、リストバンドを渡すために誘っていた。というなら簡単だろうが、ならばそもそもどうして渡そうと思ったか。重要なのはそこだ。

きっと、プロデューサーさんと一緒にいてほしいのだと思う。

プロデューサーさんとの関係の間にある壁を、きっと透ちやんも感じていて、その壁を壊したいと思っている……のだと思う。

本当かどうかは分からないけれど、少なくとも筋は通っている。

ならば、今言えることはひとつ。

「か、帰りに渡そうよー」

「うん、そうする」

透ちゃんの声は、どこか自信がないように感じてしまった。



結局、一番食べたのは玉ねぎだったきぎする。けれど、みんなと同じ場所で、自分で焼いて食べるものは、どれも美味しく感じた。

片付けを始める頃、プロデューサーさんがやってきた。

「あくあと五分早ければお肉あったのにね〜」

残念そうに眉尻を下げる雛菜ちゃんに、プロデューサーさんは苦笑してから、両手に腰を当てて胸を張る。

「それより、聞いてくれ。次の仕事が決まったぞ!」

やってきて一番最初の言葉がこれなのだから、相当嬉しかったに違いない。

ただ、わたしの胸の中では、別の不安が大きくなっていた。

「オフなのに仕事の話ですか?」

円香ちゃんが止めようとしてくれたけれど、プロデューサーさんが止まることはなかった。

「す、すまん……。でも、今回はオーディションじゃなくて、先方からのオファーなんだ。欠員埋めでも数合わせでもなくて、ノクチルがメインになる初めての収録なんだ！」
そんなに嬉しそうに言われてしまったら……。

大きくなっていく不安を抑えるために、透ちちゃんを見る。きつと、大丈夫だと思ったから。思いたかったから。

「んー」

透ちちゃんは短く唸ると、両手を後ろに回して笑う。

「うん、分かった」

プロデューサーさんは透ちちゃんの気持ちなど露知らず、それと、と続ける。

「ついで見たいになっちゃったけれど、誕生日おめでとう、小糸」

「あ、ありがとうございます」

素直に喜んでいいものか、分からない。

「といつても、俺は何も用意してあげられてないんだけどな……」

「だ、大丈夫ですよ！ お祝いしてくれるだけで、その……嬉しいですから！」

きつと、わたしが言うのではダメなのだ。

プロデューサーさんに気づいてもらいたい。そうすればきつと、透ちちゃんのプレゼントを受け取ってもらえるはずだから。

補習勉強あと幽霊

誕生日から二日。一つ歳をとったからといって、何かが変わるわけではない。

そして同じように、学年が変わるなんてこともありえない。

学校を休む日が増えて、出席日数が足りていないと言われてしまった。幸いなことに成績は問題ないらしく、形だけだけれど補習をすると言われた。

学校としては当然の考えだと思ったので、申し訳なさそうに言われて少し困ってしまった。

そうそう補習が必要な人がいるはずもなく、今日の補習は雛菜ちゃんと二人だけ。

勉強の内容は、ものすごく圧縮した授業といった感じで、要点だけを伝えられて、簡単な小テストを繰り返しているだけ。

わたしは予習ができていたので、内容に関しては何も問題ないけれど、雛菜ちゃんは大丈夫だろうか。

隣に座っているはずの雛菜ちゃんをみると、目が合った。

というより、ずっとこっちを見ていたような気もする。

そもそも遅刻が多い雛菜ちゃんは、わたしより多く補習があるのかと思いきや、そう

いうわけではないらしい。そのあたりの細かいことはよく分からないけれど。

「ねえ、雛菜もう飽きた〜」

「で、でも、ちゃんと受けなきゃ進級できなくなっちゃうよ?」

雛菜ちゃんとの距離はあまり遠くはなくて、こつそり話す分には先生に気づかれないくらいの声量で話せる。

「それもやだ〜!」

静かにジタバタと足を動かすなど、器用なことをしている。

「ら、来週は試験だから、そ、それまでの我慢だよ」

学期の真ん中に、一つ試験がある。中間テストなどといわれているその試験は、直接進級に影響するものではないけれど、噂によると進級が危ういときの救済措置にもなるらしい。

「あは〜それなら早く帰れる〜」

「も、もう! ちゃんと勉強しないとまた補習だよ!」

確かに試験期間中は半日だけしかないのですが、学校は早く終わる。けれども、試験の成績が悪ければ、結局今と同じように補習を受けなければならぬ。

わたしだって、予習しているとはいえ、いつ忘れてしまうかという不安がいつもあるのに。

でもきつと、雛菜ちゃんは上手くやる。わたしみたいにたくさん頑張らなくても、もつと効率が良いくて、ちゃんと成績を維持する方法を知っている。そして、その方法が使える人間なのだ。

「じゃあ、透先輩の家行こ〜?」

「べ、勉強会? いいよ!」

「ん〜? じゃあそれで〜!」

勉強の話だったので、そういうことだと勝手に思ったけれど、どうやら違ったらしい。とはいえ、勉強会をするということで雛菜ちゃんが納得してくれるなら、それでもいいと思う。

結局、効率がどうかという問題ではなくて、どういう名目で集まるかなのだから。

「おい、二人とも」

意識の外から聞こえてきた声は、とても低くて、まるで唸っているかのよう。

そもそもこの部屋には三人しかいない。わたしと、雛菜ちゃんと、補習を担当する先生。

「今は、補習中、なんだが?」

「やは〜。せんせーすごい顔〜」

このあと、補習とは別に一時間ほど説教されてしまったのは言うまでもない。



家とは違う環境で、周りの目もある。適度な緊張感というのは、集中するには最適な環境だとわたしは考える。

そういう点では、透ちゃんの家は真逆かもしれない。家のようにリラックスできるし、周りの目は知っている人ばかり。

集中できないから問題が解けないのかといわれれば、そんなことはない。そもそもいま解いている問題集だって、一度やったことのあるものだ。それでも間違えはするけれども。

「ね、この問題どう解くの?」

「日本語読めれば解けるんじゃない?」

「ふふ……現国だしそりやそう」

なんて透ちゃんの質問を受け流す円香ちゃんは、数学をやっている。

「ね、これは?」

「漢字知らないなら解けないから諦めて」

「えー」

円香ちゃんはため息をつくど、机に置かれたスマートフォンを手に取る。

「ね、これ……」

「少しは自分で考えたら？」

苛つきの混ざった声にも、透ちゃんは動じることなく両腕を組んでうーんと唸る。

そして数秒、数回唸ってから、両手を上げる。

「ざっぱり分からん」

円香ちゃんは再びため息をつくど、スマートフォンを透ちゃんに突きつける

「自分で考えないからでしょ」

「……ふふ、教えてくれるやん」

こういうやり取りに、目が行ってしまいうから、集中できないのだ。分かっているけど、気がついたら見ているのだから仕方ない。

「あ、雛菜ちゃんそこ間違ってるよー！」

「え〜どこ〜？」

問題集に視線を戻すついでに、雛菜ちゃんの問題集を見てみると、計算間違いをしていた。

「ほ、ほらここ。直角じゃないから三平方の定理じゃないよー！」

「え〜直角ほくない〜」

「で、でも、直角の記号がないから……」

もしかすると、問題集のミスだったり……するはずがなかった。

問題のすぐ隣には正弦定理の説明が書かれている。

「ほ、ほら、ここの式使えば解けるよ!」

問題を確認して、当てはまる公式を指さす。

しかし、どうやら雛菜ちゃんは納得できなかったようで、頬を膨らませて眉尻を上げている。

「覚えること多すぎ〜!」

叫んで、透ちゃんのベッドに飛び込んでしまう。

「ひ、雛菜ちゃん! ちゃんとやらないとまた補習だよ!」

雛菜ちゃんは、透ちゃんのベッドシーツを体に巻いて隠れてしまう。

「それもや〜だ〜!」

もしかしてわたしの教え方が良くなかったのだろうか。少しだけ偉そうに言ってしまったかもしれない。

「ね、小糸ちゃんこれ解ける?」

謝ろうと、シーツに手を伸ばしたところを、透ちゃんに遮られた。

「こ、これは……こ、こ、こ、だよね」

透ちゃんの教科は、いつの間にやら国語から物理に変わっていた。

内容も簡単で、ただ公式を答えるだけだったので、ノートに書いてから見せる。

「おお。じゃあ、これは？」

「それは今の応用で……」

今の公式に数字を入れるだけだったのだが、代入する数字を確認する前に問題集が飛んでいってしまった。

「ぐえ」

カエルでも鳴いたかのような声を上げて、透ちゃんは仰け反った。

「なにしてんの」

円香ちゃんは透ちゃんの襟口を勢いよく引つ張ると、わたしに目配せしてくる。

——雛菜も起こして。無理やり

多分そう言っていた。違うかもしれない。まあいいや。どちらにしても、雛菜ちゃんを起こさないといけないのは変わらないし。

「ひ、雛菜ちゃん起きなきゃ……だめだよ！」

「あ——！」

シーツは、ほとんど抵抗なく引つ張ることができた。中から出てきた雛菜ちゃんは、宙に浮いたシーツに手を伸ばすけれども、もう届かない位置まで上がっていた。

「小糸ちゃんスパルター〜!」

「樋口スパルター」

不満そうな雛菜ちゃんの声に続けて、苦しそうに叫ぶ透ちゃん。

持ち上げたシーツは、重力と空気抵抗によって、縁をひらひらとたなびかせながら、ゆっくりと落ちてきた。

持ち上げたあとのことを、考えていなかった。

CMとかで、勢いよくやっているところを見て、自分もやってみたかった。それだけなのに、そのあとにこんな展開が待っているなんて、テレビは教えてくれなかった。

「わ、わ……っぷ」

逃げる時間も、逃げる場所もなく、シーツはわたしの視界を奪うと、全身を包み込んでしまう。

なんとかかかそうと、布を前に前に送っていくけれども、いつまで経っても終わりは来ない。

「あ、あれ、あれ?」

「ふふ、小糸ちゃんおぼけみたい」

「小糸ちゃんみたいなおぼけなら大歓迎〜！」

雛菜ちゃんの声とともに、後ろから何かを抱きついてきた。

「おぼけ捕まえた〜！」

シートごと抱きつかれてしまったので、これ以上手繰り寄せることができない。

「ひ、雛菜ちゃん離してえ〜！」

「やだ〜」

一応引つ張つてみたけれど、ピンと張った布はびくともしない。

「小糸、だいじよ……大丈夫？」

「ま、円香ちゃん今笑つたでしょ！早く助けて〜！」

「笑つてないから……」

嘘だ。声が震えている。

結局、円香ちゃんが剥がすまで雛菜ちゃんは離れてくれなかった。

やつとのことでシートを取ると笑い転げる二人と、笑つてはいないけれど顔を真っ赤にして笑いをこらえる円香ちゃんがいた。



結局こうなると、なんとなくそんな予感があった。

やはり、勉強会というのはただの口実でしかない。

「あー、円香先輩雛菜のポテト取ったー!」

一度でも脱線すれば、もう戻ることはない。だから脱線する前に、少しでも多く詰め込む必要があった。もちろん、わたしにはなくて雛菜ちゃんに。

幸いなことに、透ちやんが休憩を提案するより前に、最低限の内容は詰め込めたので、いつも通りなら試験も問題ないだろう。

「は? 誰のとかないでしょ」

そして今は、透ちやん以外の三人がお皿に盛られたポテトを囲ってくつろいでいる。もちろん雛菜ちゃんのものではない。

「……ちやんと考えてる?」

透ちやんはといえば、延長戦が開催されていた。主催は円香ちゃん。あまりにも考えていなさすぎる透ちやんは、円香ちゃんに言われて居残りしている。

「うん……あ、違った」

「どっち」

「来週のこと考えてた」

この場合の来週とは、平日のことではない。来週末……つまり、WINGのことを考えていたと。

「考えても仕方ないでしょ」

円香ちゃんはため息をつくとお皿へと手を伸ばして、雛菜ちゃんの手を掴んだ。

「それ、私のなんだけど？」

雛菜ちゃんは笑顔を变えずに、腕に力を込める。けれども円香ちゃんの手は離れず、雛菜ちゃんの表情から、みるみるうちに笑顔が消えていく。

「円香先輩理不尽〜！ きらい〜！」

「はいはい、どーも」

そう言うと、円香ちゃんは手を離れた。結局、なにをしたかったのだろうか？

ようやくポテトにありついた雛菜ちゃんは、一口で食べきると、再び笑顔に戻る。

「雛菜は楽しみだよ〜」

「わ、わたしも、楽しみ……かな！」

本当は、少しだけ、ほんの少しだけ怖いけれど。

いや、少しではない。ものすごく怖い。けれど、楽しみであることも本当のこと。この前のライブみたいに、キラキラしていてたくさんの人と、みんなと同じ時間を一緒に過ごせるのだと思うと、期待せずにはいられない。

「あ、そだ」

透ちゃんはシャーペンを立てると、指揮棒のようになってくると回し始めた。

「終わったらさ、あそこ行こうよ、レストラン」

レストランと言われて、最初に思い浮かんだのはプロデューサーさんに連れて行ってもらったレストラン。

外から見れば少し洒落た一軒家で、中に入れば場違い感しかない高級感のレストラン。いまでも、あのハンバーグの味は忘れられない。

「そんな金ないでしょ」

やはり、あのレストランのようだ。

メニューには値段が書いておらず、プロデューサーさんがいくら支払ったのかも知らないけれど、絶対高い。学生のわたしたちが払えるような金額ではないことは間違いない。

「私らっていくら稼いでるんだっけ？」

「知らない、そんなの」

そういえば、一応曲を歌ったりテレビに出たり、ライブをしたりと、お金の繋がりがそ

うなことはいろいろとしてきている。けれども、プロデューサーさんからお金の話は聞いたことがない。オーディションを受けたときから、たったの一度もだ。

「実はプロデューサーがくすねてたり」

「え、ええっ!?!」

プロデューサーさんに限ってそんなことはしない……と思う。人はお金が関わると大きく変わってしまうと聞いたことがある。多分どこかのテレビ番組だったと思うけれど。

「ごめん、冗談冗談」

「も、もう透ちちゃん！ 冗談でもそんなこと言っちゃだめだよー!」

本気でそんなことを言うわけがないと、冷静になつて気がついた。プレゼントを渡そうとしているような相手に、そんな不信任感を抱いているとは思えない。

「知らないけど、知らないってことは、良くてゼロなんですよ」

「あは〜ゼロだ〜」

良くてゼロ、ということとは、良くなければマイナスということになつてしまう。事務所に入っていて、他のユニットもいるのだから、わたしたちが赤字だから即倒産なんてことにはならないだろうけれども、足を引っ張っているかもしれない、というのはどうにも息苦しい。

赤字だとか、黒字だとか、よく聞く単語ではあるけれども、実際のところどうなったら黒字になるのだろうか？

そういうことを、少し勉強してみてもいいかもしれない。

でも……。

「お、お金の心配より、今は勉強だよ、透ちゃん！」

「うへーい。みんなスパルタだなー」

「えー、雛菜は透先輩側だよ」



試験初日。試験期間中は午前中しか学校がないため、お昼前には下校できる。普段であれば下校したあとにみんなが集まって勉強会……なのだけれども、今回の試験期間は別の時間に割り当てようということになった。

今週末はいよいよWING本選。一昨日の勉強会で一通りは試験範囲を網羅できているはずなので、この時間はレッスンに充てようと提案したら、特に反対もなく受け入れてもらえた。

「小糸、この前変えたところ遅くなってる」

「あ……ご、ごめんね」

「あは〜円香先輩きびしくんだ〜」

確かに円香ちゃんの言うとおり、先週ストレイライトの人たちに教わって変えた部分にまだ慣れていない。みんなは教わってすぐに綺麗にこなせているというのに。

やはり、もつともつと努力しないとイケないようだ。

「雛菜もテンポ揺れてる」

「……円香先輩きびしくんだー」

雛菜ちゃんは頬を膨らませると透ちゃんに抱きつく。

「雛菜、透先輩に教えてもらうもんねー!」

「その浅倉も遅れてるんだけど?」

「どうやら、円香ちゃんからすればみんなはまだまだ及第点に達していないらしい。」

「え、樋口と合ってるはずだけど」

「……そういうことなんでしょ。大丈夫なの、これ」

つまり、みんなまだできていない部分があるようだ。わたしからしてみればみんなすぐ上手にできているし、確かに若干のズレはあるかもしれないけれど、指摘するほどではないように思える。

それはあくまでわたしの考えであって、わたしたちの考えではない。みんなで決めた

ことなのだから、みんなが納得できる形にしなければ。

「まあまあ、一度休憩したらどうだ？」

誰一人として大丈夫だと言い切れない中で、休憩を提案してきたのはいつの間にか
レッスン場に行ってきたプロデューサーさん。

プロデューサーさんは両手に四本のペットボトルを掴んで、軽く左右に振っている。

「俺は今のも好きだけだな」

「甘やかさないでもらえますか？ 図に乗る人が居るので」

即座に円香ちゃんからお叱りを受けてしまう。

「ぶ、プロデューサーさん。それ、もらいます」

プロデューサーさんが持っているペットボトルを受け取って、みんなに配っていく。
配り終わってすぐに、自分の分を開けて飲む。中に入っている水は、ただの水だけ
ども、冷たい水は火照った体を冷ましてくれる。

「いやいや、本音だぞ。みんなが踊るところを見ると、俺も一緒に踊りたくなってくる
もんな」

「ふふ、いいよ。踊ろ」

透ちゃんの返事が予想外だったのか、プロデューサーさんは一瞬だけきよとした
表情を見せてから、苦笑いで応える。

「あはは、邪魔になっちゃうから遠慮しておくよ」

きつとそれは、プロデューサーさんなりの気遣いだったのと思う。WINGが近いことや、わたしたちがレッスンを頑張っていることを知っているから、その邪魔になつてはいけないと、そういう考えだったのだと思う。

でも、その瞬間、間違いなくプロデューサーさんの一言が、この場の空気を大きく変えてしまった。

「邪魔だと思う？」

だから、その透ちちゃんの一言に、びっくりしてしまった。

とても真剣で、重くて、少しだけ怖かったから。

「そりゃあ、素人が一緒に踊ったら邪魔だろうな」

そんな変化に気がついていないのか、プロデューサーさんはあははと笑いながら応えている。

とてもではないけれど、笑っていられるような雰囲気ではなかった。少なくとも、わたしにとってはそうだった。

「……………そっか」

そう言うのと透ちちゃんは肩を落として水を飲む。すると、それを見た雛菜ちゃんが、ペットボトルの蓋を閉めて笑う。

「ん〜雑菜、今日はもう十分かなって思う〜!」

誰の賛同を得るよりも先に、雑菜ちゃんはペットボトルを床に置いて、透ちやんの手を取った。

「透先輩〜帰りにフラツペ飲もう〜」

「あー、いいね」

雑菜ちゃんは透ちやんの手を引つ張って、レッスン場を出て行くこうとする。

「え、まだ時間は……」

プロデューサーさんの言葉を遮るように、円香ちゃんがわざとらしくため息をついた。

「そういうことなんで、失礼します」

そして円香ちゃんもレッスン場を出て行って、残されたのはわたしとプロデューサーさんだけ。

つい数十秒前まで賑やかだったレッスン場は、外の車の音がうるさく感じるほど静かになってしまった。

「あ、あれ……」

今の透ちやんの反応で、確信した。

透ちゃんは、プロデューサーさんと一緒にやりたいのだ。ノクチルという四人のユ

ニットとしてアイドルをしたいのではなく、プロデューサーさんも入れた五人で……いや、もしかすると、ファンの人も含めたもつと多くの人たちと一緒にアイドルをしたいのだ。

だから、わたしの誕生日プレゼントにノクチルのグッズを選んだ。だからそのグッズをプロデューサーさんにも渡そうとした。

けれど、プロデューサーさんは違う。そう言われてしまったから。

——でも、それって……わたしと同じじゃないかな

わたしとお母さんの、少しだけ前までの関係に、少しだけ似ているような気がした。ただ、互いに噛み合っていないなかっただけだと、互いに理解し合えていないだけではないかと、そう思った。

それを、直接伝えていいものなのだろうか。

わたしがそうだと行ったところで、それでプロデューサーさんの気持ちを変えられるとは思えない。プロデューサーさんに、どうにかしてそう思ってもらえないかな。

「あ、あの、プロデューサーさん」

わたしの声に振り向いたプロデューサーさんの表情は、どこか歪んでいて、少しだけ怖かった。

「た、多分なんですけど、透ちゃんは一緒にやりたい……んだと、お、思います」

プロデューサーさんは、歪んだままの表情で苦笑いをして応える。

「でも、もうすぐWINGだし、邪魔するわけには……」

その表情は、少しだけ狂っているように見えた。それが怖くて、逃げるように一言、伝えてからその場を去ることにした。

「そ、その問題って……本当に合ってるんでしょうか……？」

なんもかんも、一緒に

「……さむ」

レッスン場から出て行って、制服に着替え直して、電車に乗って。

ここがどこだか分からない。けれど、透ちゃんが電車を降りたから、わたしたちも一緒に降りた。

きつと、海が見えたから。

誰が何を言うでもなく、気がつけば砂浜にいた。

「当たり前でしょ」

もう秋とは言えないくらいに寒い日が続いているし、日も沈みかけている。砂浜だから風を遮るものもなく、寒くなる要素は十分すぎるくらいに揃っている。

夏はあれほどにも涼しくしてくれる潮の香りも、砂浜を濡らす波の音も、今は寒さを際立てるだけだ。

「……いめん」

その謝罪は、いったい何に対してだろう。

円香ちゃんの言葉に対してか、レッスンを途中で抜け出したことか、誰にも行き先を伝えずにこんな砂浜に来たことか。それとも、その全てか。

「なんか、キツかった」

透ちゃんはひとつため息をつく、そのへんに置いてあった石を拾う。

「気づいてない方も悪いでしょ、あんなの」

透ちゃんは、拾った石を海に向かって投げると、もう一度ため息をつく。

「あは〜雛菜もやる〜!」

楽しそうに見えたのか、雛菜ちゃんも適当に石を拾って海へと投げた。

「雛菜の勝ち〜!」

透ちゃんを見ているから、どうしてプロデューサーさんが気が付かないのかと疑問に思う。

けれども、プロデューサーさんを見ていたら?

「ね、ねえ、本当……かな？」

「えー、雛菜のが遠くまで飛んだよ〜？」

そういう勝負だったのか。確かに雛菜ちゃんの方が遠くまで飛んでいたけれども、そもそも透ちゃんに勝負する意思があつたかどうかは疑問だ。

「じゃなくて……！」

危ない、流されるところだった。

「き、気づかないんじゃないか、気づけなかったり……とか、しないかな？」

わたしたちのためにスケジュールを調整して、お仕事を取ってきて、WINGも近くでオフアームも増えて。毎日駆け回る中で、そんなわたしたちのワガママには、気がつかないかもしれない。

わたしだって、同じようなことをしていたのだ。

みんなとの時間を割いて、三年間勉強して過ごしてきたし、最近も自主レッスンで同じことをした。

必死なとき、周りが見えなくても仕方ないのかもしれない。

「なにそれ」

言ったのは、円香ちゃん。見れば、眉間にシワを寄せて、下唇を噛んでいる。「それじゃ悪者つてこと?」

きつと円香ちゃんも理解してくれている。そうでなければ、わざわざ聞いてこないだろう。

でも、そうではない。首を横に振って円香ちゃんの言葉を否定する。

「た、たぶん、誰も悪くないんじゃないかな……?」

誰かが悪いわけではなくて、ただただ噛み合っていないだけ。

わたしとお母さんがそうだったように、ほんのちよつとしたことなのだと思う。

「あー……あー」

透ちちゃんは、一歩ずつ海へと歩いていく。透ちちゃんの髪が海と一緒に揺れて、赤い光を反射する。

足が波にあたって、透ちちゃんは足を止めた。

「……ろう」

ぼそりと呟いた言葉は、北風にさらわれてしまった。

「ばかやろー」

のんびりしたような、気の抜けたような声。けれども、苛つきと悔しさと悲しみが込

められた声だった。

円香ちゃんが歩きだして、雛菜ちゃんが走り出した。わたしも、追いかけるように走り出す。

その瞬間、影がわたしの横を掠めていった。少し遅れて、風が追いかけてゆく。

「ばかやろー!」

わたしを含めた全員の肩が跳ねる。

わたしたちの、誰とも違う声。透ちゃんとは違って野太くて、感情がむき出しになっていて、少しだけ怖い声。

ここにいないはずの声。本当はここにいてほしい声。

「透」

プロデューサーさんは、それだけ言うのと透ちゃんの手を引つ張つて波から離す。

「俺、気づけなくて……」

「ごめん」

プロデューサーさんの言葉を遮つて、透ちゃんは謝罪の言葉を口にする。その謝罪

は、やはりなにに対してかは分からない。

「でも、プロデューサーには一緒にいてほしいんだ。なんもかんも、一緒に」

でも、透ちゃんの気持ちに、プロデューサーさんは首を横に振る。

「俺はあくまで仕事でやってるし、学生じゃないから、それはできないよ」

「このっ——」

円香ちゃんがプロデューサーさんに向かって一步を踏み出すと、プロデューサーさんは続ける。

「でも、ちよつと……いや、大分認識を間違つてたみたいだ。俺はみんなの面倒を見なきゃって思つてたけど……みんな、みんなの考えを持つてるんだもん」

プロデューサーさんは自分の頭を軽く叩くと、ははと乾いた笑いを零す。

「当たり前だよな……そんなの」

プロデューサーさんは深呼吸をすると、両手で透ちゃんの手を握る。

「透、それに円香も、雛菜も、小糸も。すまなかつた。もう一度——」

プロデューサーさんの言葉はしかし背後から飛んできた怒号にかき消されてしまう。

「こらてめえ！ なにしてんだ！」

驚く暇もなく、今まで目の前にいたはずのプロデューサーさんがいなくなってしまうた。ほぼ同時に、足元からドサツと砂が跳ねる音が聞こえた。

「ぴえ……っ！」

視線を下に向けると、プロデューサーさんが誰かに押し倒されていた。その誰かは、プロデューサーさんから目を離すことなくもう一度叫ぶ。

「早く逃げろ！」

「い、いや、俺は——」

「うっせえ黙ってろ！」

なにがなんだか、状況が掴めない。ただ、プロデューサーさんがビンタされたことだけは理解できた。

止めないと思っただけで、どうやって？

「あの、誤解です。確かに変な人ではありませんけど」

「あはく分かるく」

そんな中でも、冷静に言葉を発したのは円香ちゃん。そして、円香ちゃんの言葉で、この誰かが誤解をしているのだと気づく。

その誰かは、プロデューサーさんの胸ぐらを掴んだまま振り返ると、威嚇するように言う。

「は？」

「びえ……」

どうして、何も言っていないわたしを見るのか。そんな理不尽を感じながらも、口から出てきたのは引き攣った声だけ。

「うちらアイドル、で、そっちがプロデューサー」

透ちやんがゆっくりというど、プロデューサーさんの胸ぐらを掴んでいた手はゆるゆると解けていき、知らない誰かの顔は、夕日に照らされていても分かるほど青ざめていった。



「ほんつとにごめん！ 最近この辺不審者多くてさ、てつきり……ほんとにごめん！」
「いや、本当に大丈夫ですから。……というより、なんかこちらこそすみません」

知らない人は、酒井さんというらしい。

プロデューサーさん押し倒して、一発叩いた酒井さんは、もちろん誤解が解けたその場で謝っていた。それでも足りないと思ったのか、断るプロデューサーさんを無理やり連れて行った。

もちろんわたしたちも追いかけた。

「家めちやひろいやん」

「どう見ても旅館でしょ」

なんなら入るときに「えやま旅館」と書いてあった。どうして酒井さんなのにエヤマさんなのかは分からないけれど。

「お詫びと言ってはなんだけど、今晚泊まつてよ。服も汚しちゃったし洗濯して——」
酒井さんの提案に、プロデューサーさんは慌てて首を横に振る。

「いい、いいいえ、そこまですてもらわなくていいですから。それに、この子たちも明日は……」

明日は試験のあとに、レッスンの予定。そのはずだけでも、プロデューサーさんはそれを言わなかった。

「ね、泊まろうよ」

透ちゃんがプロデューサーさんの後ろから声をかける。

「わ、わたしも、ちゃんと話したほうがいいかも……ううん、は、話したいです」
分からないけれど、そうするべきだと思った。

話すだけならここでなくともできるかもしれない。けれどもこの機会を逃したら、自分……もしかしたらもう二度と話す機会を用意できないかもしれないと思った。

「ご飯美味しい〜?」

雛菜ちゃんの間いかけに、酒井さんは腕を叩く。

「もちろん、そこは保証するよ!」

「やは〜! じゃあ雛菜も泊まりたい〜!」

理由は違うけれど、雛菜ちゃんも賛同してくれている。あとは――

「要は間に合えばいいんでしょ、明日」

円香ちゃんに視線を向けると、ため息交じりに言う。

「じ、じゃあ!」

酒井さんは円香ちゃんの言葉に目を輝かせながら食いつく。

「……あの、なにか曰く付きとか、騙してるとかじゃないですよね?」

そう聞いて、はいと答える人がいるかどうかは疑問だけれども、どうやら酒井さんには効果があったようだ。輝かせた目を一度しまつて、恥ずかしそうに目を逸らして頬を掻く。

「あー、えっと……実はうち、あまり繁盛してないんだよね。も、もちろん曰く付きとかじゃないから!」

酒井さんのもじもじとしながら、後ろめたそうに呟く。

「そ、その、アイドルっていうので、その人気にあやかれたりしないかなーって」

お詫びという割には押しが強いと思っていたけれど、なるほど納得がいった。

プロデューサーさんは、何かを口にしかけて、こちらを……わたしたちに振り向く。酒井さんの方へと向き直ると、一歩下がって頭を下げる。

「それじゃあ、お言葉に甘えさせていただきます」

ヨンブンノゴ いっしよに

プロデューサーさんは砂まみれだったし、透ちゃんも足が濡れてしまっていたので、まずはお風呂ということになった。

大浴場と名のつくだけあって、本当に大きかった。桶の数からして、クラス一つが丸々一緒に入れるくらいの大きさはある。さらに男湯と女湯で別れているのだから単純計算で倍は入れることになる。

そんな大きい浴場に興奮を覚えながらもぐつと抑えて、泳ぎ回る雛菜ちゃんと透ちゃんを眺めていた。

正直を言うとい泳いでみたかったが、お風呂で泳ぐのはマナー違反だといろいろなところで聞いているのでわたしはやらない。

体が温まったところでお風呂を出ると、更衣室には浴衣が置かれていたのでそれに着替える。脱衣所をでるとすぐに部屋へ案内された。

浴場の外で待っていた酒井さんは、先程とは大きく印象が変わっていた。浴衣を着て、おしとやかというか、しっかりしていそうな雰囲気だった。

「妹さん？」

姉妹か双子か、そう思えてしまいうくらいには別人のようだった。かといって、透ちやんのように直接聞く勇氣はなかったけれども。

「ち、ちがうわっ！ し、仕事中はこういうモードなん……こういうモードなんです」
恥ずかしそうに頬を赤くして振り向く酒井さんを見ると、元のままでもいいんじゃないかと思えてしまう。

それでも、このお仕事はそういうお仕事なのだろう。おしとやかにして、愛想よく、丁寧に行っているべきなのだろう。

「こちらがお部屋になります」

部屋の入り口はなんだか和風の玄関といった様子で、酒井さんがガラガラと音を立てながら開けると、すぐに襖で仕切られていて、手前は玄関のようになっていた。

まるで一つの家みたいだななどと思っていると、雛菜ちゃんが靴を脱ぎ散らかして襖を開ける。

「いい匂いがする〜！」

醤油っぽい香りと、甘い湿った香りに、口の中はよだれで潤ってしまふ。

「お食事の用意はできておりますので——」

「いいよ、普通で」

全く知らない相手ならばともかく、わたしたちはもう酒井さんの素を知っている。

「そ、そう……う？」

これはどちらだろう。

どちらにせよ、畏まられてはこちらとしても身構えてしまう。

「大丈夫です、気にするほどの神経は持ち合わせてないので」

「うんうん」

分かつているのかいないのか、透ちゃんが嬉しそうに頷くと、酒井さんもようやく笑ってくれた。気を使っている硬い笑顔ではない。ついさっきまでの女将をやっているとは思えないやんちゃな笑顔。

「じゃ、ちやつちやと入った入った。んで、熱くて旨いうちにちやつちやと食え食え」

きつと、普通の宿泊客に同じことをしたならば、その客はもう来ないだろう。下手をすれば怒られるかもしれない。

「はーい」

でも、わたしたちにはちようどいい。距離が近くて、相手が分かるほうが安心できる。

「お、おじやまします」

「あはは、他人の家じゃないんだからさ。くつろいでってよ」

他人の家なのだけでも。

けれども、その一言で少しだけ気が抜けた気はする。

靴を脱いで、雛菜ちゃん靴も揃えてから奥の部屋に入ると、小さな台が五つ、コの字に並べられていた。台には料理がもられたお皿やお椀が載っていて、両側に挟まれるように置かれた台には、すでにプロデューサーさんが座っている。両隣に、向かい合う形ですでに雛菜ちゃんと透ちゃんが座っていたので、雛菜ちゃんの隣、入り口から一番近いところに座る。

全員が座り終わると、プロデューサーさんと向かい合うように酒井さんが正座する。その座り方はゆっくりと流れるようで、思わず見とれてしまった。

「さてと、その人は別で部屋とってあるから寝るときは別だな。んで、料理の説明……はいいか。明日にでも感想聞かせてくれ」

雛菜ちゃんがおあずけ状態なのを見て、酒井さんは苦笑する。

「改めて……今日はすまなかった」

そう言うのと、やはりゆっくりとした流れるような動きで腰を折り曲げて、頭を下げる。「不器用だし、お金もないから、この場を貸すくらいしか謝罪はできない」

「い、いや、だからもういいって——」

「プロデューサーさんの言葉を遮って、酒井さんは顔を上げる。

「だから、ちゃんと話して、理解し合えることを願ってるよ」

その声からは気軽さは感じられなかったけれども、接客つぼさも感じなかった。知り合いだとか、友達だとかに真面目に話す、そんな声。

怖さを感じたのは、声にはなく、酒井さんの声が震えていたからかもしれない。

「それじゃ、あたしはこれで」

そう言うのと、ゆっくり立ち上がって音を立てずに歩き、静かに部屋を去っていった。

「いただきます〜す〜」

雛菜ちゃんも、待ってましたと言わんばかりに箸をとる。そのまま前菜だとか順番だとかそういうものをすべて無視して、目の前にあるお魚に手を伸ばした。

改めてわたしの目の前に置かれたご飯たちを見てみる。

ほうれん草のおひたしに炊き込みご飯とお味噌汁。それとなんのお魚か分からないけれども、何種類かのお刺身が置いてある。小皿にはすでに醤油が注がれており、わさびは別のお皿に盛られている。

盛り付けはとて丁寧で、出会った直後の荒々しい酒井さんからは想像もつかない。

「ん〜ぷりぷりして〜う〜」

「ひ、雑菜ちゃん、口の中に入れたまま喋っちゃだめなんだよ!」

ということをこれまで何度も言ってきたけれども、聞いてくれた試しはない。半分くらい諦めている。

「まあ、ここまでセッティングされちゃったんだから、ちゃんと話すか。……まあ、食べながらでもいいからさ」

そう言うと、プロデューサーさんは箸を取って、おひたしを口に入れる。

「うん、確かに旨いな」

正直、食べてもいいものかと思っていた。お話をする場として用意してくれているし、食べながら喋るのは先ほどわたしが言ったとおり行儀が悪い。

つまり、食べ始めればお話ができないし、お話を始めれば食べられない。だから、プロデューサーさんの言葉のおかげでわたしは目の前の料理に手をつけることができる。

「本当はあまりこういう話はしたくなかったんだけどな」

プロデューサーさんはお刺身を一口食べると言った。

「俺は、ノクチルっていうユニットについて、四人だからこそ輝くものがあると思って

る」

プロデューサーさんが話している間、雛菜ちゃんも透ちゃんも聞いているのかいないのか分からないくらい料理に食いついている。円香ちゃんはゆつくりと、一応聞いていますよと体裁を保ちながらゆつくり食べている様子。なので、わたしは円香ちゃんのペースに合わせて食べるようにする。

「正直なことを言うと、個々の活動時に俺はあまり魅力を感じていない。もちろん、ちゃんと仕事をこなしてくれているのは知っているし、それで人気を伸ばしているのも知ってる。だから個々の活動を否定するわけじゃない。けれど、四人でいるときに比べたら、それは些細なものだと思ってるんだ」

プロデューサーさんの口から、わたしたちの評価を初めて聞いたかもしれない。プロデューサーさんが普段どんなことを考えているのか、どんな思いでわたしたちのお仕事を取ってきているのか、考えたこともなかった。

だから、初めて聞いた評価が、あまりプラスで内容でないことは少しだけ辛かった。「でも、四人でいるときは、たまにすごく眩しく見えるんだ。だから、その邪魔をしたくないって思ってる。俺がその輝きをくすませたくないんだ」

プロデューサーさんの持つ箸は、小刻みに震えていた。

最近、プロデューサーさんとの間に距離があるように感じるが多かった。それは

気のせいではなくて、プロデューサーさんが意図して取っていた距離だったようだ。

けれども――

「ふおーははふへは」

プロデューサーさんの話が終わったと認識したのか、透ちやんが箸でプロデューサーさんを指す。

「と、透ちやんー」

なにを言っているか分からないレベルで口に食べ物を含みながら、それも箸で人を指す姿に、さすがに指摘せざるを得ないと感じた。

透ちやんはゴクンと喉を鳴らしながら飲み込むと、再び箸でプロデューサーさんを指す。それも行儀悪いのだけでも。

「そーじゃなくてさ……うーん、なんだろ」

違うと主張はするものの、具体的に何がとか、どうしてとか、そういった理由は一切出てこない。

わたしがそうであるように、きつと透ちやんもどうしたらいいのか分かっていないのかもしれない。

「……ごめん、わからん。わからんけど、そうやって壁を作られるのはやだ」

無表情で冷静で大人びているように見える。けれども、言っている内容はとても子供っぽい。プロデューサーさんも困った様子で首をかしげてしまう。

「俺はさ、みんなみたいに付き合いが長いわけじゃなくて、まだ出会ってから半年くらいしか経ってないんだよな。だから……だからなのは分からないけれど、たまにみんなが話していることが分からなくなるんだ」

「更年期では？」

円香ちゃんの言葉に、プロデューサーさんが苦笑するのを見てから、円香ちゃんは続ける。

「でも、今ので理解できましたよね？」

それに、プロデューサーさんは首を横に振って返す。

「いや、まだだ。だって、透が言いたいことはそれだけじゃないだろうか？」

プロデューサーさんは白いお刺身……先ほど食べた感じはおそらくイカを醤油で黒く染めてから口に入れる。

「透は何か分からないけれど、壁を作って欲しくないって言ったよな。けど、俺はあくまで283プロダクションに所属してるプロデューサーでしかないんだ。みんなみたい

に表舞台に立つ人間じゃなくて、みんなを輝かせるためにどうするか考える人間でしかないんだよ」

確かにそうだけれども、そういう話ではない。そう思った。

プロデューサーさんが今言っているのは、あくまでも役割の話。それはきつと透ちやんもみんなも、もちろんわたしも理解している。

けれども――

「そ、それって、壁を作らないと……だめなんですか？」

わたしの言葉に、一斉に視線がこちらを向く。そして、プロデューサーさんが先ほど言っていた言葉をそのまま受け取るなら、この言葉だけでは足りない。

「と、透ちやんが言ってる壁って、や、役割的なものじゃないって思うんです。あ、えと……違うかもですけど……。わたしと透ちやんとか、雛菜ちやんと透ちやんとか、透ちやんと円香ちやんとか、そういうのに壁があるんじゃないかって……」

それに、透ちやんは首を横に振る。

「ううん、違わない」

その言葉とほぼ同時に、雛菜ちやんがわたしに抱きついてくる。

「雛菜と小糸ちゃんも〜！」

「ひ、雛菜ちゃんあぶないよ〜！」

危うく倒れそうになった。それに、雛菜ちゃんは雛菜ちゃんではつぺたにご飯粒をつけたままで。

「えつと……すまん、俺には分からない」

雛菜ちゃんを押し返したところで、プロデューサーさんは眉間にしわを寄せて俯いてしまう。

「だからさ、違わないんだって。私らも、プロデューサーも」

やはり、透ちゃんの言葉は少ない。それでも、なんとか言葉にしようとしていることは伝わってくる。

みんな同じことを思っているはずなのに、だれも言葉にできない。伝えられないことが、伝わらないことがこんなにも息苦しいことだなんて知らなかった。

でも、伝わっていないことが分かってしまった。だから、伝えなければならぬ。どうにかして。

「浅倉が昼に言った言葉、覚えてますか？」

「ああ、一緒に踊るかって。でも俺も言ったとおり……」

「ええ、あれは浅倉ジョークです。そんな実力も運動神経もないことくらい、浅倉も私も

分かってますから」

今日の昼過ぎのレッスンで、透ちゃんはプロデューサーさんにダンスを一緒に踊らないかと誘った。もちろんプロデューサーさんが踊れるとは思っていないだろう。わたしは少しだけ期待してしまっただけでも。

「でも……じゃあ透は、何に怒ったんだ？」

「……プロデューサーは邪魔じゃないって思ったら、こう、よくわからなくなった」

透ちゃんの言葉に、プロデューサーさんは箸を置いた。

みんなの視線がプロデューサーさんに集まる中、プロデューサーさんは腕を組んで俯く。久しぶりに見た、プロデューサーさんの癖。

「み、みんなと一緒に……なんだと思います」

「……なるほどな」

「伝わった？」

納得したような言葉を吐いておきながらも、プロデューサーさんは透ちゃんの言葉に頷かない。

「いや、分からない。けれど、俺もなんとなく感じたことがあるよ」

プロデューサーさんは再び箸を取ると、お茶碗に盛られたご飯を一口分すくって、口へと運ぶ。そして数回咀嚼して、飲み込んでから続ける。

「俺も言葉にはできないけれど、意識してみる。だから、違つてたらまた教えてくれないか？」

「またこのご飯食べられるなら違つてもいいよ？」

雛菜ちゃんという言葉にプロデューサーさんは苦笑いをする、特に何を返すでもなく、食事を進める。

「あ、そだ」

透ちゃんは何かを思い出したかのように箸を置くと、席を立つて鞆を漁り始める。

「お、あつたあつた」

そう言つて取り出したのは、ついこの前、わたしの誕生日に渡してくれたリストバンド。

「お、この前のライブで出た物販じゃないか。どうしたんだ？」

そういえば、透ちゃんたちはこのリストバンドについて何か言っていた気がする。売れ残りだとか、在庫だとか。性格上、円香ちゃんは覗くとしてもプロデューサーさんに許可を取っているとは思えない。

そしてもし、これが在庫から勝手に持ち出したものだとして、それが本当はダメなこ

とで、プロデューサーさんがそれを知ったら……。

「透ちや——」

「倉庫にあった」

透ちゃんは私を見ると首を傾げる。止めるために呼ぼうとしたけれども、手遅れだった。

「あー……。えつとな、そういうのは持ち出す前に一言伝えてくれると助かる。まあこれはみんなに渡してなかった俺も悪いか」

「あ、ごめん」

透ちゃんはいたずらが見つかった子供のように、手を後ろに回してリストバンドを隠してしまう。

「それで、そのリストバンドがどうかしたのか？」

何かあるから出してきたのだろうと、プロデューサーさんはそう言っている。

透ちゃんは、少しだけ目を泳がせてから、再び手を前に出して、プロデューサーさんにリストバンドを差し出す。

「これ、みんなとおそろいだからさ、もらってよ」

しかし、透ちゃんの言葉にプロデューサーさんは固まってしまった。何かを理解しようとしているというより、ただ唾然としているという感じで、口も半開きだ。

しばらくして、プロデューサーさんは肩をふるわせながら手を伸ばす。

「そうか、そうか、俺のためか。そうか、そうだよな……！」

顔を赤くして必死に笑いを抑えながら伸ばした手は、リストバンドを掴む。

「スーツには似合わないかもな……。でも、ありがとう……！」



「あ、あの、時間って……！」

「大丈夫、この時間なら間に合うよ」

翌日、わたしたちは盛大に寝坊していた。

ご飯を食べたあと、特に何をするでもなく寝てしまったのだけでも、目覚ましがなはずもなく、誰かが起きるはずもなく、結局酒井さんが起こしに来るまでぐっすりと眠ってしまっていた。

昨日の話だと、プロデューサーさんが家まで送ってくれるということだったのだけ

ども、それでは間に合いそうにない。もう家を出ている時間だから。なので、直接学校に向かうことになった。

いつもとは違う場所から、いつもとは違う方法での登校は、もちろん不安しかない。どれくらい時間がかかるかも分からないし、プロデューサーさんの言葉を信じることしかできない。

「ごめんな、俺まで寝坊するなんて……」

プロデューサーさんが苦笑いをする、隣に座る透ちゃんがクスリと笑う。

「ほら、やっぱ一緒じゃん」

「……はは、そうだな！」

後部座席の真ん中だから、二人の表情はそれなりに見える。まだぎこちない気もするけれど、それでも一緒に笑っていた。

ふと、隣を見ると円香ちゃんが外を眺めている。ガラスに映った円香ちゃんも、少しだけ嬉しそうに見えた。

そして雛菜ちゃんは……。

「くかー」

「ひ、雛菜ちゃん寝ちゃだめだよ……!」

それにプロデューサーさんが笑って応える。

「学校まではまだ時間があるから、もう少し寝ても大丈夫だぞ?」

すると円香ちゃんが、顔を外に向けたまま、ため息をつけてから言う。

「甘やかさないでもらえますか? すぐ図に乗るので」

「……なかなか難しいな」

「あなたよりはマシかと」

そんな辛辣なことを言う円香ちゃんは、やはり笑っている。いたずらっぽく、この状況を楽しむように。

「あ、あとさ」

何かを思いついたかのように、透ちゃんが口を開く。

「ん、どうした?」

すると透ちゃんは、少しだけ間を空けて、小さくうーんと唸ってから言う。

「学校の少し手前で降ろしてよ。なんかはずいから」

そんな言葉を背景に、今日はいつものよりも信号で止まらないなど、そんなことを考えながら、窓の外に映る景色を眺めていた。

決戦前夜にひとつ足す

試験期間は今日で最後。試験期間中は、試験とレッスンしかしていなかったのだから、あつという間に感じてしまった。

試験が終わって、つまりは明日がWING本番。つまりは今日が最後のレッスン日である。

最終調整のためのレッスン……なのだけれども、ここまでやってきて、何かを変えるわけにもいかず、調整できることもあまりない。

レッスンを終わり、試験も終わったということであついで、いつい気が抜けてしまひそうになるけれども、本番は明日なのだ。

いつも通りにご飯を食べて、いつも通りにお風呂に入つて、いつも通りに歯を磨いて、いつも通りにベッドに入った。

「うーん……」

けれども、いつも通りには寝られなかった。

思い返してみれば、アイドルになつてからまだ一年も経っていないのだ。透ちゃんも

みんなも始めたから、一緒にいるためにわたしも始めたアイドルは、わたしの人生を大きく変えてくれた、変えてしまった。

ずっと心に引つかかっていたお母さんと向き合うことができた。それに、みんなと過ごす時間も今までよりずっと増えた。

なにより、この世の中にはわたしの知らないことが、学校では習えないことがたくさんあるのだと知ることができた。

歌やダンス、ラジオやテレビ番組の収録、ライブの設営、スケジュールの組まれ方。そして、気持ちの伝え方。

どれも、完全に理解したとはいえない。きつと……いや、間違いなく知れば知るほど新しい課題が見えてくるはずだ。

だから楽しかった。だから頑張れた。

まだ半年と少し。けれどもその短い期間で得られたことがどれほどのものかを、明日のWING本選で確かめられる。

怖さ半分と、期待半分。心臓はひっきりなしに鳴り続けている。

「そ、そうだ、みんなは……」

みんなも……透ちゃんも雛菜ちゃんも、円香ちゃんも同じなのだろうか。そう思ってスマートフォンを手に取る。

「……こんな時間に連絡したら迷惑だよね」

ホーム画面の時計ではもうすぐ日付が変わろうとしていた。

早く寝なければと自分に言い聞かせて、スマートフォンを置こうとしたら、手が震えた。いや、震えたのはスマートフォンだった。

「びえっ……！」

慌てて手を戻して画面を確認すると、透ちゃんがチェインのグループで発言していた。

『寝れない』

それだけ見れば、助けを求めているようにも、話したそうにも見える。

どちらか分からないまま、何を返せばいいかも分からずに眺めていると、再びスマートフォンは震え出す。

『わかる〜』

『うるさいんだけど、巻き込まないでもらえる?』

と、雛菜ちゃん円香ちゃんの順番で流れてくる。

みんな、同じのようだ。

この緊張が、不安からくるものなのか、高揚感からくるものかは分からないけれど、みんなも同じなのだと思うと、少しだけ安心できる気がする。

「で、でも、わたしも、みんなも寝なきやだよね……!」

明日寝坊しましたなんて、話にならない。寝不足で実力が出せませんでしたなんていう言い訳も同じだ。

「は、や、く……ね、な、きや」

寝転がりながら文字を打つなんて、慣れないことをしていた罰が当たったのかもしれない。

「わあっ。ぶ………ったた」

スマートフォンを落としてしまった。仰向けで操作していたので、顔面に思いつきり当たってしまった。

すぐく、嫌な予感がした。

前にも同じようなことをしてしまったのだ。あれは、まだわたしがアイドルになる前のこと。

応募要項を適当に埋めて、送るかどうか悩んでいるときに、手を滑らせて送信してしまっただ。

スマートフォンを拾うと、音が流れてきた。

「もしもし」

どうしてこう、嫌な予感ばかりが的中してしまうのだろうか。

「あは、小糸ちゃんからかかってくるの初めてかも〜！」

雛菜ちゃん個人にはこれでもかというほど電話をかけているけれども。遅刻だった、遅刻だったり、遅刻だったり。

でも、グループの通話をかけるのは初めてだった。そもそもわたしから発信する機会はないし、当たり前といえば当たり前かもしれない。

「あ、え、えと……これはちがって……」

間違えてかけてしまったと、今なら伝えられるはずだった。

「早く寝たら？」

次の瞬間には、円香ちゃんまで入ってきてしまつて、言うタイミングを逃してしまつた。

「ま、円香ちゃんまで……！」

「かけという言う台詞？」

ぐうの音もでない。今できることといえば、いち早くこの通話を終わらせること。

「そ、それはちがって……」

「ま、いいじゃんか。話した方が早いし」

透ちやんのフォローが心に刺さる。こうなってしまったからには責任を持つてちゃんと終わらせないと。

「え、えつとね、実は間違えてかけちゃって……」

しかしその言葉はまたしても遮られてしまう。

「ま、どうせやめなかつたし、浅倉の言うとおり早く終わるならいいんじゃない？」

それこそ、円香ちやんまで、だ。まさか円香ちやんまで向こう側の人間だったとは思わなかった。

三対一では敵うわけがない。もう諦めた方が賢明だろう。

それに、みんなと話すことで、少しだけ気持ちが悪くなった。

「あ、そだ」

透ちやんが何かを思いついたとき、それは何かが起こる予兆である。わたしがこの十年近い透ちやんたちとの付き合いいで得た知見だ。

だから、ついつい身構えてしまうけれども、透ちやんもみんなも黙ったまま、何も起

きない。

そのまま待つこと十数秒。

「な、なんだ……う？」

聞こえてきたのは、聞き馴染みのある声。

このグループにいるはずがない、プロデューサーさんの声が聞こえてくる理由は一つ。透ちゃんが招待したから。

「あは〜プロデューサーだ〜」

プロデューサーさんは最近ずっと忙しそうで、明日もわたしたちのためにいろいろとやることがあるのだと思うのだけれど。

「と、透ちゃんなにしているの……!」

「え、プロデューサー呼んだ」

それは分かっている!

そうではなくて、どうして呼んだのかということを知りたい。

プロデューサーさんに聞かれて困るようなことは話していない……と思うけれども、わざわざ言いふらすような場所でもない。

「いや、迷惑なら……迷惑じゃないから呼んだんだよね？」

「め、迷惑じゃないですけど……」

ただでも寝られなかったのに、余計に眠気が飛んでしまった。そもそもそんな言い訳をする前に、間違ってたかけたと言って通話を切れればいいのだけれども。

「いいえ、迷惑です」

次の瞬間には、円香ちゃんに否定されていた。

「プライベートまで覗かれたら、休みも休まりませんか?」

プロデューサーさんからしてみれば、いい迷惑だろう。夜遅くに呼ばれて、通話に参加したら迷惑だと言われるなんて。

「なら——」

「あくまで仕事なら、という話ですけど」

プロデューサーさんを遮って円香ちゃんが続けた。

これはつまり、仕事の話を持ち込むなど釘を刺したのだ。

ここではアイドルとプロデューサーという関係ではなく、知り合いか、もしくは友達という関係であると。

「あは〜円香先輩デレ期だ〜」

で、でれき……?」

いや、言葉の意味は知っているけれど、今の円香ちゃんが当てはまるのだろうか……?
?

その言葉が意味するのは、円香ちゃんがプロデューサーさんのことをす——
「ないから」

しばしの沈黙。誰か何か言わないと気まずい雰囲気になりそうだというタイミングで、プロデューサーさんの声が聞こえてくる。

「まあつまり、友達として呼んでくれたってことでいいのか？」

「そゆこと」

「(ととと)」

知らなかったけれども、どうやらそういうことらしい。

また少しだけ間を空けて、プロデューサーさんが続ける。

「それじゃあ友達として、助言を一つ」

改まってどうしたのだろうか。何を言われるのかと緊張しながらふと目に入った時計を見ると、もう日付が変わってしまっていた。

「早く寝ろ！」

小さくても大きくなる

WING本選。つまり準決勝と決勝はオーディションと名前はついているものの、中は立派なライブとして成り立っている。

公開オーディションということで観客は入っているし、地上波で放送もされている。それも生放送だ。

六つのグループにそれぞれ六ユニット。合計三十六ユニットから、各グループ一位の六ユニットが決勝に進むことができる。

観客からしてみれば、オーディションというよりも新人アイドルフェスといったところだろう。それでも、万人近くの人たちがこの会場にやってきているのだから驚きだ。

三十六ものユニットが集まれば、通常三十六もの控え室が必要になるものだが、残念ながらこの会場にはそれほど部屋はない。それでも控え室は必要なのだから、公平を期すために一部屋あたりを六つのユニットが使うことになっている。

「……」

きつと、いまここに集まっている人たちは、今日のために一年間……もしかしたら

もつとずっと前から頑張ってきた人たちなのかもしれない。そんな人たちが集まっている控え室が、明るい雰囲気になるはずもない。

なんというか、ずっとピリピリしている感じがする。互いに距離を取って、話しかけないように、話しかけられないように。音を出さないように、音を聞かないように。

正直、居心地が悪いと思った。

そんな雰囲気、さらに喋りづらくする。そしてまたさらに雰囲気が悪くなって、悪循環を生み出す。

「なんかやな感じ〜」

「ひ、雛菜ちゃん……」

そんな沈黙を、雛菜ちゃんは破ってしまふ。その瞬間、その場にいた全員の視線が雛菜ちゃんに向く。敵意や嫌悪感といった感情が込められた視線は、とてもではないが心地いいものではなかった。

そんな視線に、雛菜ちゃんはさらに表情を歪ませる。

それでも、雛菜ちゃんにしてはよく耐えた方だと思う。もうかれこれ二時間近くこの雰囲気の中、この部屋にいるのだから。

もう衣装には着替え終わって、リハーサルも終わって、本番まではあと何時間だろう。あとどれだけ、この雰囲気に耐え続けられるのだろうか。

「じゃあさ、外出よっか」

透ちやんが、雰囲気を感じてか囁くように言った。それでも誰一人として物音を立てていないこの部屋では、十分に全員が聞き取れてしまうのだけでも。

「で、でも、いつ呼ばれるか分からないし……」

わたしたちに伝えられているのは、もうすぐ本番で、この部屋で待機していてほしいということだけ。

この部屋を出たら何かペナルティがあるかもしれないとか、この雰囲気を耐えることもオーディションの一部だとか、そういった可能性は透ちやんでも想像できるはず。それを踏まえてなお、透ちやんは外に出ようと提案している。

「プロデューサーに伝えとけばいいっしょ」

それはそうかもしれないけれど、そもそもそのプロデューサーさんが許可を出すかどうか問題で……。

「いいって」

こういうとき、円香ちゃんの行動はとても素早い。円香ちゃんが見せてきたスマートフォン画面には、円香ちゃんとプロデューサーさんの会話で「外に出ます」「了解」という短いやりとりが映っていた。

プロデューサーさんが良いというのなら、きっと問題はないのだろう。

「他に何かある?」

円香ちゃんの言葉は、聞く人が聞いたら嫌みに捉えられるかもしれない。けれど、これはただ普通に心配しているというか、他に何か心配事があれば、確認するから教えてくれということ。

そして、特には思いつかなかった。プロデューサーさんが問題ないと判断した時点で、アイドルとしての行動はなにも問題がないはずだ。

「う、ううん。大丈夫だよ……!」

透ちゃんは小さくガッツポーズをすると立ち上がる。それを見て、雛菜ちゃんが嬉しそうに立ち上がって、一目散に控え室から出て行く。

「……小糸は行かない?」

「い、行く! 行くから……!」

円香ちゃんに急かされ、慌てて追いかけて控え室を出る。

ドアが閉まる直前、控え室の中の様子が少しだけ見えたけれども、とてもではないけれども楽しそうな雰囲気は感じられなかった。それで初めて、この気持ちの軽さは控え室を出たからなのだ実感した。



会場の外には出ないように、適当に歩き回る。アリーナ席に入ってみたり、その後方からホール外に出たら二階で驚いたり。

「びえっ……」

そこからさらに階段を上がってホールに入ると、二階席だった。三階から入ったのに二階席という名前で、疑問はあつたけれども、そんな疑問は二階席の最前に行くことで消え去ってしまった。

高いし、柵が低い。後ろから押されたら下に落ちてしまうのではないだろうか。それに、最前列に行くまでの階段が急で、転んだりしても無事では済まなさそうだ。

「うわー、ちっさ」

透ちやんはといえば、全く別の感想を抱いた様子。視線を向けると、ステージを見ていた。あまり下を見ないようにわたしもステージの方に目を向ける。

確かに、小さかった。ステージ上ではリハーサルをしている人たちと、スタッフさんたちが慌ただしく動き回っている。

そのどれも、顔の判別はできない。衣装や髪型で判断することはできるけれど、表情や顔の識別は難しそうだ。

「十分でしょ」

円香ちゃんが、眩くように言う。

いわゆる三階席はなくて、一番後ろは二階席の一番後ろ。十列以上後ろで、ここから最後列の席でも小さく見えてしまう。

「あは、円香先輩視力いい〜!」

「違う」

なるほど、ものの小ささを言っているわけではないということか。

なんとなく、円香ちゃんが言わんとしていることが理解できた。

「き、きつと届けられるよね……た、たくさん!」

距離があらうと、画面越しだろうと、ステージが小さかろうと、関係ない。わたしたちが伝えられるものが伝われば、感じてほしいことを感じてもらえれば。

「おおう、小糸ちゃんかっこいい」

透ちゃんに褒められて、少しだけくすぐったい。

「え、えへへ」

「……泥棒」

照れていたら、円香ちゃんが眩いた。

「ぴ、ぴええ……っ。そ、そんなつもりじゃ……」

確かに最初に気がついたのは円香ちゃん、わたしは気付かされて、自分なりに噛み

砕いて言葉にただけ。

透ちやんに褒められるべきなのも、照れる権利があるのも、円香ちゃんだ。普段の振る舞いから照れるようには思えないけれど。

「冗談」

それを聞いて安心する。

「あゝ円香先輩が小糸ちゃんいじめてる〜！」

安心したところに不満を漏らしたのは雛菜ちゃんだった。何も知らない人が見たらいじめにも見えるかもしれない。けれども、これが本当に冗談だということはわたしにも分かる。多分、きつと。

だからこそ笑うことができる。

円香ちゃんが冗談を言つて、わたしが慌てて、雛菜ちゃんがそれを咎めて、透ちやんが便乗して、円香ちゃんが呆れて。

そんなやり取りを楽しむことができる。

ふと、何か胸を指したような気がした。振り向いてみるけれど、なにもない。

「そろそろ、戻ろっか」

透ちやんが言うのと、雛菜ちゃんが眉を寄せる。

「えゝ、あそこやだゝ」

確かに、あの暗い雰囲気に戻りたいかと言われれば、答えはノー。けれども、もうそろそろ戻らないといけない。

「大丈夫。すぐ出番だから、戻ったらすぐに出る」



ステップを三回踏んで、一回ターン。そのまま中央に向いて二歩。ここで手を意識する。よく動きが小さくなりがちだから。

その頃には雛菜ちゃんも真ん中に寄っているから、より動きを合わせて踊る。それから――

「あは〜」

隣に立っている雛菜ちゃんが、突然嬉しそうな声を上げる。

閉じていた目を開けて、見回す。騒がしいステージをすぐそこに、今はまだ舞台袖にいる。

せつかく上手くできていたイメージを遮られて、何事かと雛菜ちゃんを見ると、正面に立つプロデューサーさんを指さして笑っていた。

「めっちゃ足震えてる〜おもしろい〜!」

見ると、言葉通り生まれたての子鹿のように足を震わせていた。テレビで見たことがあるのは子馬だけれど、似たようなものだろう。

人間、ここまでするものなのだと感心してしまった。そしてそれを見て、少しだけ肩の力が抜けた気がする。

「ほんとだ、めっちゃガクガク」

するとプロデューサーさんはぎこちなく笑って答える。プロデューサーさんには申し訳ないけれども、笑顔の引きつり方が少しだけ気持ち悪い。

「み、みんなすごいな。俺なんて……ははっ、こんな歳にもなつてこのザマだよ。正直胃薬持つてこればよかつたと後悔してる」

想像していた以上に、緊張しているようだ。

わたしは違うのかといえ、そんなことはない。もちろん緊張しているし、怖くもある。

「もうできることなんてありませんし？ やって、終わるだけでしょう？」

円香ちゃんの言う通り、あとはやるしかない。今までやってきたことを、何もかも全部出し切るしかない。

「そう割り切れないのが大人の……いや、俺の弱さだなあ」

いつになく弱気だと思った。

お仕事を取ってくるときは、子供にでも戻ったかのようににはしゃいでいるというのに。WING本選への出場を教えてくれたプロデューサーさんの面影は、微塵も残っていない。

そんな弱々しい姿を見たくないと思ったのか、不安そうなプロデューサーさんを励まそうと思ったのかは分からない。けれども、何か言わなければと思った。

「だ、大丈夫です！　ま、任せてください……！」

不安でないわけがない。優勝できる保証もどこにもない。

けれど、約束したかった。言っておきたかった。それで、プロデューサーさんが少しでも楽になるなら。なってくれるなら。

「これくらいよゆうですよ……！」

「そうそう、よゆうよゆう」

わたしの言葉に対して、雑な便乗をしたのは透ちゃん。

「あは〜よゆう〜」

さらに雑な便乗をしたのは雛菜ちゃん。そのどちらも、緊張していないわけがないのだ。多分、きつと。……違うかも？

それでも、気がつけばプロデューサーさんの足の震えは、大分小さくなっていた。まだ少しだけ震えているけれども、胃薬はもう必要ないだろう。

そして、会場が静かになる。

次はいよいよ、わたしたちの出番。

会場が静かになって、初めて心臓がうるさいことを知った。でも、嫌ではない。

「よし、出番だな……楽しんでこい！」

プロデューサーさんが背中を押すと、透ちゃんは一步二歩と前に進んで、止まった。

今のは、さすがのわたしでも、違うと気づいた。

円香ちゃんが後ろで小さくため息をつくと言。

「違う」

「こい、じゃなくて、もうだつて」

透ちゃんは一度言葉を止めて、何かに気がついたような素振りを見せてから、一文字ずつ区切つて、はつきりと続ける。

「たのしもう」

「あはゝ雛菜楽しむのは得意〜！」

それで、ようやく気がついた。この胸の高鳴りは不安などではない。

これが、楽しみなのだという事。

プロデューサーさんは苦笑いして頬を掻くと、大きく深呼吸をした。「それじゃあ、改めて……楽しんでいこう！」

再びプロデューサーさんの手を離れた背中では、今度はまっすぐステージへと向かっていった。わたしも、今度は置いて行かれないようにではなくて、一緒の景色を見るために走り出す。

一瞬だけ振り返った透ちちゃんは、今まで見た中で一番楽しそうだった。

分かるから、まっすぐ

一瞬だった。数分はあるはずの曲だけれども、瞬きする時間すらなかったように感じられる。

けれども思い返してみれば、ちゃんとそれ相応の時間が過ぎていたことがわかる。わたしたちが舞台袖へと戻ってくると、プロデューサーさんが拍手で迎えてくれた。大きな失敗はなかったはず。けれども、完璧かと言われてしまうと頷けない。ここはもっと大きく動けた、ここはもっと合わせられた、ここは若干音を外してしまった。記憶をたどれば、いくらでも改善点が出てくる。

それでも、今できることは全てやったつもりだ。時折目に映った青い光は、前見たときよりももっとと波打っていたように思える。

「めっちゃ綺麗だった」

そう、綺麗だった。キラキラと絶え間なく動いて、まるで早送りの星でも見ているかのようで。

ライトはとても眩しくて、けれども会場はそれ以上に、もっと眩しかった。

「もう一度見たかったな……」

そんなことを呟く透ちゃんを見ると、名残惜しそうにステージを見つめていた。「まだ終わってないけど?」

まだ落ちたと決まったわけではない。いまはまだパフォーマンスが終わったばかりで、結果はこれからなのだから。

だからといって、透ちゃんの気持ちが変わらないわけでもない。

もう一度、あの景色を見たい。もう一度あの場所に立って、不規則に揺れる青い光を眺めたい。

そう思った途端、全身に力が入る。もう遅いのに、もうできることはなくなってしまうのに。

わたしたちの後に続いたユニットがちょうど終わり、会場が静まり返る。それで初めて、会話が続かないことに気がついた。

「もしかしてみんな、緊張してるのか?」

つい十数分前まで全身が震えていたはずのプロデューサーさんは、すっかり良くなったようだった。今では逆に、わたしの足が震えている。

「……もう少しデリカシーという言葉の意味を調べたほうがいいんじゃないです?」

円香ちゃんのため息交じりに言うと、プロデューサーさんは笑って返す。

「はは、すまんすまん。よく言われるよ」

「でしようね」

そんな、いつも通りのやり取りを見たからだろうか。先ほどよりは気持ちが楽になった気がした。

「まあ、俺は……」

そこまで言って、プロデューサーさんは口を閉じてしまう。

「え、なに？」

もしかすると何かを言ったのかもしれないと、そう思った。聞き逃していたとか、またま聞こえなかったとか、そういう可能性もあると思った。

けれど、その可能性も含めてまるごと、プロデューサーさんは首を横に振って否定する。

「いや、なんでもない」

「えー」

残念そうな透ちゃんを見て、雛菜ちゃんが真似をする。こちらは対象的に楽しそうだ。

「そう言えば気を引けるとでも？ 舐められたものですね」

円香ちゃんの言葉の棘も、いつもより少しだけ尖っている。

注目だけ集めてやっぱりやめたと言うのだから、悪いのはプロデューサーさんだけだも。

「ほ、ほら、もう結果が出るぞー！」

話を逸らそうと必死であることは確かだったけれども、オーディションの結果が出ようとしているのも本当のことだった。

スクリーンには六つの枠が表示されていて、まるでスロットのように文字がくるくると回っている。

一番下……六位の文字が止まった。

同時に、歓声があがる。同じくして聞こえてきたのは、まるでため息のような、掠れた声。それはみるみるうちに嗚咽へと変わっていく。

声の方を、見ることができなかった。次はわたしがそうなるかもしれない。見てしまったら、同じような未来を辿るような気がしたから。

うるさくなる心臓の音を消したくて、胸を押しえつけてみるけれど、効果はない。心の準備が整わないまま、五位が発表される。

今回も、違った。ノクチルではない。

オーディションだというのに、呼ばれないことに安心してしまふ。呼ばれない毎に、怖くなってしまふ。

四位が発表されて、もう見ていられなくなった。

それでも歓声は聞こえてくるし、司会の人が喋るから結果も分かっちゃまふ。

三位も、違った。

「おねがい……おねがい……」

つぶやく声は、わたしのものだった。

二位の発表は、やたらと時間がかかっていた。そういう演出なのだろうけれども、いまは早く楽になりたかった。

胸を押さえつけける手に、力が入る。押さえれば押さええるほど、心臓の鼓動は大きく、うるさくなっていく。

ドンという太鼓の効果音とともに、音が止まった。

きっと結果が出たのだと理解するのに、そう時間はかからなかったけれど、目を開けるのが怖かった。

「小糸ちゃん」

透ちゃんの声に背中を押されて、恐る恐る、ゆつくりと目を開ける。

思わず、二位の名前を確認してしまったのは、それでもまだ怖かったから。

二位はノクチル、ではなかった。

「わ……わ、わ……！」

一位の名前を確認すればいいのに、何度も何度も二位から六位の名前を見直してしまう。

司会の人何かを言っているようだけれども、何も頭に入ってこない。歓声も気にならない。

こんな気持ちを、知らない。経験したこともないし、名前も分からない。ただ、この感情をどこに向ければいいか分からない。どこかへ逃さないと、自分を保っていられる

気がしなかった。

ほんと、肩を叩かれた。感触がした方を見ると、透ちゃんが笑っている。

「ほら、呼ばれてる」

その声だけは、他の何よりも鮮明に聞こえた。

見ると、円香ちゃんも雛菜ちゃんも、プロデューサーさんもわたしを待っている。

「行くよ、ステージ」

「う、うん……!」

そこまで言われて、ようやくステージに呼ばれているのだと気がつく。

透ちゃんたちの背中はまだ見えない。でも、分かる。そこにいる、横に、後ろに。だからわたしは、まっすぐ走っていきける。

そしてわたしたちは、青い波が揺れているステージへと駆け出した。

遠くへ行きたい

WINGから二日が経った。次の日は日曜日だったのに、プロデューサーさんは一日中電話をしていた。合間にどうしたのか聞いてみると、ひっきりなしに仕事のオフアアが来ているらしい。

わたしたちに仕事の話が来ないということは、全て断っているのだろう。プロデューサーさんを見ている、謝ってばかりなので間違いなさそうだ。

今まであつちこつちに駆け回って取っていたお仕事を、どうして断るのか気になった。とはいえその理由を知っているのはプロデューサーさん本人だけなので、直接聞いてみることにした。

「決勝が今週末なのに、今このタイミングで受ける必要がない……つていうのが大きいかな。みんなにはWINGに集中してほしいし、それに——」

プロデューサーさんは口を止めると、周りを見回す。つられて見回してみるけれども、今はわたしとプロデューサーさんしかいない。雛菜ちゃんは寄り道して行くと言っていたし、透ちゃんも円香ちゃんも今日はわたしよりも一限だけ授業が多い。

「これはオフレコで頼みたいんだが、そういう配慮ができない相手は現場でも失礼な可

能性が高い」

「へ、へー。そうなんですな」

適当に返してしまっただけで、そこまで先のことを考えているのだと感心してしまっただけだ。

オフレコ……というのは、最近覚えた。他言無用の業界版。要するに黙っておいてほしいということ。わざわざ言いふらす気もないけれど、プロデューサーさんとしては言われると本当に困ることなのだろう。

「ただいまー」

そんなことを話していると、入り口から透ちゃんの声が聞こえてくる。同時にプロデューサーさんの肩が跳ねるのが見えたので、この話はここで終わり。

まもなく透ちゃんが姿を表す。その後ろからは円香ちゃんと雛菜ちゃんの姿も見える。

「あ、そういうえば手紙を預かってたんだ。みんな読んでくれ」

そう言って差し出された手紙には、宛名も切手もなかった。辛うじて裏面に差出人だけ書かれていたのだが。

「ぴえ……」

その差出人が、ファンだったなら驚くこともなかった。

「なにそれ。トライマーク？」

その名前には覚えがあつた。283プロと同じ芸能事務所で、以前一度だけ共演したことがある。わたしたちの初めてのテレビ出演、踊つていいよもの収録のときだ。

透ちゃんは首を傾げているけれども、知らないのも無理はない。わたしだって調べていなければ知らなかった。

いくら共演後に苦言を呈されたとしても、気にならなければ調べることはないだろう。なんなら、アンティフォナというユニット名すら覚えていないかもしれない。

「……読まないの？」

後ろから覗き込んでいた透ちゃんに言われて、恐る恐る封筒を開ける。さすがにプロデューサーさんが開封済みだったのか、糊付けは取れていた。

三つ折りにされた紙を広げると、印刷用紙が二枚入っていた。

一枚目に目を通してみるけれども、ひたすら謝罪の文章が書かれているだけだった。簡単な挨拶から始まって、踊つていいよでも無礼を働いたこと、そしてそれに対して謝罪が遅れたこと、その謝罪も手紙で済ませてしまったこと。

そういつたことが長々と書かれていた。

「……小糸ちゃん要約して」

横から覗き込んでいた透ちゃんは、いつの間にか読むのをやめていた。内容も内容だけれど、お世辞にも簡潔とは言えない文章は、確かにあまり読みたくはならない。

「え、えつと……この前はごめんなさいって」

「いっ、いっ」

どうしてわたしに言うのか。わたしは何も謝るようなことはしていないのに、なんだか損した気分だ。

要約させておいて、この態度なのだから、文句の一つでも許されるだろうと、何を言おうか悩んでいると、円香ちゃんに思考を遮られた。

「二枚目は？」

そういえば二枚組だったと、紙をめくる。

二枚目も、一枚目に負けず劣らずの文字密度だった。けれども内容は一枚目のような形式張った文章ではなく、どちらかといえば話しかけてくるような文章だった。

「え、えつと、こっちは三人からのお手紙みたい」

最初はアカリさんからで、内容は謝罪しているのかどうか分からないものだった。

『あのときの言葉は撤回する。けど、撤回するってだけで認めたわけじゃない。あんたらはまだデビューして一年も経ってないし、アイドルとしてすぐく異質なやり方してる。王道なやり方が全てとは言わないけれど、正解に近づくやり方でもない。もし、次

に会ったとき同じようだったら、今度こそ許さないから』
「ごっわ」

まあ言っていることは物騒だけれども、悪意のある文章には思えなかった。ただ、褒められているのか怒られているのかよく分からなくはなつたけれども。

「で？」

「え、えつとね……」

先ほど三人からと言つたのだから、まだ二人分残っている。

しかし、こちらは普通に謝罪と称賛の言葉だけだった。

先に書かれていたのはヒトミさんで、確かアンテイフオナのセンターだったはずだ。

『やつほーヒトミだよー。つて言つてもあんまり覚えてないかなあの時は本当にね！それとそれと、決勝出場おめでとう！わたしたちもみんなで応援に行くから、だよ！』

ところどころ不自然な文章になっていて首を傾げていると、雛菜ちゃんが覗き込んできた。

「あゝこれ絵文字削られてるやつだ。かわいそ〜」

なるほどそういうことらしい。それを意識してもう一度読み直すと、なんとなく雛菜ちゃんの言うことにも納得できる。

最後はカンナさん。

『まず、この前は本当にごめんね。私たちが止めるべきだったんだろうけど……アカリちゃんの言うことも分かっちゃったから。でも、今は違うよ。ちゃんとみんなの気持ちが伝わってくる。実はラジオも毎週楽しみにしてるんだ。それと、WING決勝進出おめでとう。また共演できる日を楽しみにしてるよ』

硬い文章ではない……けれども、ヒトミさんのように崩れているわけでもない。文字での会話に慣れているような印象を受けた。

何より驚いたのは、ラジオを聞いていてくれたということ。あんな別れ方をした相手の番組を聴こうというのは、思ってもなかなか実行できることではない。

そしてその下には、さらに文章が続いていた。それも、アカリさんに見られたら消されるからと、印刷する直前で書き足したらしい。

『ああいった手前、後ろに引けないだけで、アカリちゃんもノクチルのことすごく気に入ってるからさ、悪く思わないであげて』

文章からして、カンナさんが書いたものだろう。こんな内容で気に入っているとは、にわかには信じがたい。けれども、カンナさんが嘘をつく理由も特に見当たらなかった。

そして何より――

「……これがツンデレ。オーケー？」

二枚目の裏をめくって、円香ちゃんが笑う。それを見た雛菜ちゃんが、嬉しそうに頷く。

「あゝ円香先輩より上手だゝ」

「は？」

「どうやら、一番最後に書き足したのは、アカリさんだったようだ。」

裏面には手書きで『決勝進出おめでとう。見に行くから』と小さく書かれていた。

それを見て、ふと思った。そして思ったことが正しいのか分からなくて、考えようと
して、思わず口に出してしまう。

「お返事……いるかな……？」

「いらなくない？ 謝罪の手紙なんだし」

確かに、いらなくないかもしれない。円香ちゃんの言う通りこれは謝罪の手紙だし、この一通で完結しているようにも見える。逆に、返信をすることで嫌味のように捉えられてしまう可能性だってある。

そもそも、どうして返事を書こうだなんて思ったのだろうか。手紙を送ってもらった
ら返事を書かなければならないなんて決まりは存在しない。

仮に書くとしても、何を書くというのか。そんなに気にしなくてもいいということ……それはきつと、あまり気にしていないだろう。文章を読んでいて、なんとなく感じた。

近況報告、なんでもものも変な話だ。WING出場を祝ってくれているのに、改めてその内容について返事を書く必要はない。

そもそも、アンティフォナの人たちとは踊っていいとも以降関わりがないのだから、何か伝えるようなことも……。

そこまで考えて、内心で苦笑してしまう。どうして送る送らないの話をしているのに、送る理由を探しているのかと。そうしてようやく、返事を書きたいと思っただけなのに気がつく。

どうしてなのか。どうしてここまで考えてまで返事を書きたいと思うのか。そう考えたときに、この人たちに感謝をしていることに気がついた。

「え、えつと……ありがとうって言いたいなって」

「ん〜？ この人たちなにかしたっけ？」

雛菜ちゃんが首を傾げるのも無理はない。あくまで感謝しているのはわたしだけで、みんなは関係ない。

アンティフォナの人たちに「なんのためにアイドルをしているのか」と問われたこと

で、わたしにとってのアイドルと向き合うことができた。そして、まだ間違っていないとは言い切れないけれど、答えを出すことができた。

そんなきつかけをくれた人たちにお礼を言いたかった。けれど、やはりみんなは関係ないことだ。だから、手紙は個人で出そうと、そう思った。

「いいんじゃない」

望んでいた言葉。けれども、言われることのない言葉だと思っていたから、思わず透ちゃんの表情を伺ってしまった。目があつて、うつすらと微笑んだ。

「文通友達って、かつこいいじゃん」

友達だなんて、そんな大層なものではない。けれども、透ちゃんの言葉を受けて、そう思ったらいいと思ってしまった。

アイドル同士としての関係ではなくて、事務所も立場も関係なく、友達として、他愛もない話をできる相手になったら嬉しいなど、そう思ってしまった。図々しいにも程があるけれど、それは向こうだって同じだ。初共演のその場で苦情を言ってくるような相手だからこそ、きつとアイドル同士という垣根を超えられるような気がした。

「はあ……勝手にすれば」

円香ちゃんは反対しているようだ。円香ちゃんの言い分も間違っていないのだ。この状況で何を言い返しても嫌味にしかならない。そのうえで友達になろうなど、普通な

ら言うべきではないだろう。

雛菜ちゃんとは言えば、特に興味はなさそうだ。眠そうに目を細めている。

「ん、じゃあ書けたらくれたら持つていくよ」

カタカタとキーボードを打つ音が止まり、事務机に座っているプロデューサーさんが言う。

気がつけば、返事を書く流れになってしまっていた。書きたいと言ったのは間違いなくわたしだけれども、その言葉に嘘はないけれども、気がいたら外堀が埋まっているのだから驚きだ。

「で、なに書くの?」

……まだ、書く内容は何も決まっていな

「え、えつと……」

「この前のライブ最高でしたとか?」

いや、見ていないけれども。

「う、嘘書いちゃだめだよ……!」

「だめかー」

とはいえ、いざ書こうとなると、何から書けばいいか分からない。

「まずわざわざ手紙をくれたことに感謝する。何か書くとしてもそれから」

溜め息とともに聞こえてきた声の主を見ると、相変わらずそっぽを向いていた。ゆつくりと視線をこちらに向けて、再び溜め息。

「そこから先は本当に知らないから」



お手紙はなんとか書くことができた。しかし気がついたときにはもう日が沈んでいて、レッスンの時間は少ししか取れなかった。

W I N G 決勝はもう今週末で、やはりいまさら何かを変えようなんて話にはならない。けれども、歌えば歌うほど、踊れば踊るほど新しい課題が見つかるのだから、時間で区切らなければいつまでも終われない。そんなことをしているうちに、予定していたレッスンの時間を大幅に超えてしまった。

慌ててお母さんに連絡をしてから、帰りはプロデューサーさんに送ってもらうことになった。今日は時間が遅いとのことで、わたしだけではなく、みんなも一緒だ。

「はー」

車が走り始めて少し経った頃、透ちゃんがわざとらしく息をつく。

「なに？」

何かあるのだろうか、円香ちゃんが催促するけれども、返ってきたのは横に傾いた透ちゃんの頭だけ。

「と、透ちゃん……調子悪かったり……？」

レッスンのときはあまり感じなかったけれども、そもそもレッスンのときは自分のことで精一杯なのだから、透ちゃんの調子など余程でない限り分からない。

「ううん、んー……いや、遠くに来たなあつて」

「毎日来てるでしょ」

まだ車は事務所を出たばかりで、外は見慣れた景色だ。しかし透ちゃんが意味のないことを言うとも……よく言っている気もするけれど、何か別に意味があるのではないかと考えてみる。

そして、一つの考えに行き着く。

「あ、アイドルとしてつてことだよね……！」

「おー……そんな感じ。多分」

わたしも最近、似たようなことを感じていた。

アイドルになる前はこんなことになるとは思っていなかった。そもそも、こんな夜遅くにまだ外にいることがあり得なかったし、自分がどうなりたいかということを考える

機会もなかっただろう。

なにより、ずっとみんなを追いかけ続けるのだろうと思っていた。だから準決勝で、みんなと一緒に並んでいるのだと感じられたときは嬉しかった。

必死に頑張つてようやく追いつけたのだから、これからも頑張る必要はあるけれども。

「楽しいと思えてるなら、いちプロデューサーとしては嬉しいかな」

「楽しい楽しい」

プロデューサーさんの言葉に、適当そうな返事をしてるように見えるけれども、それはきつと本心だろう。

嘘をついて楽しくなるような状況ならば話は別だけれども、今がその状況だとは思えない。それに、そう言っている透ちやんが、本当に楽しそうに見えたから、嘘のはずがないと思った。

「雛菜は知ってたよ」

隣に座る雛菜ちやんが嬉しそうに椅子を揺らす。せめて走行中はちゃんと座つていてほしい。

「透先輩と一緒にならなんでも楽しいもん」

その気持は分からなくもない。透ちやんが意識しているかどうかは別として、透ちや

んと一緒ならば、飽きという言葉とは無縁になれる。どこに行こうと何をしようといつても新しい発見があるし、一緒にいるだけで楽しくなれる。

「最近別々なこと多いけど」

最近と言っているのは、WINGよりも前の話だろう。レッスンのときはみんな一緒だけれども、お仕事が別々になる機会は増えていたと思う。

それに、雛菜ちゃんは揺れるのをやめて、口に手を当てる。そして少しだけ考えてから、すぐに笑顔に戻る。

「その時はプロデューサーいるから幸せ〜!」

「……あつそ」

円香ちゃんは軽く溜め息をつく、肘を窓枠に乗せて頬杖をつく。

それからすぐに、透ちちゃんの唸り声が聞こえてきた。

「今週でおしまいかあ」

何がだろうと思ってしまった。もちろんWINGのことなのだろうけれど、終わりが待ち遠しいものでもないし、名残惜しいものでもない気がする。

もしかしてと思い、念のために確認しておく。

「と、透ちちゃん。WINGが終わったらアイドルが終わりなわけじゃないよ……?」

「あ、そっか。……なんかそんな気分だった」

もちろん大きなイベントではあるだろうけれど、それでアイドルが終わってしまったわけではない。ラジオのお仕事はもつと先まで入っているし、プロデューサーさんが保留にしているお仕事もある。

「なに当たり前のこと言ってるの」

そう、円香ちゃんの言う通り当たり前なのだ。これからもずっと同じように続くはずなのだ。

けれど、それが崩れる瞬間を知っている。わたしの言葉は、それを避けるための保険でもあった。WINGが終わったあとも、アイドルを続けようと、続けたいという主張を込めていた。それが伝わっているかどうかは分からないけれども。

「じゃあ、まだまだ一緒だ」

透ちゃんがわたしの気持ちを汲んでくれたのかは分からない。けれども、透ちゃんがそう言うのと、なんとなくそうなる気がした。誰が何をするわけでもなく、ただただ透ちゃんが言ったから。それだけの理由で、現実になっってしまう、そんな気が。

本選本番

昨日は、驚くほどよく眠れた。今日が本番だということを考えてもあまり緊張はしなかったし、楽しみですらあった。

お母さんに見送られて会場に入って、リハーサルも問題なく終わった。

今日はWING決勝で、ステージに出られるのはたったの六ユニットだけ。わたしたちは三番目で、つい先ほど二番目のユニットがステージに出ていったばかり。

このユニットが終わったら、次はわたしたちの出番。

緊張していないといえば嘘になる。けれども、緊張していると言われても、素直には領けない。心臓はバクバクと鳴っているのだけれども、これを緊張というのかと言われると、どこか違う気がする。

「あは〜プロデューサーおもしろい〜」

つい先週、同じような言葉を聞いた気がする。雛菜ちゃんを見ると、案の定プロデューサーを指差して笑っている。そしてやはり、指をさす方を見ると、プロデューサーさんが足をガクガクと震わせていた。

「ふふ、いつも通りじゃん」

前回も同じような感じだった。早くも恒例行事と化してしまったこのやり取り。

「これがいつも通りだとしたら、鬱陶しいことこの上ない」

「す、すまん……」

いつになく弱気そうに声を漏らすプロデューサーさんに、ついつい笑ってしまう。あれだけ頼もしいプロデューサーさんでもこうなってしまうのだから、緊張していない今のわたしは、どこかおかしいのかもしれない。

「そ、そろそろだな……」

ステージを見ると、もうすぐ楽曲も終わろうとしていた。これが終われば、次はわたしたちの出番。

緊張が大きくなると同時に、期待感も大きくなった。

どんな景色が待っているのだろう。どんな反応をもらえるのだろう。それが楽しみで仕方がない。

「あそうだ。円陣」

「柄でもない」

透ちやんの突然の言葉に、円香ちやんがすかさず返す。今まで一度も円陣など組んだことがないけれど、きつとやってみたくなったのだろう。

わたしも考えたことはあったけれども、なんとというか、いまさらな感じがしてならな

かった。何年も一緒に過ごしてきて、団結も何もあつたものではないだろう。

「いいじゃん、柄でもないところ来てるんだし」

そう言うと、透ちゃんは両腕を広げて、手招く。雛菜ちゃんがすぐさま腕に潜り込み、肩を組んだ。

次に円香ちゃんが溜め息をつきながら、雛菜ちゃんとは反対側へ。わたしは円香ちゃんの隣に入る。もう片方は……。

雛菜ちゃんとは組まずに、待っているのだけれども、なかなか片腕が埋まらない。

「ほら、プロデューサーも」

「え、お、俺もか？」

戸惑いながらも、わたしの隣に、そして雛菜ちゃんの隣に入り、ようやく円が出来上がる。わたしと雛菜ちゃんの身長差で、プロデューサーさんは屈みながら斜めになってしまっている。

ちようど、前のユニットが終わった。

あとは、なにか掛け声をしてステージに出ていくだけ。……掛け声？

「……掛け声なかったわ」

締まりの悪いまま、でもそれもわたしたちらしいと、そんなことを思いながらステージへと駆け出した。



やはり、楽しい。

曲が終わって舞台袖に捌けて、最初に思ったことだった。

ステージに出た瞬間。まだ曲も始まっていないのに会場は歓声に包まれて、バラバラだった光は青く染まる。

ゆらゆらとバラバラに揺れていた光は、楽曲が始まるとリズムにあわせて手前から奥へと波打ち始める。

曲に合わせて動きを変えながら、最後まで途切れることなく揺れ続ける。

青い光に照らされて見える人の顔は、どれも笑っていた。すべてを見ることはできなかったけれど、前だから後ろだからというのは関係なく、どの人も楽しそうだった。

そんな景色が、たまらなく心地よくて、嬉しかった。

今回は満点のパフォーマンスができたかと言われれば、首を横に振るだろう。レッスンのときもそうだけれど、歌うほどに、踊るほどに新しい課題が見つかる。それがまた楽しい。

「楽しかった〜！」

言わなくても分かるくらい、雛菜ちゃんは両手を大きく上げてぴよんぴよんと跳ねている。

「いえーい」

合わせるように、透ちちゃんも両手を上げて雛菜ちゃんとハイタッチ。それを見て、なんだかわたしもやってみたくなくなった。

「い、いえーい……！」

雛菜ちゃんとの身長差で、届くかどうか不安だったけれど、ジャンプしたらギリギリ届いた。

「小糸ちゃんいえーい」

透ちちゃんは少しだけ低い位置で手を構えてくれたので、飛ばなくてもハイタッチできた。

「ま、円香ちゃんも……！」

「……ん」

やってくれるか不安だった円香ちゃんも、片手で応えてくれた。

「みんなおつかれ！ めっちゃ良かったぞ！」

奥からプロデューサーさんが走ってきた。きつと楽曲が終わって、反対側の舞台袖から走って回ってきたのだろう。

「会場がひとつになつてたし、ステージを広く使えてたと思う！ 目が足りないなんて言葉を聞いたことがあるけれど、その気持が分かったよ」

これほど熱く語るプロデューサーさんは初めて見たかもしれない。このまま放つておけば勝手に語り続けてくれそうな勢いだつた。

「あ、あの、先に戻りませんか……？」

けれども、ここでやるべきではない。ステージはすぐそこで、騒げば他のユニットの邪魔をしてしまう。これは、控室に戻ってからやるべきだと、そう思った。

「やーい怒られてやんの」

「う……わ、分かったよ」

控室に戻るまで、プロデューサーさんがずっとソワソワしていたのは、言うまでもない。



控室に戻つて、もう一時間は経つたと思う。控室に置いてあるモニターには、ステージの様子が映し出されているけれども、今はもうだれも踊っていない。まるでホテルのように、ちらほらと光が揺れているだけだ。

プロデューサーさんももう語り尽くしてしまった様子で、控室にはちよつとした緊張感があつた。

「お、遅いね……」

このあとの段取りでは、結果発表前にスタッフさんから呼ばれて、全ユニットがステージに出てから結果発表のはず。けれど、待てども待てどもスタッフさんはやってこない。

「時間かかつてるみたいだな」

「雛菜もう待つの飽きたー!」

モニターを見ている、最初は会場を埋め尽くしていた光が、一つまた一つと消えている。

「ね、ねえ。何かできないかな……?」

光が消えていくのが、寂しく思った。

消えていってしまう理由を考えて、雛菜ちゃんと同じと気づくと、じつとしていられなかった。けれど、だからといって何かができるとも思えない。わたしたちの出番は、もう終わってしまったのだから。

「トークとか?」

「正気? 恥晒すだけでしょ」

歌もダンスもたくさん練習してきたわたしたちだけれども、トークだけはなかなか上手くならなかった。なんというか、身内っぽくない話ができないのだ。ラジオではディレクターの小島さんが問題ないと言ってくれたけれども、他の番組ではそうはならなかった。

「ちよつと、確認してくるな」

透ちゃんの言葉を受けて、円香ちゃんの反対も受けて、少しだけ間を空けてプロデューサーさんが立ち上がる。

プロデューサーさんが控室を出ていくと、再び控室は静かになった。

普段のような他愛もない話をする雰囲気ではなく、ライブの感想はプロデューサーさんがすべて言ってしまったし、そのプロデューサーさんはもういない。

少しだけ気まずい雰囲気のまま、数分。机の上に置あったスマートフォンが震えだす。

「あ」

言うのと、透ちゃんが拾い上げる。

「また忘れようとして」

前科は……たくさんあった。控室に忘れたことはあまりないはずだけれど、飲食店と

か、学校とかでは平気で忘れていく。

「プロデューサーから。トークならいいって」

「ほ、ほんと……!」

透ちゃんはスマートフォンを再び机に置くと、鏡に向かう。後ろで円香ちゃんがスマートフォンを拾い上げて、勝手に透ちゃんのかばんに、雑に突っ込んだ。

「うし」

「待って。ちゃんとする」

控室を出ようとする透ちゃんを止めると、背後に回って鏡越しに身だしなみをチェックする。

「ほら、雛菜も、小糸も」

「ふふ、やる気満々じゃん」

透ちゃんの言葉に、一瞬だけ手を止めると、ため息をつく。

「やるならちゃんとやるべきでしょ」

円香ちゃんの言うことももつともだけれども、そもそもそう思う時点でやる気がある証拠でもある。

でも、円香ちゃんが嫌がっているわけではないと分かって少しだけ安心した。わたしが変なことを言ったせいで、嫌々やることになったなんてことは嫌だから。

「……うし？」

「も〜！」

透ちゃんが疑問形で気合を入れると、雛菜ちゃんが牛の鳴き真似をする。

「ふふ、牛じゃん」

そんなやり取りをしているうちに、円香ちゃんが控室のドアを開ける。

「バカやってないで」

そしてわたしたちは、予定にはないステージへと再び駆け出した。

◇◇◇

「いえーい。どうもーノクチルでーす」

やる気のない声とともにステージに出ると、暗転していたステージが一気に明るくなる。同時に会場には歓声が沸き上がる。

漫才でも始めるかのような登場の仕方だけでも、あいにくそんな技量は持ち合わせ
ていない。

「すみません。審査が長引いてて、もう少し時間がかかるらしいです」

円香ちゃんが簡潔に、要件を伝える。会場の反応は様々だった。もしかしたら苦情を

言われるかもしれないなんて思ったけれど、聞こえてきた言葉はどれも肯定的なものだった。

「そ、それで、時間まで何かできないかなって思ってた……トークとか……」

「私らトーク下手だけど」

透ちゃんが笑うと、会場にも笑いが沸き起こる。

「も、もう……！ 別に言わなくても良かったでしょ！」

どうしてそういうことを言ってしまうのか。言わなければ分からなかったかもしれないのに。

「ほんとにね〜」

雛菜ちゃんが同意してくれているけれど、隣にいるから笑っているのは分かっている。

でも、これでハードルは下がったかもしれない。仮に下手なトークをしても、笑って許してもらえるかも。

「で、何話すの？」

円香ちゃんの言葉に、透ちゃんは腕を組んで首を捻る。会場も、透ちゃんの言葉を待って静かになる。

「なんもないんだ、それが」

透ちやんの言葉が、反響して返ってくる程に、会場は静かだった。これは失敗したかもしれないと、そう思った。

「小糸ちゃん、なんかない？」

そして、まさかこの状況で話を振ってくるとは思わなかった。これではただの巻き添えではないか。

そして、何かないかと言われて、何か出てくるほどトークに慣れてはいない。

「び、びえっ……！　わ、わたし……!？」

びつくりして、悲鳴のような声しか返すことはできなかった。それが面白かったのか、再び笑いが湧く。これで笑われることに納得がいかず、何かないかと思考を回す。

「う、裏話……とか？」

芸能人の裏話というのは、テレビのいいネタになる。実際そういった番組はよく見られ、実際に面白い。

会場の反応も、悪いものではなかった。

かといって、何か話せるような裏話があっただろうか。きつと透ちやんは何も言ってくれないと思って絞り出してみる。

「じゃあ、私たちが同級生って話とか」

そんな信用していなかった透ちちゃんから話題が出てきたのだから、一瞬だけ頭が真っ白になってしまった。

「みんな知ってる」

「あはゝみんな詳しく」

283プロのアイドル紹介にも書いてあるくらいなのだから、わたしたちのことを知っている人ならばだれでも知っている情報だろう。

「それでさ、この前海行ったん、海」

脈絡もなにもあつたものではない。確かに海には行つたけれど、あまり他人に話すような内容でもない気がする。

それでも透ちちゃんは止まらない。わたしも、何の話をするのか気になったので止めなかった。

「で、みんなで泊まつたんだよね。ご飯めっちゃ旨かった」

「あれね。雛菜炊き込みごはん好きだった〜！」

そこまで聞いて、なるほどこれは本当にただの裏話だと気づく。山もなければ谷もない。なんならオチもないただの世間話なのだと気づく。

いまさらオチを作れる話でもなく、仕方ないので乗っかることにする。

「お、お味噌汁も美味しかったよね！」

これはご飯の話だけになってしまうと、言ってから気がついた。何か別の話に向かわせればよかったと後悔。

「で、さつきそこで円陣組んでさ、掛け声ないのに」

そこでようやく観客も理解したのか、チラホラと笑い声が聞こえてくる。

「話に！ 脈絡が！ なさすぎますわ！」

突然聞こえてきた声に、びっくりして見回す。会場もどよめき始めると、金髪の女の子がステージに入ってきた。

「び、びえっ……」

確か、スペシャルフラグというユニットの、輝川という人だったと思う。金色に輝く髪の毛と、お嬢様口調が特徴で、わたしたちと同じく今日の決勝に勝ち残っていた。

「ずるいですわ！ 私を差し置いてこんな目立つことをするなんて！」

そう言う輝川さんはわたしたちのところまで足早に近づいてくる。怒られるのかと思いきや、口に手をあてて呟く。

「合わせてくださいまし」

なるほど、一緒にステージを盛り上げようということのようだ。怒られなくてホッとしたと同時に、そのつぶやきはしっかりとマイクに乗っていることに唖然としてしまっ

た。

「あー……ごめん?」

「どうして謝りますの!?!」

驚く輝川さんに、円香ちゃんが頭を下げる。

「すみません、浅倉はこういう人間なので。それと、これであなたも巻き添えです。おめでどうございませす」

「どうしてスベる前提ですの!?!」

そんなやりとりに、会場が笑いに包まれる。輝川さんが出てきて、会場の雰囲気が一気変わった。

本人が意識しているかは分からないけれど、わたしたちだけではできなかつた雰囲気を作ってくれたことには感謝したい。

「おー、うちの子の扱いよく分かつてんじやんかー。うちの子面白いだら?」

そう言つて出てきたのは、スペシャルフラグのメンバーである神谷さん。輝川さんとは対象的に、庶民的な雰囲気がある。

「扱いつてなんですの!?! 人をものみたいに!」

「別にいいじゃんか、笑いの神様降りてるつて。ほれほれそのまま続けりん」

言葉に若干の訛りを感じる。お嬢様言葉と、方言のコンビは、聞いているだけでも興

味深かった。

「私は笑われるために出てきたわけでは——」

「お、結果出たから戻れって」

輝川さんの言葉を遮って、透ちやんが呟く。ステージ前方に設置された画面——プロンプトと言うらしい——には、今透ちやんが言った言葉と全く同じ文章が書かれていた。

「じ、直読み……ですの!?!」

「おい輝川。その口調は無理ある」

そんな騒がしいまま、わたしたちはステージから捌けていった。想定していないことになってしまったけれど、結果として会場のみんなを退屈させずに済んだのだと、去りに際に会場を見回して頬が緩んだ。

結果、そして

暗い会場に、キラキラと光が漂っている。様々な色が混ざり合って、まるで夜に色をつけたよう。

トークから舞台袖に行くと、スタッフさんたちにすぐさま送り出された。

ステージに出ると、わたしたちとスペシャルフラグの二人が出てくるタイミングで、会場に笑いが起こった。先ほど出ていったばかりのユニットがすぐに戻ってきて面白いのだろう。

ユニット毎に横一列に並んで、そこはリハーサル通りに。

ここから先は、リハーサルでもやっていない。決勝で発表されるのは、優勝したユニットのみ。二位以下は、たとえ順位がついていたとしても公表されないことになっている。

軽快なスネアロールとともに、スポットライトが駆け回る。いかにも結果発表という感じの雰囲気だ。

けれども、発表される側というのは、こうも緊張するものなのだ、初めて知った。

準決勝のときはまた違った緊張で、胸が苦しくなる。あの時と同じように、押さえ

つけようとした手を掴まれる。

見ると、雛菜ちゃんが握ってくれていた。

もしかして、雛菜ちゃんも緊張しているのかと思った。表情を伺って、なぜか透ちやんと目があつた。へたくそなウイंकで、なるほど透ちやんの提案と気づく。

事務所に戻ったらウイंकの練習もしよう。そんなことを考えていたら、いつの間にか胸の苦しさはなくなっていた。

「優勝は——」

アナウンスの直後、スネアロールが止まり、スポットライトが消える。

雛菜ちゃんの手に入って、私の手を握る強さに合わせて強くなったのだと気づく。

パツと、明かりがついた。

真っ白で眩しくて、思わず目を細めてしまうほど。

……けれども、目の前が白く染まるほどではなかった。

「アーケインですー！ おめでとうございますー！」

心臓が、止まったかと思った。

隣で歓喜の声が聞こえる。

反対側では、スペシャルフラグの神谷さんが膝から崩れていた。慌てて輝川さんが抱えている。

脳裏に浮かんだのは、四年前の出来事。

中学の受験発表で、わたしは合格できなかった。まわりには喜んでいたり泣いている人がいて、わたしは……。わたしはそれから……。

全身の力が抜けるような、そんな気がした。ああ、わたしも神谷さんのように崩れてしまふのかと、そう思った。……左手に強い感触があるまでは。

わたしの左にいるのは雛菜ちゃん、反射的に顔を見ると、笑っていた。

それから、ぐいと手を引っ張られた。強く引っ張られ、離すこともできずに体ごと引き寄せられる。

「ひ、雛菜ちゃ……」

雛菜ちゃんは、ただ拍手をしていただけだった。わたしの手を握ったまま。わたしの手を離さずに。

透ちゃんも円香ちゃんも、泣きもせず、悔しがりもせず、ただいつもどおりに手を叩く。

それを見て、使命感に駆られたのかもしれない。私も気づけば、拍手を送っていた。



「……みんな、おつかれ」

舞台袖へと捌けて控室に戻ると、迎えてくれたのはプロデューサーさんだった。

これまででたくさんのワガママを言っ、たくさんの時間を使ってもらっ、しかし結果は伴わなかつた。

円香ちゃんが、大きく息を吸って、ゆっくり吐く。

「お疲れさまです」

そうだ、プロデューサーさんなら、もしかしたら知っっているかもしれない。教えてくれるかもしれない。わたしが悩んでいるときにいつもその答えを示してくれたプロデューサーさんだから。

「ぶ、プロデューサーさん……なにが……なにが駄目だったんでしよう……」

失敗らしい失敗は思い当たらない。新しい課題は相変わらず見つかつたけれども、駄

目だったとは思えない。

けれども、プロデューサーさんならなにか知っているかもしれない。そんな期待を込めてしまった。

しかし、込めた期待を振り払うように、プロデューサーさんは首を横に振る。

「なにも駄目じゃない。なにも間違つてないよ。みんなよりも……すごい人たちがここにいた。それだけだ」

「でも……」

それなら、もつと頑張れば勝てたのか。頑張りが足りなかったから負けたのか。なら……もつと……。

「ごめん」

思考を遮るように、透ちやんが言う。

「ちがうだろ?」

軽く頭を下げていた透ちやんは、そのまま首を横に傾げる。

プロデューサーさんは、腰に手をあてると胸を張り、ふんと鼻を鳴らす。その姿は、まるでこの結果に満足しているかのよう。

「俺たちからすれば、このオーディションは年一回しかない、それも人生で一度しか出られないオーディションだ」

「なら……っ！」

ならどうして、そんな表情ができるのか。それほどまでに貴重なオーディションに負けてしまって、どうしてそれも満足気にしていられるのか。

「ここに来てくれた人、この放送を見ている人からしたら、あくまでライブなんだよ」
オーディションの形はとっているものの、リハーサルはきっちりやっていたし、会場の盛り上がり方もライブそのものだった。

「ライブの結果という観点では、大成功だったと言い切れる。みんなは違うのか？」

その問いかけ方は卑怯だと思った。その言い方に対して、首を横に振れないことくらいプロデューサーさんも知っているはずだ。

仮に、プロデューサーさんが普通の聞き方をしていたなら、どうだろう。

「雛菜は楽しかった〜！」

雛菜ちゃんが、大きく手を挙げた。

でも、わたしたちが楽しかったからといって、ライブが成功したこととは直接結びつかない。

重要なのは、見てくれた人が楽しかったかどうかで……。

ふと、つい先程まで見ていた景色が脳裏をよぎる。

歌っているときは必死で、景色なんて見ている暇はないと思っていた。終わったあと

に、何があったかもよく分からないまま、課題だけが頭に残っていた。そう思っていた。見ていたのだ。しっかりと。

会場が光で溢れていて、光に照らされて、沢山の人が笑っていた。どこを見ても、そこにはたくさんさんの笑顔があった。

歌っているときも、トークをしているときも、会場は笑顔で溢れていたのだ。

「それに俺さ、みんなが何かしたいって言ったとき、嬉しかったんだ。それが裏目に出るかもしれないとか、審査に悪影響があるかもとか、色々リスクはあったはずで、誰も言い出せなかったことだから」

それに、と続けてプロデューサーさんは口を止めてしまう。首を傾げて、腕を組んで目を瞑る。それから少し間をおいて、パツと目を開く。

「準決勝のときに言いかけたことなんだけど、勝ち負けは重要じゃないと思ってる」

「……え？ それってどういう——」

その言葉は、ドアをノックされて遮られてしまう。

「ノクチルさーん、そろそろ退出お願いしまーす」

慌てて時計を見ると、予定していた退出時間をもう一時間も過ぎていた。そもそもライブが三十分程度遅れていたのだが、それでも三十分以上遅れてしまっていることになる。

「まあ、反省会は帰ってから、だな」

そう言うと、プロデューサーさんは椅子に腰掛けてしまう。

しかし、スタッフさんに急かされているのに慌てていないわたしたちを不思議に思っただのか、プロデューサーさんは首を傾げる。

「……檻に入りたいですか？ この色情狂が」

円香ちゃんの言葉でようやく気がついた様子。わたしたちはまだ着替えてすらいない。慌てて控室を出ていくプロデューサーさんを見送ると、また少しだけ怖さが和らいでいることに気がついた。



事務所に戻るまでの車内は、やはり少しだけ重い雰囲気だった。

誰かが何を言うでもなく、車に乗って、発進して、事務所に着いて、車から降りて、事務所に入って、ソファアーに座った。

少しだけ遅れて、車を止めてきたプロデューサーさんがやってくる。荷物を事務机に置いてから、プロデューサーさんもソファアーに座り、さて、と切り出した。

「さっきの話の続きだけだな、俺は勝ち負けよりも、ここまでやってきた内容のほうが大

事だと思ってる。みんなは無意識にやっているかもしれないけれど、何をしたほうがよくて、どうしたらいいかを考えて、実行に移せてるんだよ」

言っていることは分かるけれども、ただ当たり前のことを言っているように聞こえる。

「……まあ、その凄さは分からないか」

「癪に障る言い方ですね」

そうは言うものの、円香ちゃんの声から怒りの感情は感じない。茶化しているというか、そう言うべきだと円香ちゃんが考えたから言っているだけ。プロデューサーさんが言っていることは、そんな当たり前のことなのだ。

「そうだな……例えば、あの時トークもしちゃ駄目だって言われたら、じっと待つていられたか？」

もちろん、駄目だと言われたことをわざわざすることは……うん、ないとは言えない。なんだかんだ、不安になっていて、あれやこれや理由をつけてステージに上がっていただろう。

プロデューサーさんはみんなの顔を確認してから頷く。

「もちろん、俺が説得を続けていたけれど、それより先に動いていただろ？ でも、ファンからすればそれが正解なんだよな。そういうシガラミの中でも正しいと思える行動

を取れることは、大人でもできないような、すごいことなんだ」

「そんなに考えてないけどね」

「ね」

雛菜ちゃんがよく分からないといった様子で、しかし嬉しそうな声で言うのと、透ちゃんが真似をする。

「俺自身、最初は実績一番だと思ってたよ。優勝しなきゃ先はないって、そう思ってた」
プロデューサーさんのわたしたちに対する……仕事に対する考えを聞くのは、もしかすると初めてかもしれない。

改めて考えてみても、どういう考えを持っているのかなど想像もつかない。

「でも、みんなと一緒に過ごして考えが変わった。結果だけじゃない、もつと残せる何かがあるんだって分かったんだ」

「何かって?」

「さあ?」

円香ちゃんの問いで、話が急に抽象的になっていくことに気がついた。そしてプロデューサーさんの返しで、話のありがたみが消え去った。

けれど、それを具体的なものにする必要はないと思った。いや、してはいけないのかもしれない。

「ふふ、じゃあさ、探さなきやじゃん」

透ちゃんの言葉に、プロデューサーさんは自信げに頷く。

「だからさ、少なくとも今日は、ごめんはなしだ」

いつ謝ろうかと、ずっと考えていた。

プロデューサーさんに出会って、みんなと一緒にいられるようになって、お母さんとの仲も元に戻って、ワガママをたくさん聞いてもらって、なりたいたしが見つかった。

そうまでしてくれたプロデューサーさんに、恩を返せなかった。だから、どうやって謝ろうと、ずっと考えていた。

けれど、駄目らしい。

プロデューサーさんの言葉を受けて、それが本当に駄目か考えてみる。けれども、謝りたい相手の言葉を無視したら、それこそ謝らなければならぬ。

しかし、それならば、何を言えばいい？

「じゃあ、おつかれ」

透ちゃんの言葉に、感心している自分がある反面、その言葉でもう終わってしまったのだと実感してしまう。

——悔しい、悔しいよ

これで終わってしまうなんて、悔しすぎる。まだまだ課題はたくさんあるのに、分かってるのに、ここまでだなんて嫌だ。

続けたい、続けなければ。もつともつとたくさん試して、たくさん知らなければ。

そんなわたしの思いを代弁するかのように、数秒間の間を空けてから透ちやんが続ける。

「んで、これからもよろしく」

これから、これからがまだある。でも、その言葉を透ちやんだけのものにしてはいけない。しっかりと伝えなければ。

「よ、よろしく……よろしくお願いします……!」

声が震えていたことに気がついて、ようやく自分が泣くのを我慢していたのだと知る。泣いてなんていられないのに、そんな暇はないのに、そう思えば思うほど、自分の弱さが悔しくなる。

悔しさは加速度的に大きくなっていつて、抑えきれなくなつて、視界を滲ませる。泣きたくなんてないのに、どれだけ歯を食いしばっても、涙は溢れてくるばかり。

「よろしく……お願いはしませんけど」

「よろしく〜」

目の前が完全にぼやけてしまつて、目の前にいるのが人なのだとか判別するのでやつとになつてしまつた。

けれども、それでも目の前にいるのがプロデューサーさんで、そのプロデューサーさんが領いたのだけは判別できた。ほとんど見えていないので、本当は違うのかもしれないけれど、少なくともわたしにはそう見えた。

「おう、こちらこそよろしく。それで次の仕事なんだけど——」

そういえば、WING本選が始まつてから、ずっとお仕事を断り続けていたようだった。きつと、完全に断るようなことはせずに、保留という形をとつたりもしていたのだろう。

さすがだな、と思つた。こうしてプロデューサーさんからお仕事の話を持ちかけられたから気づけたものの、もしわたしがお仕事を受けるか否かの判断を迫られたら、保留するなどという発想は出てこなかつたと思う。はいかいいえかの二択に、三択目を作り出すなんて。

泣きながらも、妙に感心している自分がなんだかおかしくて、内心苦笑してしまう。

「もう少し時間を置くとか……」

円香ちゃんは優しいから、きつと泣いているわたしのことを気遣つてくれているのだ

ろう。

でも、それに甘えてはいけない。

首を大きく横に振ると、視界が少しだけでもとに戻った。それでもまだぼやけているので、袖を押し付けて涙を拭き取る。

「だ、大丈夫です！ わたし、やれますよ！」

立ち止まっている場合ではない。わたしには、なりたいたわたしがいるのだから。



昨日、家に帰るや否やお母さんが駆け寄ってきた。きつく抱きしめられて、おつかれさまと、何度も言われた。

優勝していたら、お母さんを笑顔にできたのかもしれないと思うと、また悔しさがこみ上げてきたが、先ほど事務所で泣いたからか、今度は大丈夫だった。

時間が遅かったので、そのまま風呂に入って着替えて、すぐにベッドで横になった。明日は日曜日で休みだけれど、事務所には行こうと思っている。プロデューサーさんは好きに休んでいいと言っていたけれど、なんだかじつとしていられない。

そんなことを考えていたら、一瞬のうちに外が明るくなっていた。寝起きにしては妙

に頭がスツキリしていたので、タイムワープでもしたのかと思ったけれど、体の重さからして普通に眠ってしまったのだろう。

ドタドタと階段を駆け上がる音が聞こえて、なるほどこの音に起こされたのだと理解する。

やけにうるさい足音は次第に大きくなっていった、部屋の前に来ても止まる気配はなく、そのまま勢いよくドアが開けられた。

「お、お姉ちゃん大変！ あ、あ……！」

「あ……？」

何を言いたいのかわ分からずに聞き返すと、直後に妹の……紗織の叫び声が部屋中に響き渡った。

「荒れてる！」

ぜくんぶまとめて

「お姉ちゃん大変！ 荒れてる！」

真つ先に思ったことは、うるさいなあということ。優勝できなかったとはいえ、昨日は朝から晩までライブの準備と本番だったのだから、疲れているのだ。

もうすこし静かにしてもらいたいなあと思いつながら、紗織の表情に焦点を合わせて、ぎよつとする。

紗織はわたしの肩を前後に激しく揺さぶると、悲痛な声で訴える。

「早く起きて〜！」

紗織がここまで焦っているのを、初めて見た気がする。というより、紗織が焦っているのを今まで見たことがなかったかもしれない。

「わ、分かったからちよつと待って！」

紗織を引つ剥がしてからベッドを出て、服を着替える。その間もずつと紗織は落ち着きがなくて、それほど慌てているのだから、余程大変なことなのだろうと息を呑む。着替え終わるとすぐさま紗織はスマートフォンをこちらに向ける。

「ほら、これ！」

画面を見ると、よく見るツイスタの画面だった。投稿が流れるスピードが早くて、すべて読めるわけではないけれども、かい摘んで読んでみても、なんとなく状況は理解できてるものだった。

『ノクチルが一位じゃないのはおかしい』

『あの状況で良判断をしたノクチルの恩を運営は仇で返した』

『買収なんじゃねえの？』

それが昨日のWING決勝に対するコメントだということとは、すぐに理解できた。そして、それがわたしたちノクチルに対する擁護だということも。

けれど、違うのだ。

それでは駄目なのだ。わたしは昨日の結果を飲み込めた。飲み込めたからこそ今日をこうして迎えられるし、落ち込むよりも前を向こうと思えている。

だから、その事実を否定なんてされたくない。それに、そんなことをして、待つている未来は明るくない。わたしがなりたいのは、ひとりにならない場所を作れる人間であって、今の状況は逆に肩身が狭いひとを作ってしまう状況。だから、なんとかしたいと、そう思った。

けれど、わたし一人ではなにも思いつかない。一人で分からないなら、助けを求めればいい。相談すればいい。この半年間で学んできたことだ。

「紗織、ありがとう。わたし、行ってくるね！」

わざわざ起こしてくれた紗織に感謝しながら、わたしは駆け足で事務所へと向かった。



「正直言って、何をしても裏目にしか出ない」

事務所に着くと、もうみんな揃っていた。今日は遊ぶ約束はしていないし、休日に事務所を待ち合わせ場所にする必要もない。もちろんレッスンもない。

理由はどうあれ、みんな揃っていたのは都合が良かった。すぐにプロデューサーさんに相談して返ってきた返答がこれだ。

プロデューサーさんがこういった状況に慣れているかは分からないけれど、少なくともプロデューサーさんの方が長く生きていて、わたしたちより多くの経験を積んでいる。

答えを出してくれなくても、何かきっかけをくれるかもしれないと信じていたことも

あり、その返答に驚きを隠せなかった。

「で、でも……っ!」

「ああ、なにかしたいよな。だから一緒に考えよう」

プロデューサーさんの机の周りに集まっていたわたしたちだけ、プロデューサーさんの言葉を受けて、まず透ちゃんが動いた。といつても、ただソファーに座っただけ。続くように、田香ちゃんも雛菜ちゃんもソファーに座ったので、わたしも同じように座ることにした。

「みんな面白いのかなー?」

真つ先に声を上げたのは、雛菜ちゃん。しかしその表情は納得がいけないといった様子。

「面白がつてるなら、たちが悪すぎ」

「多分、みんなのためだと思ってるんだよ。本人たちは、良かれと思ってる」

「そつちのがたち悪いじゃん」

悪意はないからこそ、咎められない。単純にやめてくれと言っても、誰かに言わされたと思ってしまうかもしれない。

「えー、じゃあこの人たち悪くないってことー?」

「良い悪いというより、ノクチルの……俺たちの意思には沿っていないということかな。」

それを理解してもらえれば良いんだけど……」

つまり、わたしたちが今この状況にどう思っていて、どうしてほしいのかを伝えればいい。と、ことはそう簡単ではない。

「多分、それを説明したところで、業界の圧力だとか、事務所が言わせただとか言われちゃうだろうな。それは避けたい」

もちろん、他人に迷惑をかけるのは良くない。だからこそ、プロデューサーさんは何をして裏目に出ると言っていたのだ。

なんとか、わたしたちの気持ちを、わたしたちの考えを、誤解されずに伝える方法……。

「そんなこと、できないのかも」

つい、口から溢れてしまった。

でもそれは、諦めの言葉ではない。今ここにいる四人ならば、分かってくれるはず。顔を上げてみても、みんなはわたしの言葉を待っていてくれる。

「で、できないから、何をしてもしゃあ一緒なら……や、やったほうが良いって思うんです……」

「具体的には……」

しまった。そこは何も考えていなかった。円香ちゃんの質問に、何か応えなければと

思つて、咄嗟に出た答えは。

「な、生放送……緊急生放送……とか？」

あまりにもありきたりすぎると、言つてから自分でも思つた。だから、透ちゃんの笑い声が聞こえてきても、そうだよねと納得するしかなかった。

「いいじゃん、ドッキリみたいで」

でも、続く言葉は否定的ではなかった。

「仕掛けられる側のすることじゃない」

そんな円香ちゃんも、楽しそうに笑つていた。

「なにそれ～楽しそ～！」

そして自然と、みんなの視線はプロデューサーさんへと向けられる。結局、プロデューサーさんが許可を出さない限りは実現しないことだから。

プロデューサーさんは、いたずらっぽく、子供のような笑みを浮かべると、立ち上がる。

「よし、じゃあ準備するか！」



「あ、あーマイクテスト！」

生放送が決まって、各所に連絡を送ってから四時間後。わたしたちはレッスン場に集まっていた。

その間も、特に何を話すかという話はなかった。ただただ他愛のない話をして、時間までいつも通り過ごしていただけた。

「小糸、もう始まってる」

「びええっ!？」

そういえば、そんなことをプロデューサーさんが言っていたような気がする。いや、でも、マイクテストは大事だから。うん、ちゃんとおかないと。

「ふふ、面白いじゃん」

レッスン場の壁を背にして、目の前にはカメラと、大きなディスプレイが斜めに立てかけられている。

その画面には、数分前からたくさんのコメントが流れている。

「あーえと、ノクチル緊急生放送」

「わー!」

透ちゃんがタイトルコールのような何かをすると、雛菜ちゃんが拍手で応えた。

「えー、何言おう?」

これは駄目だと即座に判断した。コメントで笑いの声が流れてくるよりも先に手を打つことにする。

「え、えっと、ネットの反応、見えます。わたしたちも……悔しいです」

WINGに優勝できなくて、わたしは悔しいけれど、他のみんなは分からない。そう思ったけれど、そもそも違うならば今日ここに集まっていないはずだと考えた。

「で、でも、これで終わりじゃないって、みんなが教えてくれたんです……！ まだまだ先があつて、もつとたくさん景色が見られるって！ 間違つても、上手く行かなくてもそれは必要なことだつて思えたんです！ だから、今のこの時間を、嘘だつて言われたくないんです……！」

「……全部言うじゃん」

勢いに任せて出てきた言葉は、もう覚えていない。何を言ったか覚えていないけれど、この気持ちに嘘はないのだから、間違つたことは言っていないはずだ。

「ご、ごめんね……」

「んいや、いい、いい」

透ちゃんと言うと、雛菜ちゃんを跨いでわたしの頭を撫でてくる。それも、ものすご

い雑だ。

「と、透ちゃん……!」

これが全国に流れていると思っただけで、顔が熱くなる。

逃げて追ってくる手は、間に入ってきた雛菜ちゃんによつて止められた。

「雛菜もやって〜!」

透ちゃんの腕の下から頭を入れることで、半ば強制的に頭を撫でさせている。

「よしよし」

透ちゃんもそれでいいと思ったのか分からないけれど、標的はわたしから雛菜ちゃんに移っていた。

「……はあ。だから、他の悪口言うのはやめてくださいってことです」

円香ちゃんはカメラに視線を戻すと頭を下げる。

間の二人がいつの間にか撫で合いに発展しているけれども、無視してわたしも頭を下げる。

すると、コメントが目に入る。

『こんなこと言わせるとか事務所クソだな』

「いい、言わされてるわけじゃないです！」

咄嗟に出てしまった。

「小糸、落ち着いて。……でも、小糸の言う通りです。じやなきや、真ん中の二人がおかしいでしょ」

わたしが叫んだことで、一瞬だけ動きが止まったものの、すぐに撫で合いを再開してしまっただ。

その後、数秒だけ沈黙が続くと、コメントは笑いで溢れていた。そうだろう、真面目な話を両端でしているなか、真ん中二人は謎の撫で合いをしているのだから。正直わたしも何をしているのかよく分からない。

そんななか、またしても一つのコメントが目に入った。

『海行った話気になる』

そういうえば昨日突発で行ったトークで、その話題を出した気がする。海に行った理由は、あまり他人に言いふらすような内容ではない。

「え、えつと、海は……ちよつとした反省会みたいな感じだったんです」

それで終わらせてしまおうと、そう思った。そもそも、このコメントに返答する必要があるのだろうか？

気になってプロデューサーさんを見てみるけれども、コクリと頷くだけだ。

「…………ご飯の方が気になるって」

「え、ええっ!?!」

コメントを見ると、たしかにご飯についての詳細を求めるコメントが多かった。

ああ、そういえばトークではご飯が美味しかったとか、お味噌汁がどうかという話をしていたかもしれない。

「あ、え、えっと、たまたま見つけた宿に泊まって、食べたご飯なんですけど…………」

「あとはねー、お刺身とか美味しかった〜!」

いつの間に撫で合いが終わったのか、雛菜ちゃんが割り込んできた。

「わかる、醤油が神」

そこで、本題から大きく逸れていることに気がついた。今日の生放送の目的は、みんなの誤解を解くことで、思い出話をするためではない。

なんとか話を戻さなければとプロデューサーさんに助けを求めるけれども、返ってきたのは親指を立てた右拳だけ。

結局、そのままただの雑談生放送として二時間もの間、コメントを読みながら色々と回答していくだけの時間になってしまった。

終わってからようやく、これで良かったのかもしれないと思えた。

透ちゃんの言ったとおり、言いたいことはわたしは全て言ってしまったのだ。あとは、それがわたしたちの声だと信じてもらえればいい。残りの時間は、その証明。

これがわたしたちの生放送で、わたしたちが自由にする時間だったということ。その中でわたしたちの言葉は、すべてが本当のはずだ。



生放送の翌日、珍しく登校中に雛菜ちゃんと合流できたと思ったら、校門では透ちゃんと円香ちゃんが待っていた。行き交う人たちが声をかけようか迷いつつ、なんども二人を見ながら通り過ぎていく。

「お、おはようー！」

「おはよー」

「おはよ」

「おはよー」

挨拶を交わすけれども、これが異常であることには変わりない。雛菜ちゃんが起きてきたのはまだたまにあることだけれども、二人が校門で待っている理由にはならない。

透ちゃんが何かを言おうと口を開いて、止まる。

「あれ、なんだっけ」

「集会」

円香ちゃんが短く返すと、透ちゃんが再び口を開けて頷く。

「おーそれそれ。先生がさ、今日の集会でなんか話させて」

「な、何かって？」

何かと言われても、そうそう誰かに何かを語れるものは持っていない。学校として、何かを喋って欲しいのかもしれないけれど、お題の一つくらいくれてもいいではないか。

しかし、わたしの問には透ちゃんは首を傾げ、円香ちゃんは首を横に振るだけ。なんてひどい学校だ。

「なんでもいーのー？」

「いいんじゃない。なんかだし」

雛菜ちゃんのなんでもに、嫌な予感がした。しかし先に円香ちゃんが許可を出してしまふものだから、雛菜ちゃんは続けてしまふのだ。

「じゃあ、今度どこ遊びに行くか話そ〜」

「なにそれ、おもしろ」

それに、透ちゃんが面白がって乗っかる。

「え、えっ……!?!」

そんな予想の斜め上どころか、線で繋がってすらいないところから出てきた意見に、頭がついていくはずもなく、混乱してしまう。

「なんかだし」

一度面白がった円香ちゃんが止めるはずもなく、あれよあれよと話が進んでしまう。気づいたときには、もう遅い。

もちろん、このあと集会でただの雑談を繰り広げて、先生が慌てて止めるのを透ちやんと雛菜ちゃんが笑い転げて、わたしがたくさん謝ることで集会は終わった。

そんなときでも、会場には笑いが溢れていた。